130th anniversary

小松耕輔生誕130年記念誌

小松耕輔音楽兄弟顕彰会
由利本荘市教育委員会

小松耕輔生誕130年記念誌

小松耕輔音楽兄弟顕彰会
由利本荘市教育委員会

小松耕輔生誕130年記念誌

目　　次

発刊は感動の極み ……由利本荘市教育委員会　教育長　佐々田亨三　4
小松耕輔生誕 130 年記念誌によせて
……小松耕輔音楽兄弟顕彰会会長　小松耕輔生家当主　小松　義典　5
小松耕輔生誕 130 年記念 市民音楽祭プログラム …… 6
講演　小松耕輔－近代日本における洋楽の伝道師
「小松耕輔の楽壇活動－音楽の社会的発展を目指して」 …… 二子　千草　11
小松耕輔生誕 130 年記念 特別寄稿
「小松耕輔研究――末弟の小松清研究ノートを添えて」 …… 執筆　船山　信子　23
パネルディスカッション
船山　信子 …… 47
四反田素幸 …… 48
田中みや子 …… 53
小松耕輔年譜 …… 56
小松耕輔音楽兄弟 顕彰のあゆみ …… 58

小松耕輔　３つの歌曲と合唱への編曲
「母」「冬の夜」「砂丘の上」 歌詞 …… 63
「母」
原曲 …… 64
同声二部合唱版（原調）…… 66
（移調）…… 70
混声三部合唱版（原調）…… 74
（移調）…… 80
混声四部合唱版（原調）…… 86
（移調）…… 92
「冬の夜」
原曲 …… 98
同声二部合唱版（原調）…… 100
（移調）…… 105
混声三部合唱版（原調）…… 110
（移調）…… 117
混声四部合唱版（原調）…… 124
（移調）…… 131
「砂丘の上」
原曲 …… 138
同声二部合唱版（原調）…… 142
（移調）…… 148
混声三部合唱版（原調）…… 154
（移調）…… 163
混声四部合唱版（原調）…… 172
（移調）…… 181

表紙と裏表紙の絵について …… 190
編集後記 …… 191

発刊は感動の極み

由利本荘市教育委員会
教育長　佐々田　亨　三

今年も 10 月に小松耕輔音楽兄弟顕彰会と市教育委員会による第 23 回「ひがしゆり音楽祭」が東由利中学校を会場に開催されました。保育園、小・中学校、東由利混声合唱団、ゲストとして雄物川高校吹奏楽部が次々と演奏し、聴衆は今年もまた、小松耕輔作曲の「すずめ」「母」などに感動し、音楽を大いに楽しむことができました。

ところで、昨年 11 月には、小松耕輔音楽兄弟顕彰会が、日本音楽会の魁星、「音楽教育の父」小松耕輔の生誕 130 年記念音楽祭を由利本荘市文化交流館「カダーレ」で開催しました。

その記念音楽祭の午前は、小中学生による小松耕輔及びその兄弟の作品を演奏し、「百舌鳥」「電車」「お菓子汽車」などの他、竹久夢二作詞、小松耕輔作曲の「母」は、全員が合唱しました。また「母」は、午後の記念コンサートでソプラノ歌手長谷川留美子氏、ピアノは小松耕輔を曾祖父にもつ都甲紀子氏によって演奏され、満員の聴衆を魅了しました。

ふるさとの山のあけくれ
みどりのかどにたちぬれて
いつまでもわれまちたまふ
母はかなしも

小松耕輔自身、雪深い山里の地玉米（現東由利）から矢島、さらに、東京音楽学校に入学、歌劇「羽衣」の上演や皇孫の唱歌を担当するなどの多大な業績の中で、「母」の作曲にあたっては、旋律を「やわらかに、かなしく」で始まる哀愁漂う曲の調べに、子を想う母、母を慕う子の深い愛情に満ち溢れた心情を表出したものと推察され、強く胸を打たれます。

小松耕輔は、「近代日本における洋楽の伝道師」とも讃えられるまでに功を成したことは、本県の音楽界の如何に大きな支えとなったか計り知れません。

実際、耕輔の地元東由利でもいち早く花開きました。秋田市で教員をしていた玉米（東由利）出身の菊地三男氏は老方小学校長として赴任した直後の昭和 21 年夏に秋田市をはじめ全県各地から音楽教師を募り、老方小学校の教室を合宿所として開放し、３日間に亘る全県音楽教育研究会を開催、その最終日には「世界音楽の夕べ」を開き全国に魁け本県音楽教育の醍醐味を発信しています。

小松耕輔と３人の弟は、それぞれ音楽の世界で活躍、特に小松平五郎は、ハタハタ音頭を作曲し、それに振り付けをし踊ったのが石井漠です。昨年は本県で国民文化祭が開催されました。国民文化祭は、地域に根ざした国民文化の発現であり、その源流は、明治に音楽教育会や昭和２年には国民音楽協会を創立し、日本最初の合唱コンクールを開催するなど、常に先進的に活躍した小松耕輔に係わる記念誌であることを今こそ確信し合うとともに、これまで小松音楽兄弟顕彰会を立ち上げ、顕彰の発展に努力された活動に心から敬意と感謝を申し上げます。

特に、小松耕輔の親族として大きく支えられ、昭和 53 年には小松音楽兄弟顕彰碑建立に貢献された元東由利町長小松栄男氏、そしてそのご子息小松義典現顕彰会長によってなされた、謂わば「万を持しての発刊」であることを思うと、感動の極みであります。

小松耕輔生誕 130年記念誌によせて

小松耕輔音楽兄弟顕彰会会長・歯学博士
小松耕輔生家当主　小　松　義　典

「近代日本における洋楽の伝道師」とされる小松耕輔（1884 ～ 1966）は由利本荘市東由利出身の作曲家で、明治から昭和にかけて活躍しました。西洋から輸入された「洋楽」を、すべての日本人が楽しめるようにしようと、「音楽の社会化運動」を展開した人です。教育、評論・執筆、音楽団体の組織など多岐にわたった活動は、現代の音楽シーンに大きな足跡を遺しています。

合唱コンクール、吹奏楽コンクールなど、現代の日本では音楽コンクールが盛んに行われています。日本で初めての合唱競演会を昭和二年に開催したのが小松耕輔です。「コンクール」はフランス語なのですが、フランスに留学した小松耕輔の提案により導入され、今ではすっかり日本に定着しました。

現代ではＪＡＳＲＡＣ（日本音楽著作権協会）が楽曲を管理していて、作品が演奏されると作曲者に著作権料が届く仕組みになっていますが、この制度を確立するための運動を起こしたのも耕輔です。始めは作曲者組合という組織（大正十四年）でしたが、当時は著作権への理解がなかなか得られず苦労したようです。

日本人で初めてのオペラ「羽衣」を作曲し上演した（明治三十九年）のも小松耕輔です。当時、西洋では民衆の娯楽としてオペラが定着していました。耕輔は洋楽を日本人の娯楽にしようと考え、日本の物語を題材にしたオペラを三曲作って上演しました。

また、大正四年には「大正幼年唱歌」十二巻を出版しました。明治時代の唱歌は官製の堅苦しいものが多かったのですが、耕輔は子どものために、子どもの心をとらえた歌を作りました。その後、日本では童謡運動が起こり、数々の童謡が生まれています。さらに、学校の校歌を多く作曲しています。秋田県内では横手高校、角館高校、雄物川高校、由利中学校、平沢小学校などの校歌が挙げられますが、国内および海外で確認されたものは百六十校を越えます。

小松耕輔音楽兄弟顕彰会は昭和五十年代から活動を開始し、顕彰碑を建立し、ひがしゆり音楽祭を開催してきました。ひがしゆり音楽祭は今年で二十三回を数えます。また、耕輔作曲の歌曲「母」「冬の夜」「砂丘の上」の合唱用楽譜を作成し（編曲：阿部俊祐氏）、作品としての普及を目指しています。耕輔の弟である三樹三、平五郎、清についても顕彰を進めています。

「今、音楽を楽しんでいる環境の基礎を作った一人として耕輔がいた」ということを市民の皆さんに認識していただくためです。この地区にこのような音楽家がいたことを心にとめ、また、彼の作品に親しみをもって頂きたいと考えております。

この記念誌は、平成 26 年 11 月に開催した記念音楽祭をまとめたものであり、一部講演会後に修正加筆したものです。

小松耕輔 由利本荘市(旧東由利町)出身
近代日本における洋楽の伝道師
由利本荘市地域づくり推進事業
11/15(土)
生誕130年記念市民音楽祭
由利本荘市文化交流館「カダーレ」大ホール
プログラム
主催：小松耕輔音楽兄弟顕彰会
後援：「由利本荘市教育委員会」「にかほ市教育委員会」「本荘由利教育研究会音楽部」「株式会社東北新社」「クラシカ・ジャパン」

音楽祭　[10:00〜12:00]

小中学生による小松耕輔およびその兄弟作品の演奏

1　由利本荘市立東由利小学校　全校合唱（107 名）

「百舌鳥」　作詞／葛原しげる　作曲／小松　耕輔
指揮／高橋　瞳太　伴奏／太田由起子

「Ｂｅｌｉｅｖｅ」　作詞／杉本　竜一　作曲／杉本　竜一
指揮／高橋　瞳太　伴奏／太田由起子

2　にかほ市立上浜小学校・にかほ市立金浦小学校　合唱部（11 名）

「ほし」　作詞／葛原しげる　作曲／小松　耕輔
指揮／伊藤　直美

「地球の歌」　作詞／門倉　　訣　作曲／吉岡　弘行
指揮／伊藤　直美　伴奏／横山　記代

3　にかほ市立象潟中学校　吹奏楽部（15 名）

小松耕輔メドレー

「雨」　作詞／杉山　米子　作曲／小松　耕輔
「電車」　作詞／葛原しげる　作曲／小松　耕輔
「こけっこ大晦日」　作詞／水之江公明　作曲／小松　耕輔
「母」　作詞／竹久　夢二　作曲／小松　耕輔
伴奏／鮫島　愛実

「いのちの歌」　作詞／Ｍｉｙａｂｉ　作曲／村松　崇継
伴奏／齊藤　美月

4　由利本荘市立岩城中学校　クラス合唱（33 名）

「お菓子の汽車」　作詞／西條　八十　作曲／小松　耕輔
伴奏／佐藤　美香

「 手紙　～拝啓 十五の君へ～ 」　作詞・作曲／アンジェラ・アキ
指揮／渡部　　莉　　伴奏・佐々木　玲

5　にかほ市立仁賀保中学校　吹奏楽部（32 名）

「象」　作詞／小林　愛雄　　作曲／小松　耕輔
指揮／松橋　郁子　　伴奏／田中　美月

「Carol of the Drum」　作詞／ K.K.Davis　　作曲／ K.K.Davis
指揮／松橋　郁子　　伴奏／田中　美月

6　にかほ市立平沢小学校　（卒業生）

「平沢小学校校歌」　作詞／戸蒔　良吉　　作曲／小松　耕輔
伴奏／松橋　郁子

7　由利本荘市立由利中学校　全校合唱（112 名）

「由利町立鮎川中学校校歌」　作詞／竹内瑛二郎　　作曲／小松　耕輔
伴奏／佐藤　亜紀

「由利本荘市立由利中学校校歌」　作詞／加藤　貞子　　作曲／小松　耕輔
伴奏／渡部　　凜

8　由利本荘市立東由利中学校　全校合唱（91 名）

「My Own Road －僕が創る明日－」　作詞／栂野　知子　　作曲／栂野　知子
指揮／石綿　　輝　　伴奏／鈴木　南美

「母」　作詞／竹久　夢二　　作曲／小松　耕輔
指揮／松橋　　隆

9　全員合唱

「母」　作詞／竹久　夢二　　作曲／小松　耕輔

１０　「ハタハタ音頭」　作詞／金子　洋文　　曲／小松平五郎

記念コンサート　[13:00〜13:45]

演奏曲

『母』（詞：竹久　夢二）
『冬の夜』（詞：西條　八十）
『お山の細道』（詞：葛原しげる）
『雀おどり』（詞：北原　白秋）
『泊り舟』（詞：北原　白秋）
『砂丘の上』（詞：室生　犀星）

『ピアノ・ソナタ　ト長調』（パリ留学時代の 1922 年に作曲）

講　演　[14:00〜14:40]

演題　「小松耕輔の楽壇活動―音楽の社会的発展を目指して」

講師　二子（小野）千草［ふたこ　ちぐさ］

パネルディスカッション　[14:50〜15:30]

「小松耕輔の知られざる人間像」

コーディネータ　賀内　隆弘（ABS アナウンサー）

シンポジスト　船山　信子教授（音楽学者・上野学園大学学長代理）
耕輔の果たした役割
四反田素幸教授（作曲家　秋田大学副学長）
音楽家としての耕輔
田中みや子氏（耕輔の長男の子－著作権継承者）
親族から見た人間耕輔
長谷川留美子氏（ソプラノ歌手）
声楽家からの立場で

演奏者紹介

都甲 紀子
Noriko Togo
［ピアノ］

代々音楽家の家に生まれる。（曾祖父は作曲家の小松耕輔。祖母、母ともにピアノ教師）祖母内藤美枝、母都甲泰子のもと、３歳よりピアノをはじめる。

桐朋女子高等学校音楽科を経て桐朋学園大学音楽学部に進み、在学中に旧ソビエトに短期留学、モスクワ音楽院の主任教授ドレンスキー氏に師事する。

桐朋学園を卒業後、渡米し、ニューヨークのジュリアード音楽院の当時主任教授であったステッセン氏に師事する。

ニューヨーク留学中にフォーダム大学にてリサイタルを開催。

帰国後、東京音楽大学の研究科に進む。

2006年秋、紅林こずえ門下20周年記念演奏会に出演。以降演奏活動を再開。

2007年５月に荻窪音楽祭の主催にて、2008年１月にHAKUJU HALLにて、2010年５月にはルーテル武蔵野教会にてそれぞれ「音楽の楽しみ」と題した演奏会を開催。毎回立ち見が出る盛況ぶりで、司会、ピアノソロ、２台ピアノ、伴奏をこなして好評を博す。

2013年５月、トッパンホールにて「音楽の楽しみ　都甲紀子ピアノリサイタル」を開催。好評を博す。

これまでに、紅林こずえ、岩本義哉、弘中孝、中川和義、斉藤恵美子、深山美恵子の各氏に師事。

現在は後進の指導にも力を注いでいる。

「音楽の楽しみ」主宰

長谷川 留美子
Rumiko Hasegawa
［ソプラノ］

秋田県東成瀬村出身

県立湯沢高等学校卒業。洗足学園音楽大学声楽科を卒業後、東京音楽大学研究科オペラコース及び二期会オペラスタジオにて学ぶ。

91年（現）明桜高等学校を退職後、イタリア（ローマ）に渡り研鑽する。

92年イタリアのトッリチェッラ主催ベッリーニ国際オペラコンクールで第３位入賞（１位なし）。その後、ローマ、ペルージャ、シチリア等で演奏し好評を得る。

93年に帰国後は、リサイタルはじめ県内外での演奏活動に入る。県内では秋田市建都四百年記念公演「美の国あきた市民音楽祭」、秋田市文化団体連盟五十周年記念事業郷土創作オペラ「ねぶり流し物語」特別公演（主役･北姫役）、秋田県・日本交響楽振興財団主催ベートーヴェン「第九」（飯森範親指揮・東京交響楽団）のソリスト等の演奏で高い評価を得ている。他、アトリオン室内オーケストラ、秋田市管弦楽団や著名な演奏家との共演も多数。

11年間にわたり秋田大学にて非常勤講師を務めるなど、声楽指導者としても活躍する。現在、若い声楽家や小中学生一般合唱団の指導をはじめ高文連合唱部会のヴォイストレーナー、第一回より秋田県青少年音楽コンクール運営委員を務め、特に青少年の音楽育成に意欲的に取り組んでいる。

これまで木内音楽賞、秋田市文化選奨、秋田県芸術選奨を受賞。二期会会員。

小松耕輔生誕130年記念市民音楽祭

小松耕輔 ―近代日本における洋楽の伝道師

講演

「小松耕輔の楽壇活動 ―音楽の社会的発展を目指して」

二 子 千 草

本講演資料（P.11～P.22）は冊子でのみ閲覧いただけます。

特別寄稿

「小松耕輔研究 ——末弟の小松清研究ノートを添えて」

船 山 信 子

はじめに

今年、2017年は小松耕輔の生誕133周年に当たる。1884年（明治17年）12月14日、秋田県由利郡玉米村字舘合［とうまいむらあざたてあい］（のちの東由利町・現在の由利本荘市）に生まれ、1966年（昭和41年）2月3日東京で81歳で没した小松耕輔（以下、耕輔と略す）は、日本の洋楽の導入初期の明治期から大正期を経て昭和期の20世紀半ばまで、およそ60年間にわたり、息の長い活躍をした音楽人である。その守備の領域は、作曲はもとより、音楽理論、音楽評論、音楽学、音楽教育まで広範囲に及んでいる。

筆者の奉職する上野学園大学図書館の所蔵室（校舎棟14階）の一隅に、夥しい耕輔の蔵書、膨大な自筆譜、音楽会等のプログラム・カタログ類、4冊の日記、書簡・ハガキ・写真類、洋行（1920～22）の際に収集したポスター等が収納されている。これらは耕輔が没した翌年、1967（昭和42）年に、神田神保町の古賀書店を通して、ご遺族から学校法人上野学園に寄託され、「小松文庫」の名の下に、上野学園大学図書館に保管されている*[1]。

筆者は13年前に論文「小松耕輔研究―「小松文庫」の調査を中心に」を、『上野学園大学百周年記念論文集』（2004、上野学園大学発行）（以後、旧論文と略す）に掲載した。その拙論では、先ず小松耕輔研究の現状と「小松文庫」の調査報告、次に耕輔の知られざるオペラ《靈鐘》の自筆譜（スケッチ）の検証および、上演されずに終わったオペレッタ《収穫》の自筆譜（未完の総譜、ピアノ譜）に関わる報告と分析を行い、それらを手がかりに、耕輔の広汎な音楽活動の軌跡とその意味の追究を試みた。

ところで、2014（平成26）年に小松耕輔生誕130年にちなみ、「小松耕輔 近代日本における洋楽の伝道師 生誕130年記念市民音楽祭」と題する記念行事（11月15日 由利本荘市文化交流館「カダーレ」大ホール）が、小松耕輔顕彰会（会長小松義典）主催、由利本荘市教育委員会等の後援で行われた（筆者もシンポジウムに参加）。本誌はその記念として一連の行事の記録を収録している。昨2016（平成28）年秋に小松義典氏から、本誌に上記論文「小松耕輔研究――「小松文庫」の調査を中心に」を再録したいという申し出を受けた。

実はこのその執筆後12年の間に、耕輔の末弟、小松清の膨大な遺品・資料が上野学園に寄贈され、筆者はその研究にすでに着手している。そこで、今回の再録に当たり、端緒に着いたばかりの小松清研究の一部を、終章（Ⅱ）に新たに独立した「小松清研究ノート」として付け加えることとし、新たに論考のタイトルも表記、「小松耕輔研究――末弟の小松清研究ノートを添えて」と改めた次第である。

小論の全体構成は次の通りである。

まず、「Ⅰ小松耕輔研究」は、旧論文から（1）（3）（4）（5）（6）［旧論文のチャプター番号とは一致しない。その一部に補筆等あり］を再録（内容の一部に補筆・変更あり）し、このたび新たに（2）を追加した。

「小松清研究ノート」は、今回すべて書き下ろしている。

目　　次

Ⅰ　小松耕輔研究

（1）小松耕輔の生涯研究資料 …… 25
（2）小松耕輔の生涯概観 …… 25
（3）小松文庫の概要 …… 27
（4）オペラ３作品の楽譜の所在・様態 …… 28
（5）オペラ《羽衣》《靈鐘》《収穫》研究 …… 30
（6）新しい小松耕輔像のために …… 34

Ⅱ　小松清研究ノート

（1）小松清の関係資料の所在 …… 35
（2）小松清と兄弟／生涯概観 …… 36
（3）作品研究：《トメリー物語》 …… 37
（4）作品研究：《仏訳短歌九首》 …… 40
（5）小松清関連（作曲・作詞・指揮・ピアノ伴奏）のＳＰレコード …… 41
（6）小松清の仕事場 …… 43

Ⅰ　小松耕輔研究

（1）小松耕輔の生涯研究資料

小松の生涯について直接手がかりとなる資料を整理しておこう。

①年譜 *[2]：小松の死の 10 年前の出版で、小松自身が校閲したはずの正確かつ詳細なもの。

最後の 10 年に関しては、郷里で編纂された資料集『小松音楽兄弟』所載の「音楽の父　小松耕輔年譜」*[3]に詳しい。

次の 4 冊は小松の半生を回想した自著で、特に②［明治期］と④［大正期、昭和 20 年終戦まで］は「当時の貴重な証言として名著」*[4]と評価される。

②『音樂の花ひらく頃 ―わが思い出の樂壇―』（1952、音樂之友社）

③『懐しのメロディー ―音樂家の回想―』（1957、文藝春秋新社）

④『わが思い出の樂壇』（1961、音樂之友社）

⑤『世界音樂遍路』（アルス、1924）1920（大正 9）年から足かけ 3 年のパリ留学時代の記録で、一部が③に再掲載されている。

⑥日記：小松の著作の原典となった日記はかなり重要な資料である。小松は日記を、決して毎日ではない（中には白紙状態の 1 年もある）が生涯にわたり（死の 12 日前まで）几帳面につけていた。小松文庫に入っている日記は全部で 7 冊（大正 5、6、7、8、9 年版當用日記、昭和 25、26 年の記載ある横書きノート）、遺族の田中みや子氏（小松の長男盛廣の長女）所蔵の日記（小型の手帳も含む）が 65 冊ある *[5]。これらは補完する関係にあるが、大正 3 年の日記および大正 10 年の日記 *[6]を欠く。また明治 44 年以前の日記（②にかなりの引用がある）はこれらには含まれておらず、それらの所在は不明である。

⑦小松広子『広子日記』（1963）妻広子（1958 没）の長年の日記の抜粋を、彼女の追悼として小松がまとめた私家版で、彼の私人としての謹厳で穏和な人となりの証言である。

（2）小松耕輔の生涯概観

小松耕輔の生涯と音楽履歴は大略次のとおりである。

耕輔は先述した通り、1884（明治 17）年 12 月 14 日に、平蔵（1853-1922）とトミ（1859-1936）の二男（長男は夭折）として、秋田県の玉米村に生まれた。父の平蔵は 2 期（明治 29 年と明治 33 年）にわたり玉米村の村長を務め、郡会議員等の要職を歴任する「村の名士」であった。また妻トミと共に短歌をたしなみ、トミは漢学も学んでいた。耕輔は 1891（明治 24）年 4 月館合尋常小学校入学。1905（明治 29）年に矢嶋尋常高等小学校に転校し、1898（明治 31）年に同高等小学校を卒業する。ここには「オルガンがあって唱歌を立派に教えてくれる先生がいた」（② 6 頁）。その人が正教員の木内喜七（1872 －？　耕輔が転校した年に秋田師範学校を卒業し、赴任してきた）。（幼年・少年時代にどのようなきっかけで音楽に目覚めたかについては、②で耕輔自らが語っているが、さらなる実証が加えられる必要があろう）。

1901（明治 34）年 3 月に上京し、同年 6 月に東京音楽学校選科、翌年 9 月に同校予科、翌

1903（明治 36）年 9 月に同校本科に入学する。3 年後の 1906（明治 39）年 9 月同校研究科に入学してピアノを専攻（1909 年修了）。早くもこの年の 6 月 2 日、楽苑会（山田源一郎、小林愛雄と 3 人で結成した歌劇研究会）の旗揚げ公演のために作曲した歌劇《羽衣》を上演する。そして同年 9 月に弱冠 21 歳にして、しかも学生の身分で、学習院講師に任命されている。これらは、若くして耕輔が社会的な信頼を得たことを物語っている。

翌 1907（明治 40）年 4 月、第 2 回楽苑会公演で歌劇の第 2 作、《霊鐘》を上演する。翌 1908（明治 41）年に雑誌「音楽界」の編集主事、学習院初等科入学の昭和天皇の唱歌科担任（22 才）。翌年音楽教育会の理事就任。4 月に本多ひろ子と結婚する（後に一男六女をもうける）と同時に、東京外国語学校ドイツ語の専科（夜学）に入学するという勤勉ぶりを発揮している（なお 1916 年には、同校フランス語の専科にも入学）。

1912（大正元年）、喜歌劇《収穫》の大半を作曲（未完）したが、上演の企画は挫折する。この年、明治天皇崩御により殉死した乃木将軍を悼んで 9 月に出版した«乃木大将の歌»が広く普及している。1915（大正 4）年、「音楽普及会」の発起人となり、8 月には音楽教育振興を目指す『大正幼年唱歌』の刊行を始める（1918 年 12 集で完結）。（『大正少年唱歌集』は 1919 年から 1929 年にわたり第 12 集を刊行。）1917（大正 6）年 5 月に弘田龍太郎等と「作曲研究会」を組織、この年に《芭蕉》《沙羅の木》、翌年に《泊り舟》など歌曲の代表作が誕生する

1920（大正 9）年 9 月、パリ留学の途につく。欧米の音楽および音楽教育観察・調査を内務省・文部省から嘱託されての 2 年半に及ぶ長旅となる（1923 年 3 月帰国）。パリ音楽院にてシャルル・ヴィドール、ポール・ヴィダルの作曲クラスを聴講。オペラやコンサートに熱心に通う一方、ドイツ、オーストリア、イタリア、英国、アメリカに視察に向かう。この欧米体験を経た耕輔は、音楽教育活動を社会活動に広げるとともに、音楽評論・音楽学の領域における、西欧音楽の啓蒙活動にさらに積極的に取り組んでいく。

1924（大正 13）年 11 月、学習院教授に就任。翌年に、本居長世、中山晋平等、8 人の仲間と共に「作曲家組合」を結成。1927（昭和 2）年 11 月に「国民音楽協会」を設立して理事長に就任。同 28 日に第 1 回合唱祭を開催、これが日本における最初の合唱コンクールとなったことは耕輔の功績の一つに挙げられよう。また、翌年 12 月には日本作曲家協会理事長に就任する（1930 年改称された「大日本作曲家協会」総務理事）。

1937（昭和 12）年 6 月、東京女子高等師範学校教授に就任（1951 年には改称されたお茶の水女子大学教授の音楽科主任となる）。1940（昭和 15）年 9 月、日本大学音楽部長を兼任。1946（昭和 21）年、皇太子殿下に音楽を進講。1952（昭和 27）年、東邦音楽短期大学教授、1954（昭和 29）年同大学講師となる。小松耕輔楽壇 50 年を記念して《小松耕輔作曲選集》（1956、春秋社）が刊行される。1966（昭和 41）年 2 月 3 日逝去。享年 81 歳。従四位に叙せられ勲三等旭日小綬章を受勲。（以上の略歴において、作品と多くの著作、訳書、歌劇台本訳等については、ごく一部を除いて省略した。）

ここで見えてきたのは、耕輔の音楽に関わる活動の守備の広さである。しかし、次には、耕輔のごく初期の活動である、歌劇に的を絞ることにしよう。

（3）小松文庫の概要

小松耕輔の蔵書

小松文庫の蔵書カードによると、和書（教科書を含む）約 1240 冊、洋書約 470 冊、楽譜約 1240 冊がある。和書の中に小松の著書・訳書が 36 冊、小松編の出版楽譜が 37 冊ある（これらは残念ながら彼の全著作ではない。現に『世界音楽遍路』『懐しのメロディー』『わが思い出の楽壇』『広子日記』という重要な資料は小松文庫に収容されていない *7。

小松耕輔の自筆譜

1）小松文庫の自筆譜

小松耕輔の自筆譜は長らくカード化されない状態にあった。最初に調査・整理が行われ報告されたのは、1996（平成８）年、上野学園大学旧音楽学部音楽学科の春田小百合作成の卒業論文［以下春田論文と略す］においてである *8。この論文は主として小松の夥しい数の自筆譜の整理・カード化の作業に充てられ、その結果、小松文庫に属する小松の自筆譜の曲数は 564 曲にのぼることが明らかにされた *9。これらの自筆譜の大半は五線紙ノートにぎっしり丹念に書き込まれている、歌曲・童謡・校歌 *10 （新・旧の小・中・高等学校・専門学校）・寮歌・社歌である。ノートには一部を除き日付がないものが多いので、これらから作曲年代を特定することは難しい。これら自筆譜にあって異彩を放っているのが、未完のオペレッタ《収穫》（後述）である。これら自筆譜の全ては、元来入れられていた破損の著しい５つの袋から、そのままⅠ～Ⅴの番号を付した５つの新しい図書館の銘入りの袋［自筆譜袋と称する］に 1997 年に移し替えられ、保管されている。さらに今回の調査で、小松文庫の書架に混入していた自筆譜が見つかったので、これらを新に６つ目の袋（Ⅵの番号を付した）にまとめ、先の５つの自筆譜袋と同じ場所に保管することとした。

2）小松文庫以外の自筆譜：遺族所有の自筆譜

上述の春田論文の作成にまつわり、小松直系の遺族の田中みや子氏と春田・筆者が面会した折りに、同氏が複数の紙袋入りの相当数の自筆譜を保管していることが判明した。そこで翌年の 1997（平成９）年に春田論文の作業の延長として、同じく音楽学部旧音楽学科の伊藤あゆみ作成の卒業論文［以下伊藤論文と略す］*11において、田中みや子氏所蔵の全自筆譜を、春田論文の方法を踏襲してカード化した結果、遺族所有の自筆譜はおよそ 764 曲にのぼることが判明した *12。これらの自筆譜は、形態こそ小松文庫のそれと変わらないが、日付のより新しい［1931-51 年］自筆譜に集中し、自筆譜以外の出版譜やメモなど雑多な資料の混入も見られた。これらは全て、小松文庫の自筆譜袋と同じ仕様の、Ⅴ～Ⅹの番号を付した５つの袋に収められ、田中みや子氏の同意の下で、上野学園大学図書館に管理を委託されている。

小松文庫の雑誌・評論記事

小松文庫の少なからぬ位置を占めるのが、明治期から昭和30年代までの雑誌のバックナンバーである。それら夥しい数の雑誌は、現在まで未整理のまま小松文庫のカードから外されていたので、この度の調査において一覧表を作成した。またこれら雑誌のバックナンバーから小松自身の執筆した記事を抽出し、同じく一覧表とした*[13]。『音樂界』(1908［明治41］年1月號創刊　樂思社　小松が編集主幹)、『音樂』(1910［明治43］年創刊*[14]　共益商社樂器店)などは1年毎に、金文字のタイトル付きのハードカヴァー付き製本が施され、小松が大切に保存した様子が窺える。小松耕輔が創刊に関与した雑誌で、あまり知られていない『樂苑』(1935［昭和10］年4月號創刊 東京シンキヤウ社 小松が「創刊の辞」執筆）も揃っている。

また、自筆譜袋Vには、新聞の批評記事の切り抜きが丁寧に貼り付けられた、新聞記事専用の2冊のスクラップ・ブックがあるのが目を引く。その多くは日付と新聞名のメモの記載がないが、明治43・44・45年の讀賣新聞ないし秋田魁新聞の名がみえる古い1冊（カード番号：V／(2)／Sc-2）および、大正5・6・7年の秋田魁新聞、讀賣新聞、日々新聞の名が散見される別の1冊（V／(1)／Sc-1）から、若き小松が雑誌のみでなく新聞紙上においても、音楽評論の健筆を振るったことがわかる。小松の文体（例えば「～をる」という終生抜けなかったくせ）から、これらの記事は全て小松の筆によると思われる。そうであれば、小松耕輔の筆名には、既知の「玉巌」、「つゆまろ」、「若松美鳥」、「高橋乙治」のほかに、新聞上で使われた「野狐髯」「あふひ」「いてふ」も加えられてよい。

（4）オペラ3作品の楽譜の所在・様態

ここで自筆譜研究の範疇に限り、3つのオペラ作品、《羽衣》(1906)、《靈鐘》(1907)、《収穫》(1912）に焦点を当てよう。これらの楽譜の所在の状況は次の通りである。

処女作の《羽衣》の上演の年、1906（明治39）年に修文館よりピアノ・スコアが出版され、50年後にも同スコアが『小松耕輔作曲選集』(春秋社、1956）に収録された。修文館版は小松文庫にないが後者はある。上演時の総譜（弦楽合奏とフルート）の自筆譜は、小松文庫にも遺族所有の自筆譜袋にもない。小松の著述にもそれに言及した箇所は見あたらない。

第2作《靈鐘》は翌年、1907（明治40）年に上演されたが、小松は「樂譜は銀座の共益商社より出版の豫定で原稿を渡したが火災のために紛失してしまつた。手ひかえが無かつたので全く跡方もなくなってしまつた。臺詞は小林愛雄氏の詩集『管弦』の中に収められて神田表神保町の彩雲閣より明治四十年四月に出版された」*[15]としている。また「多分關東大震災の時燒失してしまつたことと思う。手元に控えがないので惜しい氣がする」*[16]と二つの回顧録で述懐しており、爾来この楽譜は残存しないと見なされてきた*[17]。

しかしながら、その下書き用と思われる草稿2種が、田中みや子氏所有の夥しい自筆譜の中に埋もれていた（小松が控えがないので何も残っていない、と全否定しているのは、ひとえに総譜を指したというよりは、草稿自体を忘れていたのだろう)。

草稿は別々に2種存在する。一つは小型の5線紙ノート1冊を占めている*[18]［譜例1］。もう一つは見開きの五線紙2枚の内、全3頁に書かれた15小節である*[19]。

第3作の《収穫》は3つの中では最も規模の大きい「オペレッタ」で、1912（明治45）年冬頃に作曲された。小松文庫に以下の3種類の自筆譜および、手書き台本がある。

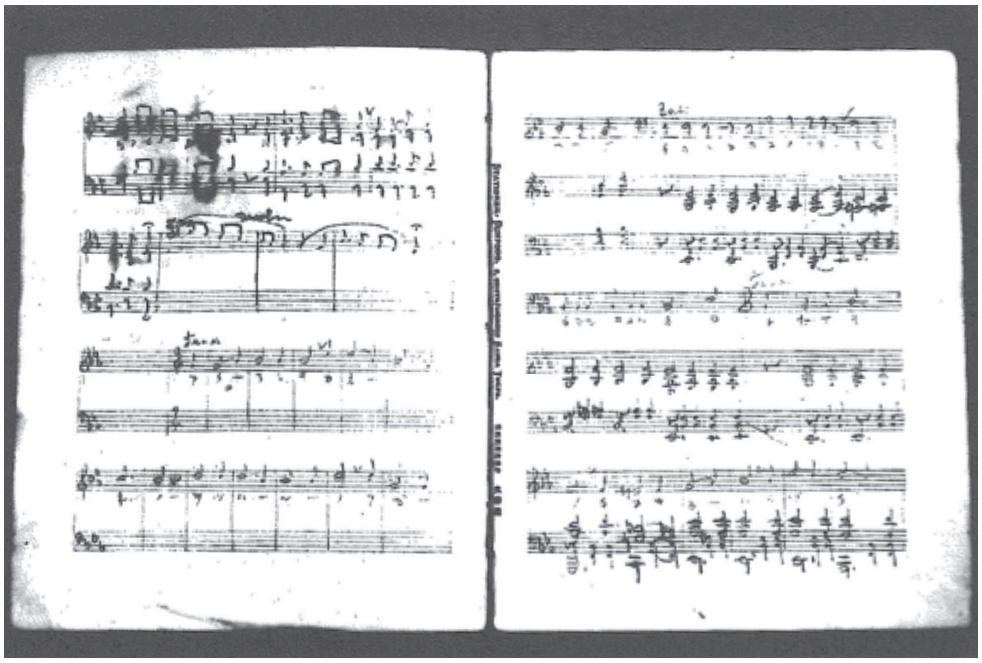
イ）極薄の和紙に書かれた手書き台本 * [20]

ロ）歌のパート譜 * [21]［譜例 2］

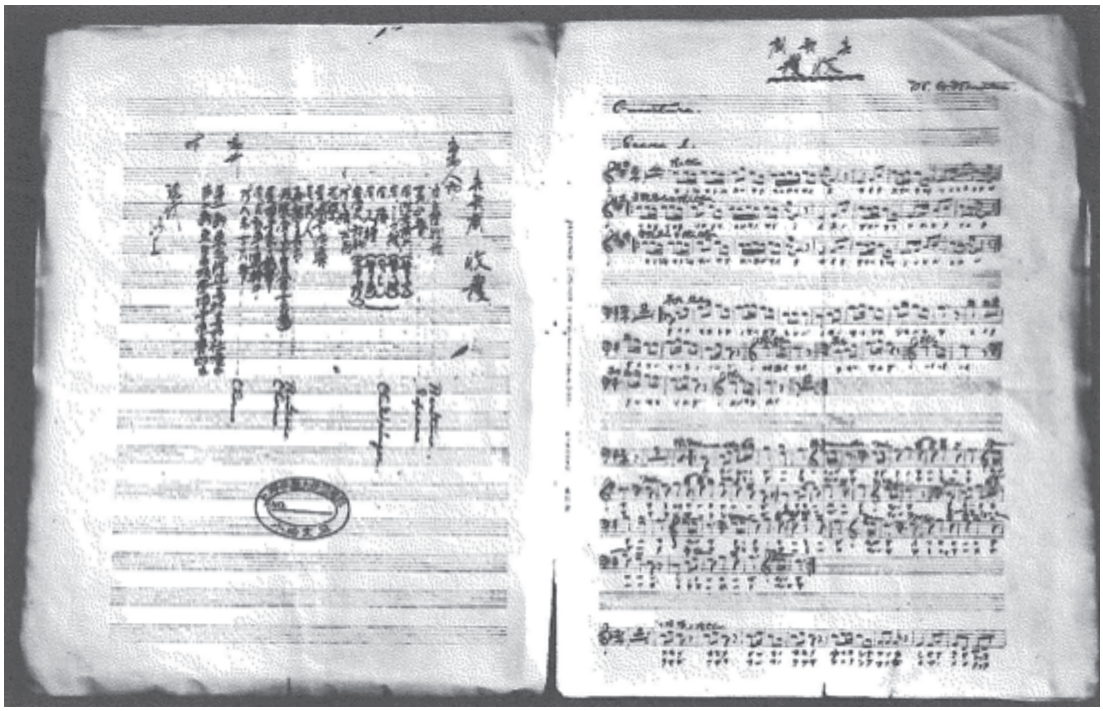
ハ）下書き総譜 * [22]

ニ）清書された総譜 * [23]

以上の４種のうち、イ）の台本は全二齣（こま）の完成版、ロ）の歌のパート譜は第一・二齣とも存在しているが、ハ）ニ）の総譜は何れも第一齣のみで、第二齣は存在しない。



【譜例 1】オペラ《霊鐘》草稿　第２・３頁



【譜例 2】 オペレッタ《収穫》歌のパート譜 見開き頁

（5）オペラ《羽衣》《靈鐘》《収穫》研究

オペラ第１作《羽衣》（1906）

《羽衣》は 1906（明治 39）年６月２日に基督教青年会館において上演された、「実質的な日本最初の創作として記憶すべきもの」*[24]といわれる。これより遡ること３年、1903（明治 36) 年７月４日に日本初の本格的オペラ上演、グルック Christoph Willibald Gluck（1717 ～ 84）の《オルフォイス Orfeo ed Euridice》（1751）公演（東京音楽学校奏楽堂）が行われた。翌 1904（明治 37 年）に北村季晴（1872 ～ 1931）が発表した叙事唱歌《露営の夢》が、次の年に歌舞伎座において舞台仕立てで再演され、「日本人が作った最初のオペラだとして大評判になった」*24 が、作曲家はオペラを意図したものではないと発言、半世紀後に牛山充が「極めて幼稚なもの」、「戦時中［日露戦争］のきわもの」*[25]と評した。

さて、小松は《羽衣》に関して、２冊の回想録で雄弁に語っている（Ⅰ② 46-49 頁、Ⅰ③ 64-65 頁)。この創作の遠因を、「この《羽衣》を創ったことには動機がある。明治 35 年頃に帝大からドイツ文學と宗教學の研究のためにドイツに行った姉崎嘲風（正治）［中略］はドイツでヴァーグナーの研究をし、オペラを実際に聴いてきた。そこで日本へ歸ってきてからヴァーグナーの研究を宣傳した。これが當時の文壇にひじょうな反響を起した［後略］」(③ 64 頁) とし、「此の頃世間の歌劇熱に刺戟されて音樂新報社に於ても同社同人を中心として歌劇の研究を行うこととなり新たに樂苑會を組織し、第一回の公演を催すこととなつた」(② 46 頁)

「東京音樂學校本科３年生で、卒業間際の時間を、この作曲に注いだ」（同）動機について、「みんな『オルフォイス』の影響ですよ。少なくとも私は、あれで奮起したんだ。ぜひ日本人の手でもと……。ヨーロッパでワグナー熱が全盛の時で、日本にも、だんだんワグナーがわかってきたころで、彼は自分で作詞作曲したというのを聞いて感激して、それでは私もと、それから自分で作詞作曲したんです」「えらいもんでしたわ」*[26]と述懐すると共に、彼が実は《オルフォイス》の本番を見ていなかったことも白状している*[27]。

同名の謡曲に題材を求めた《羽衣》の具体的な内容については、ピアノ版出版譜が存在するのでここでは簡単に触れるにとどめる。36 小節の「前奏」と、独唱・二重唱・合唱の交叉する番号つきの 10 曲から成る。全曲が４分の４拍子、第６曲の中間部のハ短調以外は全てハ長調、同一音型を多用した唱歌の様式の支配する簡素で朴訥な作品だが、日本人の書いた初めてのオペラの「試作」としての要素は兼ね備えていたといえよう。

オペラ第２作《靈鐘》（1907）

次に第２作《靈鐘》の草稿について詳しくみよう。楽譜の所在については先述した通り、遺族所有の自筆譜の中に２種類、別々に存在する（注 18・19 参照)。先ず五線紙ノート［自筆袋Ⅷ－ (1)］をみると、全 37 頁（小松には珍しくノンブルが書き込まれていない）に 341 小節にわたり、作曲された全曲とおぼしき鉛筆による走り書きのスケッチが、オペラの進行順に書きつけられている。中には書き損じを示す斜線が施されている段も２箇所ある。序曲は見あたらず、いきなりアカペラの混声４部合唱曲から始まるが、序曲が省かれたとは考え難いので、

別の自筆譜に紛れて序曲の草稿が存在するのかもしれない。

このオペラの成立と初演について作曲者は《羽衣》と同様、二回想録で言及するが、②がより詳細で正確を期し、③はすっきり略述している。

私は［明治］三十九年十月より作曲を始め四十年の四月に略々脱稿した。(② 58 頁)

翌明治四十年四月十三、十四の兩日、午後七時から牛込神樂坂の高等演藝館で樂苑会の第二回公演會を開いた。この時上演されたのが、小林愛雄作詞、私の作曲した「靈鐘」と、グーノーの「ファウスト」一幕､及び澤田柳吉作曲パントマイム「影法師」であつた。「靈鐘」は我國の振事「道成寺」の材源なる印度古劇「鐘魔」によつたもの 1 で、花の江と稱する一女性が僧妙海を慕うて、梵鐘の中に隠れていたところを取り殺す筋である。この歌劇には簡単であるが全部オーケストラを用いた。曲風は洋楽の組織によつたもので、多少のレシタティヴを混えている。せりふは全然用いない。(③ 66-67 頁)

登場人物は五人で、花の江（ソプラノ）若い僧妙海（テノール）主僧（バス）他に僧二人である。時は春の夕暮。處は山深き寺院の境内。［中略］管弦樂は戸山學校の陸軍々樂隊を中心として他に有志者、合唱は女子音樂学校生徒及び東京高等師範學校生徒有志其他の諸君総總五十余名であった。(② 58 頁)

オーケストラが使われたと回想されているが、草稿にはピアノ・パートしかない。最後の頁に「300」と記されているが、これは全小節数（下表の小節数の合計は 294 小節）の書き込みと思われる。草稿による作品全体の構成は、私見によれば次の 7 つの部分に分けられる（以下の頁数は便宜上、著者がつけたもの。T はテノール = 僧、B はバス = 僧、主はバス＝主僧、妙はテノール＝妙海、花はソプラノ＝花の江、レシはレシタティフ)。

枠	頁数	小節	形態(括弧は小節)	調性･拍子･発想記号	テキストの内容/[その他]
1	1 ～ 2	16	四部合唱＊(13)+後奏(3)	変ホ長調 4/4 Moderato	山寺の描写“山寺の春の夕暮れ”
2	2 ～ 5	53	T ソロ(14)／B ソロ(9)／T (12)／B (11)／T **+ B (7)	変ホ長調 3/4	新しい鐘の音のさま“新しき鐘の音の遅春の風情かな[略]鐘はいづこまで響くらむ 聞く人はさびの音に打たれつつ何思ふ”
3	5 ～ 10	29	四声体*** (20)／間奏(9)	変ロ長調 6/8(20)／2/2 (9)	[テキストなし。9 小節の後奏および35～37頁の改定稿***から合唱用と思われる。]
4	7 ～ 8	27	主ソロ(19)+間奏(8)	変ホ長調 2/2 (19) ／変ロ長調 2/2 (8)	“［新鐘を］今打たさばや　用意ととのえよ”

5	8～15	43	T＋B＋妙レシ(12)／妙ソロ(10)／三部合唱(3)／妙レシ(9)／三部合唱(2)／後奏(7)	ヘ長調　4/4 (12)／ト長調　3/4 (10)／4/4 (16)	寺僧に妙海が、“いずくの御方なれよ”、なぜ参られたかと問われ、幼馴染みの娘と再開し愛を契ろうとしたが、鐘の音に“かくてはならじとここまで来しか”と答えるのを、“よくぞ発心”と合唱が讃える
6	15～22	54	花+妙+主レシ(9)／間奏(3)／花ソロ(6)／花+合唱+T+B+主レシ(23)／間奏(13)	ホ短調　4/4 (41)	花の江が“美しい夢”と歌い登場、妙海が慌てて鐘の中に身を隠すと、“友はいづこぞ”と探す　主僧が“春の夜の露深し　疾く磯へ帰られよ”と諭すが、“美しき夢”と彼を追う彼女に鐘の響きが聞こえてくる
7	23～31	73	花ソロ+合唱(6)／vl(5)／主(1)+合唱(26)／T＋B＋主レシ(17)／合唱(11)+後奏(7)	ト長調　3/4 (73)	花の江が合唱を伴い“怪しき鐘よ、魔の歌よ”と歌うと、主僧が“南無大菩薩”と唱え始め、合唱がそれを継ぎ、寺僧が“東方に降し無明王、南方に軍だり夜叉明王 etc. ”と唱え、フィナーレの合唱が“ナマクサアンダetc.”を歌う

* 四部合唱の 13 小節はアカペラだが、34-35 頁にほぼ合唱と同型の伴奏パートを加えた改定稿がある。
** このテノール独唱の 14 小節はほぼ旋律ラインのみの走り書きだが、32-33 頁に伴奏パートを加えた、より整った筆致の改定稿がある。
***35-38 頁にアルペッジョ音型の伴奏パートを加えた改定稿がある。

《靈鐘》の以上の分析対象は五線紙ノート［自筆譜袋：整理番号Ⅷ－（1）］に書き詰められた草稿だが、もう一つの五線紙２枚 [整理番号Ⅷ－（16)］については、上表７項のフィナーレの合唱（11 小節）および後奏の改訂稿 * [28]に他ならないことが判明した。

以上、これらの草稿および一部その改訂稿から全体像を組み立ててみた。次の諸点により、完成作品の全貌を窺い知ることは出来ない。まず、《羽衣》にはあった序曲が見あたらない、女声３部合唱（12 頁）の最下声が男声の音域になっている等、譜面の整合性を欠くのが目につく、ヴァイオリンのオブリガート旋律（14-15 頁、24 頁）のピアノ部分が白紙である、ピアノ・スコアのみでオーケストレーションは皆目分からない等。しかし下書きスケッチ色が濃厚であるにせよ、これらの草稿から、忘れられていた小松第２作目のオペラ《靈鐘》の骨子が把握できた。

小松は自作をどう評価していたのだろうか。「[前略]《羽衣》よりはよい出來であったと思う。此の曲にはレシタティーヴォ風のもの * [29]を入れ、よほど劇的の表現にも成功したように思っている。［中略］演出の出來は相當によく、都下の各新聞はいずれも同情ある批評を書いてくれた」* [30]として、新聞評の抜粋も引用している。しかし東京日日新聞のように、《羽衣》の方を評価する酷評 * [31]もみられた。

未完のオペレッタ《収穫》（1912）

第３作の《収穫》は《靈鐘》の５年後に企画されたが、自筆譜が未完のまま放置され、上演されることなく終わったオペレッタである。先述した３つの草稿（注 21・22・23 参照）中の歌のパート譜［VI／(2)／Ms-33-1］の表紙には「Récolte de l'Amour／Opéra Comique en une acte.／喜歌劇／収穫／壱幕」と書かれている。フランス派らしい小松の仏語タイトルから、「収穫」とは「愛の収穫」の意味が含まれていることがわかる。台本は全１幕２齣 [こま] の構成であるが、残っている楽譜は何れも１齣のみである。この作品について小松自身は例外的に寡黙であり、半生記の内でも言及しているのは次の 1912（明治 45）年の箇所だけである。

そんな關係で二人相談の上「収穫」を作ることとなり、同君は脚本を私は作曲を受持　つことになつた。私は一月十二日から作曲に從事した。（中略）そこで［帝劇の二月のユンケル作曲「熊野」の評判があまりよくなかったので］帝劇は日本人の作曲になつたものを上演しようという考もあつたので、私と藤澤君と兩人で當時の帝劇會長だつた澁澤栄一男と面會することとなり、益田太郎氏の邸で「収穫」の下讀みをすることになつた。そうこうしている中に主役になるはずの柴田環が外國に行くことになり、結局「収穫」はお流れの形となつてしまつた *[32]。

上述の「そんな關係」とは、「Pocket Diary Meiji 45」（博文館）明治 45 年のポケット日記中の１月５日（金）欄の「朝九時藤沢君来訪一処に田中正平博士を訪問、（中略）田中君の訪問はこんど企てたオペラについての相談のため。楽しい一日であった」という件から窺える。さらに１月 12 日（金）欄には、「喜歌劇『収穫』のオヴァチュアを書きはしむ」の記述がある。「藤澤 [沢] 君」とは、台本を担当した藤澤古雪 *[33]のことで、同じ日記の２月２日（金）、12 日（月）、16 日（金）、18 日（日）、３月 10 日（日）、４月 11 日（木）、10 月 19 日（土）欄に彼が来訪したとのメモ、９月９日（月）には小松が彼を訪問したメモがみられ、この年の頻繁な２人の往来がわかるが、詳細の記述は一切ない。引用文中の「渋澤との面会」についても日記にメモ書きがある。すなわち５月３日（金）の「主件」欄に「帝劇。収穫会。」と記され、文章欄に「〇収穫会延期」とだけ記されている。この件が引用文中の「お流れの形」と一致するが、「益田太郎氏の邸の下讀み」についての日記の記述はない。

物語の第１齣の舞台は「東京附近某村某神社境内」、かつては愛しあったが訳あって村を出た、今をときめくソプラノ歌手の夏山繁と外国で成功した波多野欣弥（バリトン）が再会。村人の収穫の踊り、わらべうた等を背景に求婚、インドへの同行を求める欣弥と応じる繁との愛の２重唱を園城寺侯爵の迎えが遮り、今宵の仮装舞踏会へと繁を強引に連れ去る。第２齣の舞台は赤坂の「侯爵家舞踏室」、仮装の客人が踊りさんざめく中で、歌を所望された繁は欣弥への想いを歌うと、仮装して紛れ込んで歌の中に彼女の本心を聴き雀喜す欣弥が非礼を詫びると、侯爵はこの宴を２人の婚約の祝いにしようと提案、大団円となる。

（6）新しい小松耕輔像のために

小松耕輔の評価は死後40年を経たが現在も未だ確定しているようには思えない。(小松耕輔の歴史的な評価について、) 秋山邦晴は昭和期以前の作曲家に触れた箇所で、「(前略)明治時代の瀧廉太郎や北村季晴［すえはる］＊の創作歌曲にはじまり、明治・大正にかけての山田耕筰、信時潔にみられるいわば日本の作曲界の創生期ともいえる時代、そして大正初期以来の童謡運動を推し進めた小松耕輔、梁田貞［やなだただし］ら」と位置づけている＊[34]。小松は「明治・大正の作曲家の創生期」のジャンルから漏れた、「大正の童謡作曲家」というわけである。他方、「明治の作曲家たち〜音楽の花ひらく頃〜」と題する奏楽堂特別展 (2003.10.28-11.30) の対象となった26人の最後の人物である。つまり「明治を担う最後の作曲家」と位置づけられている*[35]。

《羽衣》の出版譜に掲載された森歐外（筆名 源高湛［みなもとたかしつ］）の巻頭言を見よう。

（前略）韻語と聲樂とを併せ好める小松氏は、詩と樂との調和をもて畢生の業とせんと志して、こは只試みにものしつるなりとぞ。もとより我が國には例なきことにしあれば、初めより全き効果を収め得んことを期すべきにはあらず。(後略)

「我が國には例なきこと」をした小松が「全き効果を期す」べきではなかった。しかし、小松が明治時代の最後の６年間に、３つのオペラ作品を手がけたものの、それ以降にオペラ創作の筆を折ったことは象徴的に思われる。

ここでは、不完全ながら草稿がみつかった《靈鐘》を特に分析し、この幻のオペラの全体像を捉えた結果、これがレチタティーヴォの導入や劇作法の工夫の点で、(音楽的には歌曲や唱歌の域を超えるものではないが、)《羽衣》より進化したことが確認できた。

また民俗音楽の要素を加えた、最も大規模な《収穫》が全１幕２場の内、１場のみの清書総譜があるものの未完に終わった真相は何だったのか、「収穫会延期」という文字だけから究明することはできない。しかしながら、これ以後、小松はオペラ創作の筆を折り、他のジャンルの作曲と多角的な社会活動に移る点で、この転向は彼の創作の軌跡で、後の欧米視察旅行 (1920-22) 以上の意味をもつと思われる。

小松が果たした役割は、作曲家というジャンルに留まらず、教養ある音楽文化人として、着実な評論活動を展開し、二代にわたる天皇（昭和天皇と今上天皇）の音楽教育を担当し、楽壇の要職を歴任し、社会的行動の中に自己の存在の場を求めた。このことを、小松文庫、そして彼のオペラの自筆譜が語っているようである。

最後に付け加えたいのは、音楽学の重要性についての小松の 1933 (昭和８) 年の次の慧眼は、(小松自身が音楽の啓蒙家に留まったにしても) 注目に価しよう。

［音楽雑誌の使命は］一つは所謂ヂャーナリステックなものと一つは学術的な専門的研究的のものとである。しかるに現在刊行されつゝあるものは前者に属するものが多く、後者に属するものは極めて勘い。(中略) しかし音楽の真の向上は演奏、作曲、と相俟って音楽学の研究及び普及に尽力しなければならぬことは此処に言ふまでもあるまい＊[36]。

81 年の長い人生を最後まで現役で貫き通し、作曲家というよりは音楽の求道者として、淡々と楽壇を睥睨し続けた小松耕輔は「明治期の作曲家」に留まったのではなく、「音楽研究家」（小松自身が自らをこう評したことがある＊[37]）としての己を貫いた。

小論は本格的な小松耕輔研究のための序論に過ぎない。小松文庫の幾多の資料のさらなる研究、小松が教職にあった学習院大学図書館、東京女子高等師範学校（のちのお茶の水女子大学）図書館、さらに小松が創設に尽力し長らく理事長を務めた日本合唱協会に恐らく残っている関係資料の調査も残された課題である。

Ⅱ　小松清研究ノート

（1）小松清の関連資料の所在

小松耕輔の末弟、小松清（1899-1975）＊[1]の死後 26 年目の 2006（平成 18）年に、光子夫人（1905-2006）が 100 歳の長寿を全うした。二人には子供がなく、光子夫人の里方の吉野家と小松耕輔の長男の長女、田中みや子氏が整理に当たった際に、小松清家の遺品を、「小松文庫」のある上野学園大学に寄贈する旨の打診があり、これを受諾することとなった。そこで、筆者が同年 12 月 25 日に、阿佐ヶ谷の小松邸に赴き、小松清の蔵書、著書、訳書、作曲した作品の自筆譜、出版譜、自作録音を収録した SP レコード、その他の SP・LP レコード、書簡、写真、演奏会プログラム、その他の資料を確認し、合わせて段ボール 184 個口がその年の内に、上野学園大学上野校地に収められた。

2012（平成 24）年夏より、筆者はこれら厖大な遺品・資料の調査、整理に着手し、データ化の途上である＊[2]。

これらの作業を通じて明らかになってきたことは、小松清のフランス文学研究者という主たる肩書きの陰に隠れていた、音楽関連の多彩な活動ぶりである。この観点を踏まえて、小松清の活動を鳥瞰すると、次のような分類が相応しいと思われる。

1）著作活動
　・著書　　イ . フランス文学関連　ロ . 音楽関連
　・エッセイ　イ . フランス文学関連　ロ . 音楽関連
2）翻訳活動
　・著作　　イ . 小説　ロ . 音楽関連：訳詩
　・戯曲　　イ . 文学作品　ロ . オペレッタ、音楽劇 etc.
　・詩（ボードレール、マラルメ、ヴェルレーヌ etc.）〔歌曲用〕
3）作曲活動　イ . 舞台作品　ロ . バレエ　ハ . 室内楽、器楽　ニ . 歌曲 etc.
4）作詞活動
5）社会活動　イ . 演奏活動（指揮、ピアノ）

ロ．フランス文学関連
ハ．音楽企画：コンサート・オペレッタ・バレエ etc. 上演
ニ．音楽団体活動
6）その他の記録・資料　　イ．プログラム　ロ．書簡　ハ．写真

小松清の知られざる数百以上に及ぶ音楽作品の自筆譜は、分類の上、整理番号を付して、著作とその草稿と共に、データ化を進める途上にあるため、資料一覧については、別の機会に稿を改めることとする。

（2）小松清と兄弟／生涯概観

小松清（1899-1975）は、小松平蔵・トミの第七子、七男として 1899（明治 32）年 4 月 15 日に耕輔（1884-1966）と同じく、秋田県由利郡王米字舘合に誕生した。7 人の兄弟の内、長男耕造は 1877（明治 10）年に生後 2 ヶ月で死亡、次男耕輔（1884-1966）に続く三男翠（1888-1970）は 1907（明治 40）年に東京高等工業高等学校（現在の東京工業大学）入学以来、染色一筋の人生を送った。四男三樹三（1890-1921）は指揮やヴァイオリニストとして活躍するも 32 歳直前に夭折した。五男千年太郎（1892- ？）は北海道に養子に行った他は不明。六男平五郎（1897-1953）は慶應義塾大学出身で母校のワグネルソサエティ他の指揮者、作曲家として活躍したが、56 歳で世を去っている（清の遺品の中に、「平五郎」の名が書かれ、資料の入っている紙袋が存在し、後述する清作曲の舞踊劇の《トメリー物語》初演のオーケストラ指揮を担当している）。

つまり、秋田の「寒村」（小松耕輔談）に生まれ育った小松兄弟、7 人の男たちの内、4 人がクラシック音楽活動に従事するという、音楽一家が形成されたのである。これは日本の特に明治期にあって、きわめて稀な「現象」であったといえよう。とりわけ末っ子の小松清は、4 人の中でも、文学者と音楽者という二本の柱を 75 歳の長い生涯にわたり貫き通した点で、他の兄弟とはまた一線を画す存在であった。

小松清の履歴をざっと辿っておこう。以下は東京大学教養学部の記録による。清は 1912（明治 45）年 4 月に東京の私立京華中學校入学、1917（大正 6）年同校を卒業する。その 6 月、18 歳の清は東京音樂学校（現在の東京藝術大学）選科ピアノ科（現在の別科に当たる予備科）に入学（5 年後の 1922（大正11）年に同科を終了）、ピアノをかなり本格的に学んでいる。その同年、1917 年 9 月には、最難関校の第一高等學校仏法科に入学する。病気のため 1 年休学を経て、1922（大正 11）年 3 月に同校を卒業する（すなわち 5 年間ずっと、一高生と、ピアノ選科生という両輪の学びを両立させたのである）。続いて同年翌 4 月に東京帝國大學文學部仏蘭西文學科入学、1925（大正 14）年 3 月に同学を卒業する。卒業と同時に明治大學講師となる。

1927（昭和 2）年には東京高等學校講師に任ぜられ、その 9 年後に同校教授、1949（昭和 24）年に東京大學教授に就任している。そして 2 年後の 1951（昭和 26）年に東京藝術大学講師を兼任することになる。1960（昭和 35）年、60 歳の時に東京大学を定年退職すると、東京藝術大学教授に迎えられる。この年にはフランス、西ドイツ、オーストリア、ハンガリー、オランダ、イタリア各国に出張、各地の音楽事情を視察、国際音楽評議会総会等に出席する。

同年東京藝術大学学生部長（任期２年）、翌 1965（昭和 40）年より２年間、同大学評議員に就任。そして 67 歳の 1967（昭和 42）年、同大学を定年退職する。同年に引き続き東海大学教授に、翌年４月より同大学教養学部の初代学部長に就任、同大学の運営に腐心する。

大学以外の社会的活動としては、1965（昭和 40）年ユネスコ国内委員会委員、その他国際音楽評議会全日本委員長、日本作詞会長、日本音楽学会理事、全日本鼓笛バンド連名会長を歴任、また国民音楽協会音楽コンクール創設にも携わっている。

1975(昭和 50)年４月 12 日に永眠。享年 75 歳(あと３日で 76 歳を迎えるところであった)。三樹三は 31 歳、平五郎は 55 歳で世を去ったので、長生きだった耕輔（81 歳で病死）の次に長生したことになる。

小松清は、1926（大正 15）年 10 月に吉野光子と結婚している。光子は大正デモクラシー研究の騎手とうたわれた吉野作造 (1878-1933) の一男六女の三女であり、百歳を超える長寿を全うした。この光子の希望で、その死までは夫の遺品に他人が手を触れることはできなかったのである。

ところで、フランス文学研究者としての小松清の主要な領域は、アルフレッド・ド・ミュッセ Alfred de Musset（1810-57）等を中心とするフランス文学作品の翻訳にあるといえよう。ミュッセの訳書には『世紀の告白 La Confession d’un enfant du siècle』（1949、白水社）、『二人の恋人 Les deux Maîtresses』（1951、岩波文庫）等があり、何千頁にも及ぶ訳稿や、夥しい量の校正刷りなどが丁寧に保管されてあり、彼の文学関連の「仕事」について、丁寧に追跡していくことが可能ではあるが、小論の関心事は、「未知の領域」である音楽関連の仕事である。

そこで、彼の作曲した数百以上に及ぶ音楽作品の中から、主要作品と思われる２作、《トメリー物語》と歌曲集《仏訳短歌九首》を取り上げてみる。

（３）作品研究：《トメリー物語》

小松清の舞踊のための舞台用作品が複数存在しており、また上演もされている。それらは、《トメリー物語》《太古の真昼》《幽愁賦》《源氏物語》などで、それぞれ分厚い自筆譜が、厚手の紙でしっかり梱包されるか、紙袋に収められて、自宅廊下のタンス引き出しや押し入れの桑折に保管されていた。

この《トメリー物語》（全２場）は、珠實會［たまみくわい］（日本舞踊家の花柳珠實が主催する舞踊の会）の第４回公演が 1931（昭和６）年、日比谷公会堂で行われた際に、プログラム第３部で初演された（題名は自筆譜のピアノスコアでは《トメリイ物語》）。なお第１部は古典舞踊〔日本舞踊〕２曲、第２部は「児童舞踊」と「小品舞踊」全８曲、第３部は「傳説的な物語に題材をとって創作しましたバレー」（プログラム）の《トメリー物語》及び、《支那の刺繍》（大中寅二作曲、振付・指揮：花柳珠實）という構成。

小松清の鉛筆書きのメモ（総譜Ⅱに挿入されていた）に、「作曲、昭和６年九月二十四日　十月三十一日／初演　同十一月八日　珠實會で発表。／日興 [響のミス] アンサンブル／小松平五郎指揮」とあり、続いて作品の簡単な説明が続く。「筋　二場（一場と二場の間は弦の低い音でつながれている）／曲はアラビア風の音楽で、その中に、老臣マートンや舞姫トメリーのモーティヴが入りまぢってゐる」

残されている自筆譜は次の通りである。筆者の資料整理番号を付記している。

□総　譜「トメリイ物語Ⅰ／由利泉案／小松清作曲」［Ｂ６版五線ノート］Ⅲ－（６）－３ａ
「トメリイ物語Ⅱ　同上」[同上] Ⅲ－（６）－３ｂ
「トメリイ物語Ⅲ　同上」[同上] Ⅲ－（６）－３ｃ

＊全て鉛筆書きでスケッチの域を出ていない（空白パートが多い）。完成版ではない。

□ピアノ譜「トメリイ物語」[同上] Ⅲ－（６）－２ａ
ピアノ譜「トメリイ物語」[同上] Ⅲ－（６）－２ｂ

＊全て鉛筆書きで一部スケッチや訂正があるが、総譜より全体の構成が明瞭である。完成版ではない。総譜、ピアノ譜ともに、演奏に使われてはいない。

□オーケストラ用パート譜（２種あり）全 608 小節
旧版（鉛筆のスケッチ）
完成版（万年筆できちんと清書されている）：表紙に各楽器名が記されている。
「1st Violon.」（２冊）「2nd Violin.」（２冊）「Viola.」「Cello.」「Bass.」「Flute.」「Clarinette.」「Oboe.」「Trumpette.」「Fagotte.」「Trombone.」「Timpani ／ Bell ／ Petite caisse ／ Cymbal」（以上１部）。演奏に使われた痕跡がある。

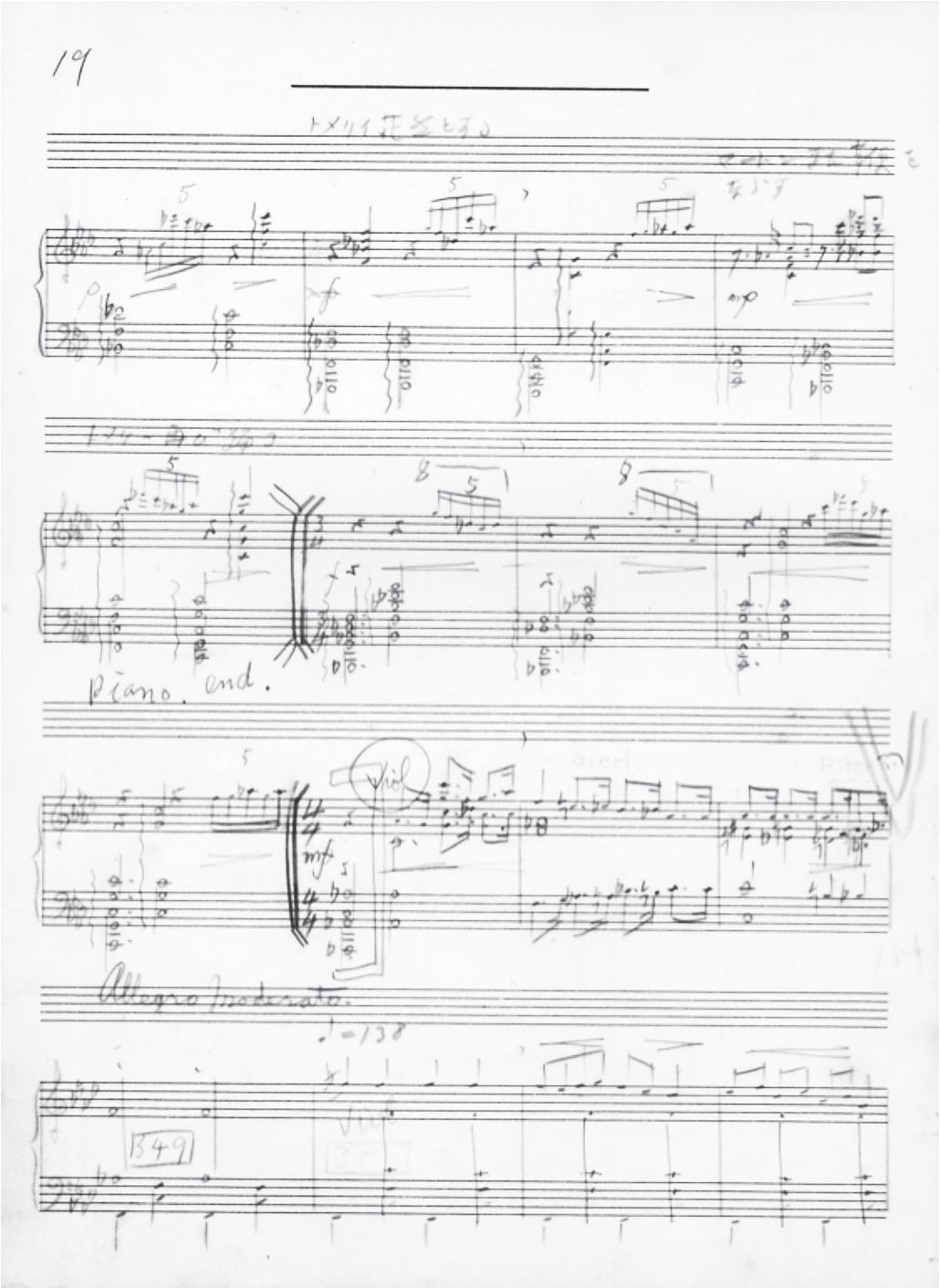
以上のように、完全に読める楽譜が存在しないために、音楽的内容に触れることは難しい（恐らく指揮者用の総譜、練習用のピアノ譜が別に存在したと思われるが、現在まで遺品から見つけることはできなかった）。

さて、この筋書きの作者について、自筆譜には「由利泉案」、プログラムには「由利泉」とあるが、小松清の筆跡による筋書きの草稿〔原稿用紙７枚〕の冒頭に、「珠實會作／小松清氏作曲／トメリー物語」と記されている。「由利泉」は作曲者の出身地、東由利町にちなんだペンネームの可能性が濃い。

登場人物は王、マートン（老いた廷臣）、舞姫 10 人、トメリー（舞姫）、ハスタム（若き騎士）、刀をもった男。舞台は「東洋の或る国。草稿の「第一場 宮殿」「第二場 牢獄」には、それぞれ「1~76 」「1 ～ 23」の番号が付され、各場面のト書きが書き込まれている。

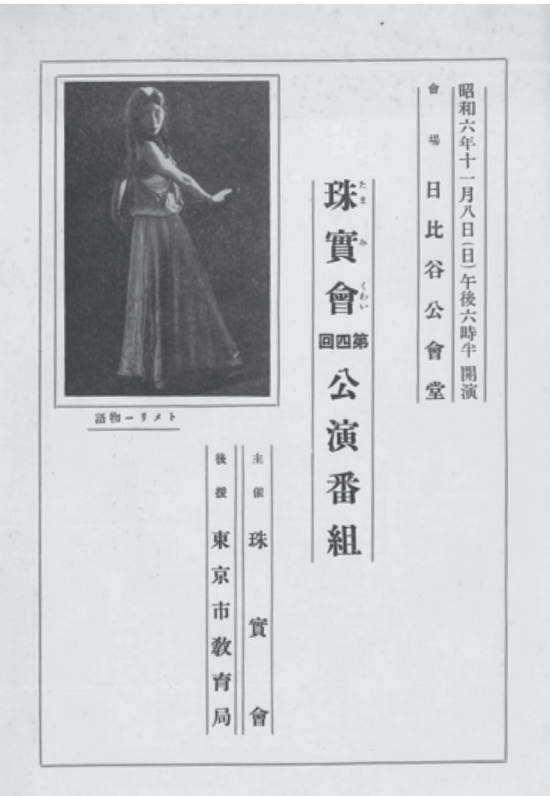
あらすじは異国の舞姫トメリーの悲恋と死という簡単なもの。第一場はある王国の宮殿。王妃を失った王が、自分に靡かない奴隷の舞姫トメリーを監禁。他の踊り子に目もくれず無理にもトメリーを踊らせようと、廷臣マートンに呼びに行かせるが、彼女には踊る気配がない。マートンが杖を鳴らし威嚇するのでしぶしぶ踊り出すと、踊りは白熱を帯び、心を奪われた王が彼女に近づく。逃げるトメリーに王が接吻しかけると、トメリーの恋人ハスタムが登場、彼女を奪い返す。一同恐怖の内に幕。

第二場は牢獄、悲しみに凝立するトメリーとハスタムが踊り始めると、刀を手にした男が彼を連れ去る。ハスタムの処刑を暗示する fff のトゥッティ（「総譜Ⅲ」105 頁、433 小節）（オーケストラの打楽器用「パート譜」では６頁、490~497 小節の s*fff* のシンバルと続くティンパニの部分に該当）の響きに発狂したトメリーが、悲愴な舞いを舞ったのちに、倒れて息絶える。



【譜例３】小松清 《トメリー物語》ピアノ譜Ⅰ 19頁

先述した通り、完成楽譜が（パート譜以外は）残っておらず、スケッチの形のピアノ譜から類推するしかない。【譜例３】にみられるように、５連音符の混ざった音型がトメリーの踊りのモティーフであり、「マートンまた鞭をならす」「トメリー再び踊る」といったト書きが書き込まれ、舞台の動きを彷彿とさせる。オーケストレーションは、一部分から類推するに、かなり精緻に書き込まれている。小松清の名訳、リムスキー＝コルサコフ『管弦楽法原理Ⅰ・Ⅱ』（1939、1950、創元社）の出版以前の作品だが、彼が基本的な技法を会得していたことが窺える。旋律はシンプルで異国趣味の香りづけは余り感じられない。



【図版１】昭和６年 11 月８日（日）珠實會
第４回公演プログラム表紙
於：日比谷公会堂

【図２】同公演《トメリー物語》
トメリー：花柳珠實、王：藤田繁

（４）作品研究：《仏訳短歌九首》

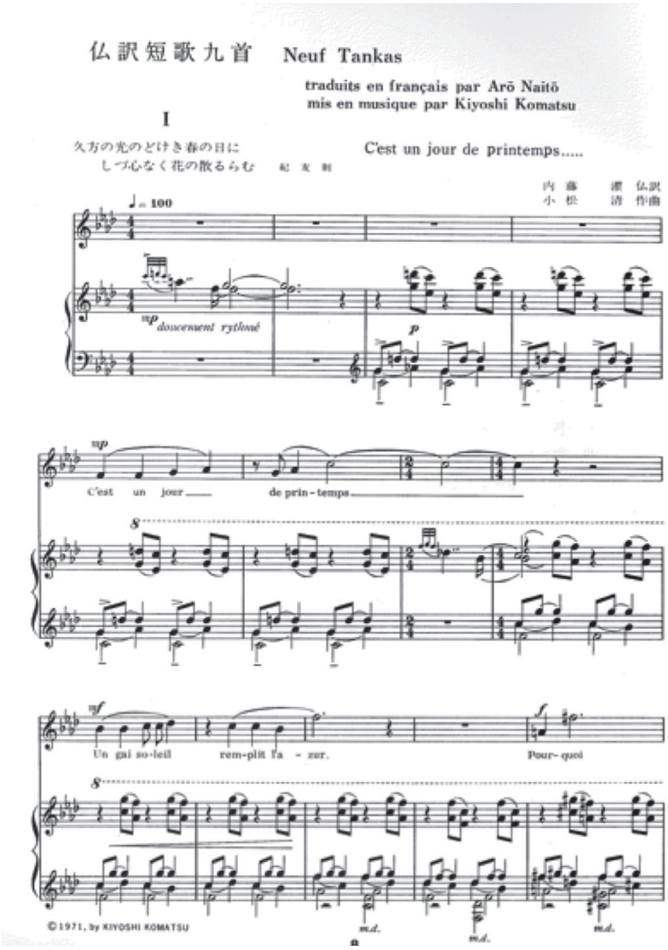
小松清の印刷された数少ない作品のひとつに《仏訳短歌九首　Neuf Tankas》がある。これは 1971 年に日本作曲家協議会から出版された（JFC.71130 B4 判　全 20 頁）。表題紙の説明によれば、「日本作曲家協議会が、文化庁の助成を得て会員の作品を広く海外に紹介するために作成したもの」という。

裏表紙の次の頁に、「大いなる敬愛をこめて　アルセーヌ・アンリ夫人に à Mme Arsène Henry en très réspectueux hommage」との献辞がある。その頁にはフランス語と英語のタイトルがある。フランス語は「Neuf Tankas ／ Traduits en français par Arō Naitó ／ Mis en musique par Kiyoshi Komatsu 」。

9 曲のタイトル（詩）は次の通り。

1. 久方の光のどけき	C’est un jour de printemps	（紀　友則）
2. 何がなしに頭の中に	Je sens dans ma tête	（石川啄木）
3. 何処やらに若き	Quand il grésille au printemps	（石川啄木）
4. 大きなる何事もなき	Une grande rose	（北原白秋）
5. 美しき夜の横顔	Cette ville là-bas	（北原白秋）
6. やはらかき光の中に	Même dans une lumière douce	（北原白秋）

7. ちりからと硝子問屋の　Les lanternes de verre poussiéreuses　（北原白秋）
8. わが夢はおいらん草の　Mon rêve est pareil　（北原白秋）
9. 麗らなれば童は　L’enfant pleure　（北原白秋）



【譜例４　小松清：《仏訳短歌九首》日本作曲家協議会　1971 年】

以上の短歌９首のうち、６首が北原白秋作である。短歌の作曲について作曲家自身が次のようなコメント（要約）を残し、この作品への自負を表明している。彼の代表作の一つといえよう。

・テキストは一高のフランス語の恩師、内藤濯［あろう］教授がパリ留学中に仏訳したもの。
・東大時代に「久方の…」の仏訳を同教授が示したで作曲した。
・残り８曲は６，７年後の病気回復期に作曲し曲集にまとめた。
・ストラヴィンスキーなどの仏訳短歌作品もあるが、日本人として作曲したかった。
・チェレプニンが来日の折に持ち帰ったこの曲はウィーンで演奏され、のちにパリやベルリンでも放送された。

９曲とも１頁未満～２頁未満、ミニアチュア歌曲とでもよぶべき小品で、調性や書法が各々特徴をもち、短歌の簡潔さを生かして、「一筆書き」といった趣を醸している。

例えば第１曲。〈久方の光のどけき〉は百人一首」定番の和歌。ヘ短調、全７小節。「リズムをやさしく刻んで doucement rhythme」と指示され、先ずハ長調でのどかさを表すハープを模した導入、続いて伴奏の四声部の上声二部がモザイク状に花びらがひらひら散る様を主調の属調のハ短調で描き、主調を導く。「何故 pourquoi」で突然、遠隔調のイ長調が現れ、すぐに変ロ短調から原調に戻る。この間、無窮動のモザイク音型が日本風の悠久な自然観を漂わせる佳品である。

（５）小松清関連（作曲・作詞・指揮・ピアノ伴奏）のＳＰレコード

興味深いジャンルと思われるのが､次表のＳＰレコードである。この表は､膨大なＳＰレコードの内の、小松清自身が作曲か作詞した楽曲の録音、彼が指揮かピアノ［伴奏］を担当したレコードを抜き出し一覧にしたものである（表記法はすべて原綴通り）。

小松清関連のＳＰレコード一覧表

	題　　名	作　曲	詞	歌	伴　奏　等	指　揮	演　　奏	品　　番
1	おくめ（詩朗読）	小松清	島崎藤村	照井瀅三	小松清（ピアノ）			Columbia 33288-B
2	静なる夕、聖者の死を懐ふ（詩朗読）	小松清	三木露風	照井瀅三（朗読）	小松清（ピアノ） 上田仁（オルガン）			Columbia 33288-A
3	白銀の乱（旧字に変換せよ）舞（映画主題歌） ドイツソ―カル映画（白銀の乱舞）主題歌	小松清	佐伯孝夫	徳山璉（独唱・合唱付き）				VICTOR 52177-B
4	二葉小學校々歌	小松清	佐藤春夫	杉田政太郎	小泉信一（ピアノ）			NIPPON RECORD 1990
5	草津小學校々歌	小松清	同校作詞	杉田政太郎	小泉信一（ピアノ）			NIPPON RECORD 1989
6	田植唄（新民謡）	小松清・林柳波		次田勝		小松平五郎	國民交響管弦樂團	ヒコーキ 70246-A
7	打ち込め（新民謡）	小松清・林柳波		次田勝		小松平五郎	國民交響管弦樂團	ヒコーキ 70246-B
8	盆をどり歌（童謡）	小松清	岸邊福雄	平山美代子／高山得子				VICTOR 53186-A
9	佛さま（童謡）	小松耕輔	山田静	松本俊枝			日本ビクター管弦樂團	VICTOR 53186-B
10	さんよ節（新作民謡）	小松清	松本義人	徳山璉			日本ビクター管弦樂團	VICTOR 51857-B
11	上越線行進曲（新作民謡）	小松清	松本義人	四家文子			日本ビクター管弦樂團	VICTOR 51857-A
12	春の夜の（歌謡曲）	小松清	長田幹顔	四家文子			日本ビクター管弦樂團	VICTOR 52512-A
13	嘆きのピエロ	小松清	西岡水朗	四家文子			日本ビクター管弦樂團	VICTOR 51833-A
14	野良の北風	小松清	濱田廣介	佐藤千夜子			日本ビクター管弦樂團	VICTOR 52037-A
15	母の里	小松清	林柳波	佐藤千夜子			日本ビクター管弦樂團	VICTOR 52037-B
16	叱られたあと	小松清	林柳波	植村政子			オーケストラ伴奏	ORIENT 60309-A
17	小人の村	小松清	林柳波	植村政子			オーケストラ伴奏	ORIENT 60309-B
18	蟲の歌	小松清	林柳波	常磐照子				ヒコーキ 70154-B
19	春が來た	小松清	林柳波	常磐照子				ヒコーキ 70154-A
20	勝浦小唄（新作民謡）	小松清	松崎武雄	四家文子			日本ビクター管弦樂團	VICTOR 51996-A
21	勝浦小唄（新作民謡）	小松清	松崎武雄	三島一聲			日本ビクター管弦樂團	VICTOR 51996-B
22	茨の實・野火	小松清	林柳波	佐藤千夜子			日本ビクター管弦樂團	VICTOR 51814-B
23	若き日（抒情小曲）	小松平五郎	林柳波	植村政子		小松平五郎	國民交響管弦樂團	ヒコーキ 70201-A
24	國定忠治（侠客小唄）	小松平五郎	霜田史光	照井詠三			國民交響管弦樂團	キングレコード K37-B
25	清水次郎長（侠客小唄）	小松清	霜田史光	青木晴子	杵屋正八郎（三絃）		國民交響管弦樂團	キングレコード K37-A
26	白樺の林（抒情小曲）	小松清	林柳波	植村政子		小松平五郎	國民交響管弦樂團	ヒコーキ 70201-B
27	佐渡おけさ（民謡）	小松清編曲		照井榮三	金澤孝次郎			NITTO 3414-A
28	南海の漁夫	福田正夫		福田正夫	小松清（ピアノ演奏）			Parlophone E2044-A
29	月かかりて空に／わくら葉	福田正夫		福田正夫	小松清（ピアノ演奏）			Parlophone E2044-B
30	東京高等學校々歌					小松清	東京高等學校音樂部	Columbia 25935-A
31	東高節（校歌）					小松清	東京高等學校音樂部	Columbia 25935-B
32	高崎小唄（新小唄）	小松光子 奥山貞吉編曲	中里東雪	淡谷のり子	コロムビア オーケストラ			Columbia 26472-A
33	高崎小唄（新小唄）	小松光子 奥山貞吉編曲	中里東雪	久龍（うた／新橋南地）	豊吉／色千代（三味線） 住田又三郎連中（鳴物）			Columbia 26472-B
34	茨の實	小松清	林柳波	宮下晴子	深澤一郎			NITTO 5235-B
35	かあかあ鳥	小松清	林柳波	宮下晴子			日東管弦樂團	NITTO 5472-A
36	伊香保小唄（新作民謡）	小松清	市丸武二	四家文子（ソプラノ）			日本ビクター管弦樂團	VICTOR 51909-A
37	伊香保小唄（新作民謡）	小松清	市丸武二	藤本二三吉	小静／秀華他1名（三味線 管弦樂／鳴物入			VICTOR 51909-B
38	春の夜	小松清 鈴木清一編曲	長田幹顔	せき屋敏子			日本ビクター管弦樂團	VICTOR 13481
39	船唄	ペスタロツア 奥山貞吉編曲	小松清	柴田秀子		奥山貞吉	日本コロムビア交響樂團	Columbia 35328-B
40	懐かしき唄	モロイ	小松清	四家文子			日本ビクター合唱團 日本ビクター管弦樂團	VICTOR 53822
41	偲儡節	小松清		柳原燁子 照井榮三	金澤孝次郎（ピアノ）			Nitto Record 3127-B
42	船頭唄	小松平五郎編作		照井榮三	金澤孝次郎（ピアノ）			Nitto Record 3127-A
43	水ぐるま	小松清		和田古江	石井漠振付 石井舞踊體育學校			BAC 舞踊レコード1764
44	音（おと）	小松清		和田古江	石井漠振付 石井舞踊體育學校			BAC 舞踊レコード1764
45	麦（旧字）笛	小松清	川路柳虹	吉田満喜子			キング弦楽三重奏団	キングレコードK83-B
46	国民歌《此の一戦》	信時潔 小松清編曲指揮						TEITIK T3305（イ1157）
47	国民歌《大詔奉戴の歌》	信時潔 小松清編曲指揮						TEITIK T3305（イ1156）
48	工場歌　日本軽金属株式會社《蒲原工場歌》	小松清 宮脇春夫編曲	武田秀治				テイチク合唱団	TEITIK T特347（A647）
49	工場歌　日本軽金属株式會社《蒲原工場歌》	小松清 宮脇春夫編曲	武田秀治	櫻井健二				TEITIK T特347（A647）
50	合唱《大詔奉戴盡忠歌》	辻井暁雪 小松清編曲	辻井暁雪					TEITIK T特357（A668）
51	《ウィリアムテル》序曲					小松清	東京高等学校音楽班	ONKEN RECORD 3110(578)
52	《旧（旧字）友行進曲》	クイケ（タイケ？）				小松清	東京高等学校音楽班	ONKEN RECORD 3109(578)
53	曹洞宗制定《四弘誓願》	（仏典より） 小松清本多編曲					サーラ合唱団 東京佛教管弦楽団 振付：賀來琢磨	KING RECORD N7720 N60

小松文庫には、小松耕輔の所蔵したSPレコードは残されていないが、小松清が残した多数のSPレコードの内、清自身がその制作に何らかの関わりを持っていたSPが53枚も存在しているのである。なぜならこれらに、清の比較的若い時代の音楽活動が刻印されているからである。(残念ながらそれらの制作年はほぼ不明だがSPの時代は恐らく1950年代までである。)

童謡作品11点。

新作民謡9点(これは新民謡運動に若き小松清が積極的に参画していたことを物語っている)

歌謡曲・歌曲（曲名から類推）9点

小唄・船歌 8点

校歌（東京音楽学校校歌、東高節を含む）6点

国民歌（編曲・指揮）2点

仏教歌　1点

その他 7点

中でも新作民謡と小唄の類いの作品が17点と圧倒的に多いのが目を引く。専門からすれば「西洋派」である清が、新民謡運動という時代の要請もあったろうが、かくも熱心に日本の伝統的な素材に関心を抱いていたことを記しておきたい。

（6）小松清の仕事場

小松清はなぜ生涯にわたり、フランス文学と音楽活動という「二足のわらじ」を履き続けたのだろうか。その最も大きい要因は15才年上の「音楽人」(こう耕輔は自らを評していた)の兄の強い影響だったのは疑いないだろう。耕輔の専門領域は明治期としては珍しい「フランス派」でもあった。十代で秋田から上京後に東京帝国大学時代まで、兄の耕輔の自宅に居候していたはずの清が、音楽のみならず、フランス語とフランス文化に傾倒していったのも、自然の成り行きだったろう。

清のもう一つの特筆すべき行動は、先述の通り、最高のエリート・コース、東京帝国大学文学部佛文科に入学すると同時に、東京音楽学校（現在の東京藝術大学選科にも登録してピアノを学び始めていることだ。そしてさらに、この間にポーランド人ステファン・ルビエンスキに、また後に高名なドイツ人、クラウス・プリングスハイム Klaus Pringsheim(1883-1972) に作曲を学んでもいるのである。

さらに、大学卒業後に東京高等学校（旧制）に任用されたのも、清のこの二つの方向性をさらに決定づけることになる。この東京高等学校は、1921（大正10）年11月に設立された日本初の官立7年制高校で、4年制の尋常科と3年制の高等科という組織である。高等科では「文科」「理科」に加え、当時としては画期的な「丙類」というフランス語専修コースが設置されていた。「丙類」を教えることになった清は、(遺品の中にある多数の変色したノートに丹念にフランス語の綴りの練習や単語の意味を書き連ねていることから類推されるように、）フランス語の達人となっており、申し分ないフランス語教師に成長していた。また、東京高等学校の管弦楽団や合唱団の指揮者として活躍し、同校の校歌や名物となった《東高節》の作曲も手がけるのである。

また、柔和な相貌、「春風駘蕩としたお人柄の君子人」(薮田義雄の人物評）の小松清は、設

立当時からの自由でスマートな気風（イギリスのパブリック・スクールを当初から範としたといわれる）の東京高等学校（但し戦時中は軍国主義が横行したといわれる）の、申し分のない教師であったはずである。なおこの学校は 1949（昭和 24）年に新制の東京大学に吸収されて教養学部の前身となる。

ところで（余談だが）、筆者が東京藝術大学音楽学部楽理科及び同大学院の学生時代に 6 年にわたり小松清先生に「フランス語上級」「フランス語原典購読」「フランス文学」等の講義で指導を仰いだ間、先生は、自身の音楽活動の作曲や演奏に関わる事柄に言及することは、一度たりともなかった。ここではフランス語とフランス文化の教師に徹していたのである。それは先生の奥床しいお人柄のせいだったのか、音楽家の集団の中で敢えて公言を避けたのだろうか。

小松清という多才な文化人の生涯は、東京大学と東京芸術大学の大学人という安定した平穏な日々の中で、「日曜画家」のように作曲やコンサート企画、（特に若い時代に）指揮やピアノ伴奏に勤しむという二面性に彩られている。

また、小松清のもう一つの知らざれる業績に、近代フランス歌曲の訳詩という仕事があった。古澤淑子が創設に関わった「フランス歌曲研究会」*4や、中村浩子の主催する「コンセール C」*5など、フランスの詩と音楽を専門とするグループにおいて、彼の名訳になるボードレール Charles-Pierre Baudelaire（1821-67）やヴェルレーヌ Paul Verlaine（1844-96）など、数々の詩人の数えきれない多くの美しい翻訳が、長く重宝に使われてきたことは特筆に値するだろう。遺品の大きな部分を占める書簡の中には、古澤淑子を始め、フランス音楽の権威のピアニスト、井上二葉など、多くの音楽家とのやり取りをたどることが出来る。実は小松清の名はこの領域において、秘かに深く名を留めているのである。

小松清の満州における文化活動や新民謡運動との関わり等については、また作曲活動の全貌については、稿を改めねばならない。

最後に記しておきたいのは、彼の音楽の仕事場は「日曜音楽家」の域を超えた本命の「場」だったかもしれない、ということである。

小松清研究は端緒についたところである。

（2017.2.6）

注記

I

*1　1988（昭和 43）年より所蔵。上野学園大学図書館（東京都台東区東上野 4-24-12）の保存書庫に保管されている。

*2　牛山充、井上武士、小出浩平編『小松耕輔作曲選集』（小松耕輔作曲選集刊行会、1956）巻末 13-15 頁。ただし死の 10 年前までの記録。

*3　高野喜代一編著『小松音楽兄弟』小松兄弟音楽顕彰会、1992、336-337 頁、小松兄弟とは、最年長（次男）の耕輔、四男の三樹三（1890-1921）、六男の平五郎（1896-1953）、七男の清（1899-1975）の音楽に携わった 4 人（同書 254 頁の「小松家系譜」参照）。

*4　畑中良輔「小松耕輔・本居長世・梁田貞・中山晋平とその作品」『日本歌曲全集 2 』1993、音楽之友社、巻頭（頁記載なし）

*5　全 65 冊の内訳は次の通り。明治 45（大正元）年、大正 2 、 3 、 7 年の日記、大正 11・12 年のフランス製 agenda［小型手帳］、大正 13-15（昭和元）年、昭和 2 -20 年の日記、昭和 20-24、40 年の小型手帳 6 冊、昭和 26-28、30-32、34-40 年の懐中日記、昭和 33-41 年の当用日記、その他、自由日記（記述：昭和 14-16、 2 ・

20-22、22-25、27-29、30-32 年）５冊、小型ノート４冊［３冊はフランス製］なお、これら 65 冊の番号を付された一覧表が日本近代音楽館により作成されている。

*6　大正 10 年１月～５月末の日記をベルリン滞在中に紛失した小松は、『音楽の花ひらく頃』の 199-308 頁を、同年６月 26 日から書きだした「巴里日記」からの引用に当てる、と 199 頁に書き、以後帰国した大正 11 年３月９日までを日記形式で書いているが、それに該当する日記帳ないしはノートは残念ながら見つからない。

*7　４冊のコピーは春田小百合氏の寄贈により、小松文庫の一隅に請求番号なしで保管されている。

*8　春田小百合（平成５年度入学生）卒業論文:『学校法人上野学園所蔵の小松耕輔自筆譜研究』（本文･附録全２冊）

*9　それらのカードのコピーが春田論文の附録巻に掲載され、546 枚のカードが上野学園大学図書館に保管されている。これらの春田作成カードに基づき、1997 年以降に同図書館の正式番号入りカードが作成され、小松の自筆譜は小松文庫において「市民権」を得た。

*10　小松耕輔の校歌については、佐藤晃之輔編著『小松音楽兄弟　校歌資料』において、167 曲（現行校歌 90、旧校歌 77）が全国レベルの調査の成果として掲載されているが、小松文庫の自筆譜はその数を遙かに超えている。しかし自筆譜にはタイトルが付されていない曲が相当数あるので、自筆譜の校歌の総数を突き止めることは困難である。

*11　伊藤あゆみ（平成６年度入学生）卒業論文『小松耕輔の自筆譜・出版楽譜に基づく研究』（本文・附録全２冊）

*12　それらのカードのコピーが伊藤論文の附録巻に掲載され、764 枚のカードは上野学園大学図書館に保管されている。

*13　一覧表のコピーを上野学園大学図書館に寄託してある。

*14　1910（明治 43）年第１巻から 1915（大正４）年第６巻までが全て製本されている。ただし傷みの進みは激しい状態である。

*15　『音樂の花ひらく頃――わが思い出の樂壇』58 頁　なお文中の小林愛雄［あいゆう］（1881-1945）は小松らと苑会を結成し《羽衣》を上演。1916 年に雑誌『音楽と文学』同人、浅草オペラの訳詩を多く手がけた。

*16　『懐しのメロディー』　66 ～ 67 頁

*17　『明治の作曲家たち』（奏楽堂特別展「明治の作曲家たち～音楽の花ひらく頃～」資料 集 日本近代音楽館、2003）の項目「小松耕輔」にも「楽譜焼失」と記載（51 頁）。

*18　田中みや子氏所蔵の自筆袋 Ⅷ－ (1)：自筆譜　五線紙ノート（文房堂製８段）22×18　鉛筆書き　38 頁　341 小節

*19　同 Ⅷ－（16）：自筆譜　五線紙（共益商社樂器店製 10 段）　１枚二つ折　2 fs. 30×21.5　鉛筆書き　３頁　15 小節

*20　収穫台本　小松文庫の自筆袋Ⅵ:Ⅵ／（2）／Ｍｓ 33　台本（手書き）　和紙製 400 字詰め　原稿用紙袋とじ（表紙厚手和紙）24×16.5　墨筆（朱筆で加筆）　86 p

*21　収穫声パート譜　小松文庫の自筆袋Ⅵ:Ⅵ／（2）／Ms-33-1　自筆譜（声のパート譜）　五線紙（文房堂製 16 段）１枚二つ折　0 fs. 32.6×25.1　ペン書 (歌詞は朱筆) ５頁

*22　収穫下書き総譜　小松文庫自筆袋Ⅵ：Ⅵ／（1）／Ms-32　自筆譜（下書き総譜）五線紙（文房堂製 16 段）１枚二つ折　43fs. 32.5×25　鉛筆書き (表紙は墨書) 170 頁

*23　収穫清書総譜　小松文庫自筆袋Ⅵ：Ⅵ／（2）／Ms-33-2、同３、同４、同５（全４冊）　自筆譜（清書用総譜）五線ノート　ペン書　各冊０p

*24　増井敬二『日本オペラ史』水曜社、2003、43 頁

*25　座談会「日本オペラ史　明治時代」（『日本のオペラの歩み』、「日本オペラの歩み」　刊行会、1962）８頁

*26　『日本のオペラの歩み』7-8 頁

*27　前掲書　座談会「日本オペラ史　明治時代」において、小松は宮沢縦一の質問に対し次のように答えている。
宮沢:それ［《オルフォイス》］については、いままで石倉小三郎先生ほかの方たちが、終戦後も「音楽」とか「シンフォニー」とかの雑誌や、その他のいろいろなものに詳しくお書きになっておられますが、これは小松先生はごらんになったんですか。
小松：上野の音楽学校の本科１年のときですが、ちょうど７月で、暑中休暇で帰郷したから実際は見ていないが、前のリハーサルは見ている。

*28　この改訂稿では、旧の４分の４拍子が８分の６拍子に変更され、後奏も旧の７小節から４小節に短縮されている。

*29　４箇所計 61 小節に認められる。構成表中の「形態」欄の下線部分を参照。

*30 『懐しのメロディー』58 頁

*31 「歌劇《霊鐘》は［中略］愚劣極まるものにして、其の音樂としての價値は勿論、科白ともに何の感興もひかず。バタ臭き異形の僧がおづおづと、間拍子の抜けたるスリ足の動作など、あたかも奥山式機械人形よろしくの見得にて、[中略] 先年の『羽衣』の方　優れり」（68 頁）

*32 『音樂の花ひらく頃』89 頁

*33 （？ -1946）本名は周治、歌のパート自筆譜の表紙に「大野素人作哥」と書かれているところから、これも筆名と思われる。英文学者。

*34 『昭和の作曲家たち――太平洋戦争と音楽』みすず書房、2003、４頁

*35 『明治の作曲家たち』日本近代音楽館、2003、50-51 頁

*36 雑誌『音楽評論』創刊号［４月号］、1933

*37 エッセイ「巴里できいたコルトー」（『Demos』７月号、1952、６- ７頁）の最後で、「筆者・音樂研究家」と記されている。

II

*1 同姓同名のフランス文学者がいる。もう一人の小松清（1900-62）は、アンドレ・マルロー Andre Malraux（1901-76）の研究家。

*2 上野学園大学学長室スタッフ（永田美穂、有村真美）、図書館スタッフ（佐久間牧子、高松章子）と共に通常の業務の間を縫って調査・整理に取り組んで現在に至る。

*3 フランス文学およびフランス語関係の多数の蔵書に関しては、内藤俊人上野学園大学講師により大まかな分類がなされ、上野学園大学校舎棟 14 階の図書館書庫に仮置きされている。

*4 1953（昭和 28）年に、17 世紀から現代までのフランス音楽の紹介者として知られるソプラノ歌手、古澤淑子（1916-2001）を中心として結成され、関西を中心に域の長い活動を続けている。

*5 東京藝術大学におけるフランス派として活動を続けてきたメゾソプラノ歌手、中村浩子（1928-）が主宰する、フランス歌曲の研究・演奏を続けるグループ。

パネルディスカッション

「青柳　聡」撮影

船山 信子
（ふなやま のぶこ）

シンポジスト略歴

音楽学者。専門はフランス音楽と思想（18 世紀中心）。東京芸術大学および同大学院音楽研究科修士課程（音楽学専攻）修了。パリ第 4 大学音楽学研究所博士課程在籍 (1973～74)。フランス文化芸術勲章シュヴァリエ受章。

主要著書に『ある「完全な音楽家」の肖像―マダム・ピュイグ＝ロジェが日本に遺したもの』（編著）、「音楽フェスティバルをつくる」（共著）、「日本ドイツ 女性の新しいうねり」（共著）、主要論文に『小松耕輔研究――「小松文庫」の調査を中心に』（『上野学園創立 100 周年記念論文集』2005 年）、「タンゲンテンフリューゲルの響きを求めて――オリジナル楽器の修復と活用に関する一考察」（共著）（『エオリアン論集』上野学園大学音楽文化研究センター 第 1 号（2013 年））など。

＜東京の夏＞音楽祭企画（一部制作）担当（1989-2008）、北とぴあ国際音楽祭企画担当 (1994-2009)、文化審議会委員（文化功労者選考分科会）（3 期）、独立行政法人評価委員会委員（4 期）、文化庁新進芸術家海外留学制度，同国内研修制度選考委員（3 期）。現在、北区文化振興財団理事。東京文化会館運営委員。

東京藝術大学講師、お茶の水女子大学講師、千葉大学講師などを歴任。1969 年より上野学園大学短期大学講師、1993 年より同大学教授、現在、上野学園大学学長、上野学園 石橋メモリアルホール館長。

小松耕輔の果たした役割

上野学園大学（私の勤務大学）図書館に「小松文庫」が存在します。これは、小松耕輔氏の自筆譜およそ 1300 曲（歌曲・童謡・オペラの下書き等、大部分が校歌・社歌）、著書の一部、日記類、蔵書、書簡の一部、コンサート・プログラム類、ポスター類 etc. から成っています。

まず、この中の自筆楽譜の中で最も分厚い、オペレッタ《収穫》を皆さまに見ていただき、小松耕輔氏のオペラ第一作《羽衣》と第二作（1906）《靈鐘》（1907）に続き、第三作として起案されながら日の目をみなかった、幻の未完のオペレッタについてお話します。

続きまして、小松耕輔氏の歌曲の代表作《母》（竹久夢二 詩）の自筆譜を見ながら、この作品の「母」の意味するところを探ってみたいと思います。

最後に、私が資料研究を始めている、耕輔氏の末弟、小松清氏の活動に触れて、お二人の活動の軌跡の違いについて少し言及させていただきます。

＊この場の発表の代わりに、同氏の特別寄稿（22-45 頁）を掲載します。

四反田 素幸
（したんだ もとゆき）

シンポジスト略歴

東京芸術大学作曲科卒業。文部科学省在外研究員として英国留学。これまでの作曲活動で文化庁舞台芸術創作奨励特別賞、笹川賞第１位、秋田県芸術選奨、奏楽堂日本歌曲コンクール作曲部門第２位、日本音楽集団創立 40 周年記念作曲コンクール第１位、その他を受賞。作品は文化庁芸術祭主催公演（国立劇場）で取り上げられた他、「日本の作曲家」シリーズなどの日本作曲家協議会主催コンサート（サントリーホール、東京文化会館、紀尾井ホールなど）や民間団体主催コンサート（東京オペラシティ、草月ホール、東京国立博物館など）において演奏され、NHK-FM 放送番組「現代の音楽」などでも紹介されている。

2005 年から 2011 年までアトリオン室内オーケストラ音楽監督として計 10 回の秋田県主催の定期公演を企画し、編曲や指揮も行う。

2009 年、秋田市文化章。

現在、秋田大学理事・副学長。

小松耕輔の業績

小松耕輔（1884 ～ 1966）は、秋田県内では由利、矢島、角館、横手、横手城南、雄物川各高校などの校歌の作曲者として知られている。しかし日本における最初の歌劇『羽衣』を作曲したことや、日本で最初の音楽コンクールを開催したり、音楽の教科書や啓蒙書など多数の著作によってクラシック音楽の普及に貢献したこと、さらには昭和天皇の学習院初等科時代の唱歌指導の担当であったことや、昭和 20 年代には当時の皇太子、即ち現在の天皇陛下に「音楽」をご進講したことなど、特色ある業績を残した音楽家であったことを知る人は少ない。

小松は明治 34 年（1901 年）に 16 歳で上京し、東京音楽学校（現東京芸術大学）の選科に入り、翌年予科に入学。そして本科に進んだが、当時、東京音楽学校には作曲科はまだ無く、作曲志望であった彼は作曲をピアノ科の外国人教師に学んだ。

私は小松が本科在学中の 21 歳の時に書いた歌劇『羽衣』の楽譜を見て驚いた。作曲を学ぶ生徒の最初の学習課程である「和声学」の古風な書式で書かれていて、音楽が讃美歌風なのだ。出版された楽譜には森鴎外による次のような序文が付けられた。

> ことし東京音楽学校の業を卒へたる、出羽の人小松耕輔氏、歌劇羽衣一篇を著して世に問はんとす。韻語と声楽とを併せ好める小松氏は、詩と楽との調和をもて畢生の業とせんと志して、こは只試みにものしつるなりとぞ。もとより我が国には例なきことにしあれば、初めより全き効果を収め得んことを期すべきにはあらず。昔伊太利にて新音楽（NUOVA MUSICA）のなりいでけん時のさまなど偲ばれて、その山口のしるきを愛づる心ばせを、繙くひとに知らせばやと、一言書き添ふるにこそ。
>
> （小松耕輔著『音楽の花ひらく頃』より）

西洋音楽に造詣が深かった鴎外の評価は正鵠を射ていると思う。日本には歌劇作曲の前例はないのだから、最初から完璧さを求めても仕方がない。まずは小松の試みに注目しようではないかと言うのだ。西洋音楽の様式による歌曲や歌劇の作曲における日本語の詩の韻律と旋律との関係性の探求は始まったばかりである。鴎外が「韻語と声楽とを併せ好める小松氏は、詩と

楽との調和をもて畢生の業とせんと志し」と書いた通り、小松の作曲は歌曲が中心となっていく。

『羽衣』の初演の3年前、明治36年（1903年）には日本人によって初めてオペラ『オルフォイス』が上演され、画期的な出来事として注目されていた。『音楽の花ひらく頃』には、当時の歌劇熱に刺激されて同人組織が結成され、第一回公演のために小松が『羽衣』を作詩作曲することになったとある。初演は超満員だったそうだ。

『羽衣』の作曲から14年後の大正9年(1920年)、小松はパリに留学する。『荒城の月』や『花』の作曲で知られる滝廉太郎はドイツのライプツィヒに留学し、また小松の後輩で、『赤とんぼ』『この道』で知られる山田耕筰や、同じく後輩で、後に東京音楽学校教授として多くの優れた作曲家を育てた信時潔らはベルリンに留学した。ドイツ志向が非常に強かった時代に、小松はなぜ留学先にフランスを選んだのであろうか。

明治・大正期の日本ではドイツ・オーストリア音楽が主流ではあったが、フランス音楽も演奏されていた。前述のドイツ人作曲家グルックの『オルフォイス』より前に、日本で最初に外国人によって演奏されたオペラはフランス人作曲家グノーの『ファウスト』であったし、マスネやサン＝サーンスの作品など、同時代にフランスで生まれた曲も日本では演奏されていた。明治42年（1909年)、東京音楽学校のピアノ教師としてアメリカ人のルドルフ・ロイテルが着任し、リサイタルでドビュッシーの作品を取り上げた。音楽批評家としても活動していた小松は、リサイタルの批評を自らが編集主事を務めていた音楽誌『音楽界』に掲載するのだが、この批評はドビュッシーの名前が日本の音楽批評に出てくる最初期のものとして注目される(佐野仁美著『ドビュッシーに魅せられた日本人』)。小松は研究科でロイテルに師事し、また知人の内藤濯（『星の王子さま』の翻訳者）からもフランス音楽の情報を得ており、内藤は近代フランス音楽に関する記事やフランス歌曲の訳詩を『音楽界』に寄稿していた。そして同年、小松は最初の編著『名曲新集』を出版し、この曲集について「フランスの作曲家たちを紹介した点で特色があった」と述べている。小松は早くからフランス音楽に強い関心を示し、その音楽に触れる機会や情報を、十分ではなかったかもしれないが持っていたのだった。パリ留学にはこういった背景があった。

前掲の『ドビュッシーに魅せられた日本人』には「明治末期に小松耕輔によってフランス音楽をドイツ音楽に対置する言説が生まれた」とある。小松は、ドイツ音楽は哲学的、フランス音楽は純芸術的で絢爛豪華という見方をしていた。日本の音楽界にはこの対置する見方に沿うように、ドイツ志向とフランス志向があるように思われる（それは日本だけではないかもしれないが・・・)。戦後の日本の作曲界をリードした黛敏郎や矢代秋雄、三善晃らを育てた池内友次郎は、小松よりも暫く後の昭和2年（1927年）にパリに留学している。池内はパリ音楽院でフランスの技法を徹底的に学び、東京芸術大学の作曲科の教授となって以降、フランス志向の流派が形成されていく。門弟の黛、矢代、三善らはパリに留学し、その後に続く世代の作曲家も同地に留学する人が少なくない。

雑誌『音楽芸術』昭和33年7月号に掲載の「作曲家訪問・小松耕輔」には、小松はパリでは「ハーモニーをフォーシェについた。このフォーシェという先生には日本人の留学生がその後沢山習った」と記されているが、池内がパリでハーモニー（和声学）を師事した人物は正しくフォーシェであった。池内がパリ音楽院に入学する前に、フォーシェに個人的に師事するこ

とになった経緯について、池内は「パリに着いて、すぐポール・フォーシェという先生のところへ行きました。紹介状をもらっていたので・・・」と述べており（キングレコード『池内友次郎の音楽とその流派』付録冊子)、紹介状が小松によるものであった可能性が高い。現在、日本ではフランス流の和声学が定着しているが、その始まりは小松のパリ留学であったのだ。

小松は留学から帰国した翌年、欧米の音楽事情を自身の外遊経験を交えて著した『世界音楽遍路』を出版し、その3年後の昭和2年（1927年）にはフランス音楽だけに焦点を当てた大著『現代仏蘭西音楽』を書き上げ、当時のフランスの主要な作曲家と先端的な音楽芸術の論文を紹介している。『現代仏蘭西音楽』には新芸術に対する小松の理念が表れている印象的な箇所があるので引用しておく。当時の新しい傾向の作曲技法の特徴について触れた後で次のように述べている。

> 無論今日でも、是等の凡ての運動に反抗してをる澤山の音楽家がをる。しかし事実は日、一日と其等の人達でも此の新傾向に同化されつゝあることは否むべからざる事実である。故に習慣的に古来の法則に安住せんとする人々は、用捨なく取残されてしまふ。
>
> 又現代の音楽を鑑賞しようとする人々も同様である。在来の音楽を聴くと同一の態度を以て臨んだならば恐らく現代楽の眞の価値を知ることは六つかしいであらう。何故かならば、作曲者は既に凡ての古き習慣の埒外に立つて、新しい外光のもとにペンを執ってゐるからである。(原文のまま)

小松は日本の作曲界におけるフランス流派の先駆けであり、彼の熱心な啓蒙活動によって、昭和の初めには近代フランス音楽に対する理解が進んだのだった。

小松がパリに留学していたのは1920年から1923年までで、エコール・ド・パリと呼ばれたモディリアーニ、ユトリロ、シャガール、藤田嗣治ら個性的な画家たちが活躍していた時代であった。音楽ではドビュッシー没後の反印象主義、新古典主義を掲げた若手作曲家のグループ「フランス六人組」が台頭する時代になっていたが、ラヴェルはまだ40代半ばで意気盛んであった。またディアギレフ率いるロシア・バレエ団がファリャの『三角帽子』やストラヴィンスキーの『プルチネルラ』などの話題作を相次いで初演していた頃であった。小松は留学中、精力的に演奏会を聴いて回り、これらの新芸術が次々に生み出されていく「レ・ザネ・フォル(狂乱の時代)」の熱気を肌で感じることが出来たのだ。なんと素晴らしい体験であったことか。『音楽の花ひらく頃』には「巴里日記」として、パリ滞在中の様々な出来事が記されているが、これによると小松は薩摩治郎八と度々会っている。薩摩は巨万の富を築いた大富豪の孫で、己の美学を貫き通すために、祖父と父が残した膨大な財産を一代で使い果たしてしまった人物である。薩摩はパリの芸術家たちの庇護者であり、特に藤田嗣治との関係は良く知られている。小松と薩摩が会ったのは大正10年(1921年)で、小松は36歳、薩摩はなんとまだ20歳であった。薩摩の父は、薩摩の妹がピアノの勉学のためにパリ留学を希望した時に、小松に身元引受人を頼んだのだった（鹿島茂著『蕩尽王、パリをゆく―薩摩治郎八伝』)。薩摩はフランスに魅せられ、パリでの交友の輪を広げていくが、その起点が小松であったことは実に興味深い。なぜなら薩摩は日本の近代フランス音楽の受容と日本の作曲のモダニズムの形成に関わる画期的な出来事をこの後仕掛けることになるからである。

薩摩は小松と出会ってから4年後の大正14年（1925年）に、ジル＝マルシェックスとい

うフランス人ピアニストを私財を投げ打って日本に招聘し、6夜に渡るリサイタルを帝国ホテルで開催する。日本の聴衆は、この時初めて本格的なフランス音楽の演奏に接し、大きな衝撃を受ける。小松によれば「曲目の多くは日本ではかつて演奏されたことがないもの」であった。ジル＝マルシェックスの演奏会はその後も開催され、ドビュッシーやサティの他、ラヴェル、ミヨー、プーランクら当時現役で活躍していた作曲家たちの作品が演奏され、同時代の日本の作曲家たち、例えば清瀬保二や松平頼則らに強烈な印象を残した。そしてその後、昭和5年（1930年）には清瀬や松平ら16名によって「新興作曲家連盟（現在の日本現代音楽協会）」が結成されることになる。彼らはドイツ・アカデミズムから離れ、フランス印象派の音楽に日本人の音感覚との近親性を見出し、印象派の技法と日本的抒情の表現との結び付きを試みるようになるのである。

小松はこの頃、大正の終わりから昭和の初めにかけて、後世に重要な影響を与えることになる二つの活動を開始する。一つは作曲家の著作権擁護のために「作曲者組合」を組織したことだ。小松は日本では著作権の観念が極めて低いと感じていた。作曲者組合はその後「大日本作曲家協会」となって小松は総務理事を任されるのだが、著作権使用料があまりに低額過ぎるとして放送局とやり合っている。大日本作曲家協会は昭和14年（1939年）には「大日本音楽著作権協会（現在の日本音楽著作権協会）」となり、小松は「これでわが国の音楽著作権がようやく確立し安定した」と述べている（小松耕輔著『わが思い出の楽壇』）。

もう一つの活動は「国民音楽協会」を設立し、日本で最初の音楽コンクールを開催したことである。小松は外遊中に欧米各国で音楽コンクールが盛んに行われているのを見て、日本にも音楽の普及と向上のためにはコンクールが必要と考え、その第一回目を昭和2年（1927年）に「合唱大音楽祭」として開催した。小松は「合唱コンクール」という名称にしたかったらしいが、反対意見があって「合唱祭」となったらしい。当日のプログラムに小松は「音楽の社会化運動を図り、更にその他の諸事業、例えば国民音楽を樹立するための作曲奨励、新進楽人の紹介、音楽上の展覧会、演奏会、講演会等を次々に開催したい考えであります」と記している（『わが思い出の楽壇』）。「国民音楽協会」と名付け、また事業として「国民音楽を樹立するための作曲奨励」を挙げているところを見ると、小松の頭の中にはサン＝サーンスが創設し、フランス人による作曲の奨励とその作品の演奏を目的としていた同じ名称の国民音楽協会のイメージがあったのかもしれない。そして昭和6年（1931年）には時事新報社主催の「音楽コンクール」が始まり（小松は創立委員の一人）、ピアノ、ヴァイオリン、声楽、作曲の部門ができる。これが現在の「日本音楽コンクール」に発展していく。また国民音楽協会の方は昭和23年（1948年）に全日本合唱連盟となり、小松は初代理事長に就任し、同年、第一回目の「全日本合唱コンクール」が開催される。

著作権にせよコンクールにせよ、音楽の世界で今では当たり前のように考えられているが、これらは小松が取り組み始めたものだ。ちなみに「コンクール」はフランス語である。

さて作曲家としての小松の作風であるが、近代フランス音楽を志向していた人にしては古典的で、そこからはみ出すようなところがないことについては不思議な感じがしないでもない。小松が著書『現代仏蘭西音楽』に記した「習慣的に古来の法則に安住せんとする人々は、用捨なく取残されてしまふ」という言葉と、このような彼の作風をどのように結び付けて考えればよいのか、私は正直言って戸惑いを覚える。

しかしながら小松の足跡を辿り、彼が行った様々な活動の全体を俯瞰して見ると、日本が単なる西洋音楽の受容から独自に発展してゆく過程の重要な場面において、彼が率先して新しい種を蒔いていたことが分かる。小松の出発点は作曲であったが、彼の偉大なところは関心をそこだけに限定せず、生涯に渡り広い視野をもって社会的活動を続け、蒔いた種を育てていったことだと思う。現在の日本の音楽文化の隆盛を考えると、その功績は誠に大きいと言わねばならない。

田中 みや子
（たなか みやこ）
小松耕輔長男の長女
作品及び関係資料の所在確認、収集、調査等

皆様はプログラムの写真をご覧になって　小松耕輔はどんな人と思われますか？

耕輔は一男三女の子供に恵まれ、それぞれが家庭を持ち、二男十女の孫がおります。わたくしは長男・盛廣の娘でございます。

私ども孫たちにとって祖父・耕輔はこの写真そのまま、謹厳実直で近寄り難く、怖いような、どちらかと言えば煙たい存在でした。食事の時なども、おしゃべりをしていると「これ！　静かにしなさい」と良くたしなめられたものです。晩酌を欠かさず、相撲の中継を見ながら、静かに盃を傾けていました。

秋田の産ですからお酒は好きで楽壇の三大酒豪にも名を連ね　楽壇仲間との野牛会（のもうかい）をはじめ、詩壇や芸術家、異分野の方々との会等、それぞれの常連であった、或いは無勤であったと自らが語っているほどです。“小松さんは酒の飲み方が立派で、酒席でのエチケットの理想的な人”“酒が回って来ると低い声で都々逸や、二上り新内も出て来る。浅酌低唱の味を知る粋な人”と評されています。飽くまで静かに、程良く、ゆったりと楽しんだ様です。

子供達にとって耕輔はどんな父親であったかと、長男・盛広の小学生の頃の作文集を開いて見ました。そこには、学校での出来事や友達と遊んだこと、三人の妹たちの事、母・ひろや祖母・トミと出掛けた事等、日常の様子がつづられています。＜清さんに魔術を教わった＞＜博覧会に連れて行って貰った＞　又、＜五郎さんに英語の発音をさらって貰った＞などとも有ります。25歳で結婚後ほどなく、耕輔は秋田から両親、弟達を呼び同居して居り、大家族でした。当時は学生だった清や、五郎さんこと・平五郎は耕輔の弟で、盛広にとっては12～3歳年上のお兄さんの様な存在であった様です。しかし、作文に父親・耕輔は登場しません。

耕輔は学習院の教職にありながら、音楽普及会等自らが興した事業に加え、引き受けた役職もあり多忙を極めていました。そんな中でも、当時音楽学校では英語しかなく、語学の力不足を痛感したと外国語学校夜学のドイツ語専科に学び、その後、近代フランス音楽にふれたいと

やはり夜学のフランス語専科でも学びます。さらに「帝大文科の心理学、美学概論の聴講が許されたのは幸いであった」「根元博士（秋田出身）の易学は痛快で身にしむ講義であった」と貪欲なまでに学び、喜びとしています。

それでも尚「いろいろな事に関係していて、充分勉強をする時間がない」「今なすは我がなす業か省みて・・」と悩み、「全てを投げ打って創作に没頭すべし。これ汝の生くる途なり。明日ありと思うなかれ。無常は迅速なり」とも。ですから、子供達と出かけたり、一緒に何かをするような時間は、ほとんど無かったのではないでしょうか。

ただ、耕輔が三年間の欧米留学の留守中に父・耕輔に触れた作文が有ります。＜二階に上がると一番先に目に付くのはシュトラウスの額、それからお父さまの机、ベートーベンの額。そして、ピアノとオルガンがある。ピアノの上には音楽の本が乗っている＞と続きます。留守中でも書斎は音楽に情熱を傾けている父を身近に感じる場所であったのでしょう。

また、＜来年はお父様が帰っていらっしゃいます。お父様も帰っていらっしゃる事を楽しみにしていらっしゃるのに違いありません。お父様がお暇な時には　パリのお話を知っているだけ、聞かせていただきたい。そして、絵ハガキなど頂いて裏に説明を書いておきます。それを、大切にしまって置きたい＞と書いています。

耕輔は留学中にはもちろん、日頃から、地方に出掛けた時にも、妻や子供達に良く絵ハガキを送っていたようです。そんな便りを心待ちにしていた子供たちの様子、又、帰ると話を聞かせていた父親、耕輔の姿を見る事が出来ます。

祖母・ひろも音楽の教師で、結婚後も東京女高師付属の高女と小学校で 15 年程、教師を続けました。学校が引けた後も家でのおけいこ、出稽古、講習会の講師、自身の学びと毎日がせわしく、「試みに学校以外の時間割を作った」と。

この間、一男三女を生み育てた祖母の日記からは、子供が熱を出したり、留守を預かる子守りさんが急に辞めたり、今も昔も変わらない働く母親の苦労が伺われます。

ちなみに明治 44 年の夏休みの日記には、＜８月１日主人は東北、北海道地方へ演奏旅行に出発＞　＜８月９日第一子長男・盛廣大学病院にて誕生。９月中、学校を欠勤して産後の静養をなす＞　＜10 月１日初めて登校。まだ、ふらふらしそうなり＞と記されています。

耕輔は後に、此の頃を振り返り、“ 妻･ひろと二人で一生懸命音楽教育の為に働いた ” と語って居ます。夫・耕輔とその大家族を支えた妻・ひろは、耕輔にとって “ 共に音楽教育に携わる同志 ” でも有ったのでしょう。

祖父のかたわらには、書斎にも茶の間にも虫メガネがありました。幼いころに眼病を患い著しく視力が減じ且つ近視であった為、メガネだけでは視力が足りなかったのです。楽譜に顔を近付け、直径 10 センチ程の大きな虫メガネを覗き、譜面を見る祖父の姿を思い出します。

祖母の日記には、“今日は主人の代書をす”あるいは、“原稿書きのお手伝いをするので、毎日書いてばかり”ともあります。また、包装紙の裏などに歌詞原稿を大きく筆書きした物が残っています。見やすいようにとの祖母の手によるものでしょう。祖母が新聞の連載小説を毎日読み聴かせ、じっと目を閉じて聴いている祖父の表情は穏やかで、満足げでした。

祖父が亡くなったのは昭和 41 年 2 月 3 日、その年の元旦の日記です。

初春や　まず思うこと　親の恩

今年は 82 歳　両親より長命である。　健康である。

眼、耳、とにかく用を弁ず。　手足不自由なし。

他人にうらまれることなし　うらむことなし。　　上々吉

眼病には終生悩まされ不自由することも多かったであろうと、祖父の苦労をいくらかでも察しているつもりでいたわたくしには、ちょっと意外でした。その潔さに脱帽です。

子供の頃は煙たい存在であった祖父を、今、この歳になって振り返り、当時の写真など見ますと、まっすぐで穏やかで、やさしいまなざしの人だったと思えるようになりました。

探究心旺盛で、研究熱心、努力を惜しまず、凛と前を向いて潔く・・・

うらまれることなきよう、うらむことなきよう

わたくしもそのように・・・と。

今、改めて祖父・小松耕輔の生き方から学んだことです。

小松耕輔年譜

西暦	元号	小松耕輔の経歴	年齢	主な作品	主な著作	
	明治 1					
	2					
	3					
	4					
	5					
	6	（宮内省雅楽部が洋楽伝習）				
	7					
	8					
	9					
	10					
	11	（音楽取調掛開設）				
	12					
1880	13					
	14					
	15					
	16					
	17	玉米村館合に生まれる（十二月十四日）	0			鹿鳴館時代
	18	（便宜上十八年も零歳にした）	0			
	19		1			
	20		2			
	21		3			
	22		4			
1890	23		5			
	24	館合尋常小学校入学	6			
	25		7			
	26		8			
	27	矢島小学校高等科入学　オルガンと出会う	9			日清戦争
	28		10			
	29		11			
	30		12			
	31	矢島高等小学校卒業	13	「玉米八景唱歌」		
	32		14			
1900	33		15			
	34	上京　東京音楽学校選科に入学	16			
	35	東京音楽学校予科に入学	17			
	36	東京音楽学校本科に入学	18			
	37		19		「音楽新報」へ執筆を開始	日露戦争
	38		20		「音楽新報」主筆として活躍	
	39	楽苑会を組織してオペラを上演　学習院講師	21	歌劇「羽衣」		
	40	帝国音楽会を組織・理事となる	22	歌劇「霊鐘」		
	41	学習院助教授・皇孫の唱歌を担当	23		「音楽界」編集主事として活躍	
	42	東京音楽学校研究科ピアノ科を修了	24			
1910	43	音楽教育会を組織・理事となる	25			
	44		26			
	45		27	歌劇「収穫」「乃木大将の歌」		
	大正 2		28	明治天皇昭憲皇太后御詠唱歌集		
	3	叙勲八等瑞宝章	29			第一次世界大戦
	4	音楽普及会を組織	30	「大正幼年唱歌」		
	5		31			
	6	作曲研究会発足	32	「芭蕉」「沙羅の木」「赤い夕日」		
	7		33			
	8		34	「大正少年唱歌」「泊り舟」「砂丘の上」「母」		

1920	1930	1940	1950	1960

元号	大正時代							昭和時代（戦前）																			昭和時代（戦後）																							
	9	10	11	12	13	14	15	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41
小松耕輔の経歴	欧米留学			留学を終えて帰国	学習院教授　蓄音機増税への反対運動	勲六等　作曲者組合を組織し著作権運動展開		国民音楽協会設立・理事長　合唱音楽祭開催	日本作曲家協会設立・理事長		大日本作曲家協会総務理事			大日本作曲家協会がＮＨＫと解決声明書				東京女子高等師範学校教授	勲五等	大日本音楽著作権協会（現ＪＡＳＲＡＣ）理事 日本大学芸術科音楽主任	国民学校教科書編集委員 日本大学芸術科教授　音楽部長				勲四等	音楽コンクール（毎日新聞主催）顧問	皇太子（現天皇陛下）に音楽の講話	教育音楽協会会長	第二回全日本合唱コンクール開催 全日本合唱連盟を結成・理事長	著作権審議会専門委員	著作権法改正案起草審議会委員	お茶の水大学教授	文部省著作権制度調査会委員　東邦音楽短大教授	文部省著作権審議会委員	東洋音楽短大講師	小松耕輔教授楽壇生活五〇年 記念作品演奏会			紫綬褒章									二月三日永眠 勲四等旭日小綬章
年齢	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81
主な作品		小松耕輔作品集「子鳥の唄」「銀の胡弓」	耕輔作品集「沙羅の木」　ピアノソナタ			「なくした鉛筆」「お月さんと遊ぼ」	「お山の細道」			耕輔新作唱歌		「土筆と山羊」「四匹のお馬」	「昭和幼年唱歌」「昭和少年唱歌」							「小夜曲」	「日本愛国唱歌集」																耕輔作品選集											
主な著作		「西洋音楽の知識」	「音楽遍路」を連載		「世界音楽遍路」	「西洋音楽講座」	「童謡作曲法」	「現代仏蘭西音楽」				「月刊楽譜」編集顧問	「音楽新聞」編集顧問			「現代音楽の奔流」	「西洋音楽史綱要」「楽譜の読方」	「和声学教科書」	「標準洋楽語彙集」				「音楽理論と和声学」		「音楽の構成と鑑賞」			「西洋音楽史」			「和声学」「伴奏の作り方」	「現代フランス音楽」		「音楽の花ひらく頃」	「中学の音楽」（教科書）			「懐かしのメロディ」				「わが思い出の楽壇」			(広子日記)			

レコード普及震災　ラジオ普及　第二次世界大戦

小松耕輔音楽兄弟 顕彰のあゆみ

主な事業

昭和52年４月	小松兄弟音楽顕彰発起人会を結成
昭和53年３月	東由利町議会、一般会計当初予算で顕彰碑建立補助金 350 万円を計上、議決
	音楽顕彰碑建設委員会を設立
	小松兄弟音楽顕彰会を設立
昭和53年10月４日	顕彰碑除幕式挙行
	小松兄弟音楽顕彰会主催
昭和56年10月６日	音楽顕彰碑建設委員の解任、現顕彰会の今後の運営について協議
	建設委員会を解散し、顕彰会は継続させることで合意
昭和57年８月	小松音楽兄弟作品選集
	東由利教育研究所発行
昭和57年11月12日	小松音楽兄弟作品選集刊行記念小松音楽兄弟顕彰音楽会
	主催　東由利町教育研究会
	後援　東由利町教育委員会
昭和58年10月30日	新たに「小松兄弟音楽顕彰会」を設立
昭和59年10月25日	小松耕輔先生文化振興顕彰記念誌
	生誕 100 年教育音楽の父　小松耕輔ー伝記・校歌作品集発行
	秋田県教育委員会・東由利町・東由利町教育委員会
昭和59年11月１日	昭和 59 年度秋田県文化顕彰事業（記念演奏会・合奏）に共催
	主催　秋田県教育委員会・東由利町教育委員会
昭和60年10月18日	音楽主任教員研修に助成
	秋田県青少年劇場バイオリンコンサートの後援
昭和63年９月23日	森吉町「浜辺の歌音楽館」視察
平成２年６月28日	宮城県中新田町「バッハホール」視察
平成３年７月	「小松音楽兄弟」高野喜代一編著に資料等を提供
平成４年10月21日	音楽祭の主催事業について検討
平成５年10月24日	第１回ひがしゆり音楽祭開催
	主催　小松兄弟音楽顕彰会
	主管　東由利町教育委員会
	出演者　吹奏楽　東由利中学校
	合唱
平成16年12月１日	特集　小松耕輔生誕 120 年（広報ひがしゆり　p12-15）
	「音楽の花ひらく頃」1　　小野千草対談集
平成17年１月１日	特集　小松耕輔生誕 120 年（広報ひがしゆり p18-21）
	「音楽の花ひらく頃」2　　小野千草対談集

平成25年４月　　顕彰会の名称を「小松耕輔音楽兄弟顕彰会」に改める
規約も変更制定する

平成25年９月23日　　ウィーンピアノデュオ　クトロヴァッツ in 由利本荘
共催　由利本荘市・由利本荘市教育委員会
小松耕輔音楽兄弟顕彰会
カダーレ自主事業実行委員会
協力　（財）日本青年館 /（株）社　ニッセイ

平成26年11月15日　　小松耕輔生誕 130 年記念市民音楽祭
主催：小松耕輔音楽兄弟顕彰会
後援：「由利本荘市教育委員会」「にかほ市教育委員会」「本荘由利教育研究会音楽部会」「株式会社東北新社およびクラシカ・ジャパン」

小松耕輔音楽兄弟顕彰会

顧　問　　四反田素幸
会　長　　小松　義典
副会長　　長谷山博昭
会　計　　小松　　建
監　事　　小松耕之助
理　事　　豊島　重孝、須藤　　完、小松　幸円、佐々田亨三
鈴木　憲一、織田羽衣子、横田　　廣、伊藤　彦舟
佐藤智治郎、松橋　　隆、工藤　　良、高橋　裕子
廣田　俊介、板垣　直俊

小松耕輔
3つの歌曲と合唱への編曲

編曲者紹介

阿部 俊祐
（あべ しゅんすけ）

秋田県秋田市出身。東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。在学中に安宅賞受賞。同大学院修士課程作曲専攻修了。フランス、パリ国立高等音楽院作曲科中退。2010 年度野村学芸財団奨学生。2011 ～ 12 年度ローム・ミュージック・ファンデーション奨学生。2010 年京都フランス音楽アカデミーにて最優秀作品に贈られるメシアン賞受賞。同年、第 17 回奏楽堂日本歌曲コンクール作曲部門中田喜直賞の部優秀賞受賞。2012 年第 22 回芥川作曲賞ノミネート。

秋田大学教育文化学部非常勤講師を経て、現在北海道教育大学岩見沢校音楽文化専攻作曲コース特任講師。

「母」

原曲

同声二部合唱版（原調）

（移調）

混声三部合唱版（原調）

（移調）

混声四部合唱版（原調）

（移調）

「冬の夜」

原曲

同声二部合唱版（原調）

（移調）

混声三部合唱版（原調）

（移調）

混声四部合唱版（原調）

（移調）

「砂丘の上」

原曲

同声二部合唱版（原調）

（移調）

混声三部合唱版（原調）

（移調）

混声四部合唱版（原調）

（移調）

歌　　詞

「母」

竹久　夢二

ふるさとの山のあけくれ
みどりのかどにたちぬれて
いつまでもわれまちたもう
母はかなしも

幾山河とおくさかりぬ
ふるさとのみどりのかどに
いまもなおわれまつらんか
母はとおしも

「砂丘の上」

室生　犀星

渚には青き波の群
鷗の如くひるがえり
すぎし日は
海の彼方に死に浮ぶ
音もなく砂丘の上に
うずくまり
海の彼方をこいぬれて
ひとり　ただひとり
はるかに思い疲れたり

「冬の夜」

西條　八十

凩（こがらし）の　音さえ絶えし
冬の夜（よ）を
二人してある
しめやかさ

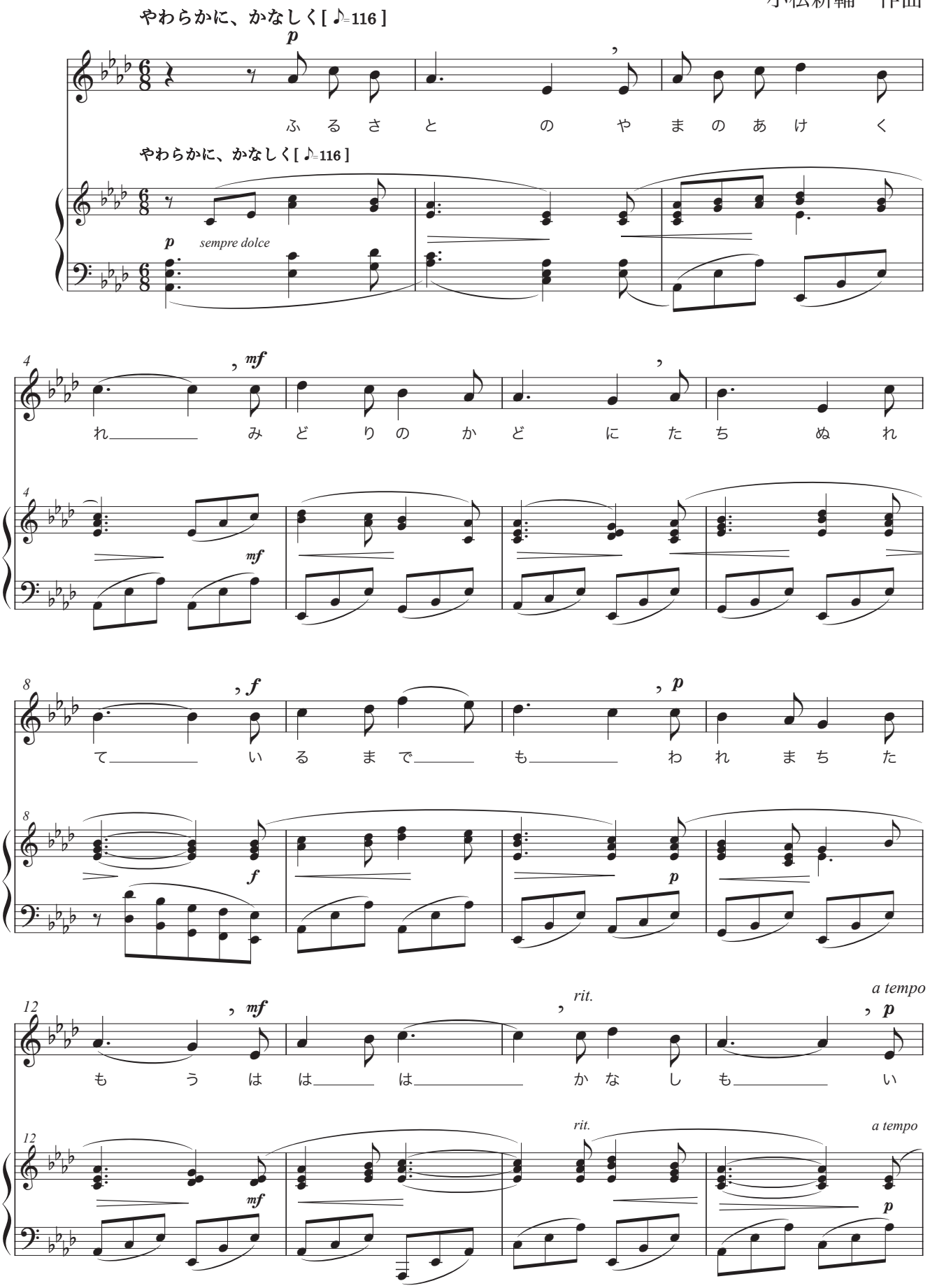
炉（いろり）に燃ゆる
黄金（きん）の火に
君眼（め）を伏せて
語るらく――

「夏の日
園の噴水（ふきあげ）に
集（つど）いし若き男女（ひとびと）も
凩わたるこの夜（よる）を
斯（か）く寄りそいてあるべきか」

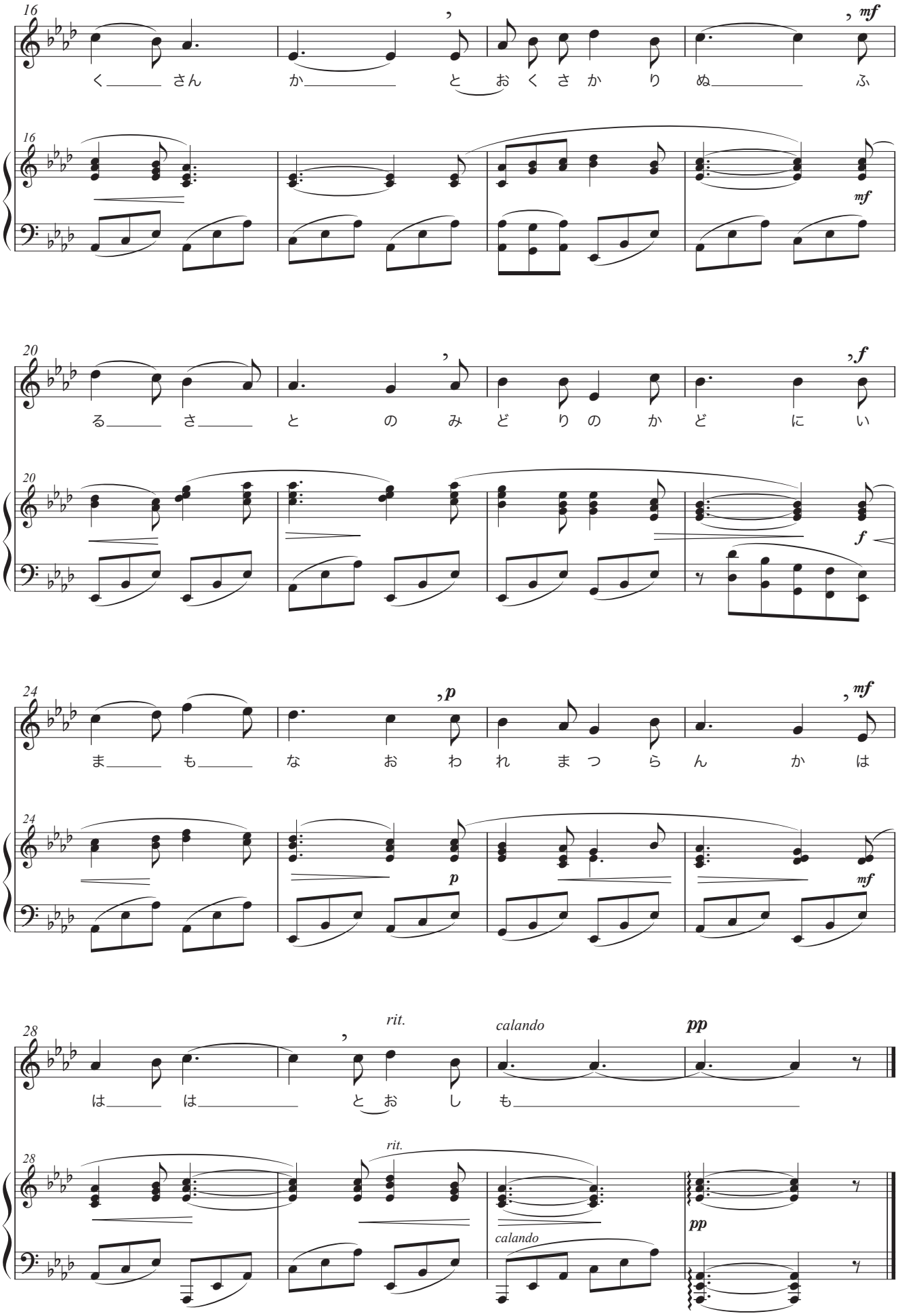
母

竹久夢二　作詩

小松耕輔　作曲



©小松耕輔音楽兄弟顕彰会


16
く さん か と おくさかりぬ ふ
mf
20
る さ と のみどりのかどにい
f
24
ま も な おわれまつらんかは
p
mf
28
は は と おしも
rit.
calando
pp

母

同声二部合唱版（原調）

作曲：小松耕輔
作詞：竹久夢二
編曲：阿部俊祐

♪ = 116 やわらかに、かなしく

Piano

♪ = 116 やわらかに、かなしく

mp　f

A

mp

ふ る さ と の や ま の あ け く

mp

ふ る さ と の や ま の あ け く

A

mp

mf

れ　み ど り の か ど に た ち ぬ れ

mf

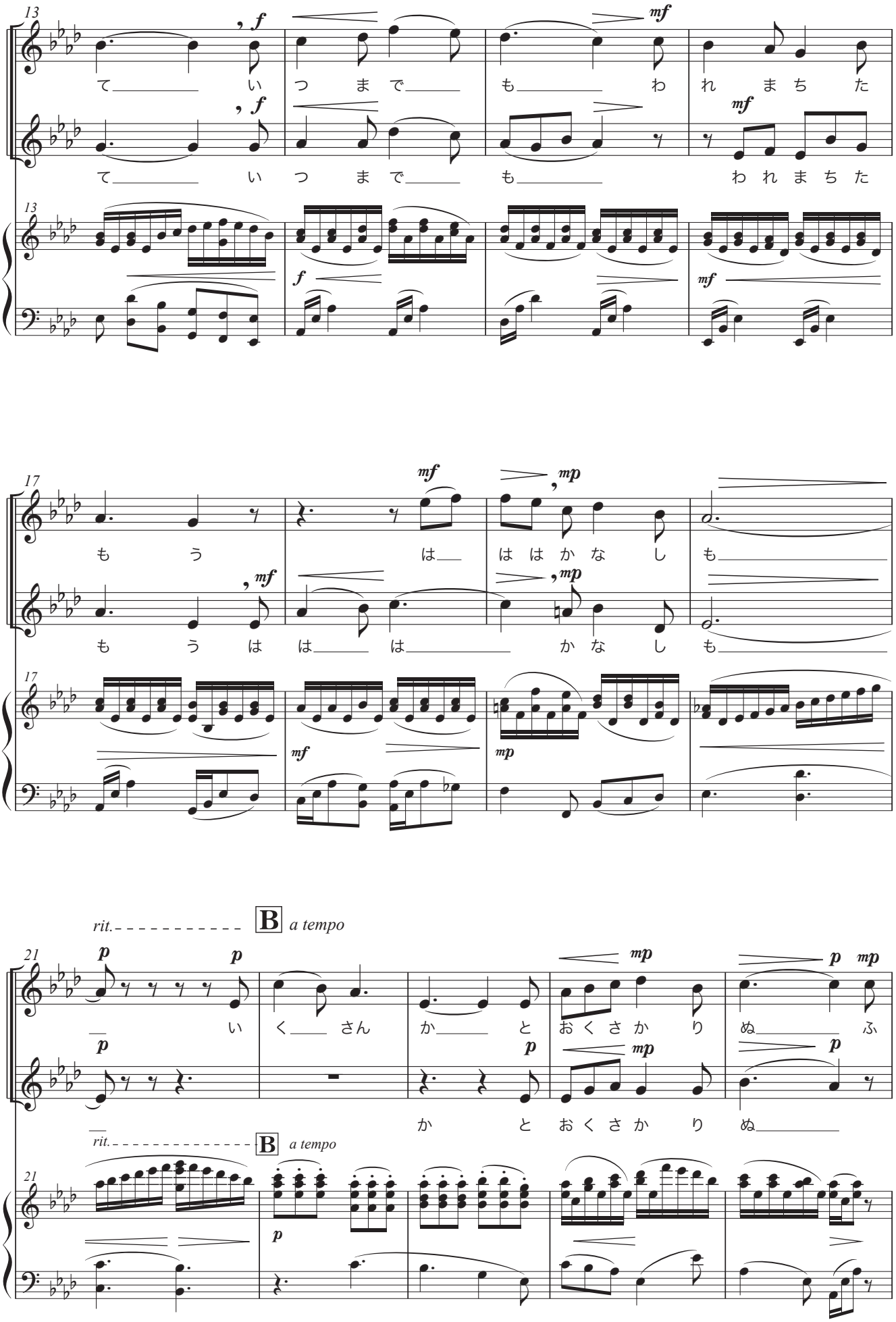
れ　み ど り の か ど に た ち ぬ れ

mf

©小松耕輔音楽兄弟顕彰会

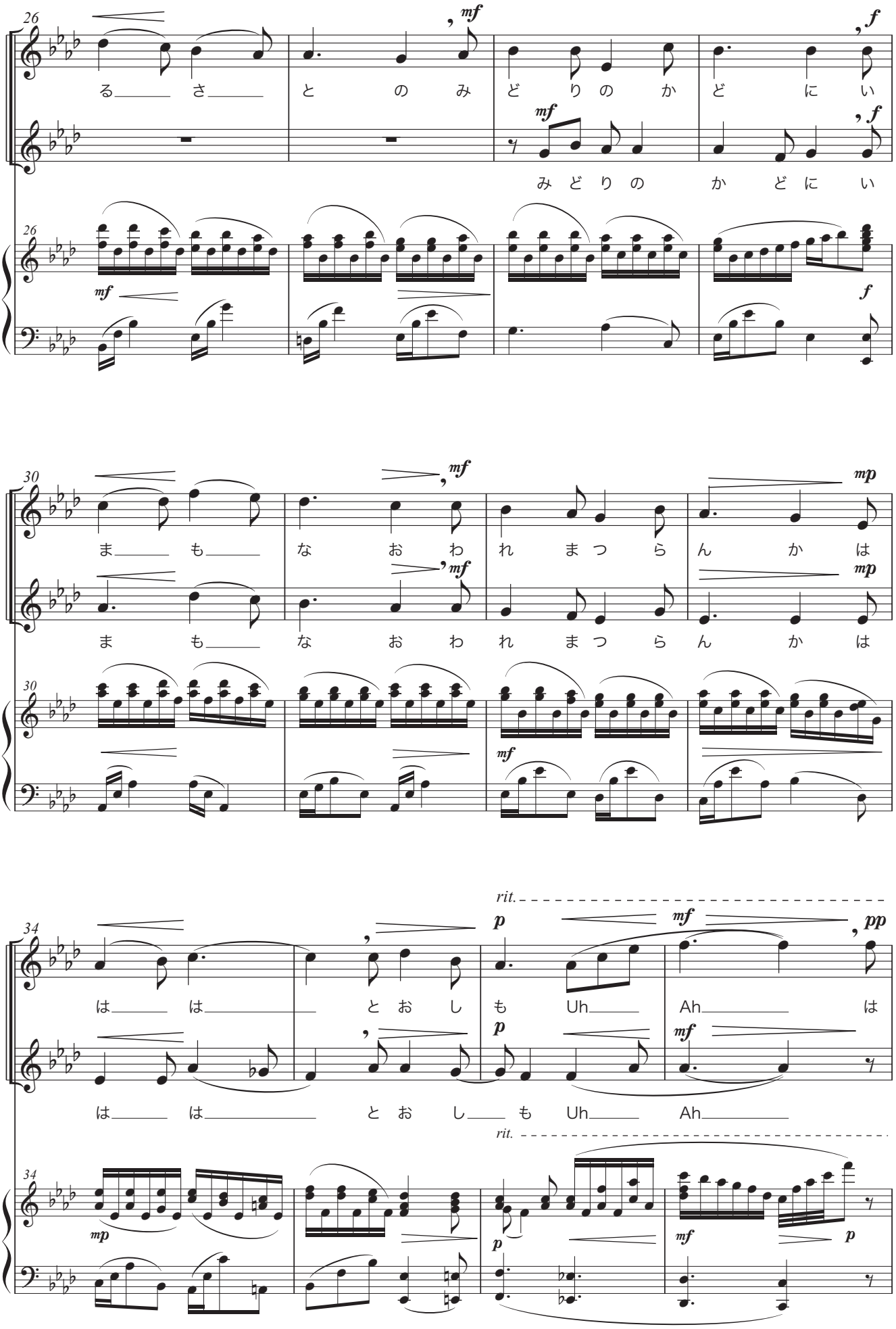
母

同声二部合唱版（原調）


13
て い つ ま で も わ れ ま ち た
て い つ ま で も わ れ ま ち た
17
も う は は は か な し も
も う は は は か な し も
rit.
B
a tempo
21
い く さ ん か と お く さ か り ぬ ふ
か と お く さ か り ぬ

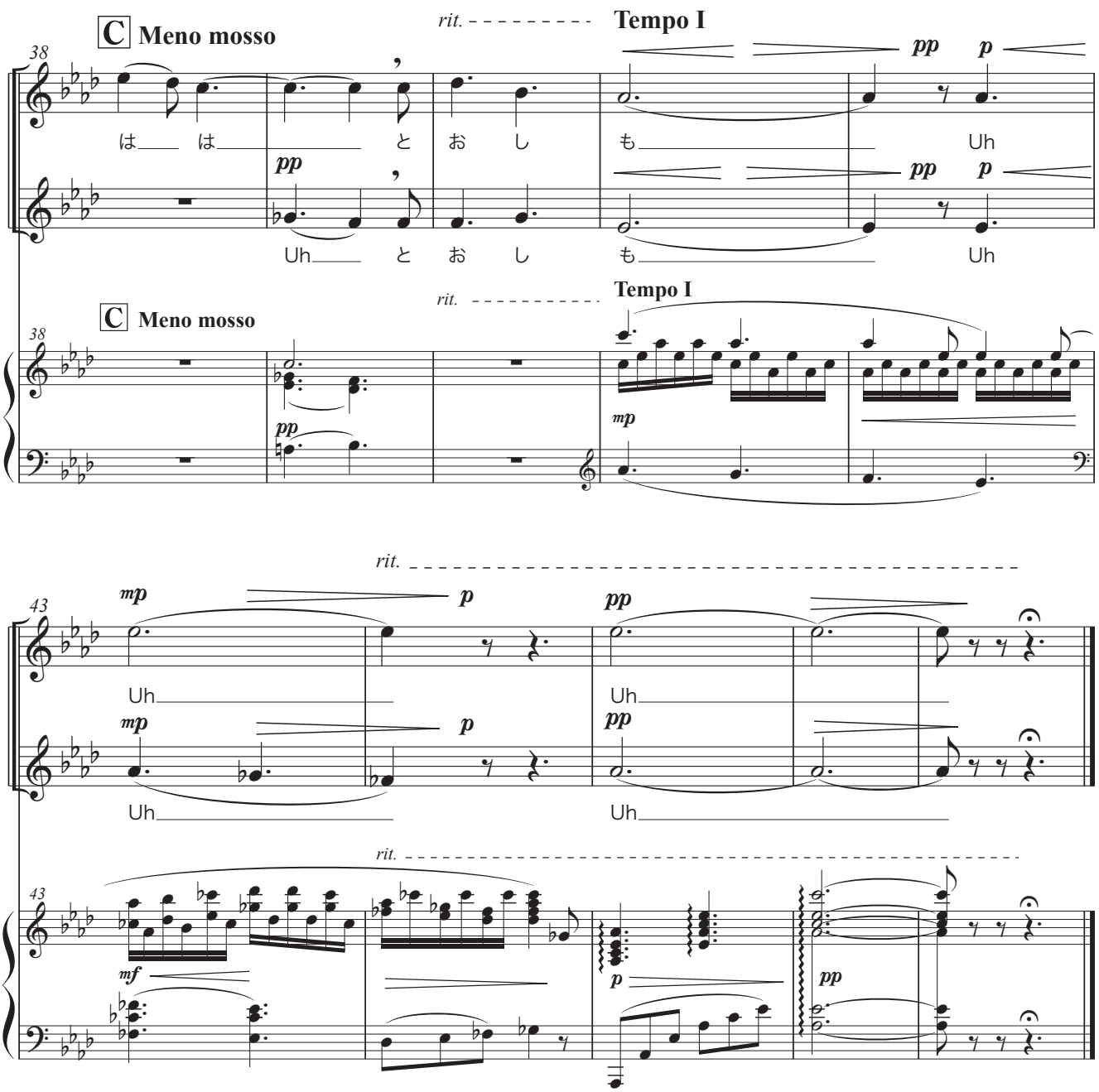
母

同声二部合唱版（原調）


26
る さ と の み ど り の か ど に い
mf
f
みどりの かどにい
30
ま も な お わ れ ま つ ら ん か は
mp
34
は は と お し も Uh Ah は
rit.
p
pp
は は と お し も Uh Ah

母

同声二部合唱版（原調）

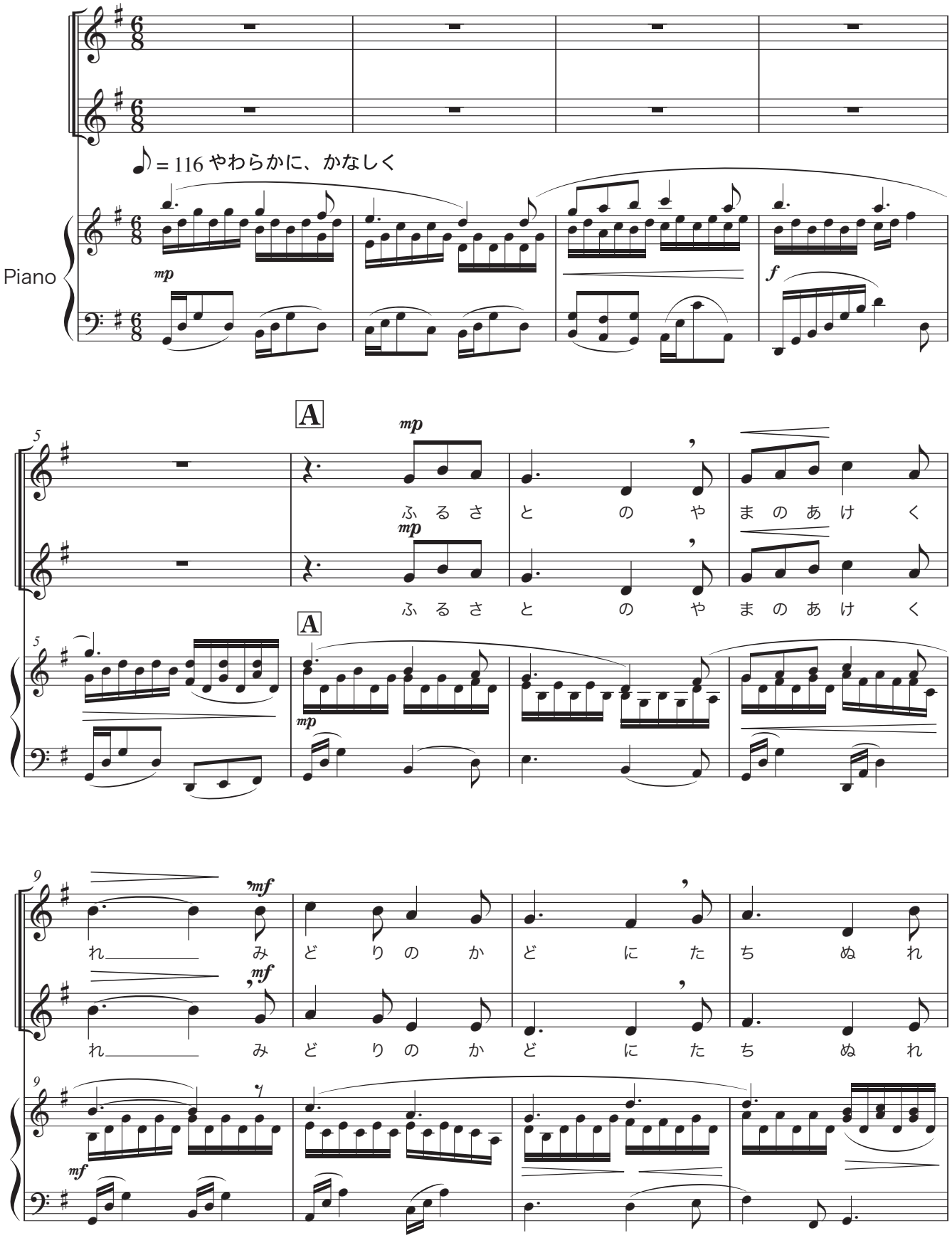


母

同声二部合唱版（移調）

作曲：小松耕輔
作詞：竹久夢二
編曲：阿部俊祐

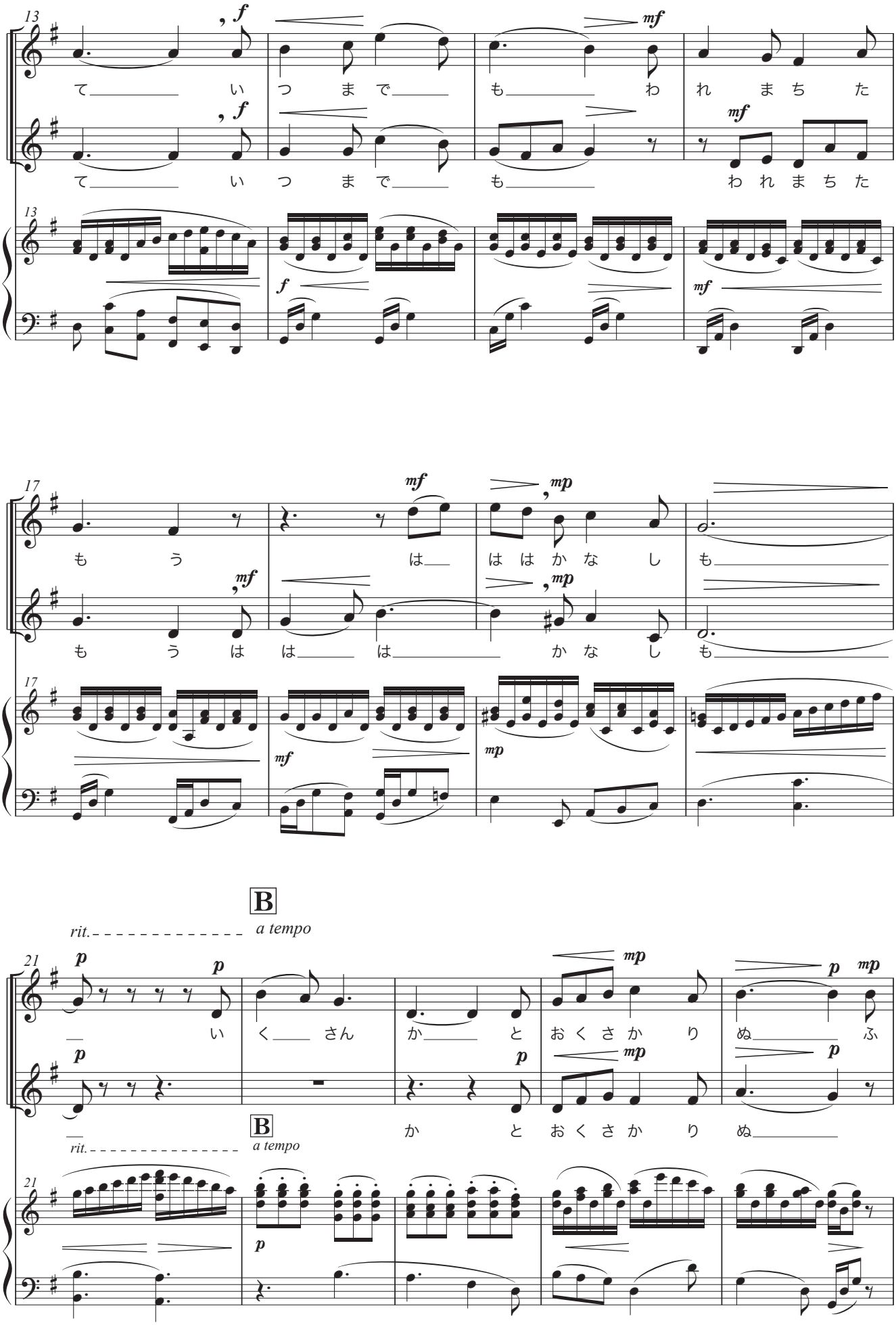
♪ = 116 やわらかに、かなしく



©小松耕輔音楽兄弟顕彰会

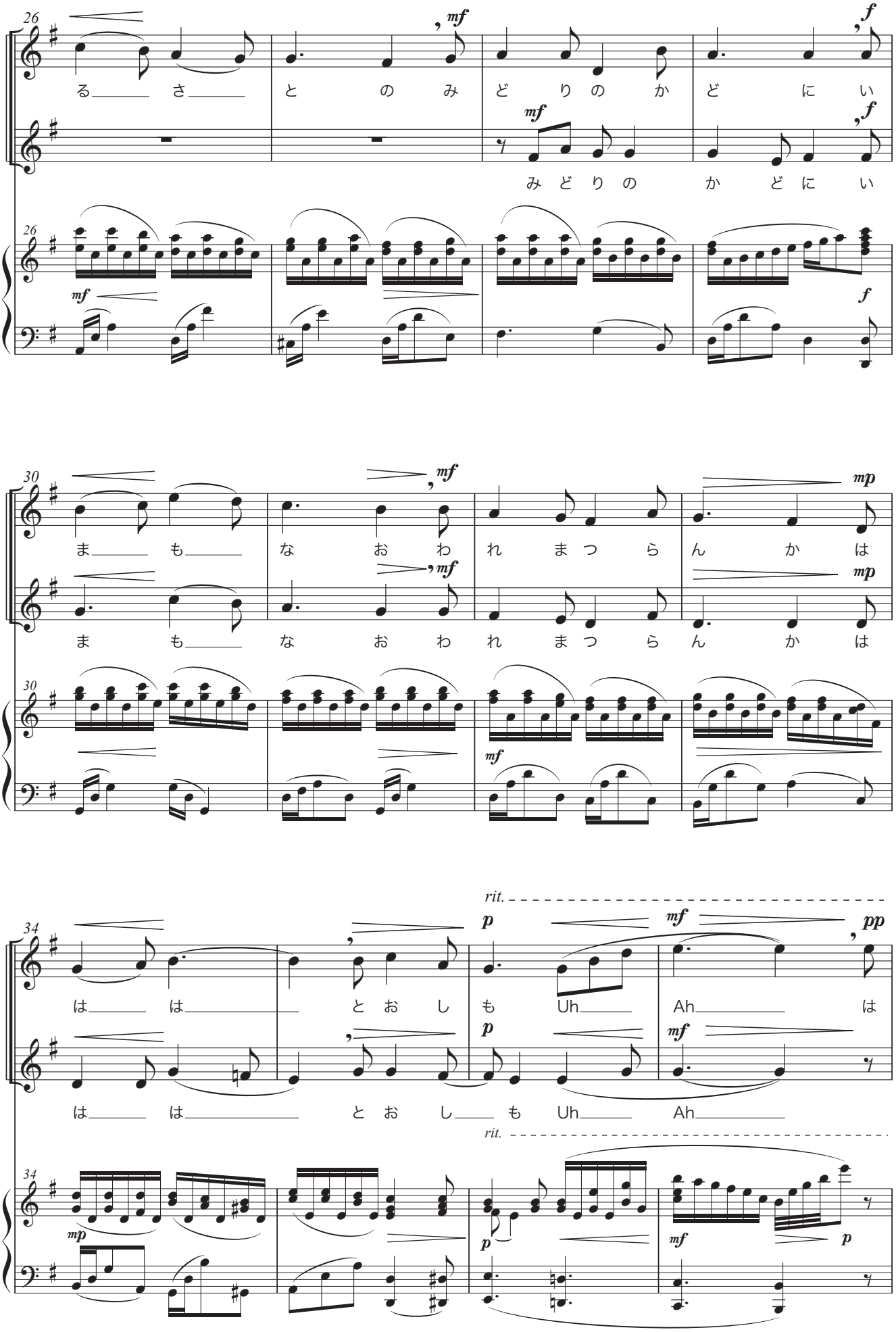
母

同声二部合唱版（移調）


13
て い つ ま で も わ れ ま ち た
て い つ ま で も わ れ ま ち た
17
も う は は は か な し も
も う は は は か な し も
B
rit.
a tempo
21
い く さ ん か と お く さ か り ぬ ふ
か と お く さ か り ぬ

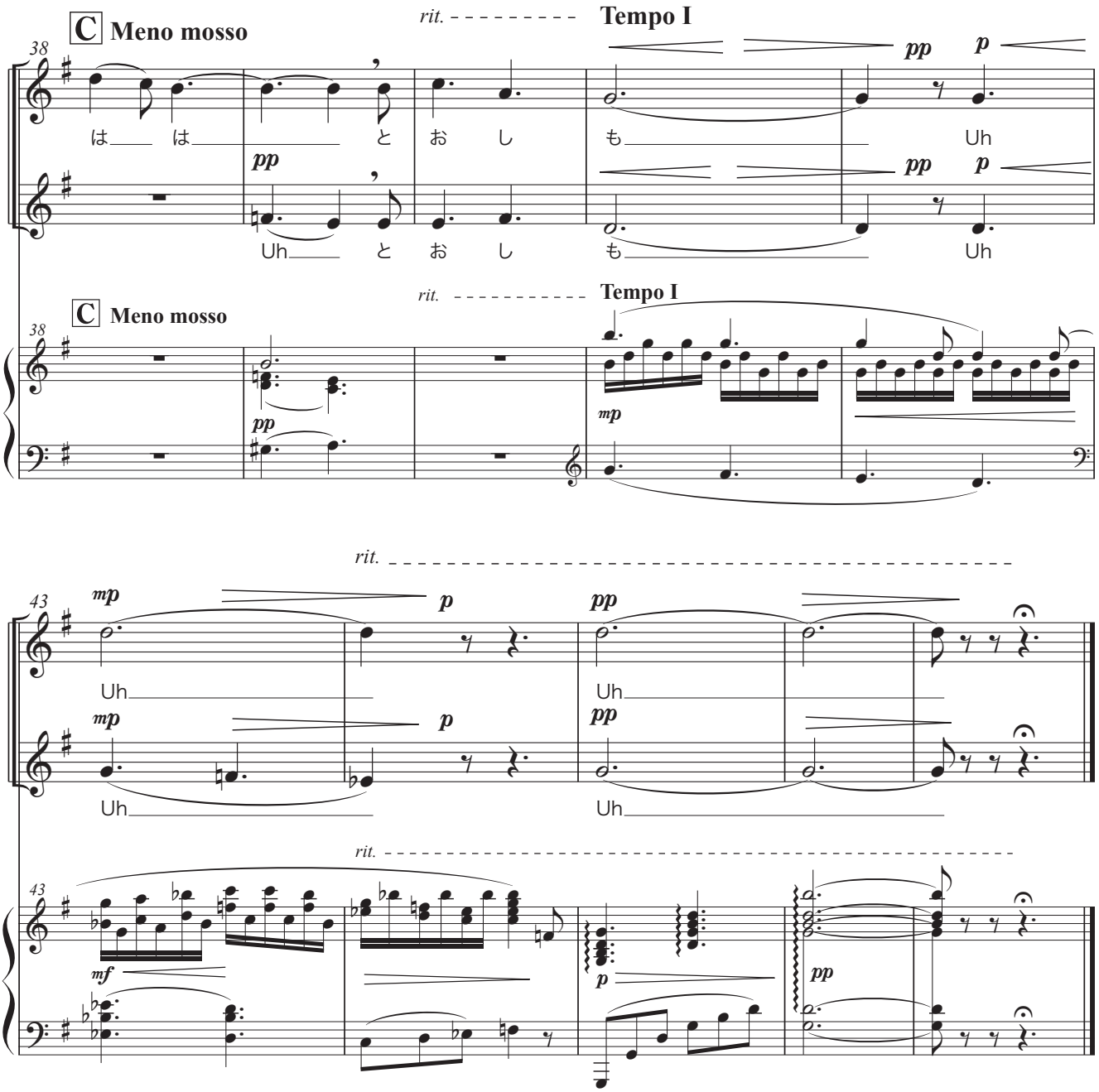
母

同声二部合唱版（移調）


26
る さ と の み ど り の か ど に い
mf
f
みどりの かどに い
30
ま も な お わ れ ま つ ら ん か は
mp
34
は は と お し も Uh Ah は
rit.
p
pp
は は と お し も Uh Ah

母

同声二部合唱版（移調）



母

混声三部合唱版（原調）

作曲：小松耕輔
作詞：竹久夢二
編曲：阿部俊祐

♪ = 116 やわらかに、かなしく

♪ = 116 やわらかに、かなしく

Piano

mp

f

A

5

mp

ふ る さ と の や ま の あ け く

mp

ふ る さ と の や ま の あ け く

A

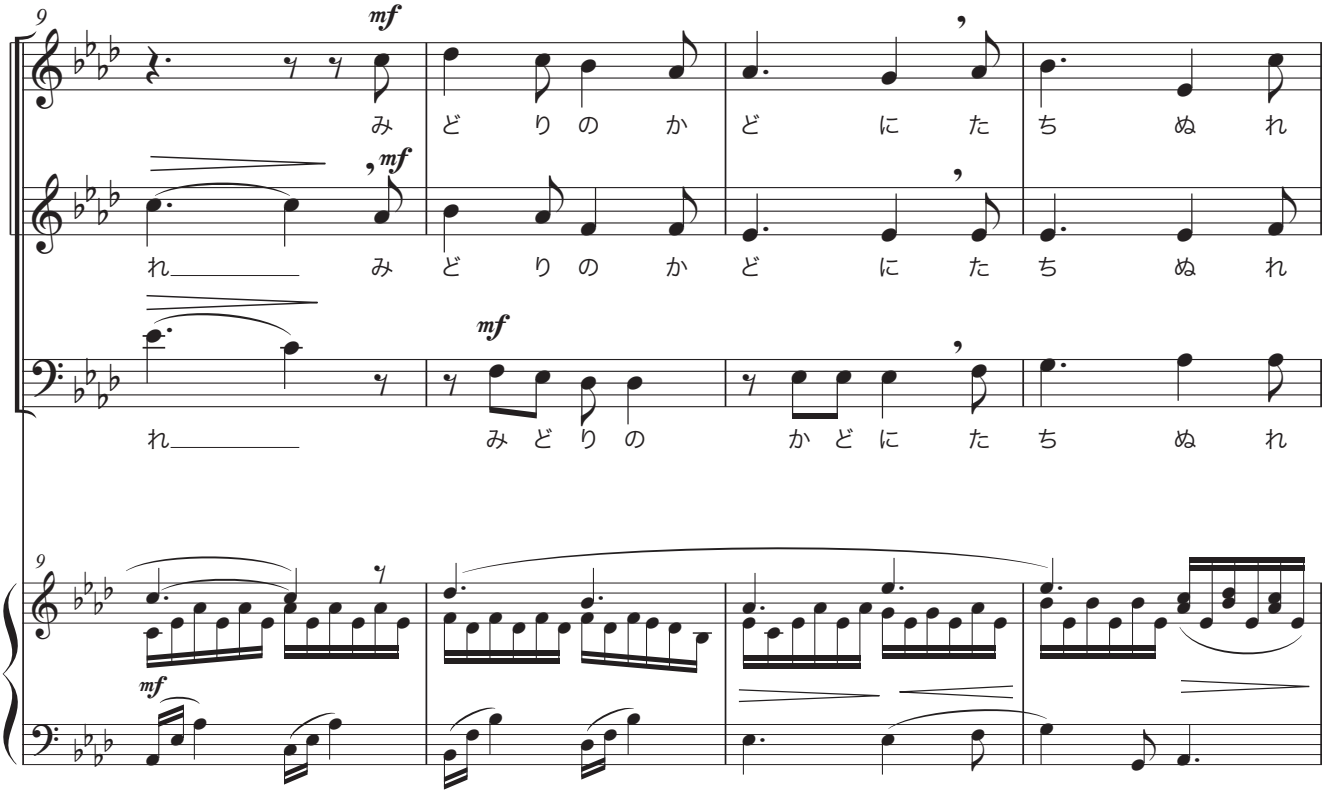
5

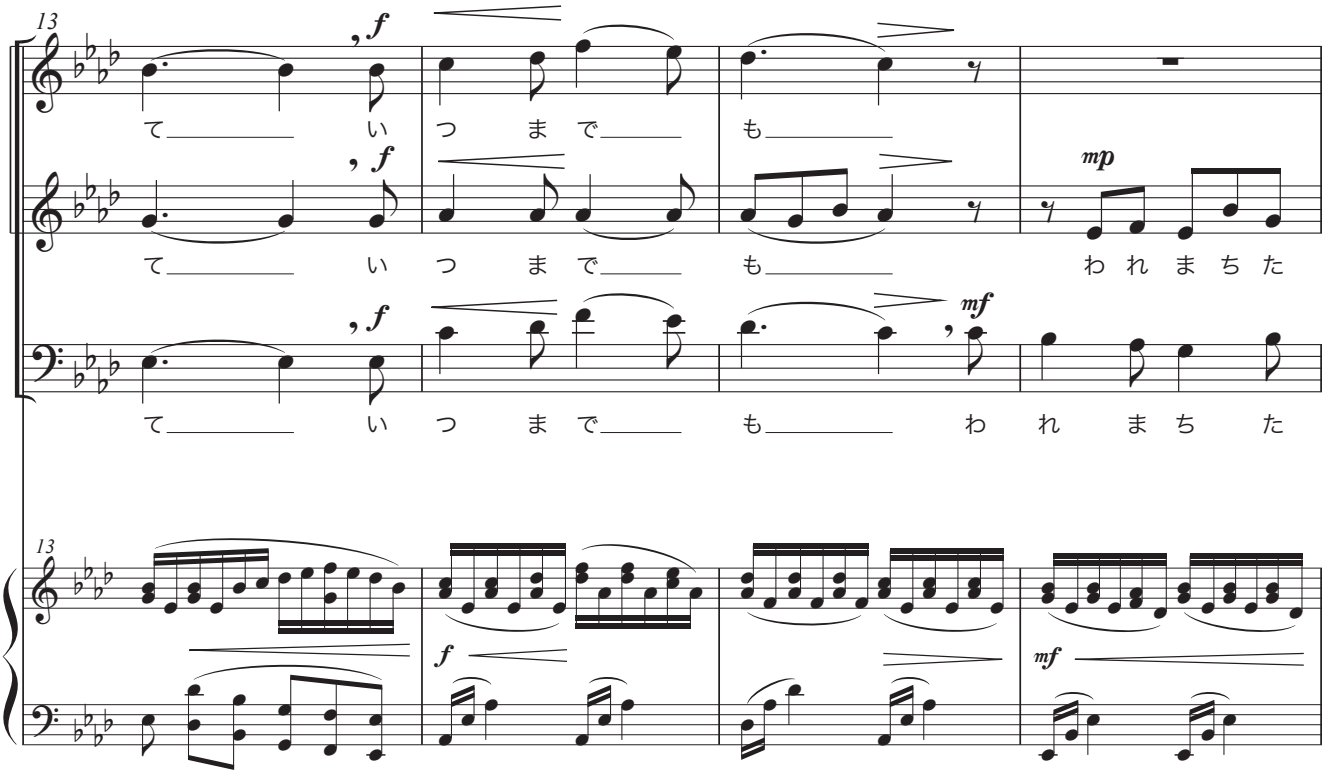
mp

©小松耕輔音楽兄弟顕彰会

母

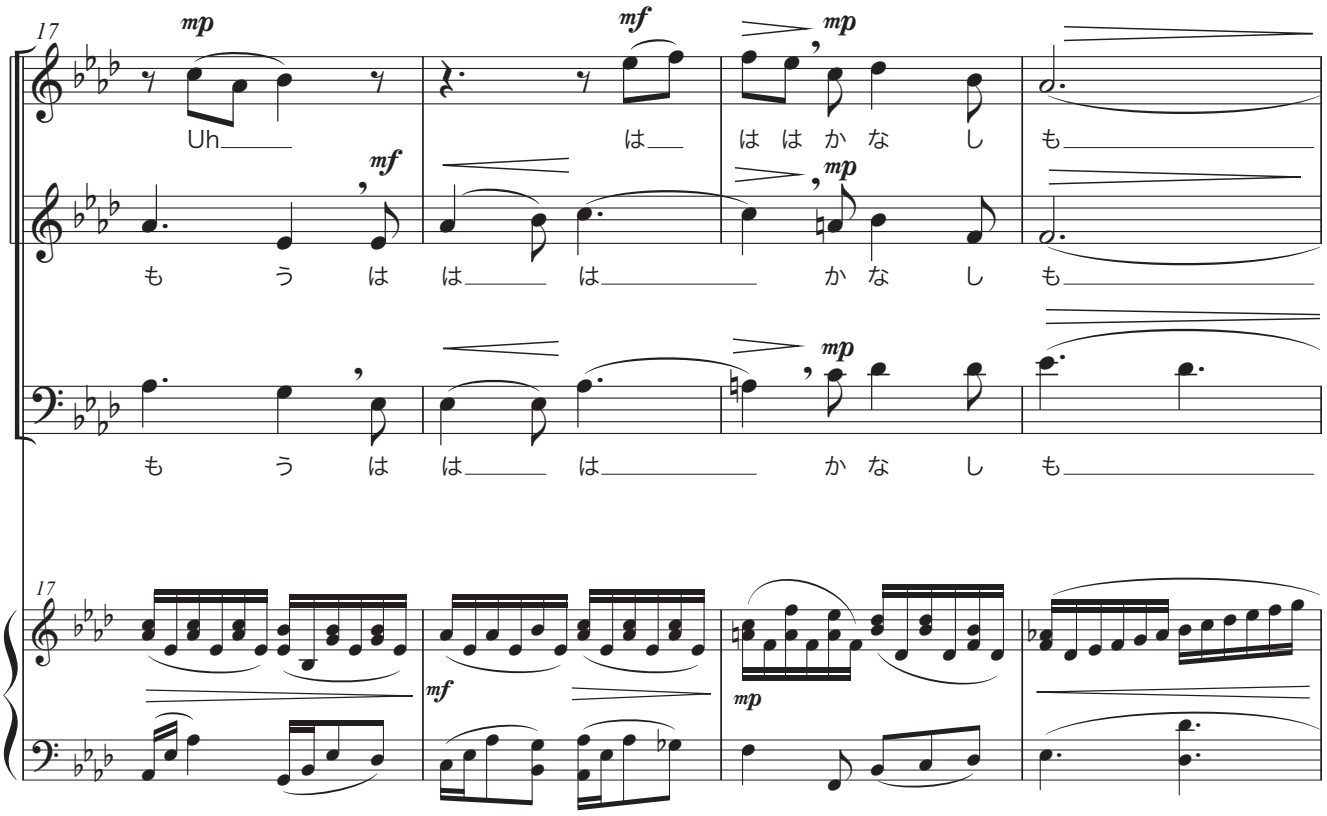
混声三部合唱版（原調）

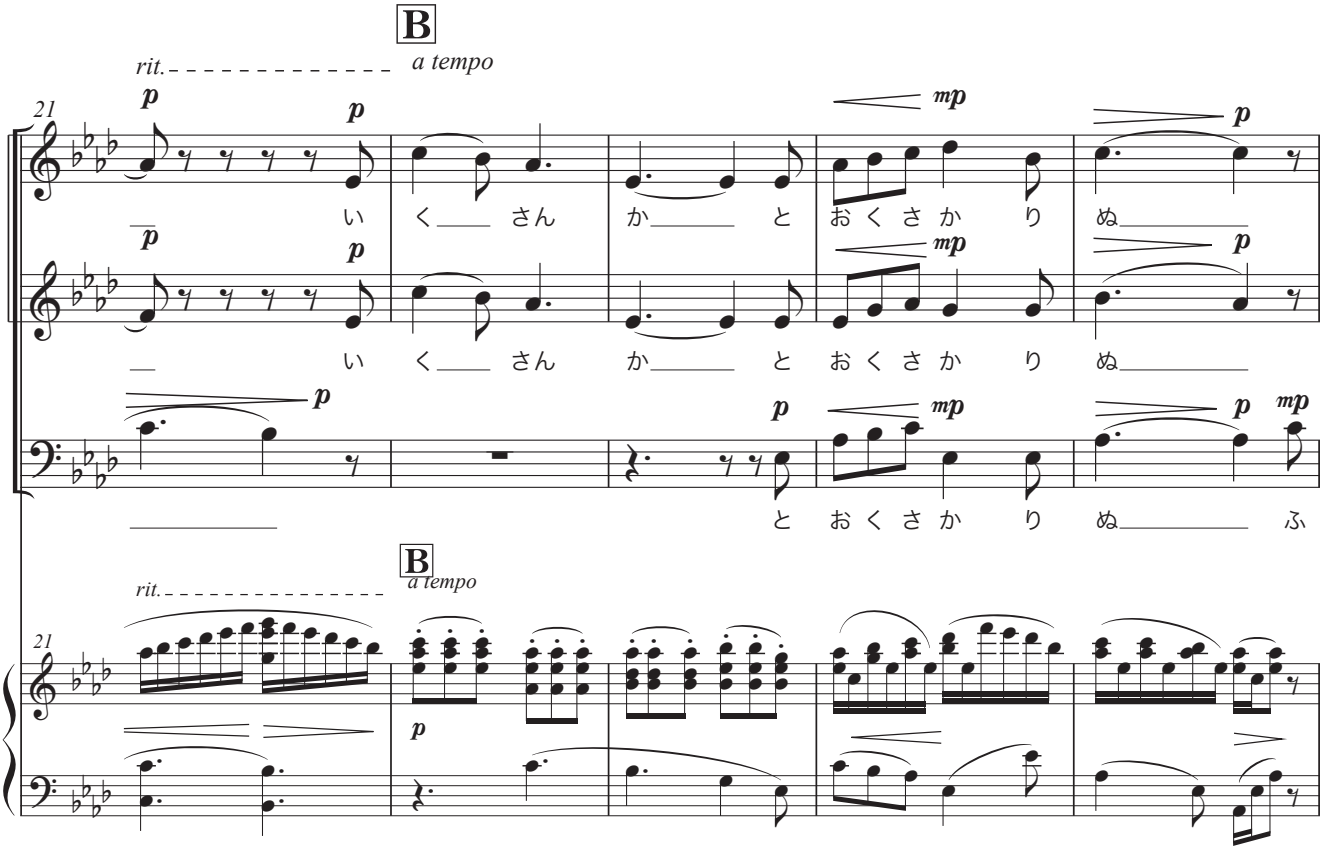

9
mf
み どり の か ど に た ち ぬ れ
れ みどりの かどにたちぬれ
れ みどりの かどにたちぬれ


13
f
て い つ ま で も
mp
わ れ ま ち た
mf

母

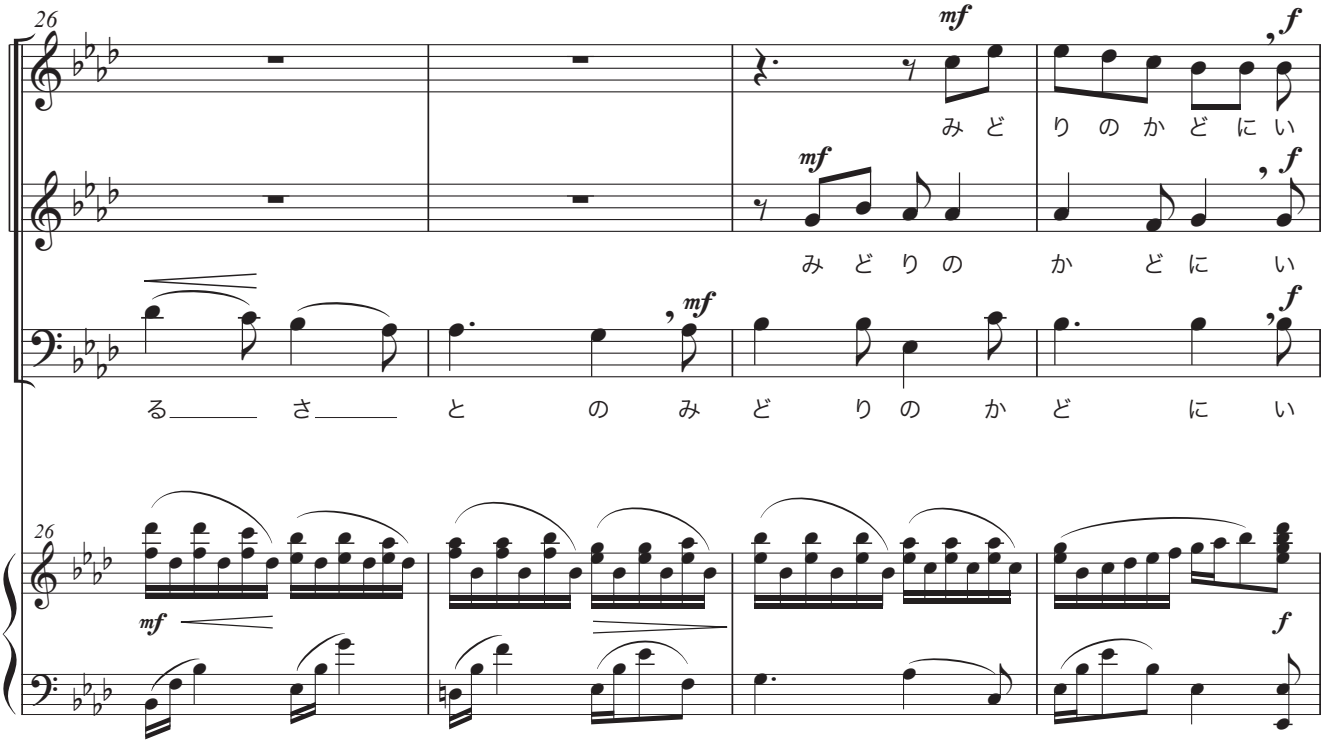
混声三部合唱版（原調）

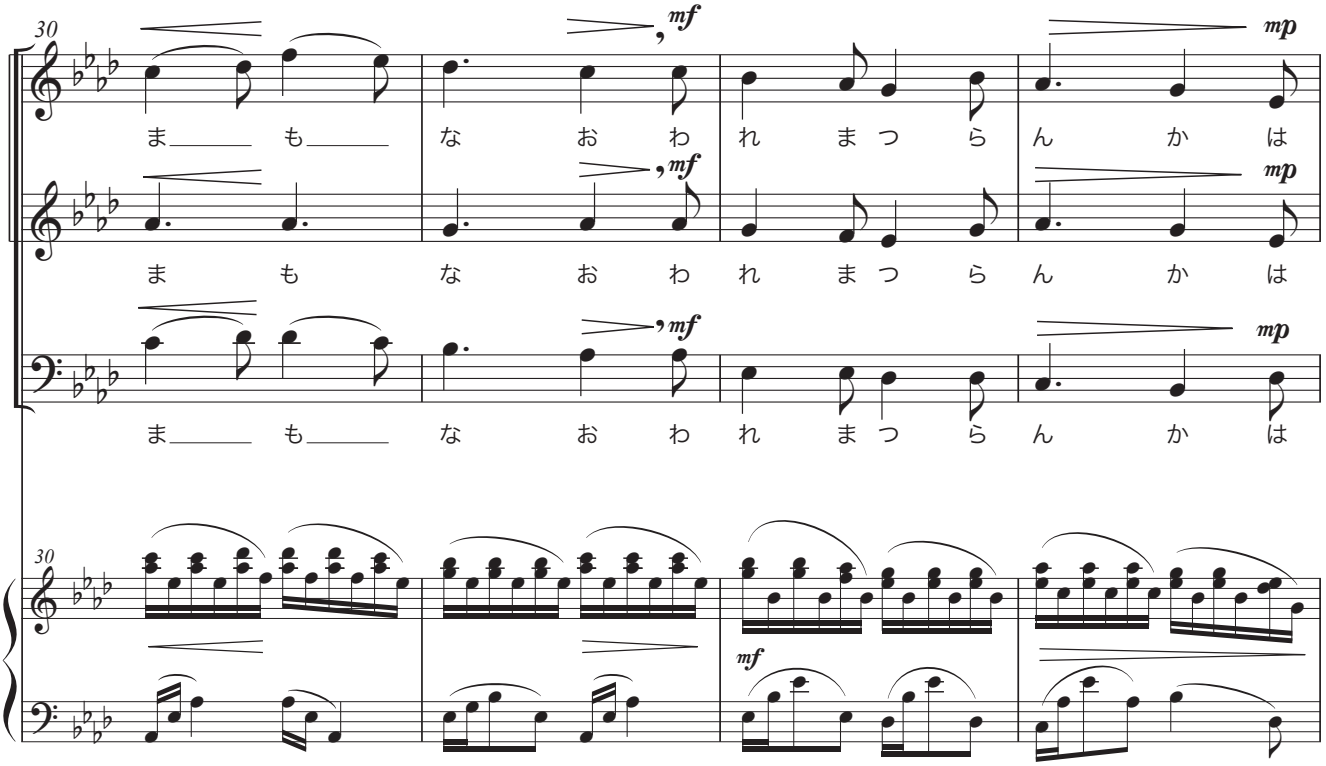

17
mp
mf
mp
Uh
は
はは かな し も
mf
mp
もう は は は かな し も
mp
もう は は は かな し も
17
mf
mp


B
rit.
a tempo
21
p
p
mp
p
い く さん か と おく さか り ぬ
p
p
mp
p
い く さん か と おく さか り ぬ
p
p
mp
p
mp
と おく さか り ぬ ふ
B
rit.
a tempo
21
p

母

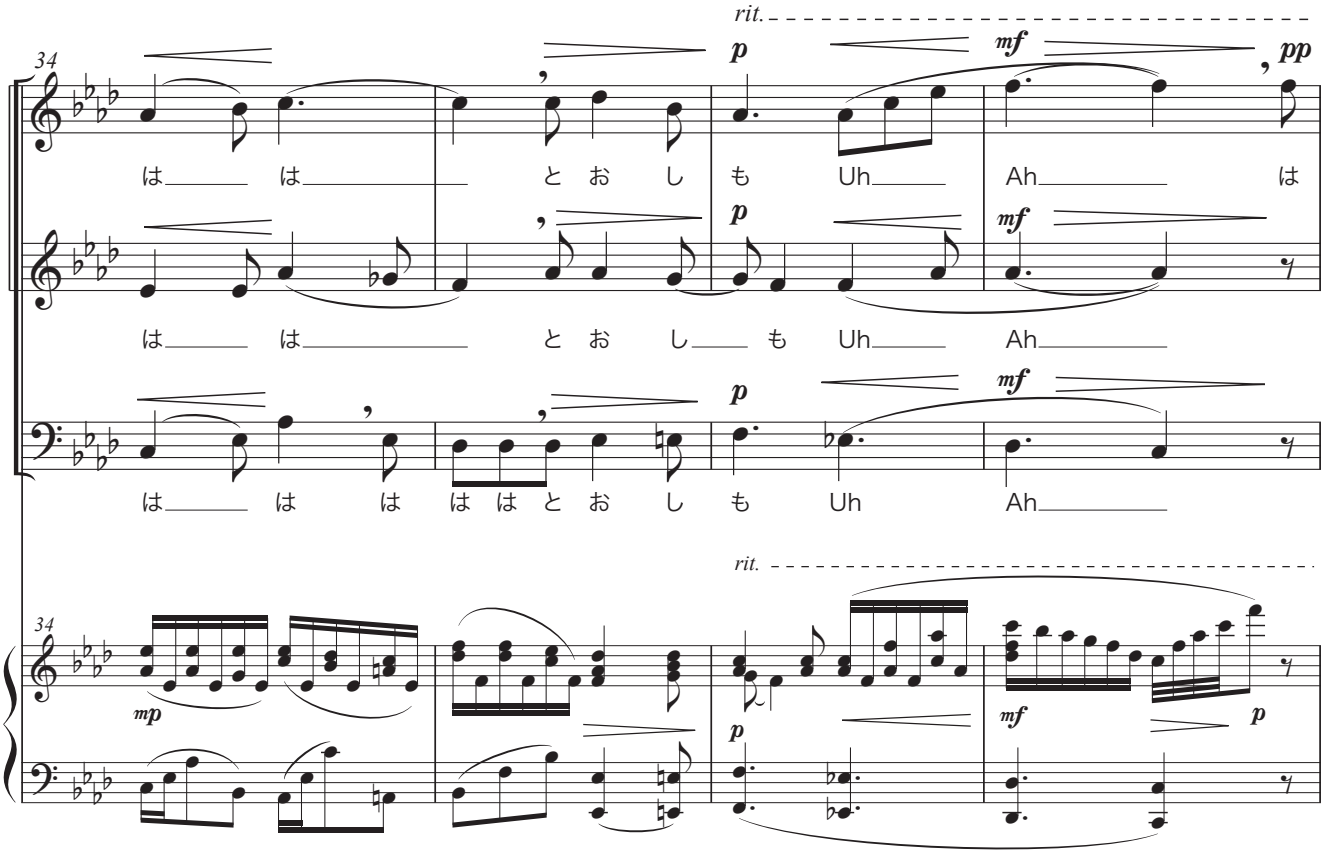
混声三部合唱版（原調）

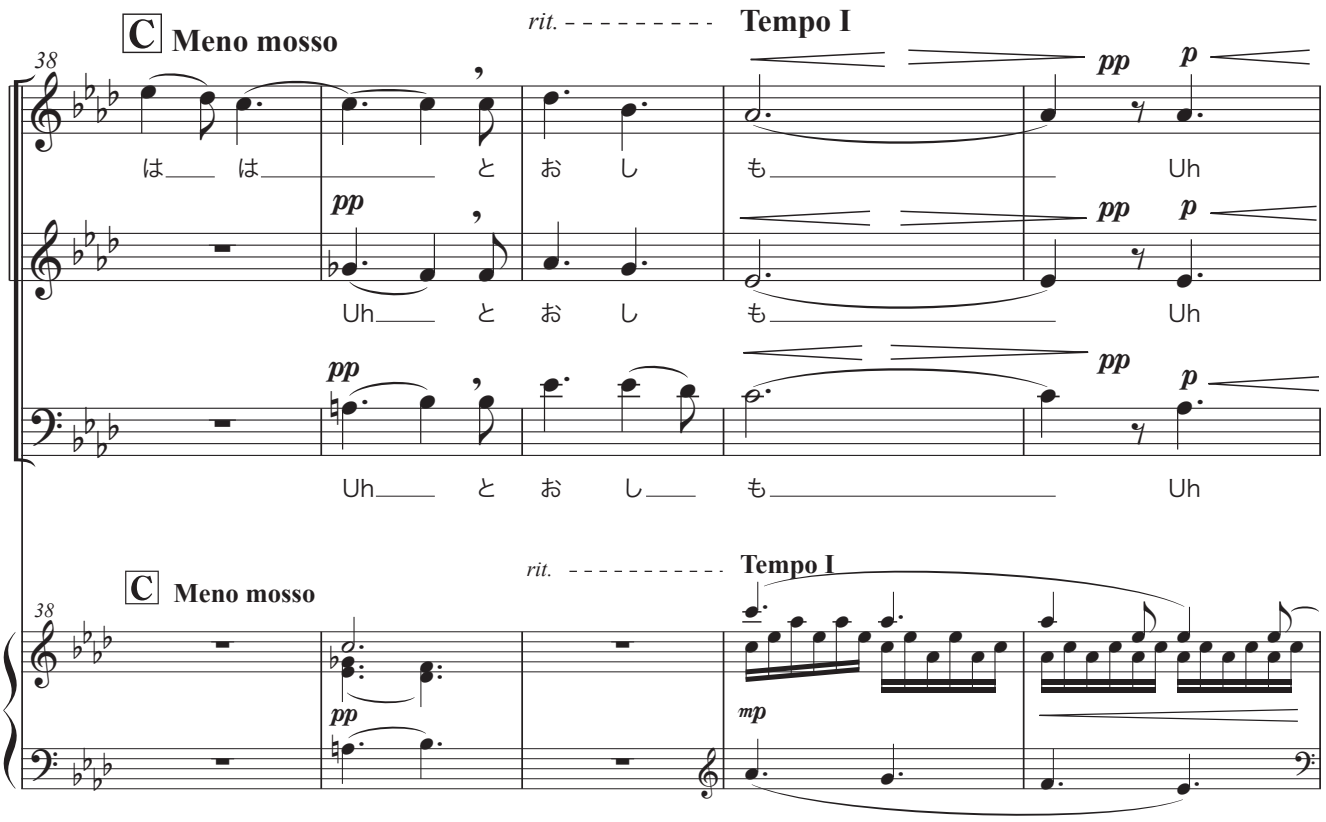

26
mf
f
みどりのかどにい
みどりの かどにい
る さ と のみどりのかどにい


30
mf
mp
まもなおわれまつらんかは
まもなおわれまつらんかは
まもなおわれまつらんかは

母

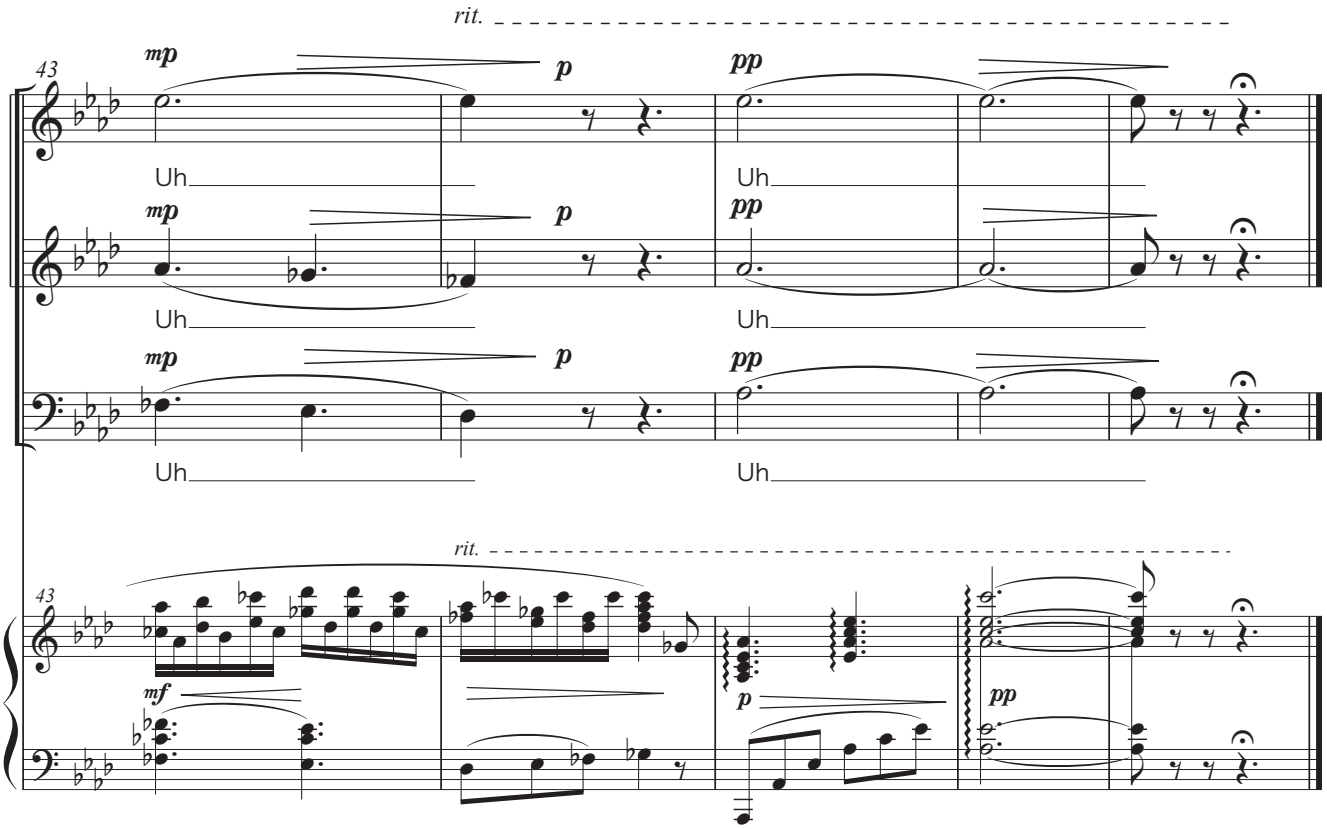
混声三部合唱版（原調）


rit.
34
は は と お し も Uh Ah は
は は と お し も Uh Ah
は は は は は と お し も Uh Ah


C Meno mosso
rit.
Tempo I
38
は は と お し も Uh
Uh と お し も Uh
Uh と お し も Uh

母

混声三部合唱版（原調）



母

混声三部合唱版（移調）

作曲：小松耕輔
作詞：竹久夢二
編曲：阿部俊祐

♪ = 116 やわらかに、かなしく

♪ = 116　やわらかに、かなしく

Piano

A

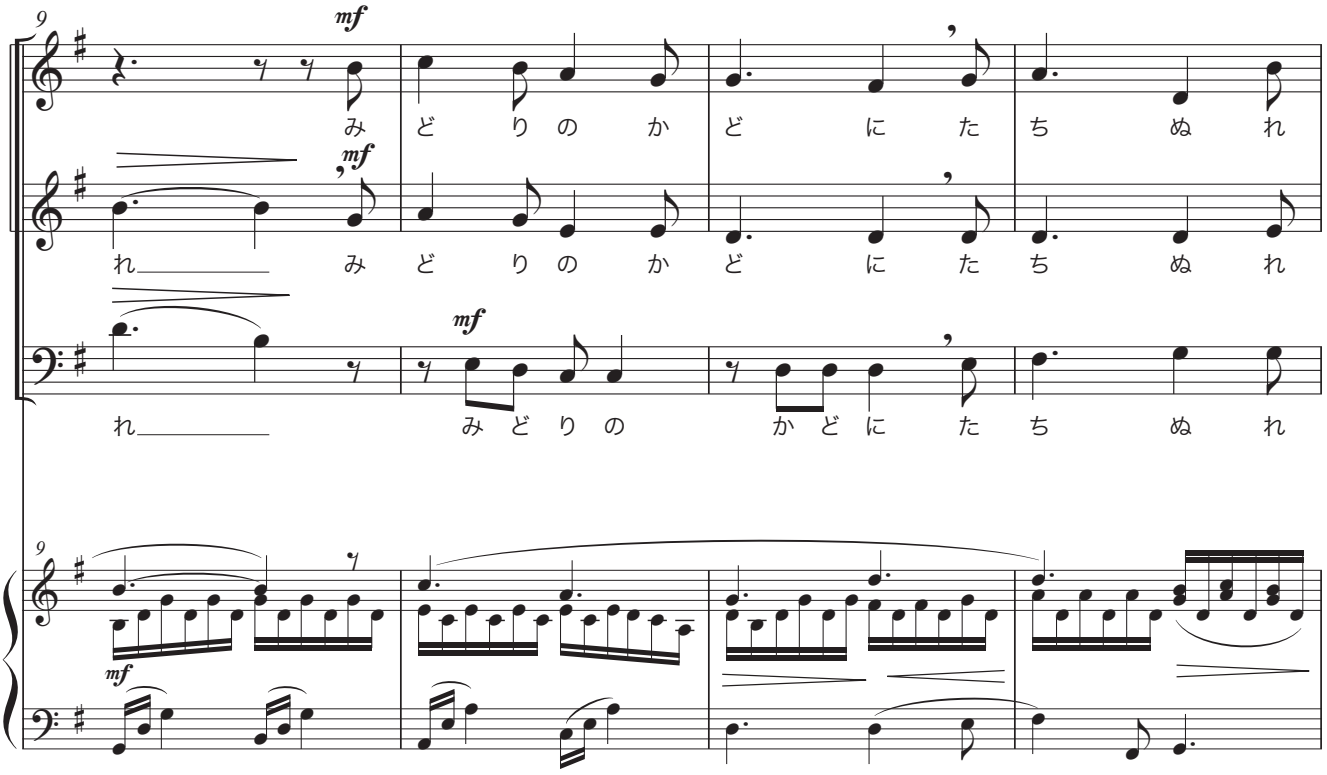
ふ る さ と の や ま の あ け く

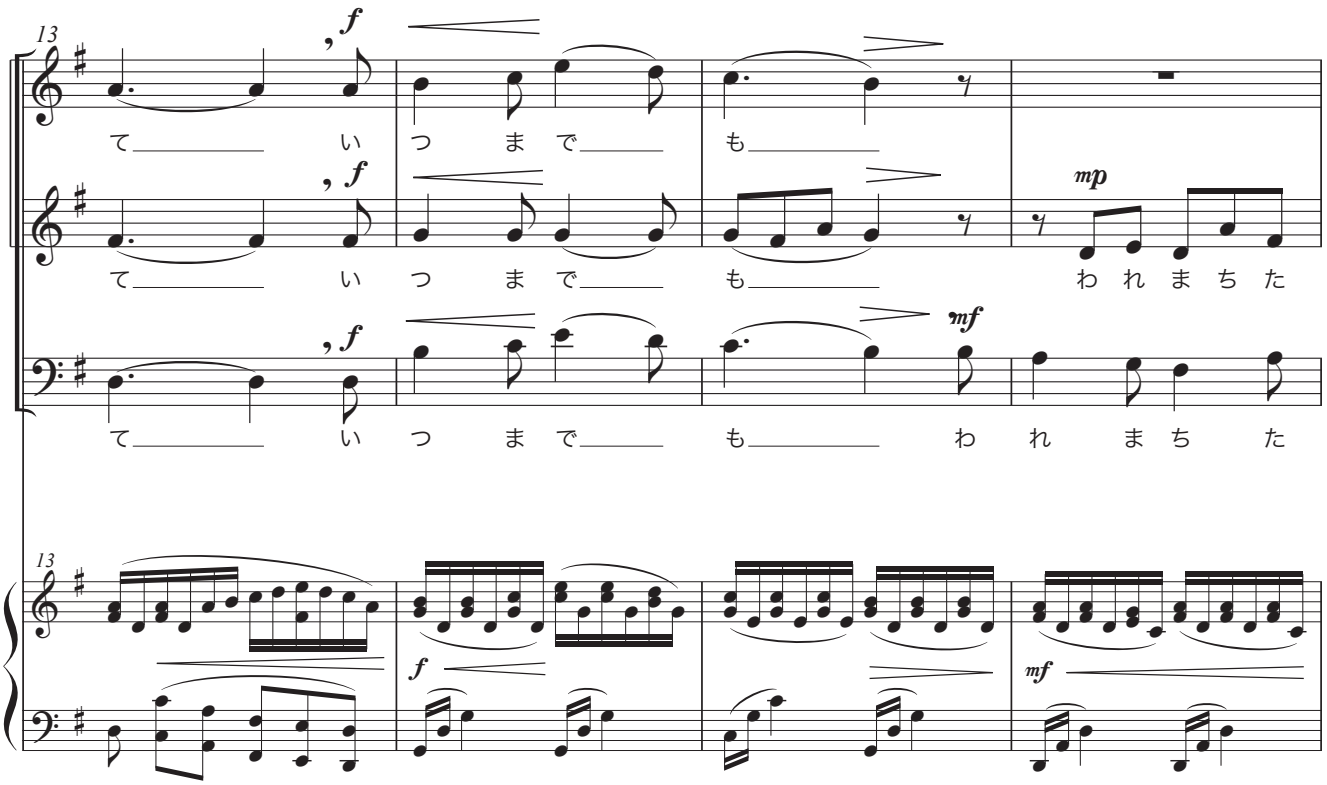
ふ る さ と の や ま の あ け く

©小松耕輔音楽兄弟顕彰会

母

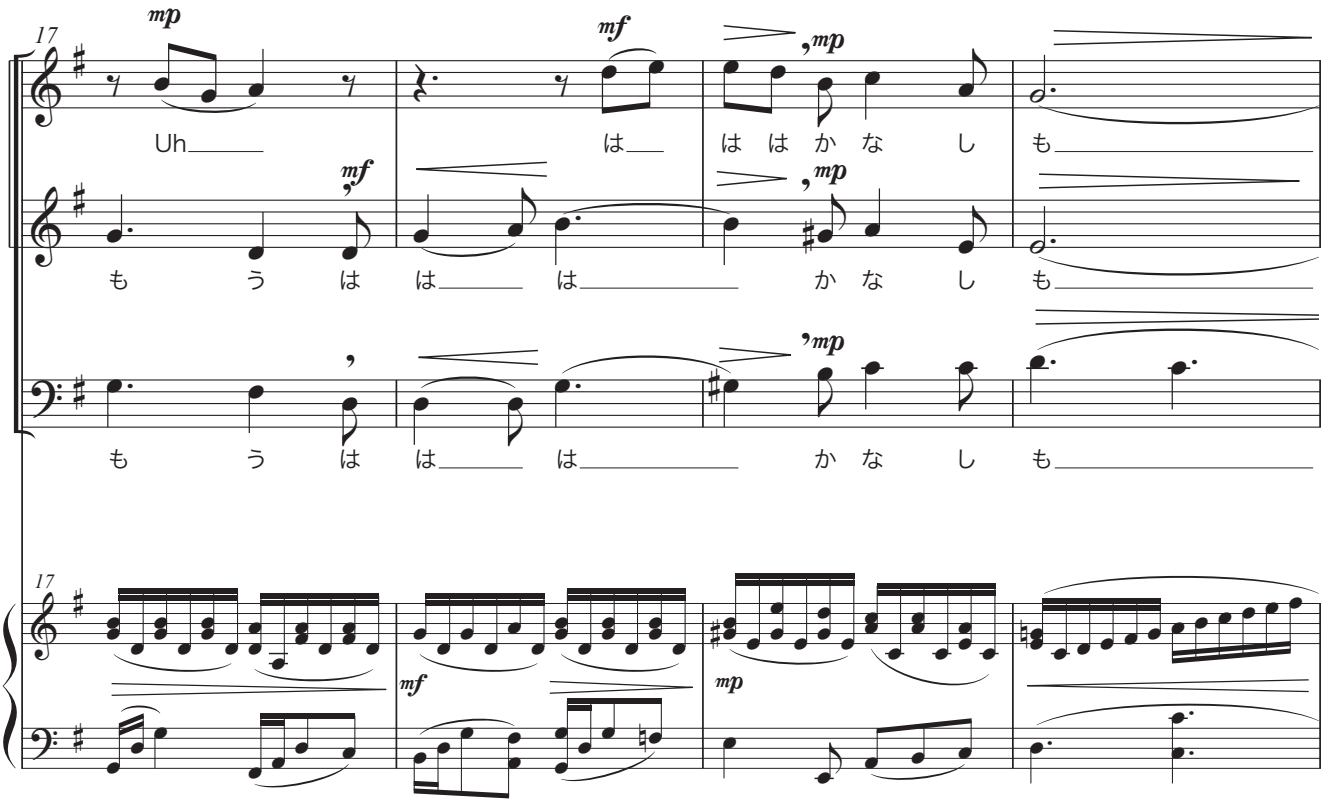
混声三部合唱版（移調）

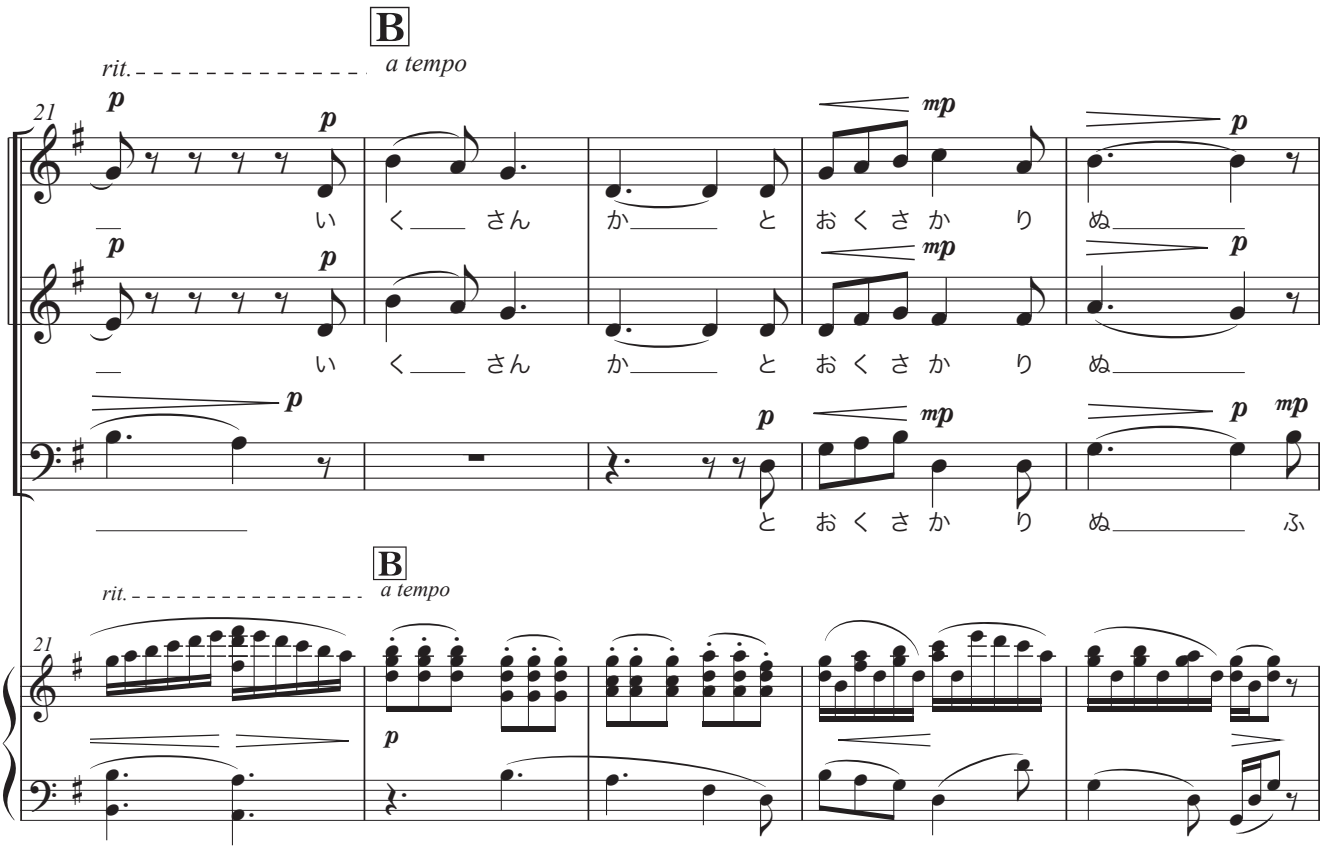

9
mf
み どり の か ど に た ち ぬ れ
れ みどりの かどにたちぬれ
れ みどりの かどにたちぬれ


13
f
て い つ ま で も
mp
わ れ ま ち た
mf
て い つ ま で も わ れ ま ち た

母

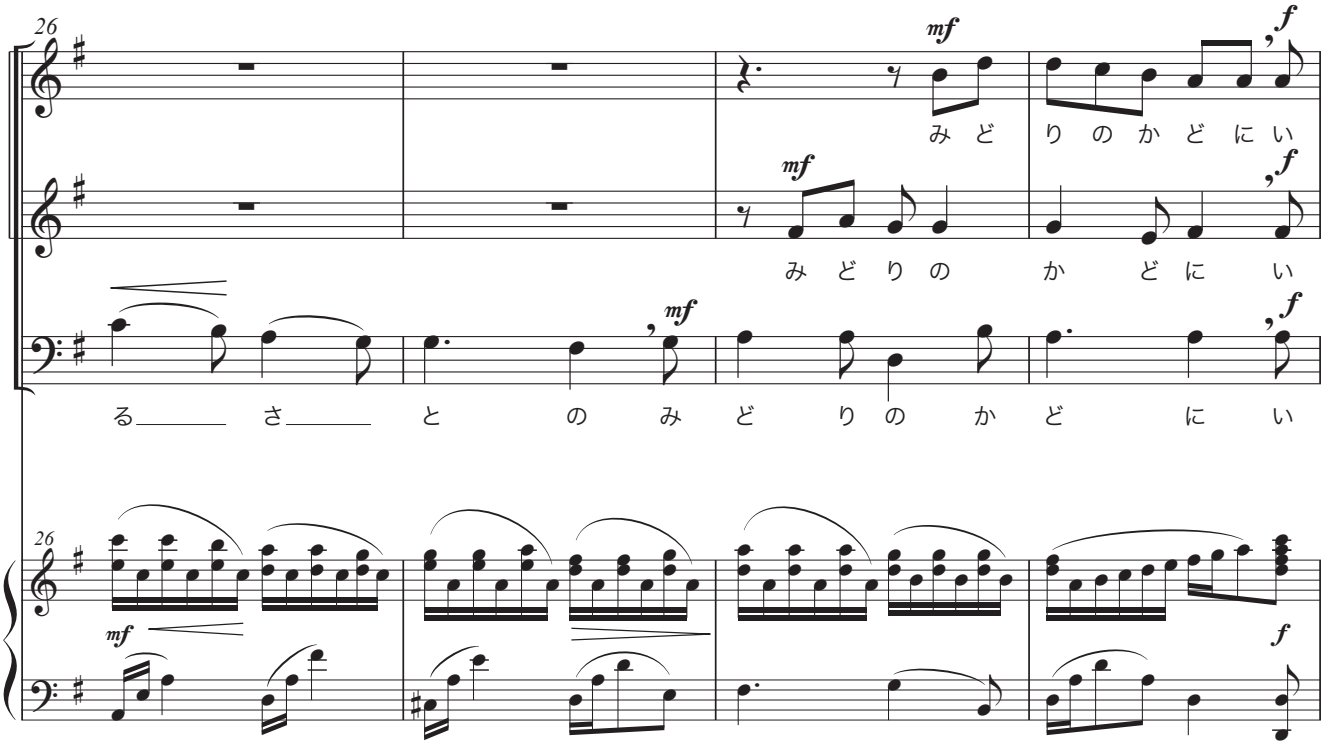
混声三部合唱版（移調）

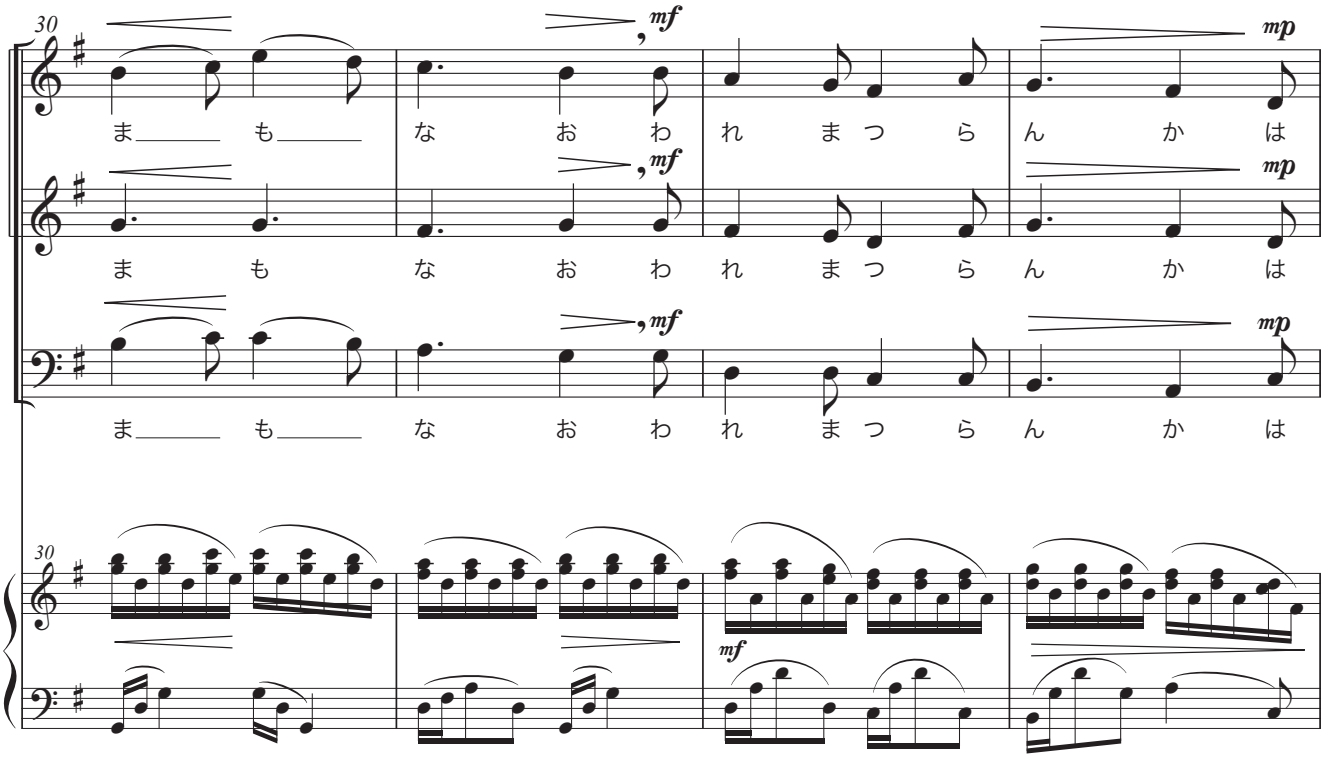

17
mp
mf
mp
Uh
は
はは かな し も
mf
mp
も う は は は かな し も
mp
も う は は は かな し も
17
mf
mp

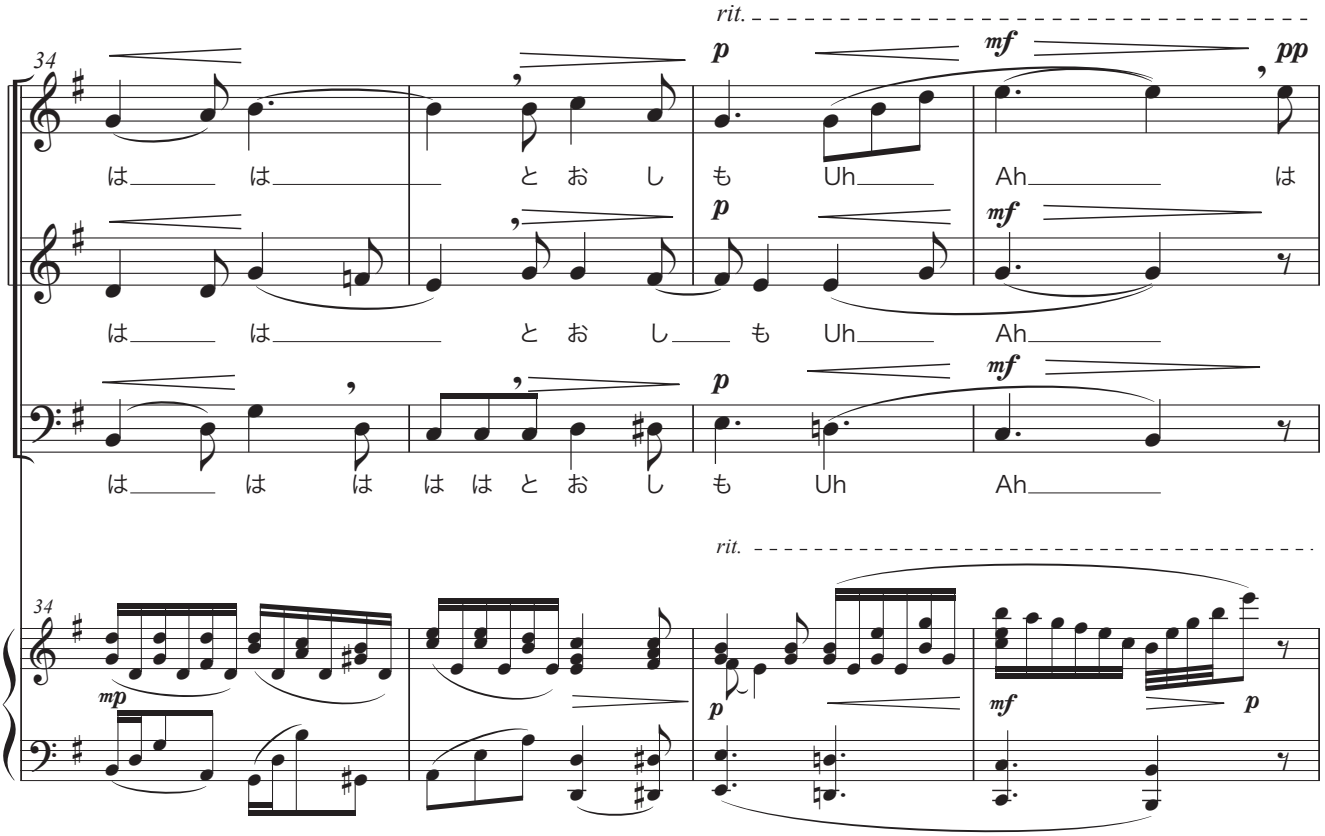

B
rit.
a tempo
21
p
p
mp
p
い く さん か と おく さか り ぬ
p
p
mp
p
い く さん か と おく さか り ぬ
p
p
mp
p
mp
と おく さか り ぬ ふ
B
rit.
a tempo
21
p

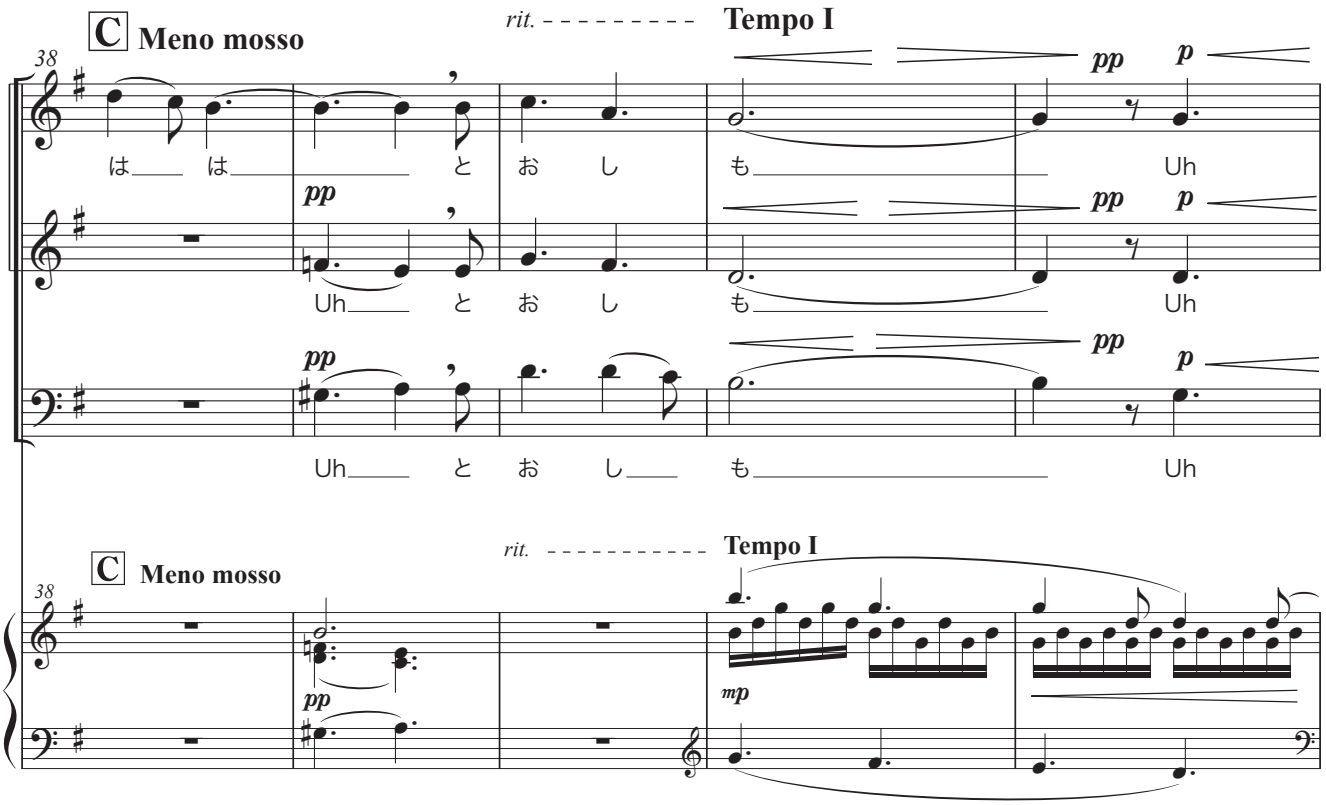
母

混声三部合唱版（移調）


26
mf
f
み ど り の か ど に い
み ど り の か ど に い
る さ と の み ど り の か ど に い

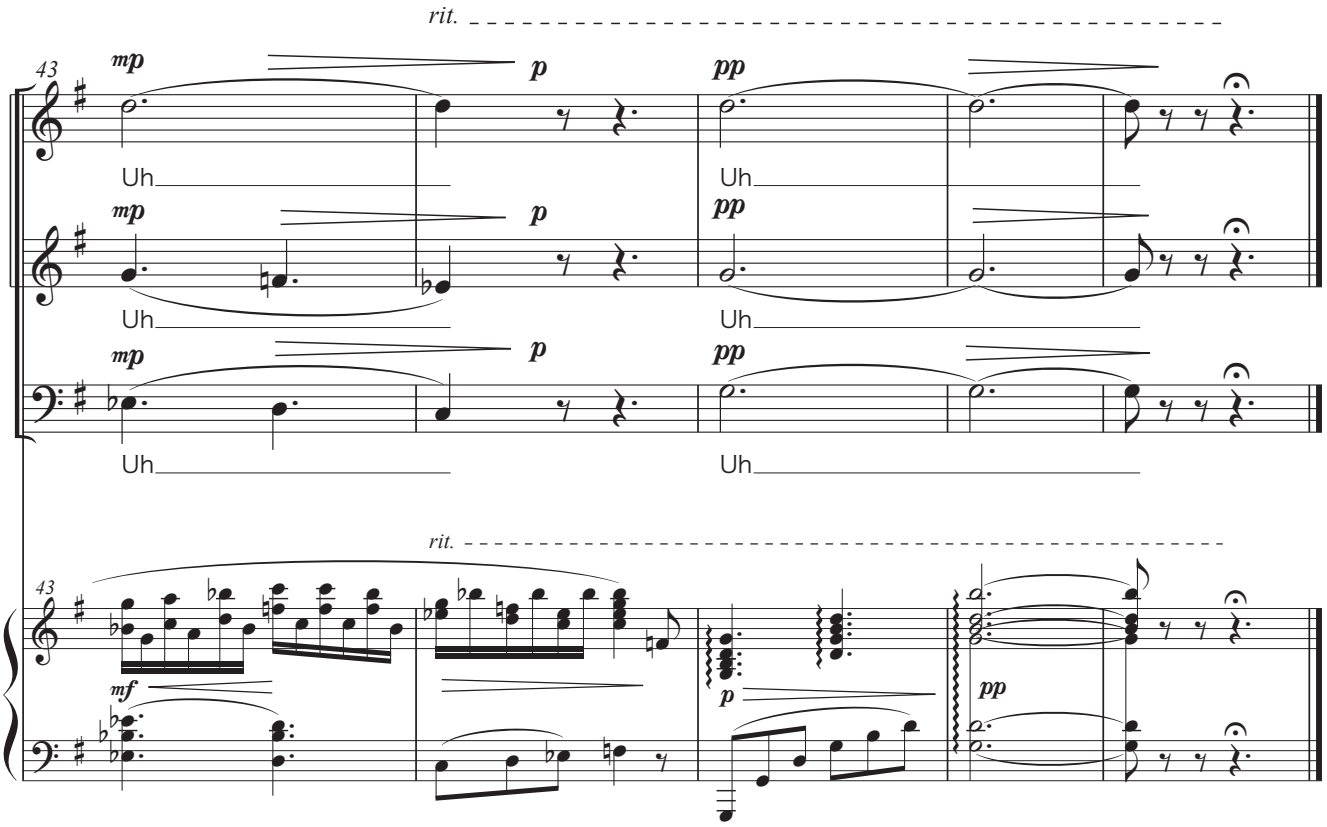

30
mf
mp
ま も な お わ れ ま つ ら ん か は
ま も な お わ れ ま つ ら ん か は
ま も な お わ れ ま つ ら ん か は


34
rit.
は は とおし も Uh Ah は
は は とおし も Uh Ah
は は はは はとおし も Uh Ah


C Meno mosso
38
rit.
Tempo I
は は とおし も Uh
Uh とおし も Uh
Uh とおし も Uh

母

混声三部合唱版（移調）



母

混声四部合唱版（原調）

作曲：小松耕輔
作詞：竹久夢二
編曲：阿部俊祐

♪ = 116　やわらかに、かなしく

♪ = 116　やわらかに、かなしく

Piano

A

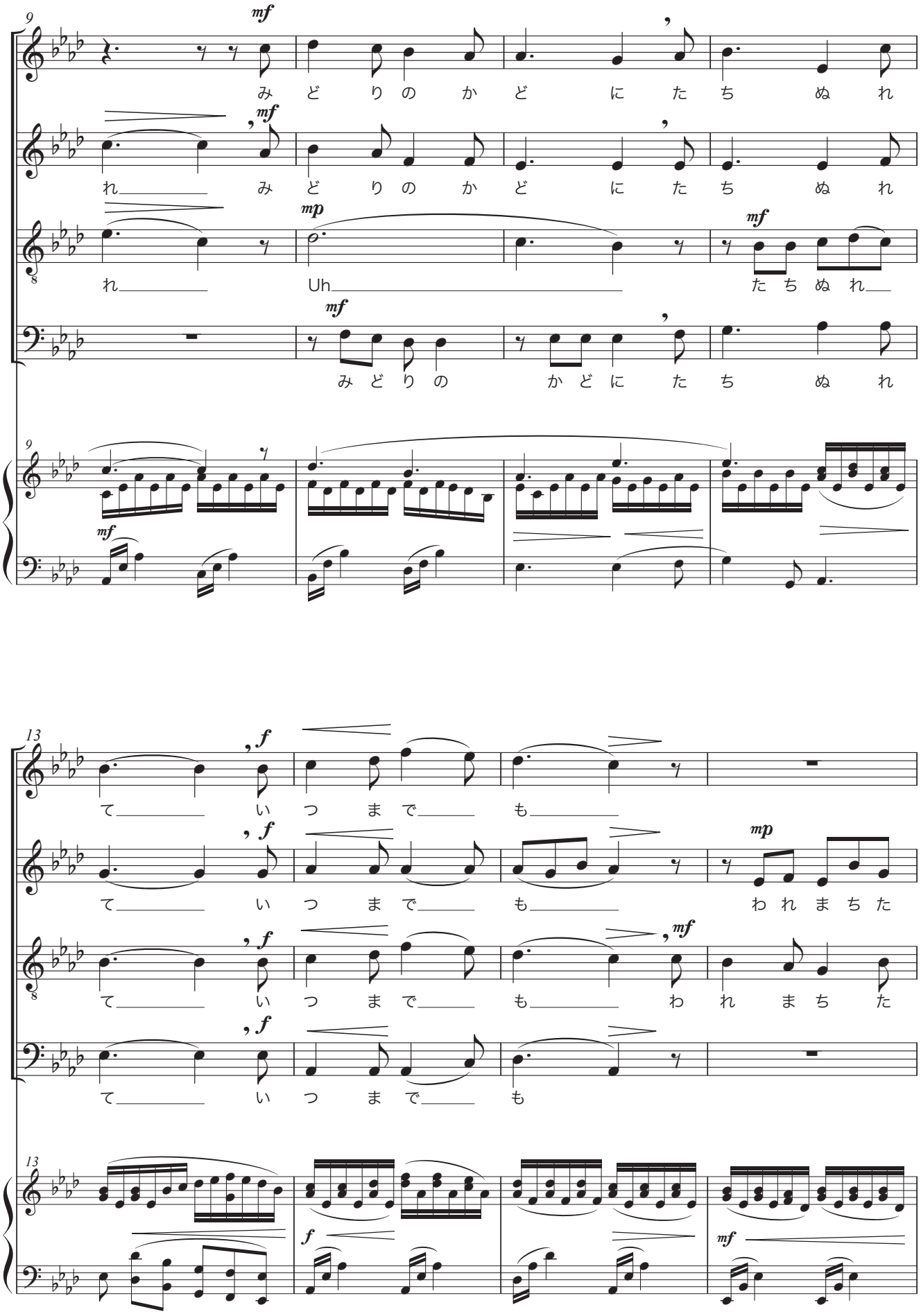
ふ る さ と の や ま の あ け く

ふ る さ と の や ま の あ け く

©小松耕輔音楽兄弟顕彰会

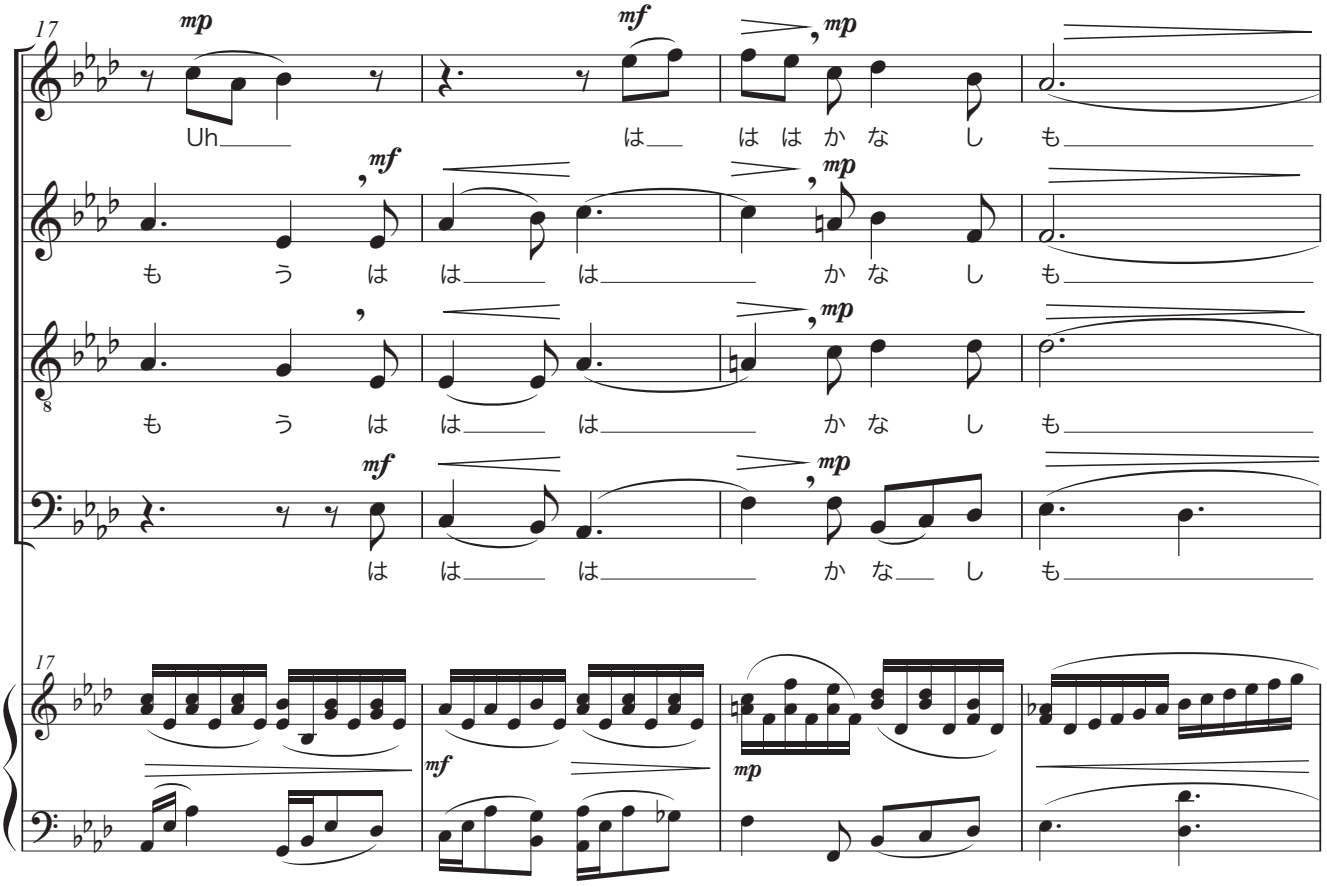
母

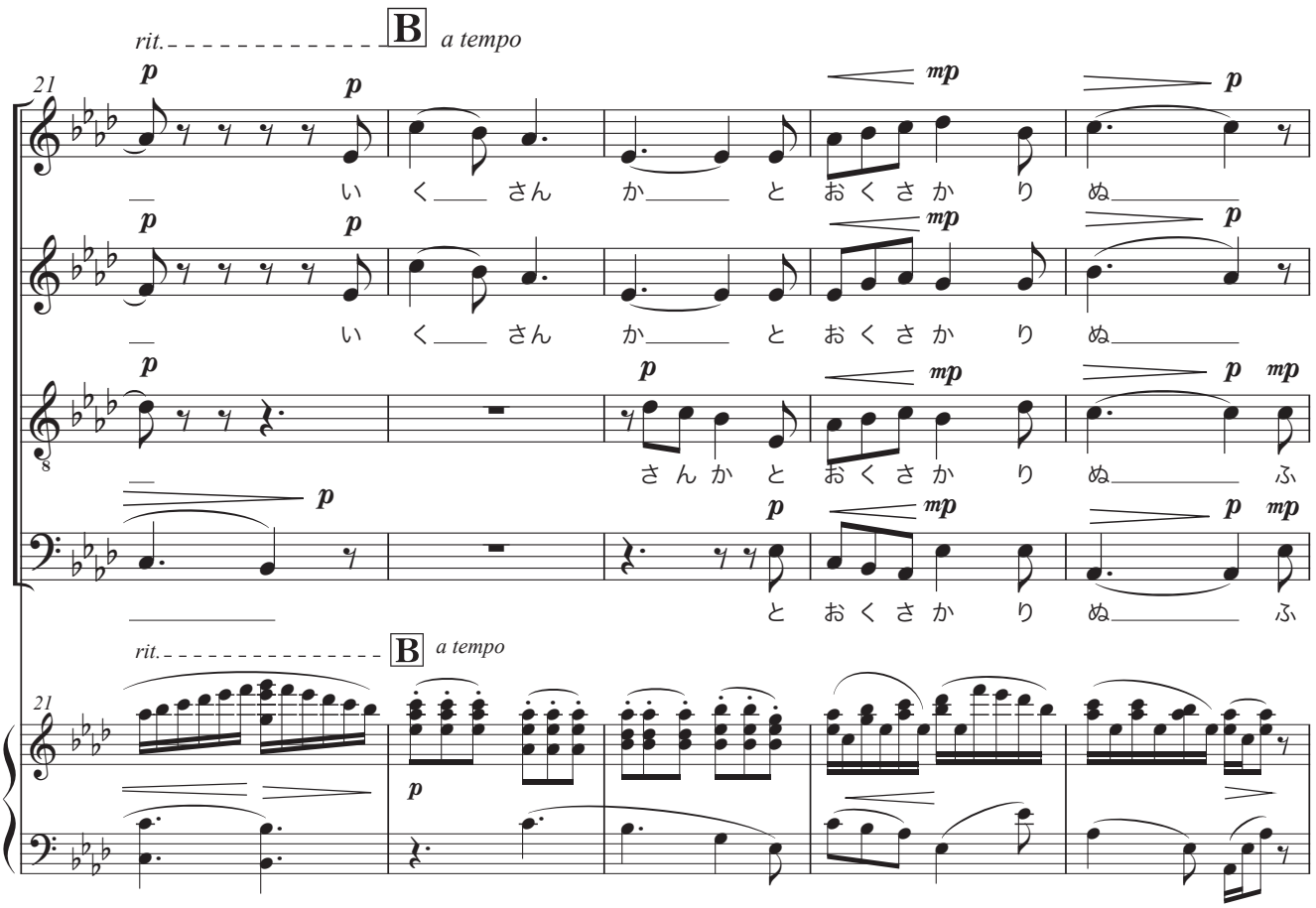
混声四部合唱版（原調）


9
mf
み どり の か ど に た ち ぬ れ
れ み どり の か ど に た ち ぬ れ
mp
mf
れ Uh た ち ぬ れ
mf
み どり の か ど に た ち ぬ れ
mf
13
f
て い つ ま で も
f
mp
て い つ ま で も わ れ ま ち た
f
mf
て い つ ま で も わ れ ま ち た
f
て い つ ま で も
f
mf

母

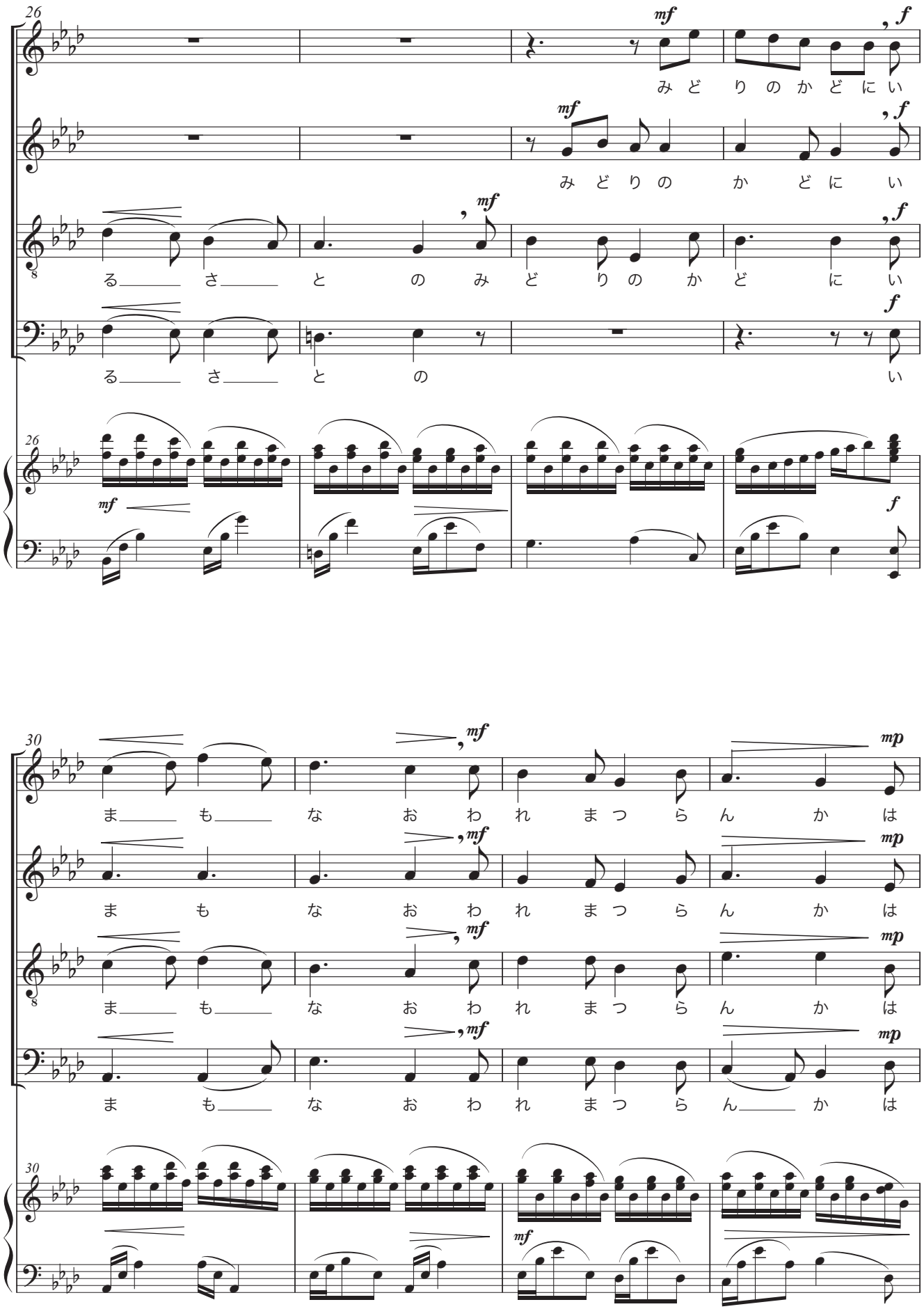
混声四部合唱版（原調）


17
mp
mf
mp
Uh は はかなしも
mf
mp
もうはは はかなしも
mp
もうはは はかなしも
mf
mp
はは はかなしも
17
mf
mp


rit.
B
a tempo
21
p
p
mp
p
いく さんか とおくさかりぬ
p
p
mp
p
いく さんか とおくさかりぬ
p
p
mp
p
mp
さんかとおくさかりぬ ふ
p
p
mp
p
mp
とおくさかりぬ ふ
rit.
B
a tempo
21
p

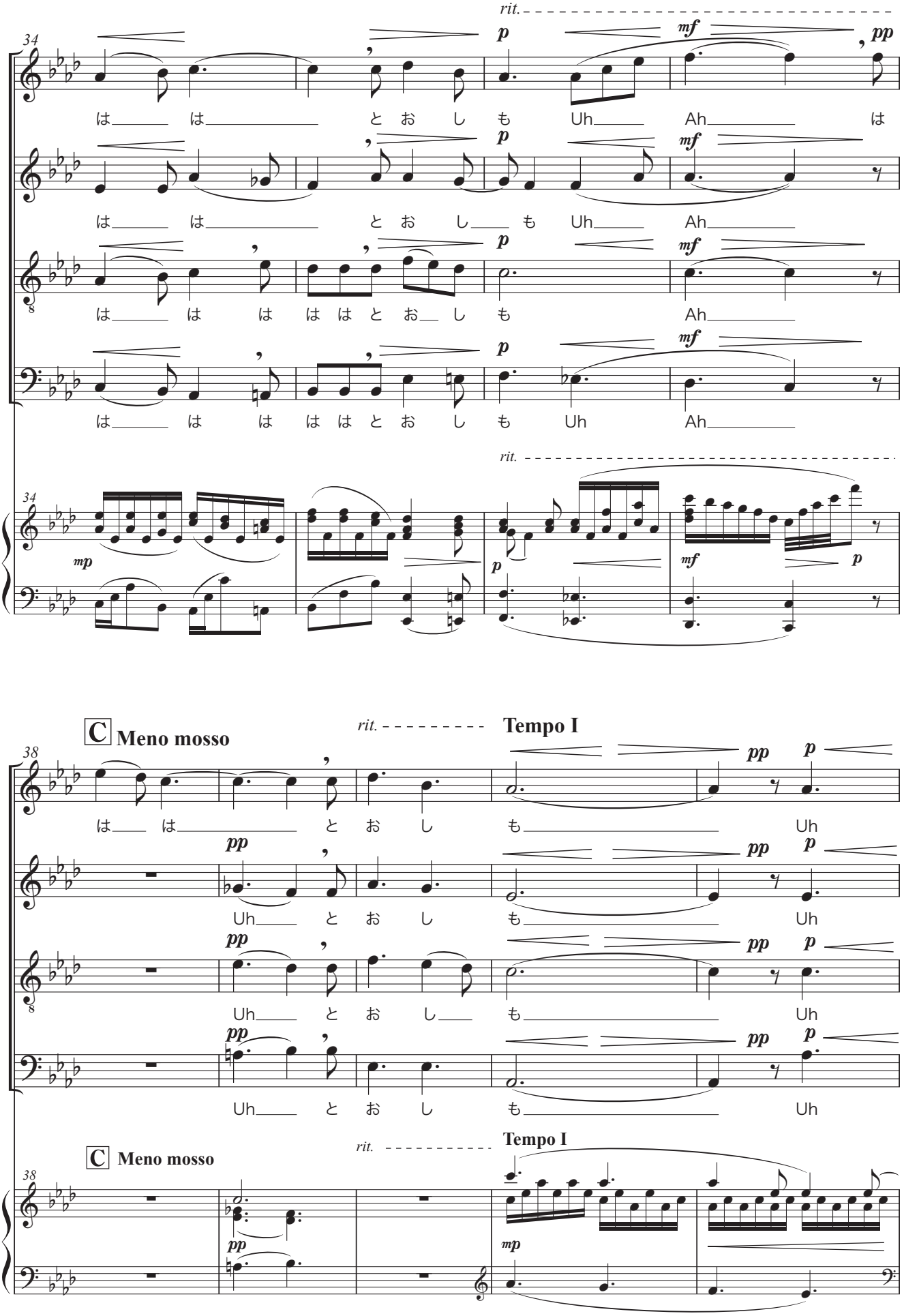
母

混声四部合唱版（原調）


26
mf
f
みどりのかどにい
みどりの かどにい
る さ と の みどりのかどにい
る さ と の い
30
mf
mp
ま も な お わ れ ま つ ら ん か は
ま も な お わ れ ま つ ら ん か は
ま も な お わ れ ま つ ら ん か は
ま も な お わ れ ま つ ら ん か は

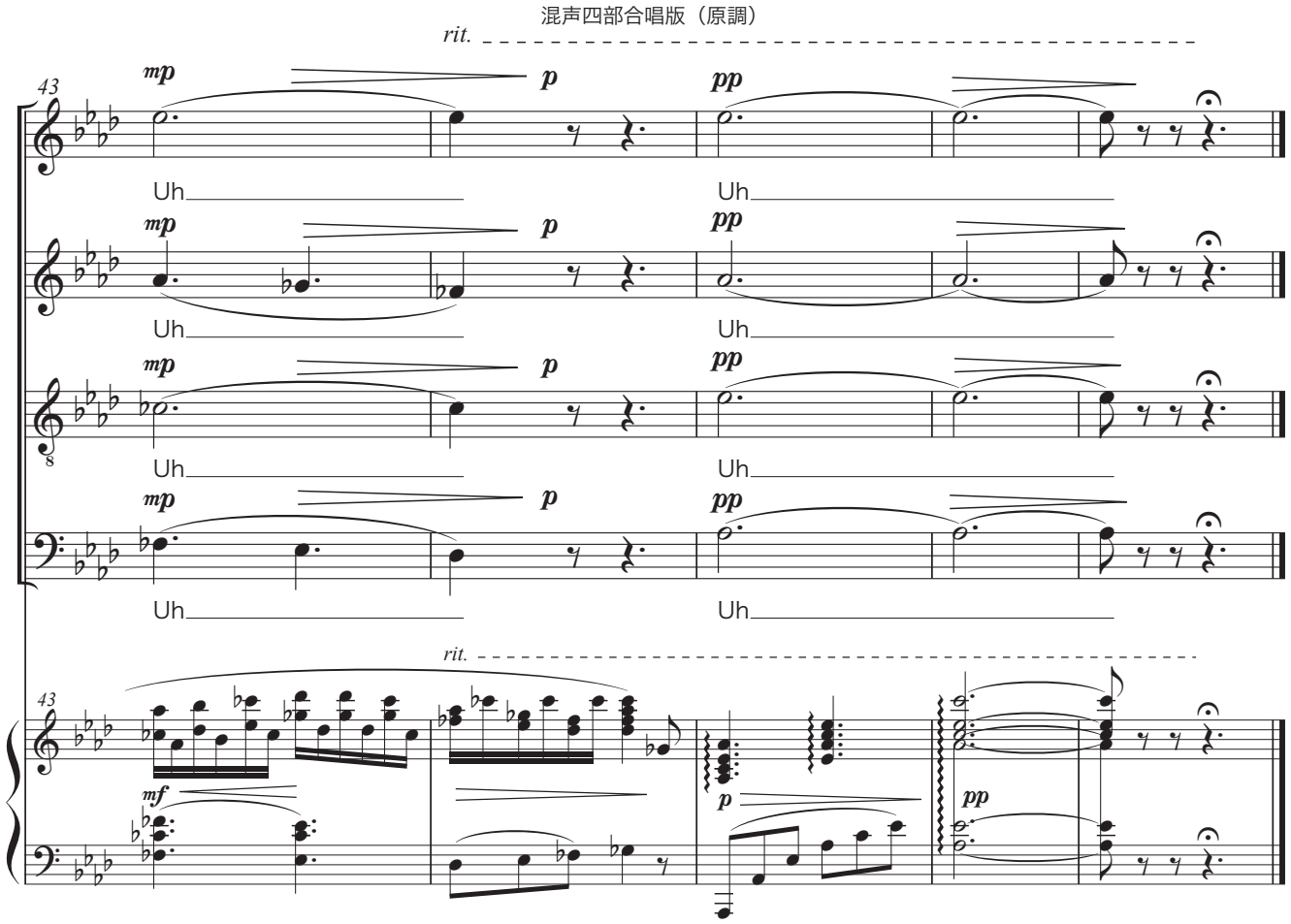
母

混声四部合唱版（原調）


rit.
は は とおしも Uh Ah は
は は とおしも Uh Ah
は は はは はとおしも Ah
は は はは はとおしも Uh Ah
C Meno mosso
Tempo I
は は とおしも Uh
Uh とおしも Uh
Uh とおしも Uh
Uh とおしも Uh

母

混声四部合唱版（原調）


rit.
43
mp
p
pp
Uh
Uh
mp
p
pp
Uh
Uh
mp
p
pp
Uh
Uh
mp
p
pp
Uh
Uh
rit.
43
mf
p
pp

母

混声四部合唱版（移調）

作曲：小松耕輔
作詞：竹久夢二
編曲：阿部俊祐

♪ = 116　やわらかに、かなしく

♪ = 116　やわらかに、かなしく

Piano

A

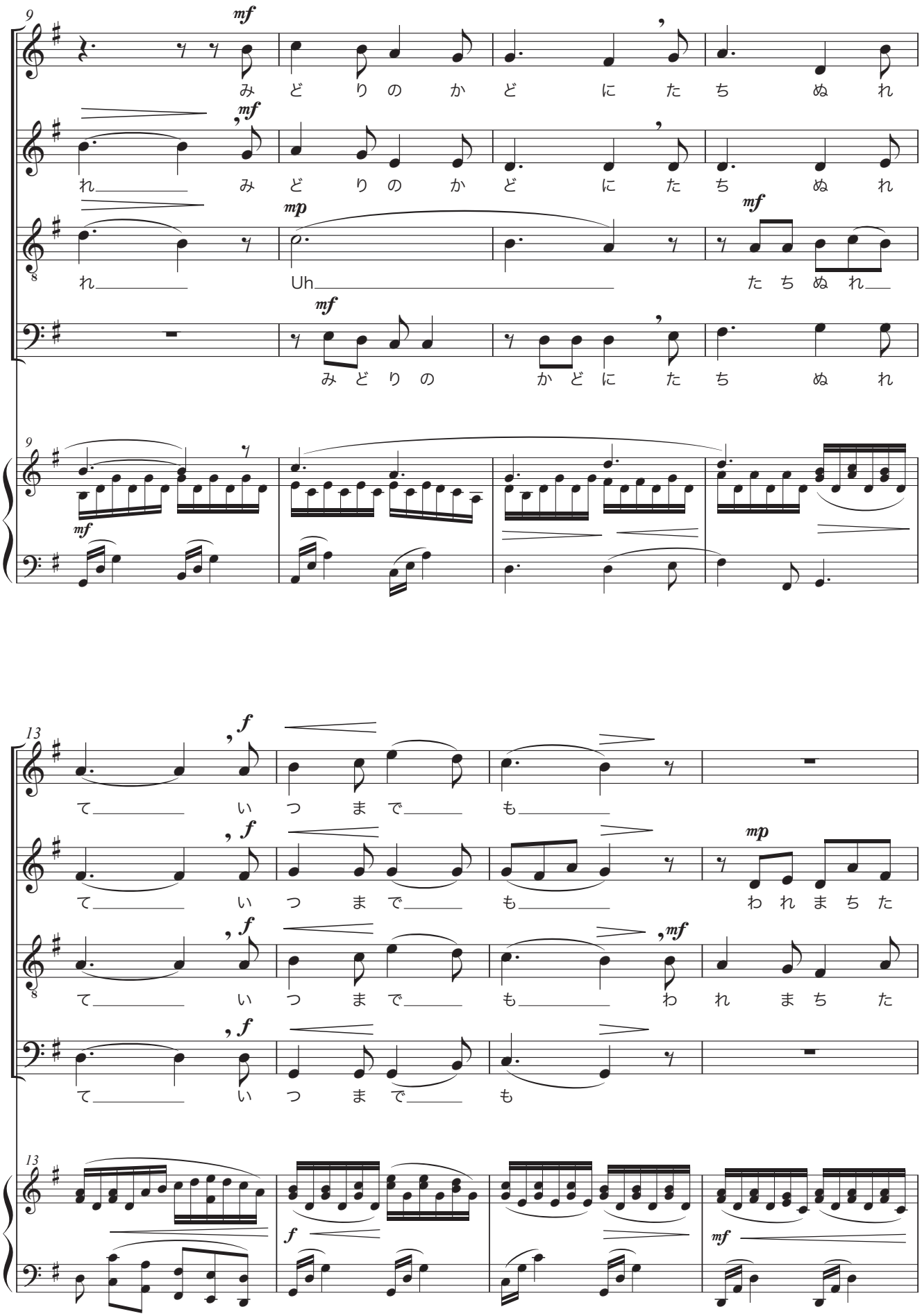
ふ る さ と の や ま の あ け く

ふ る さ と の や ま の あ け く

©小松耕輔音楽兄弟顕彰会

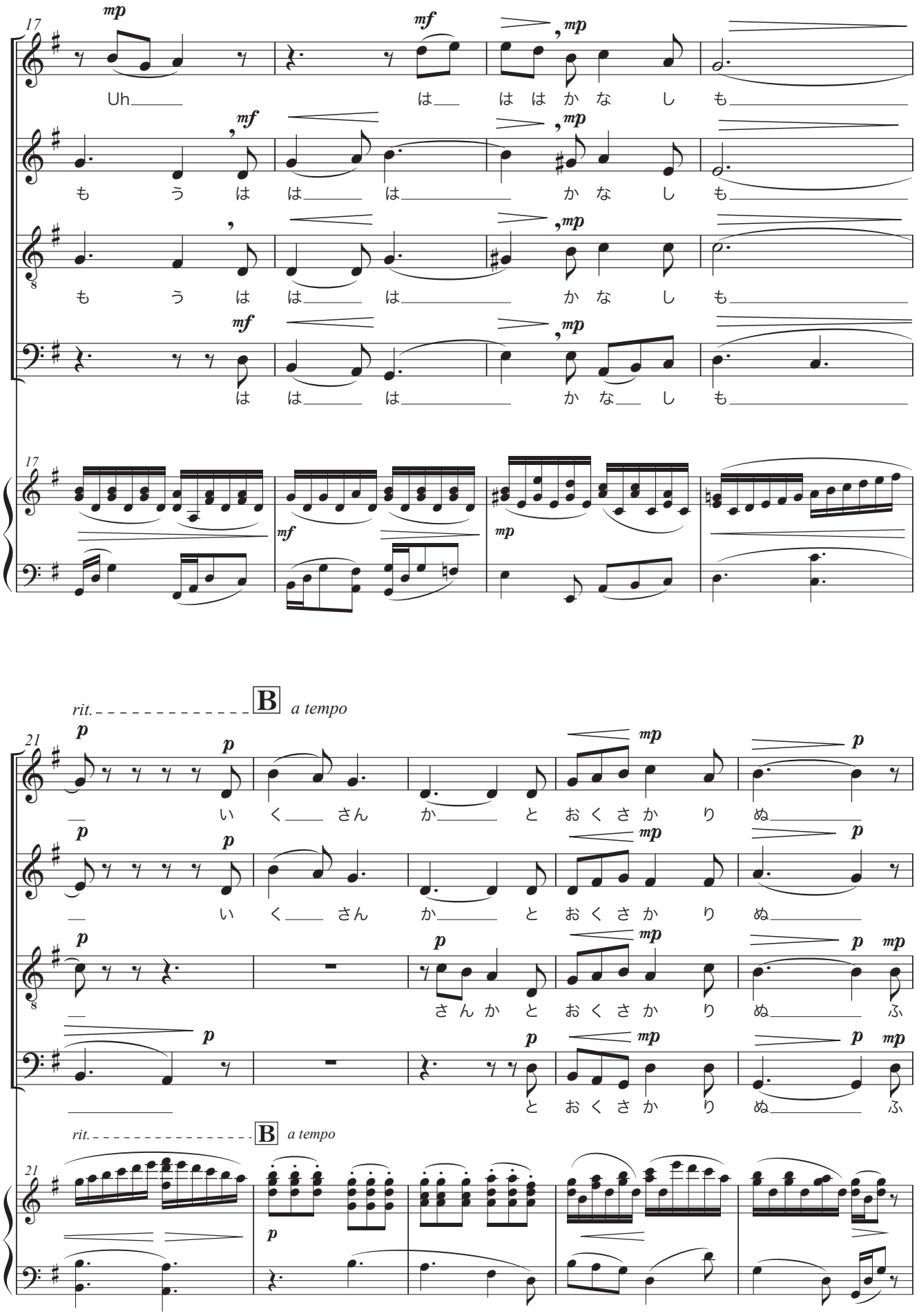
母

混声四部合唱版（移調）


9
mf
み どり の か ど に た ち ぬ れ
れ みどりの かど に たち ぬれ
mp
mf
れ Uh たち ぬれ
mf
みどりの かどに たち ぬれ
13
f
て いつまで も
mp
て いつまで も われまちた
mf
て いつまで も われまちた
て いつまで も

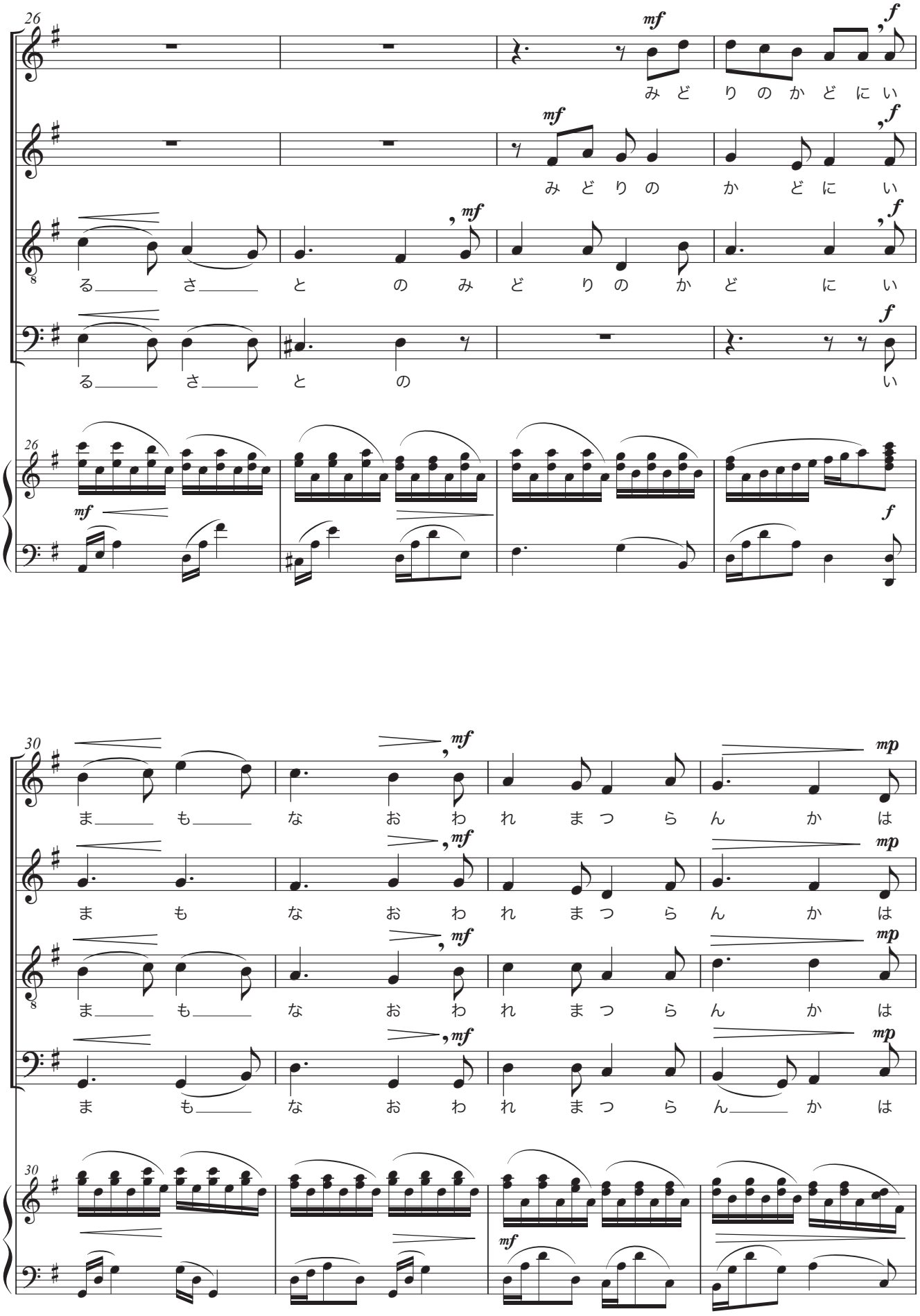
母

混声四部合唱版（移調）


17
mp
mf
Uh は はは かな しも
mf
mp
も う は は は かな しも
mp
も う は は は かな しも
mf
mp
は は は かな し も
rit.
B
a tempo
21
p
mp
い く さん か と おく さか り ぬ
さ ん か と おく さか り ぬ ふ
と おく さか り ぬ ふ

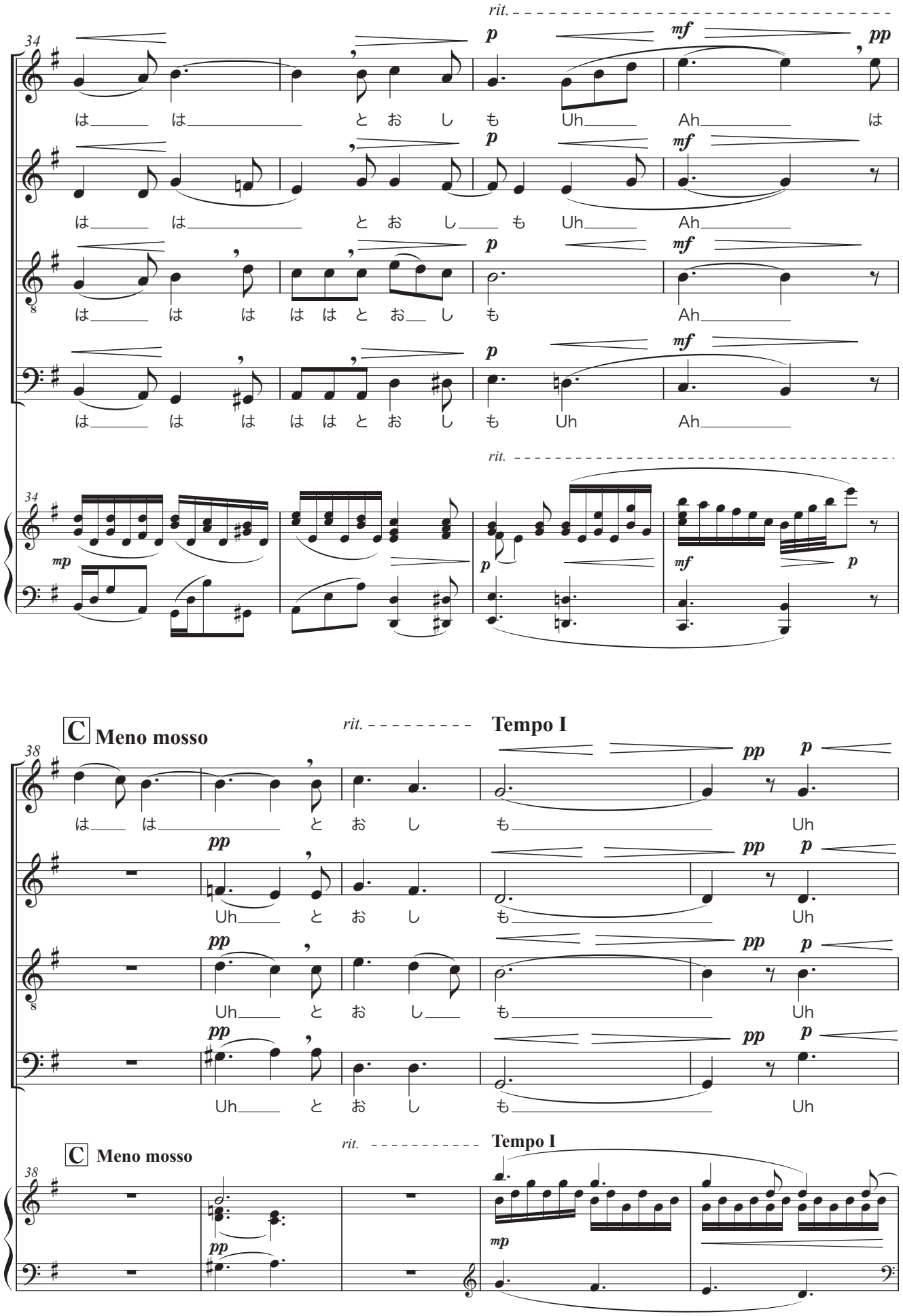
母

混声四部合唱版（移調）


26
mf
f
みどりのかどにい
みどりの かどにい
る さ と の みどりの かどにい
る さ と の い
30
mf
mp
ま も な お わ れ ま つ ら ん か は
ま も な お わ れ ま つ ら ん か は
ま も な お わ れ ま つ ら ん か は
ま も な お わ れ ま つ ら ん か は

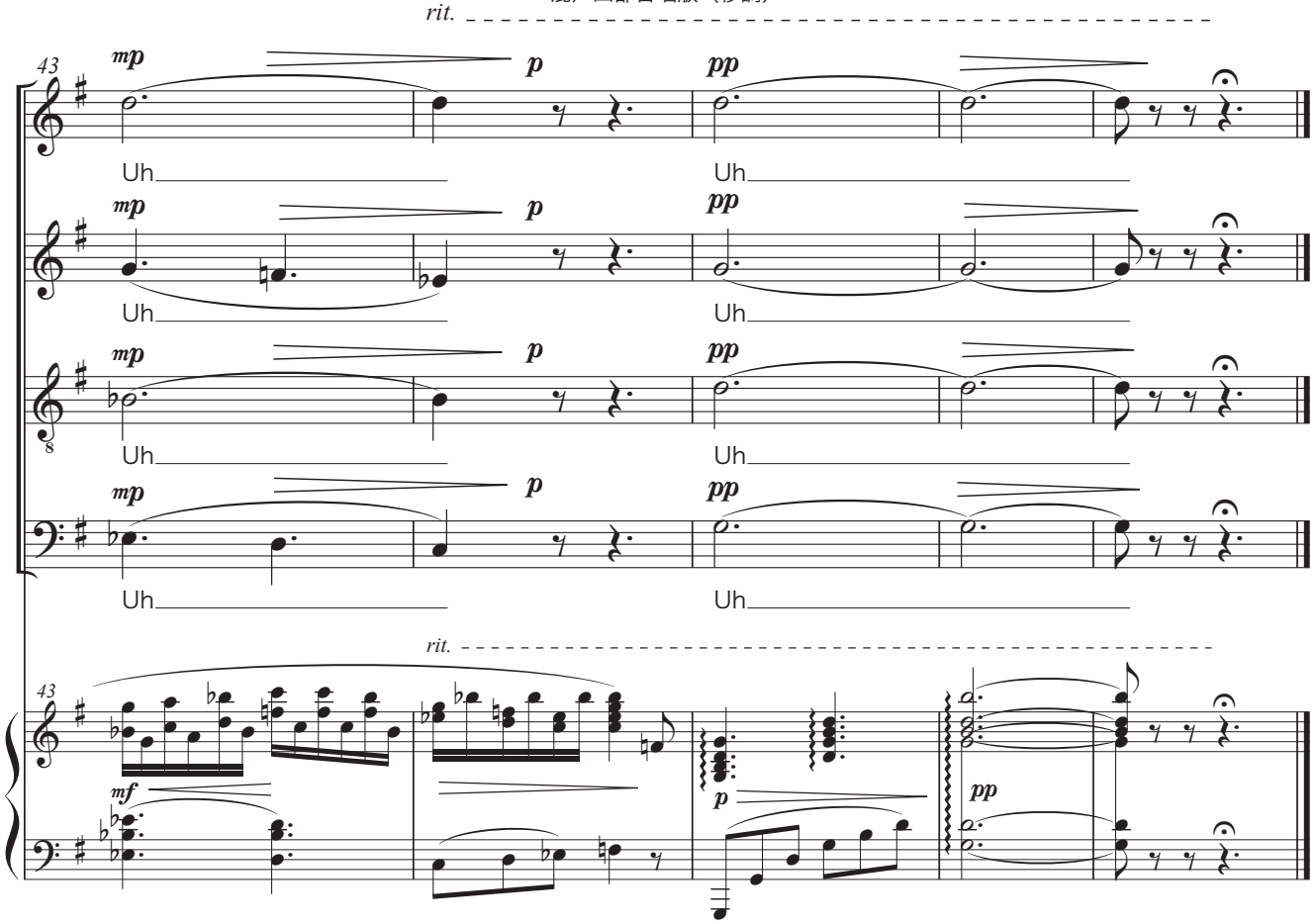
母

混声四部合唱版（移調）


rit.
34
は は とおしも Uh Ah は
は は とおしも Uh Ah
は は はは はとおしも Ah
は は はは はとおしも Uh Ah
C Meno mosso
Tempo I
38
は は とおしも Uh
Uh とおしも Uh
Uh とおしも Uh
Uh とおしも Uh

母

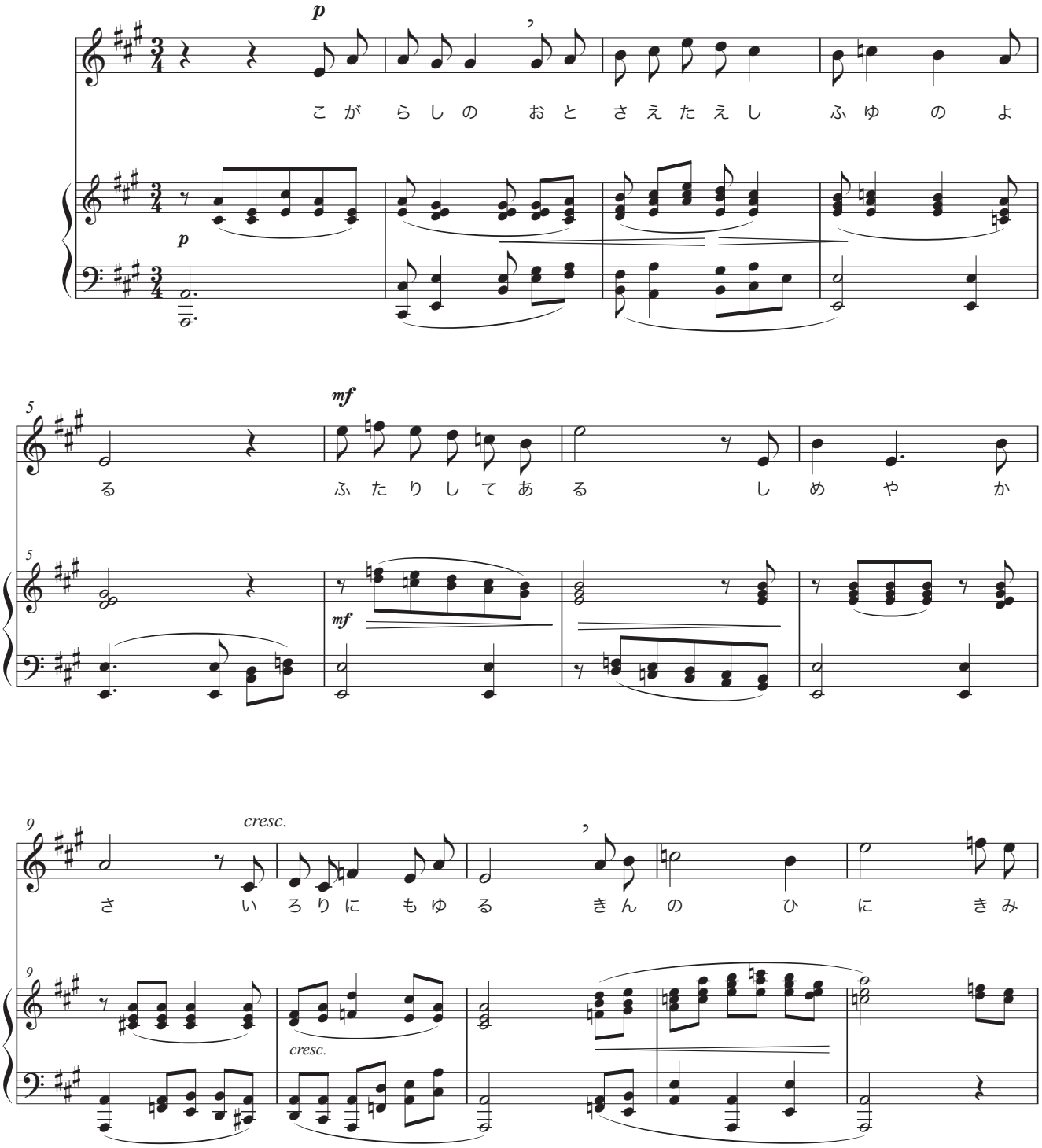
混声四部合唱版（移調）



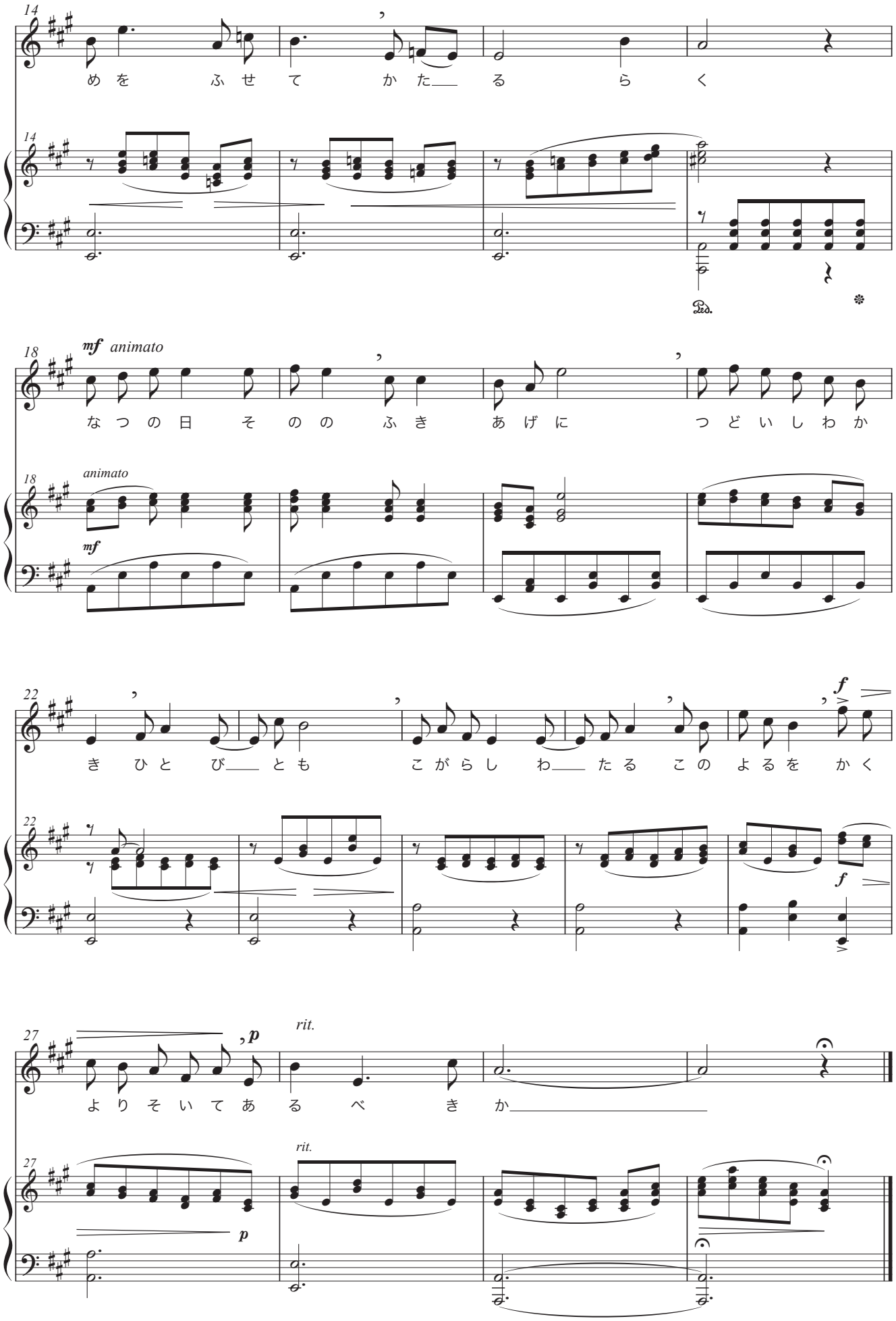
冬の夜

西條八十　作詞

小松耕輔　作曲



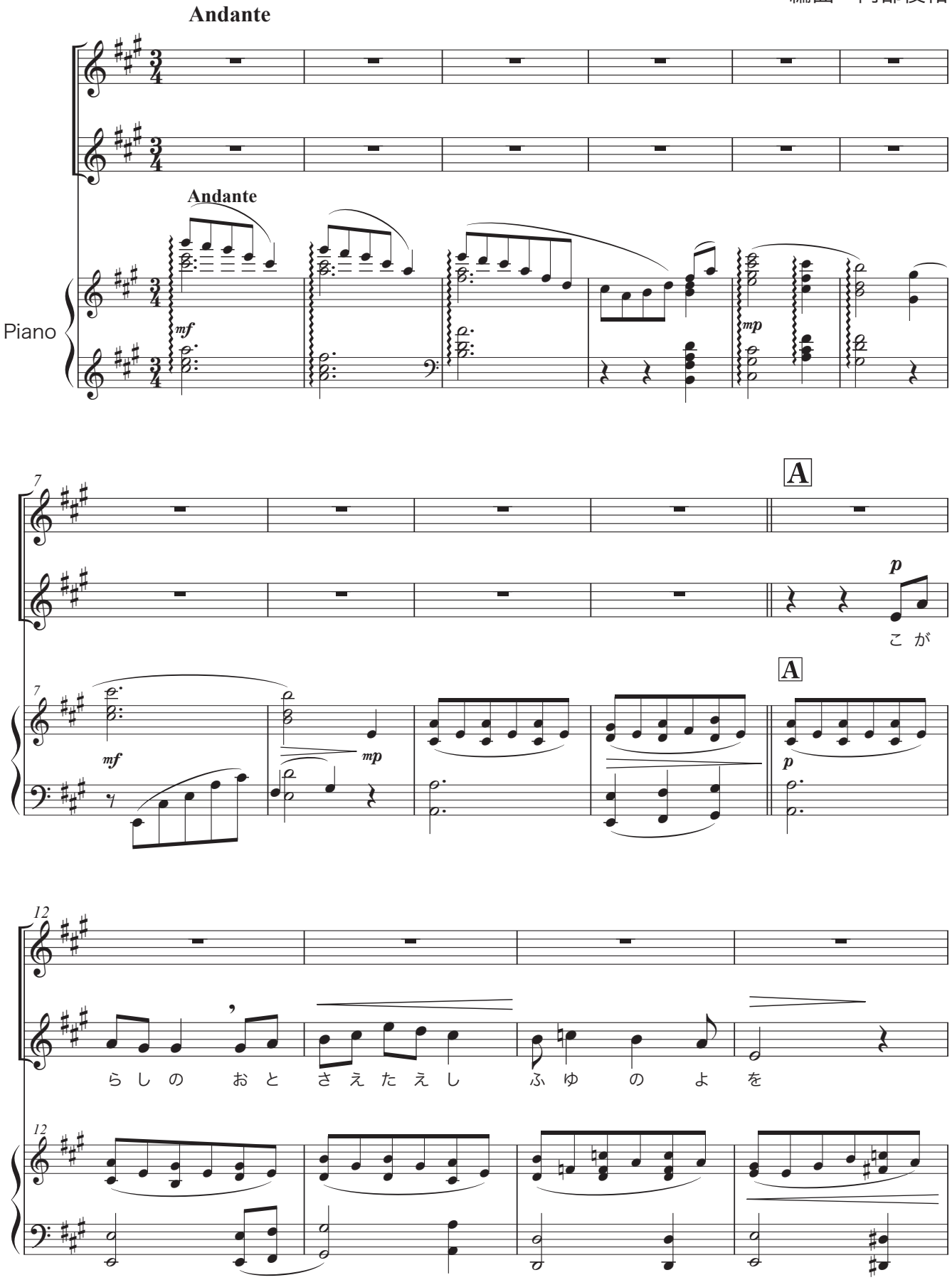
©小松耕輔音楽兄弟顕彰会


14
め を ふ せ て か た る ら く
Ped.
18
mf animato
な つ の 日 そ の の ふ き あ げ に つ ど い し わ か
animato
mf
22
き ひと び と も こ が ら し わ た る こ の よ る を か く
f
27
p
rit.
よ り そ い て あ る べ き か
rit.
p

冬の夜

同声二部合唱版（原調）

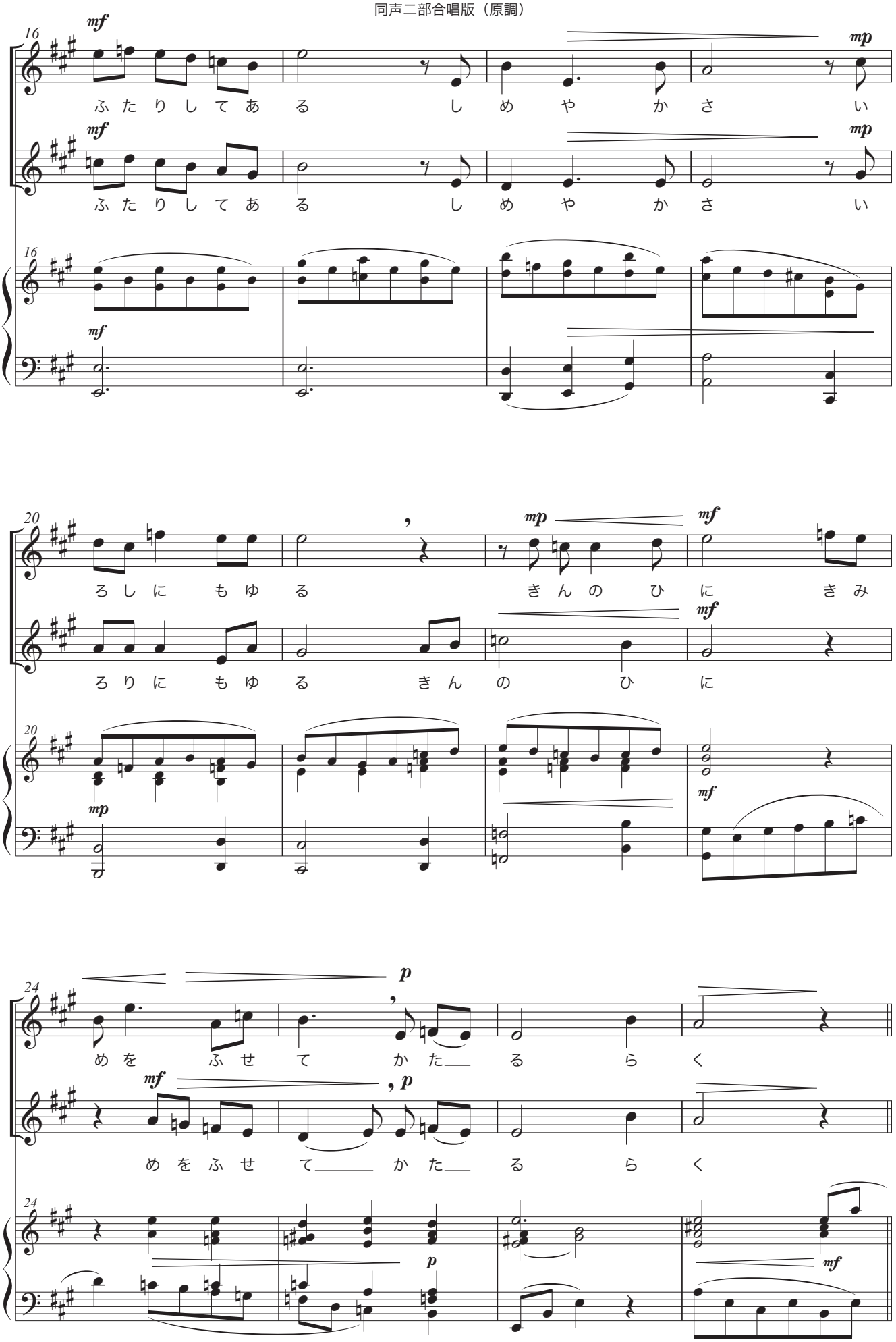
作曲：小松耕輔
作詞：西條八十
編曲：阿部俊祐



©小松耕輔音楽兄弟顕彰会

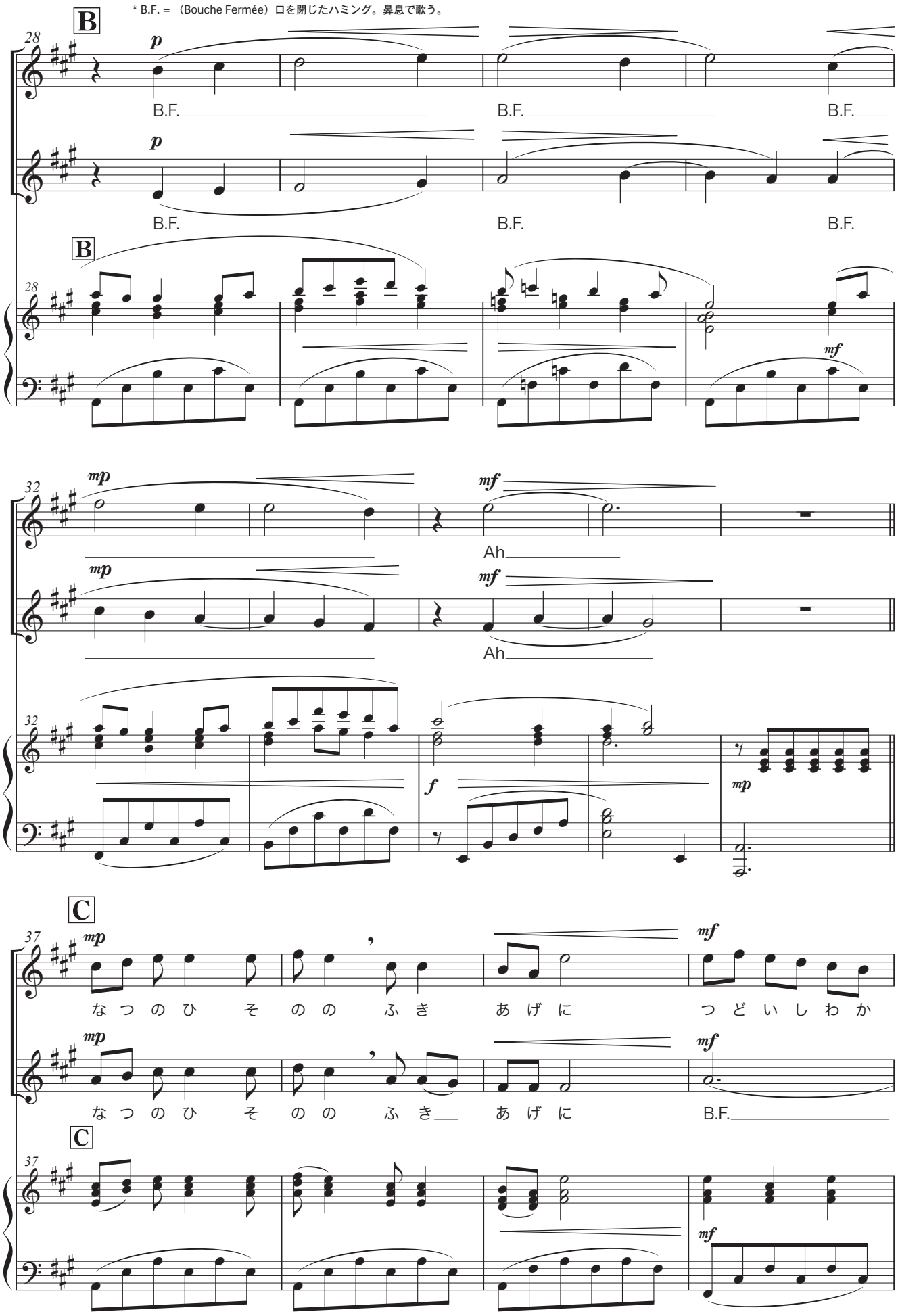
冬の夜

同声二部合唱版（原調）



冬の夜

同声二部合唱版（原調）



冬の夜

同声二部合唱版（原調）

41

D

mp

き ひと び とも こがらし

B.F. ひとび とも こがらし わ

mp

41

D

mp

45

mf f mf

わたる このよるを かくよりそいてあるべき

たる このよるを かくよりそいてあるべき

mf f mf

45

f mf

49

rit.

E Poco meno mosso

pp

か かくよりそいて

か よりそいて

pp

49

rit.

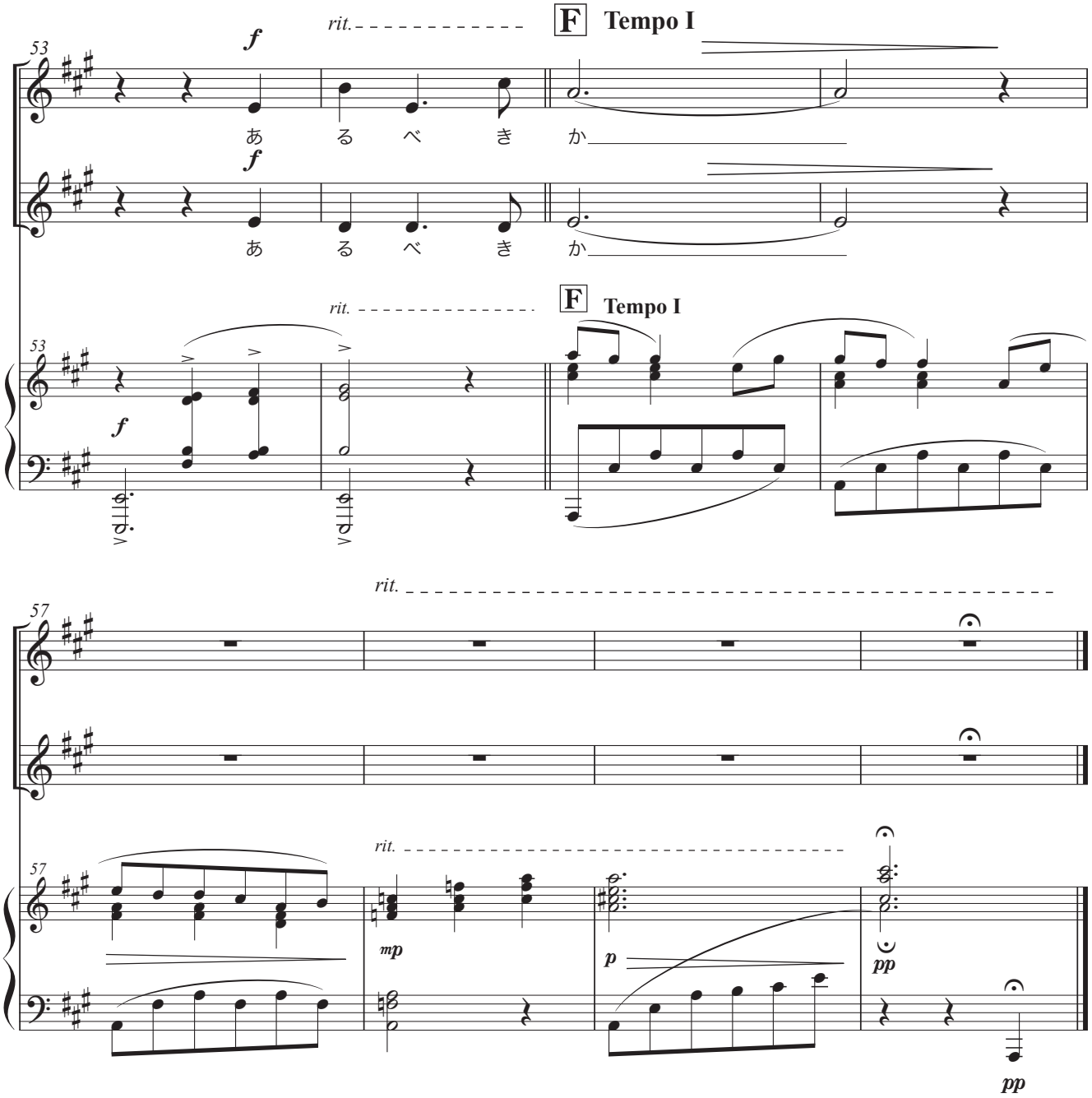
E Poco meno mosso

pp

pp

冬の夜

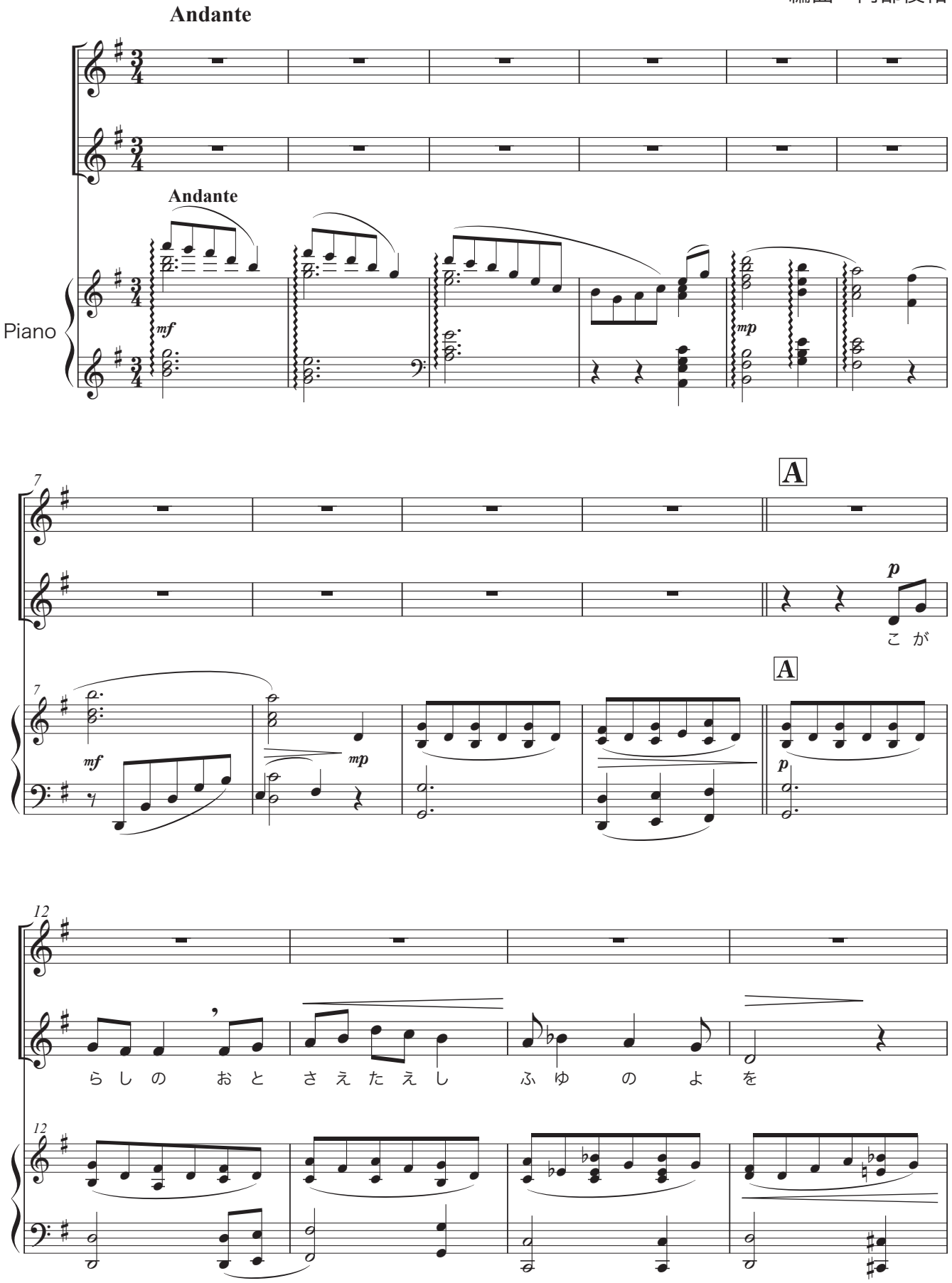
同声二部合唱版（原調）



冬の夜

同声二部合唱版（移調）

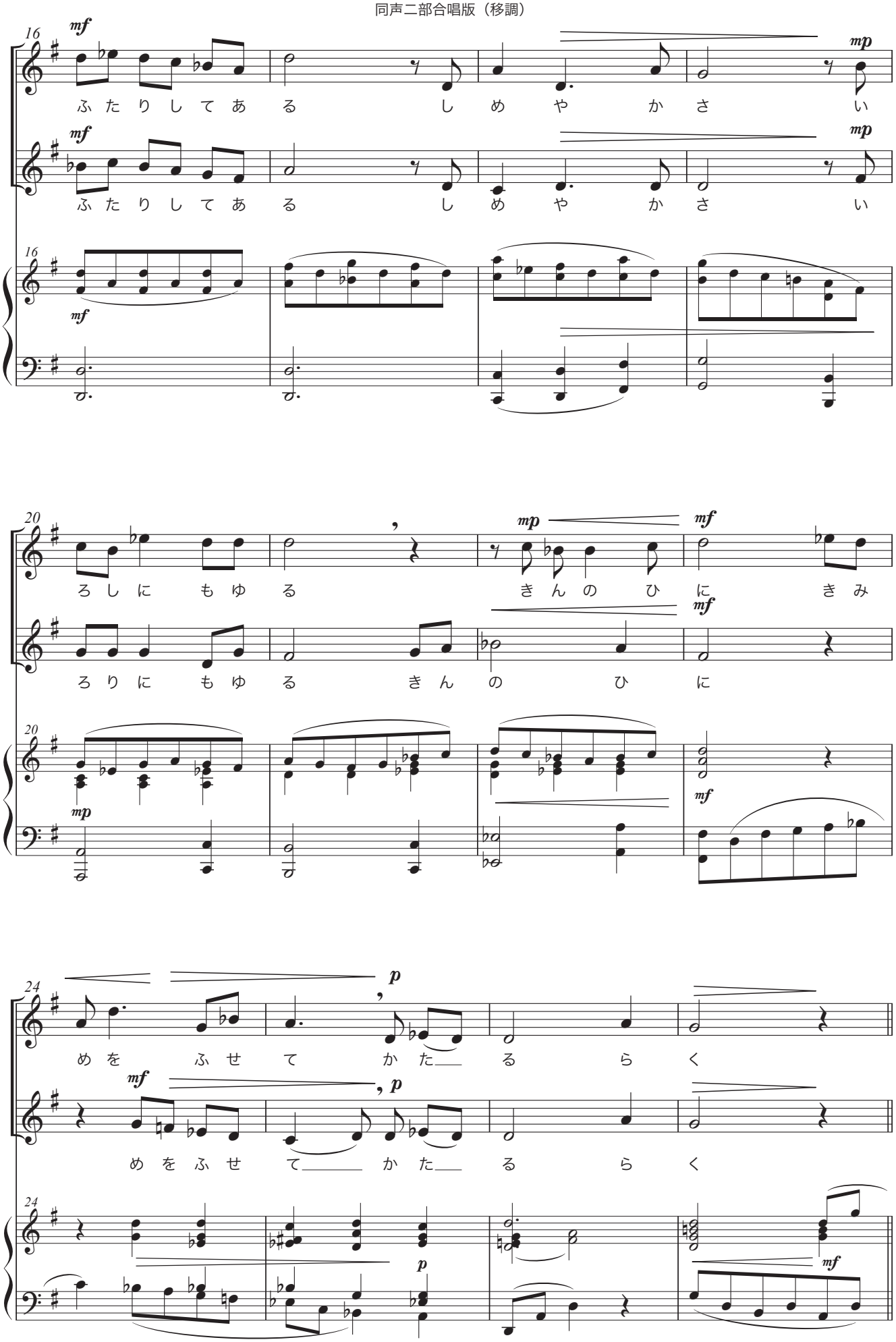
作曲：小松耕輔
作詞：西條八十
編曲：阿部俊祐



©小松耕輔音楽兄弟顕彰会

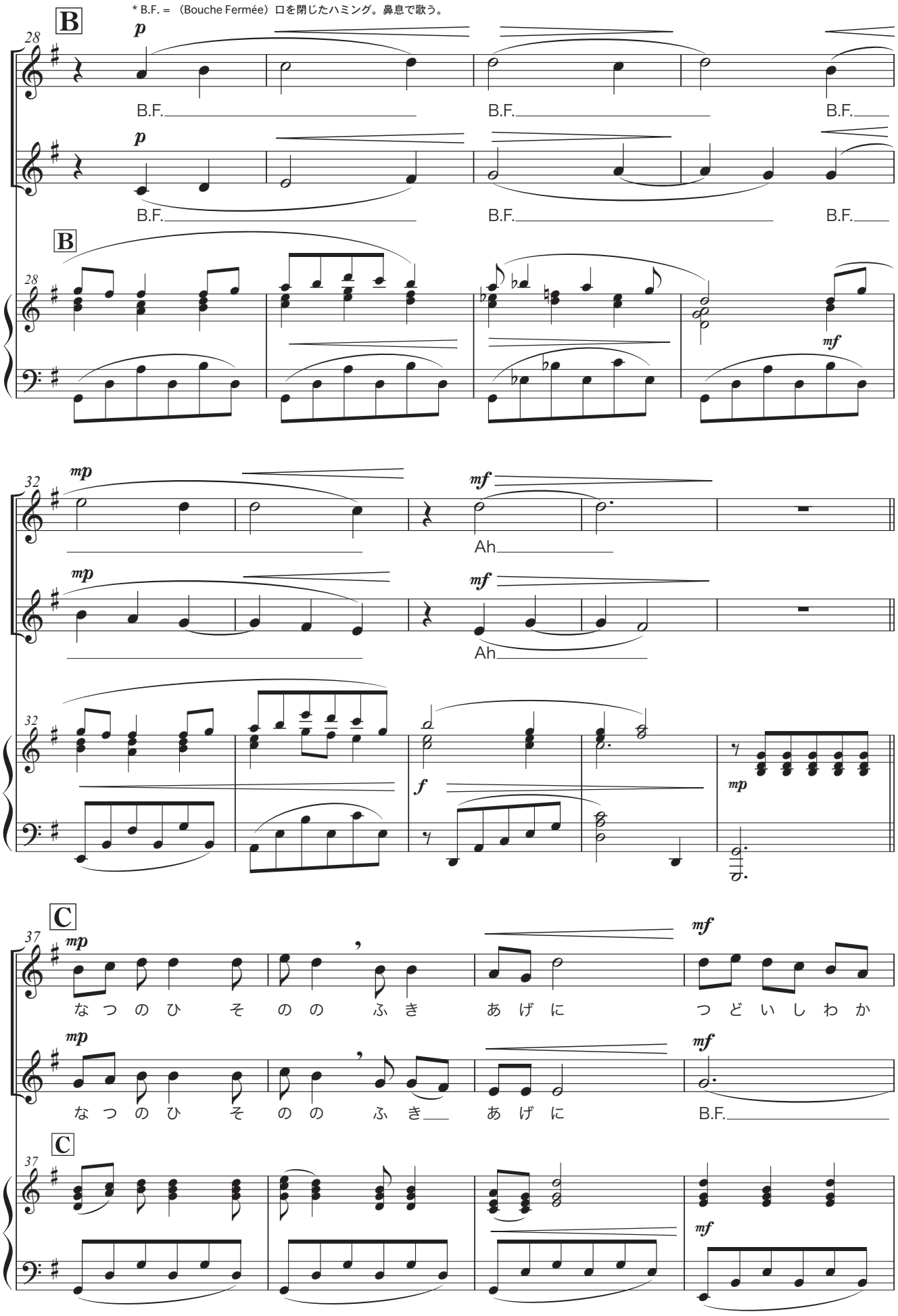
冬の夜

同声二部合唱版（移調）



冬の夜

同声二部合唱版（移調）



冬の夜

同声二部合唱版（移調）

41

D

mp

き ひと び ___ と も ___ こ が ら し

___ B.F. ___ ひ と び と も こ が ら し わ ___

45

mf f mf

わ た る こ の よ る を か く よ り そ い て あ る べ き

___ た る こ の よ る を か く よ り そ い て あ る べ き

rit. E Poco meno mosso

49

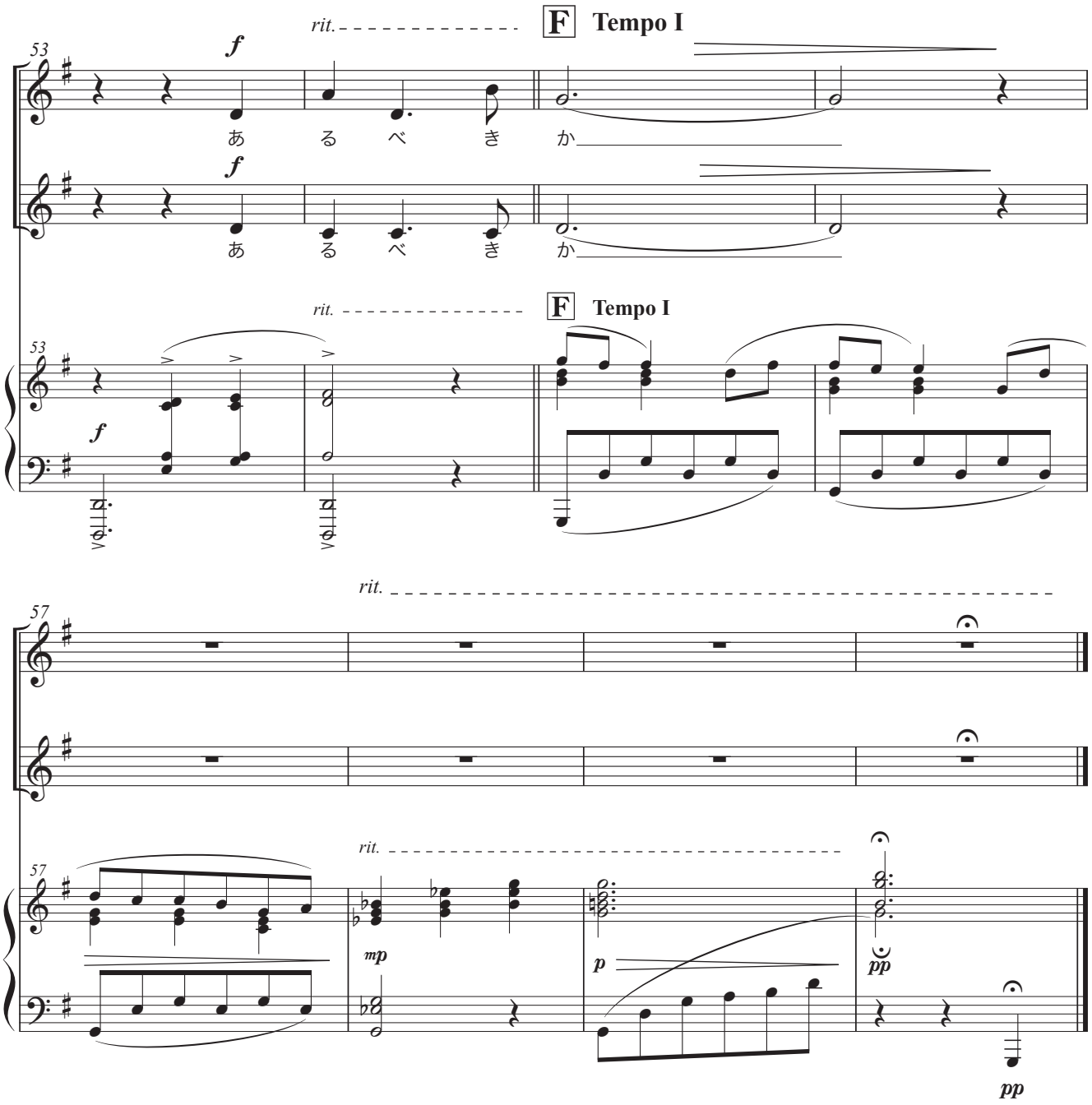
pp

か ___ か く よ り そ い て

か ___ よ り そ い て

冬の夜

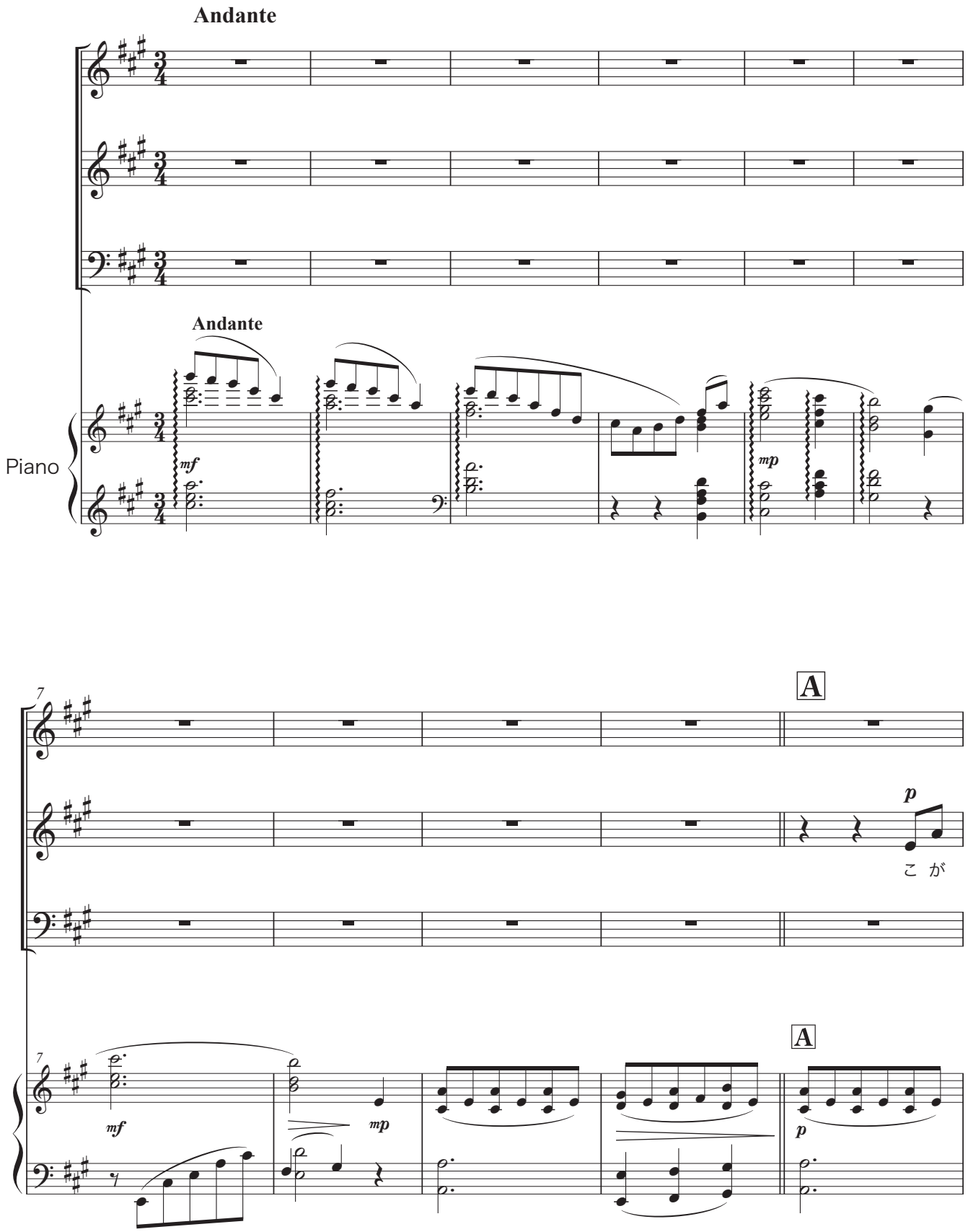
同声二部合唱版（移調）



冬の夜

混声三部合唱版（原調）

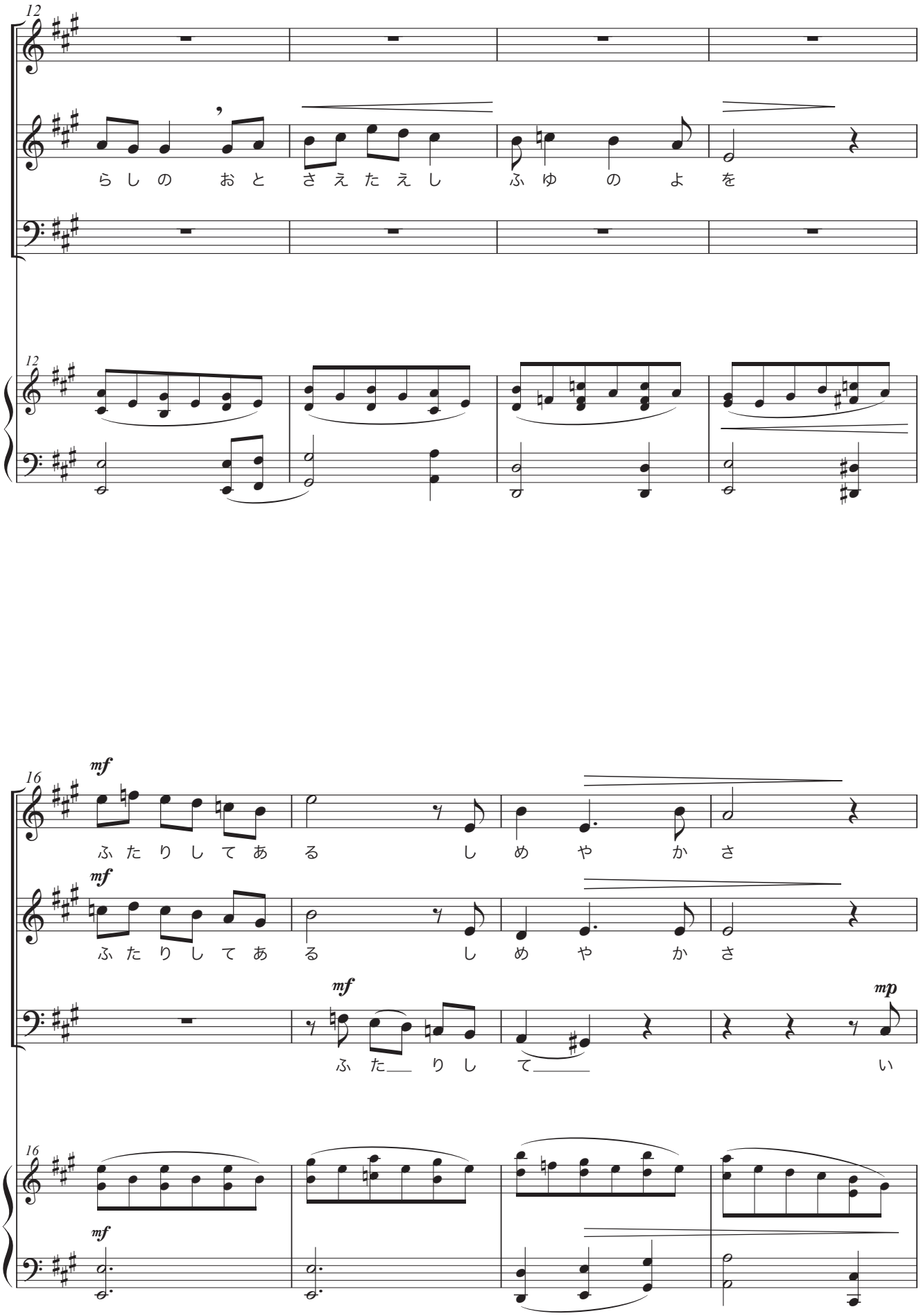
作曲：小松耕輔
作詞：西條八十
編曲：阿部俊祐



©小松耕輔音楽兄弟顕彰会

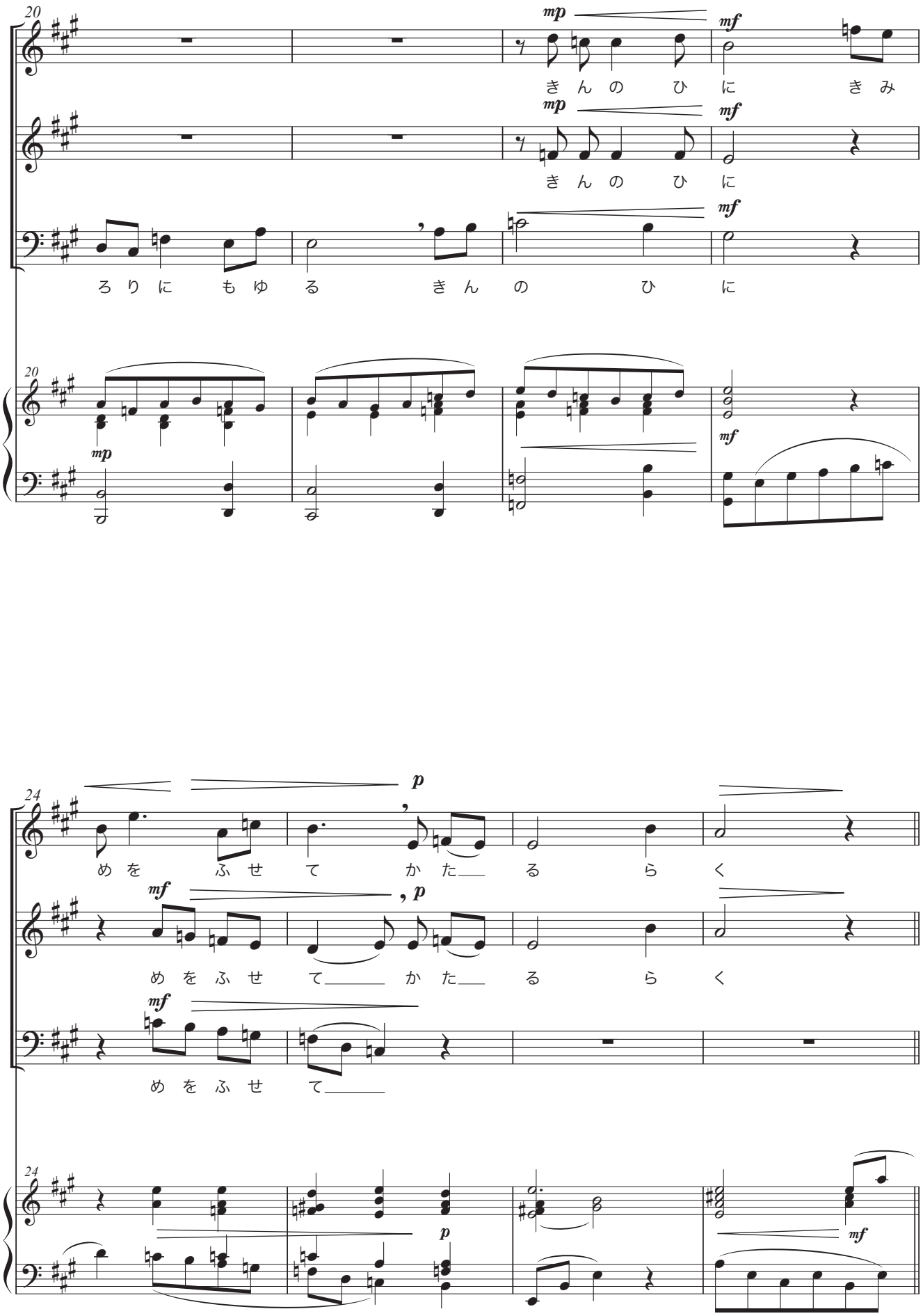
冬の夜

混声三部合唱版（原調）



冬の夜

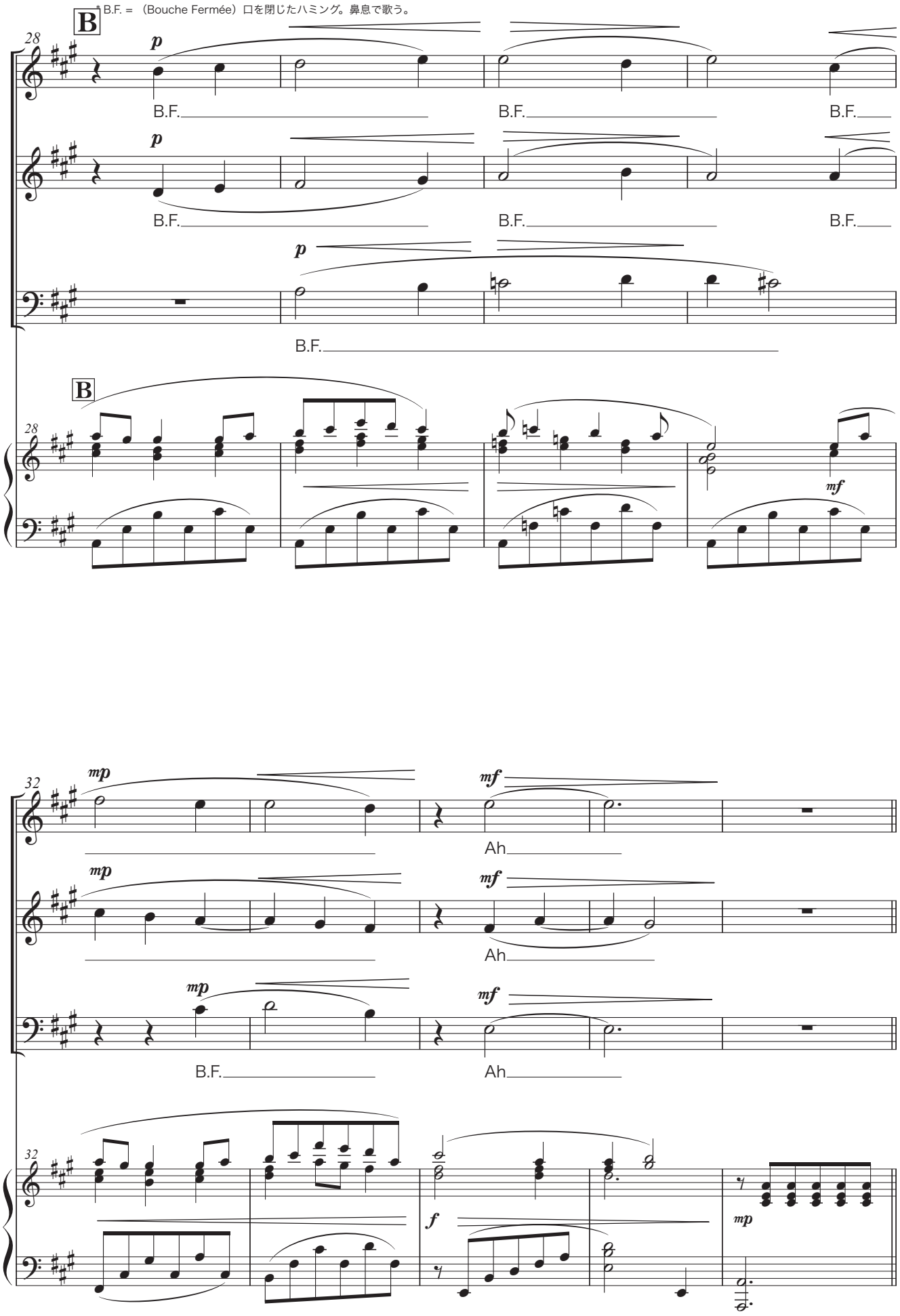
混声三部合唱版（原調）



冬の夜

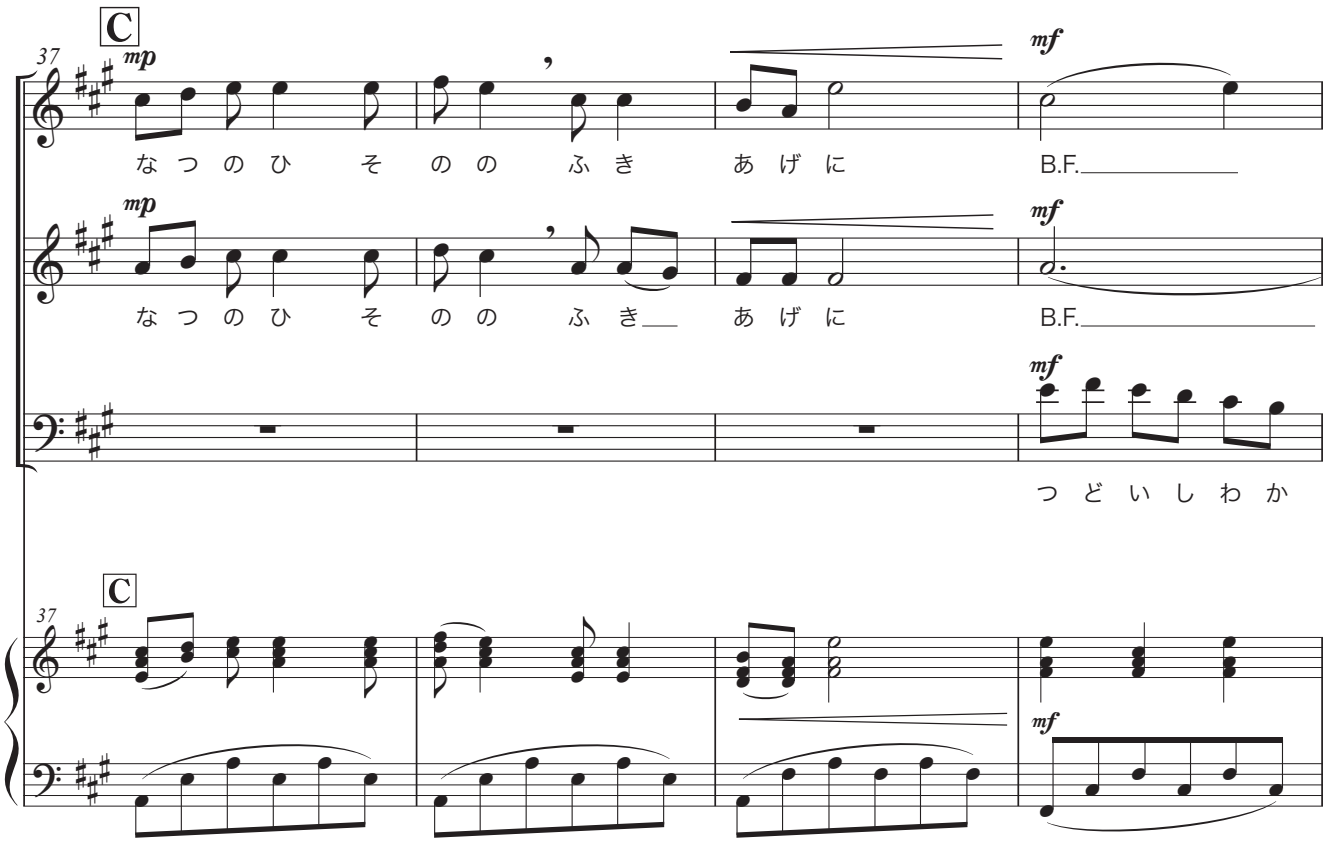
混声三部合唱版（原調）

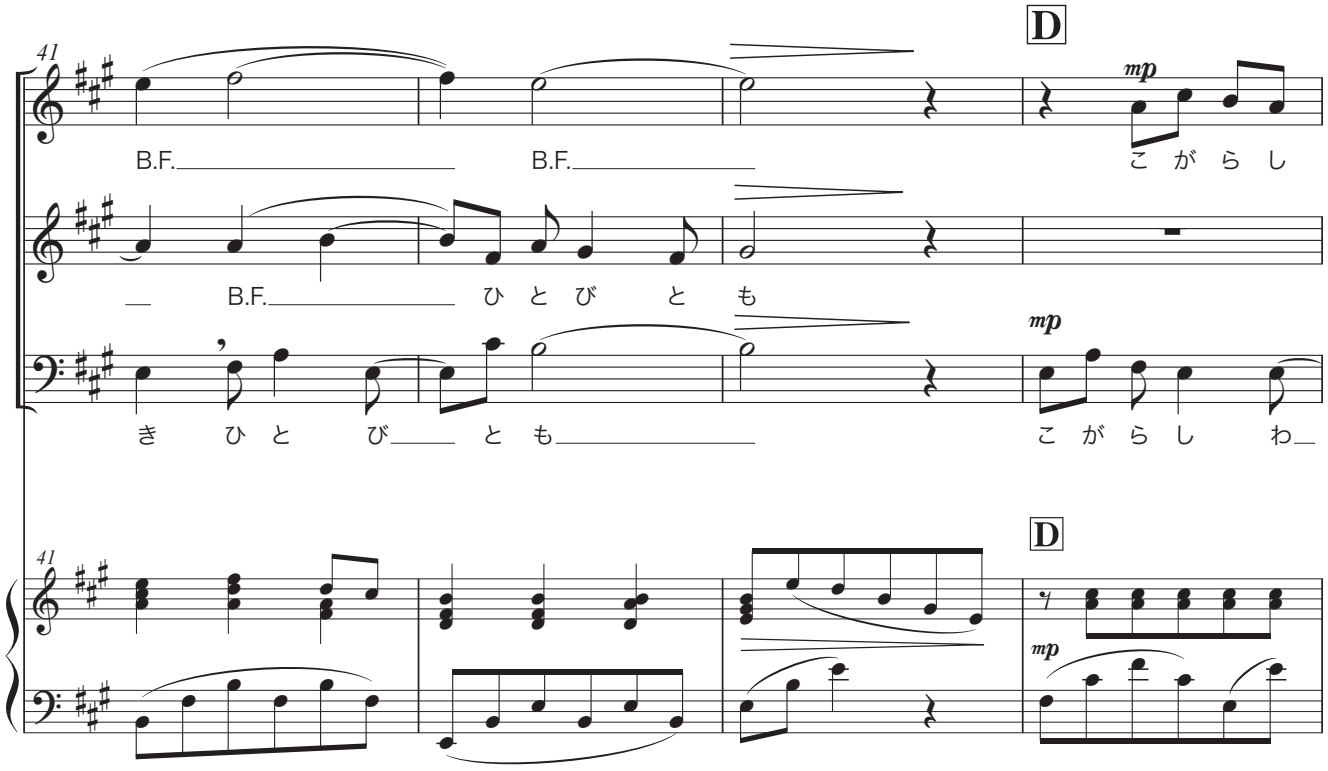
B.F. = （Bouche Fermée）口を閉じたハミング。鼻息で歌う。



冬の夜

混声三部合唱版（原調）





冬の夜

混声三部合唱版（原調）

45

わたる　この　よる　を　かく　より　そ　い　て　あ　る　べ　き

この　よる　を　かく　より　そ　い　て　あ　る　べ　き

＿　たる　この　よる　を　かく　より　そ　い　て　あ　る　べ　き

rit.　E Poco meno mosso

49

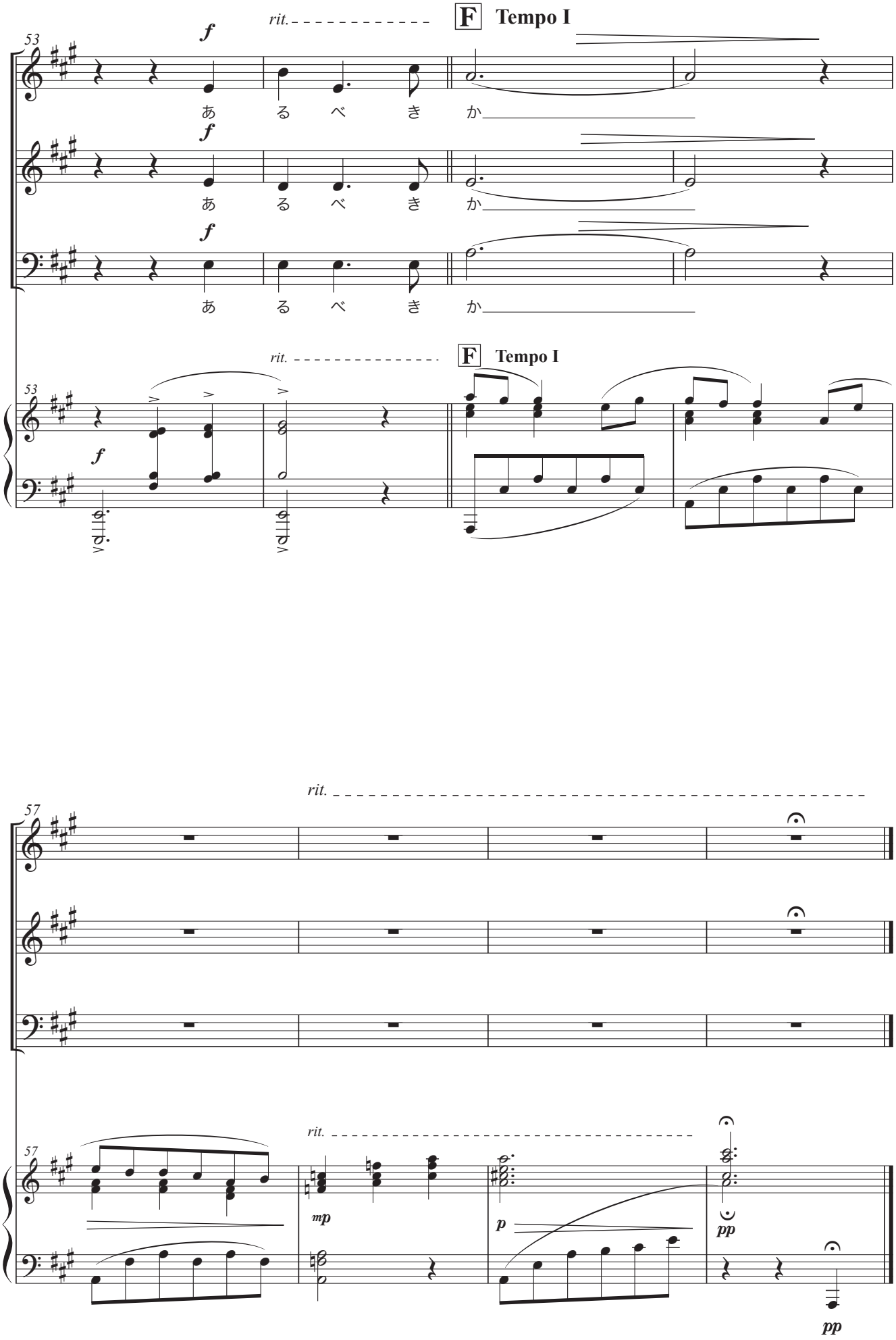
か＿＿＿＿＿＿　かく　より　そ　い　て

か＿＿＿＿＿＿　より　そ　い　て

か＿＿＿＿＿＿　かく　よ　り　そ　い　て

冬の夜

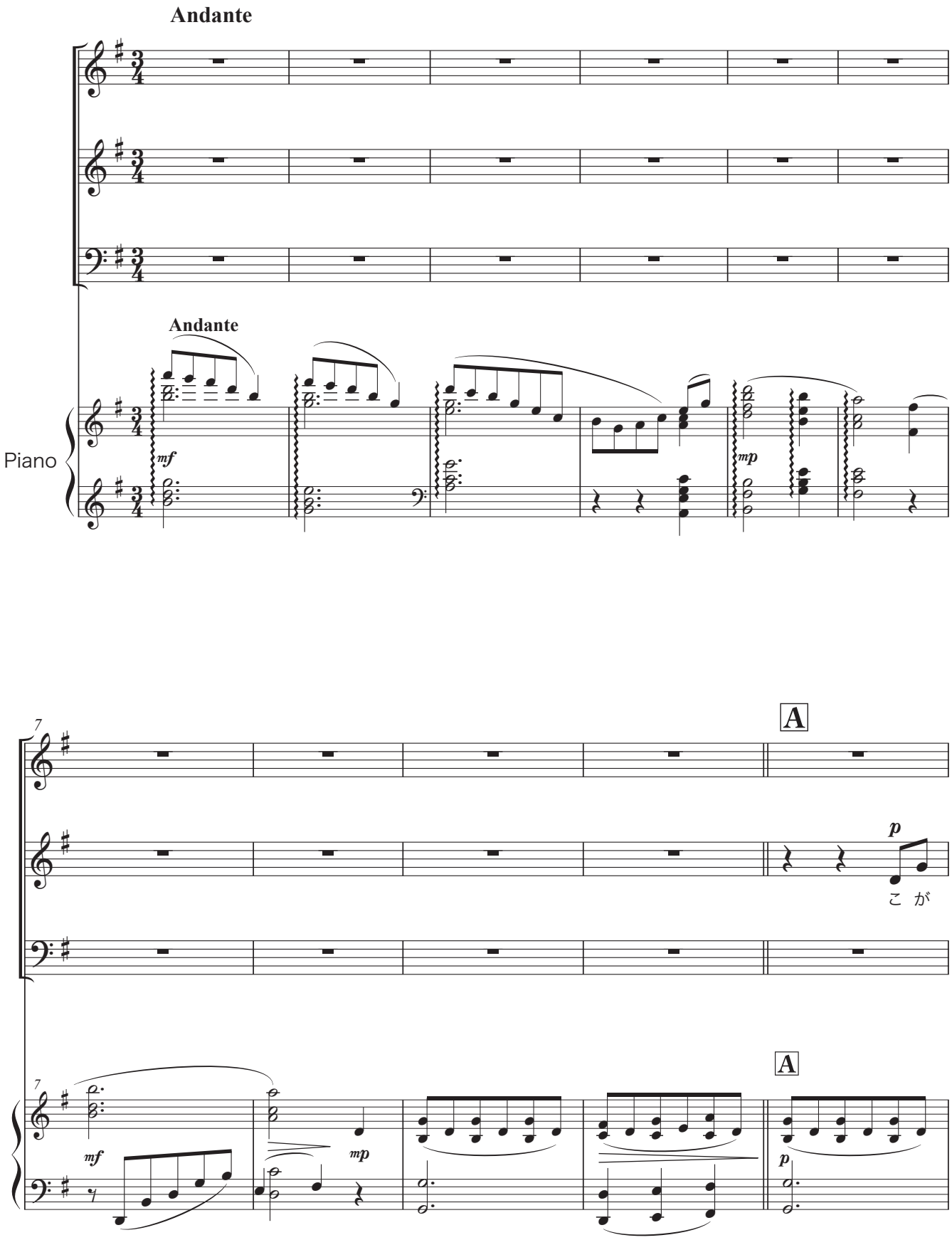
混声三部合唱版（原調）



冬の夜

混声三部合唱版（移調）

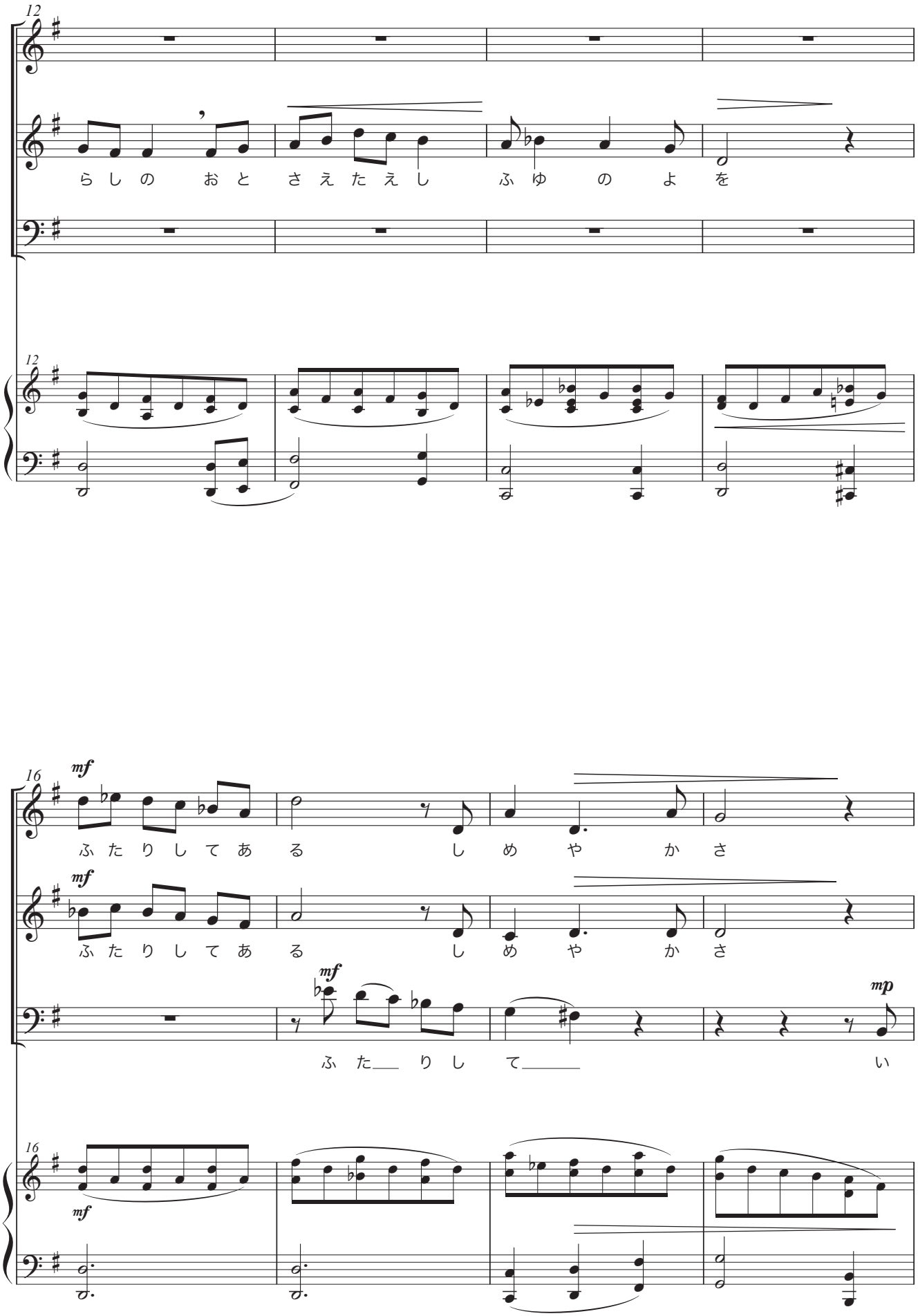
作曲：小松耕輔
作詞：西條八十
編曲：阿部俊祐



©小松耕輔音楽兄弟顕彰会

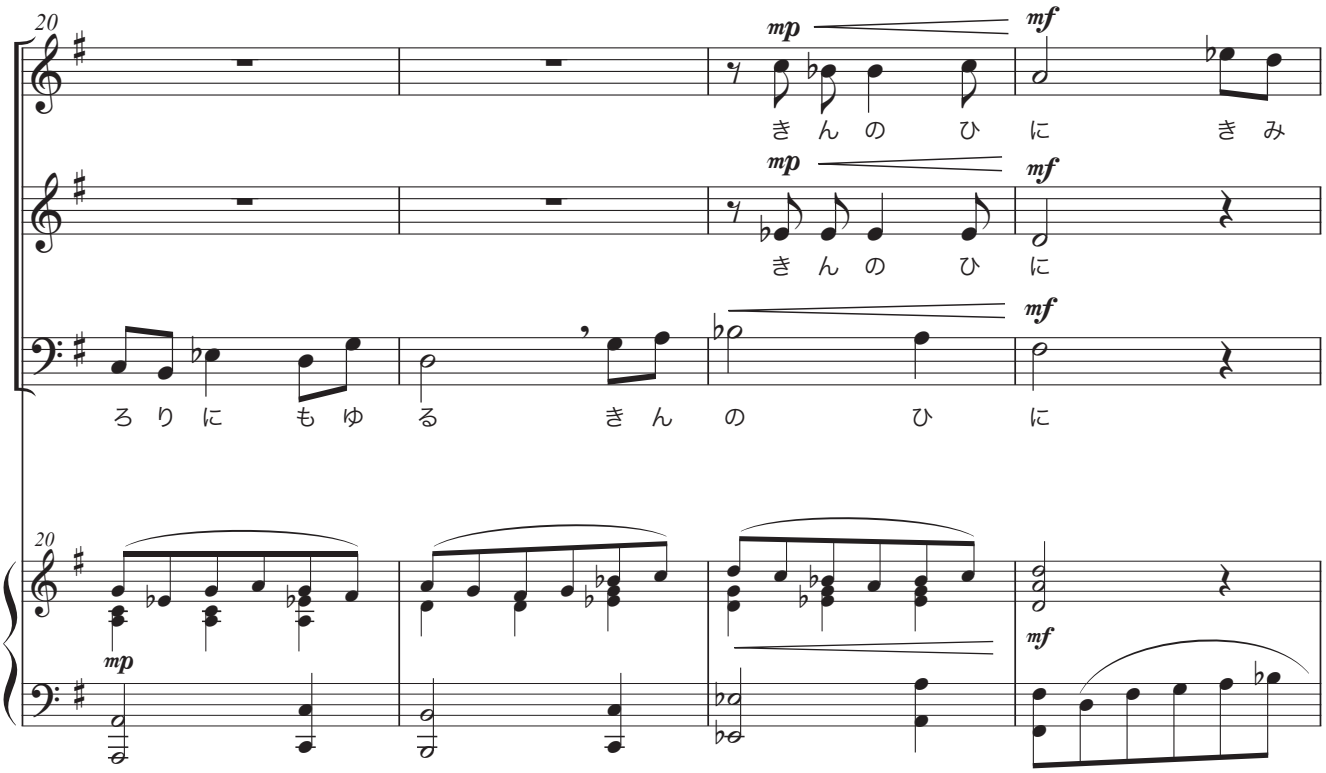
冬の夜

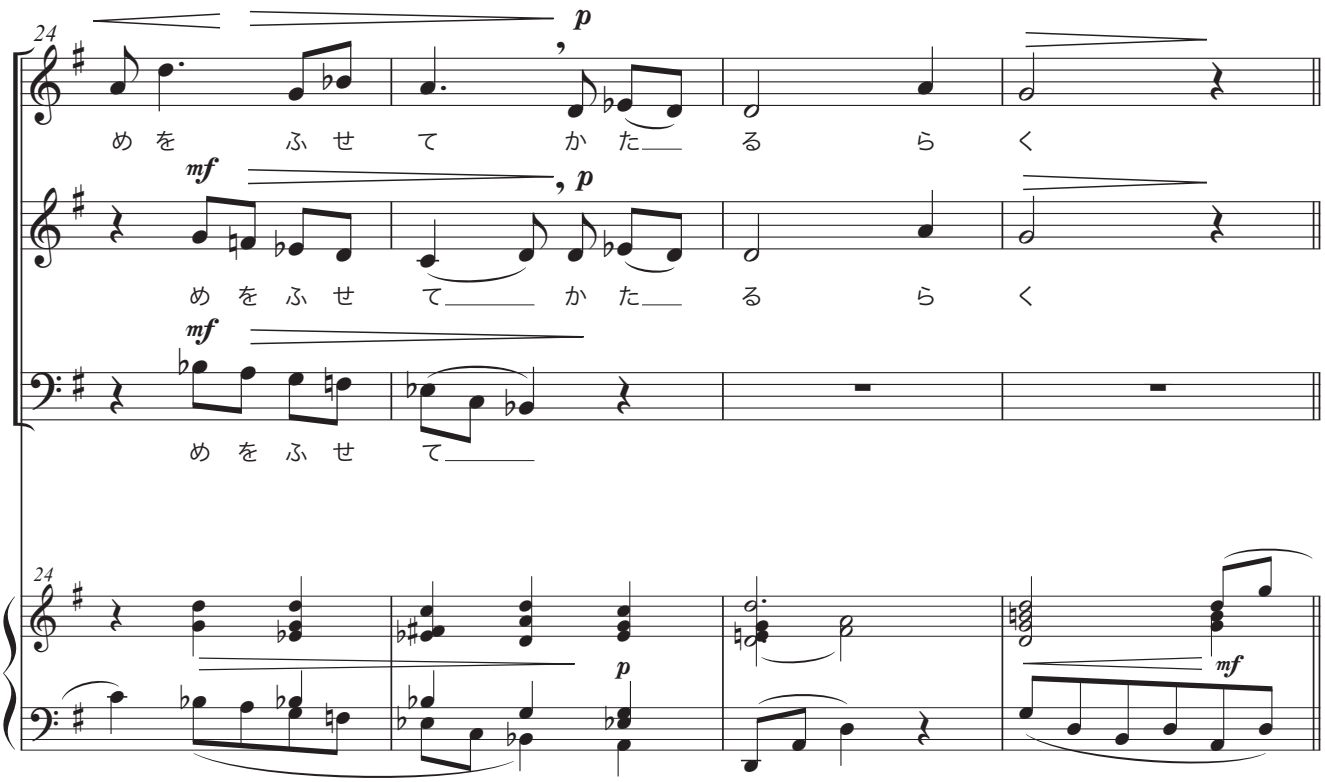
混声三部合唱版（移調）



冬の夜

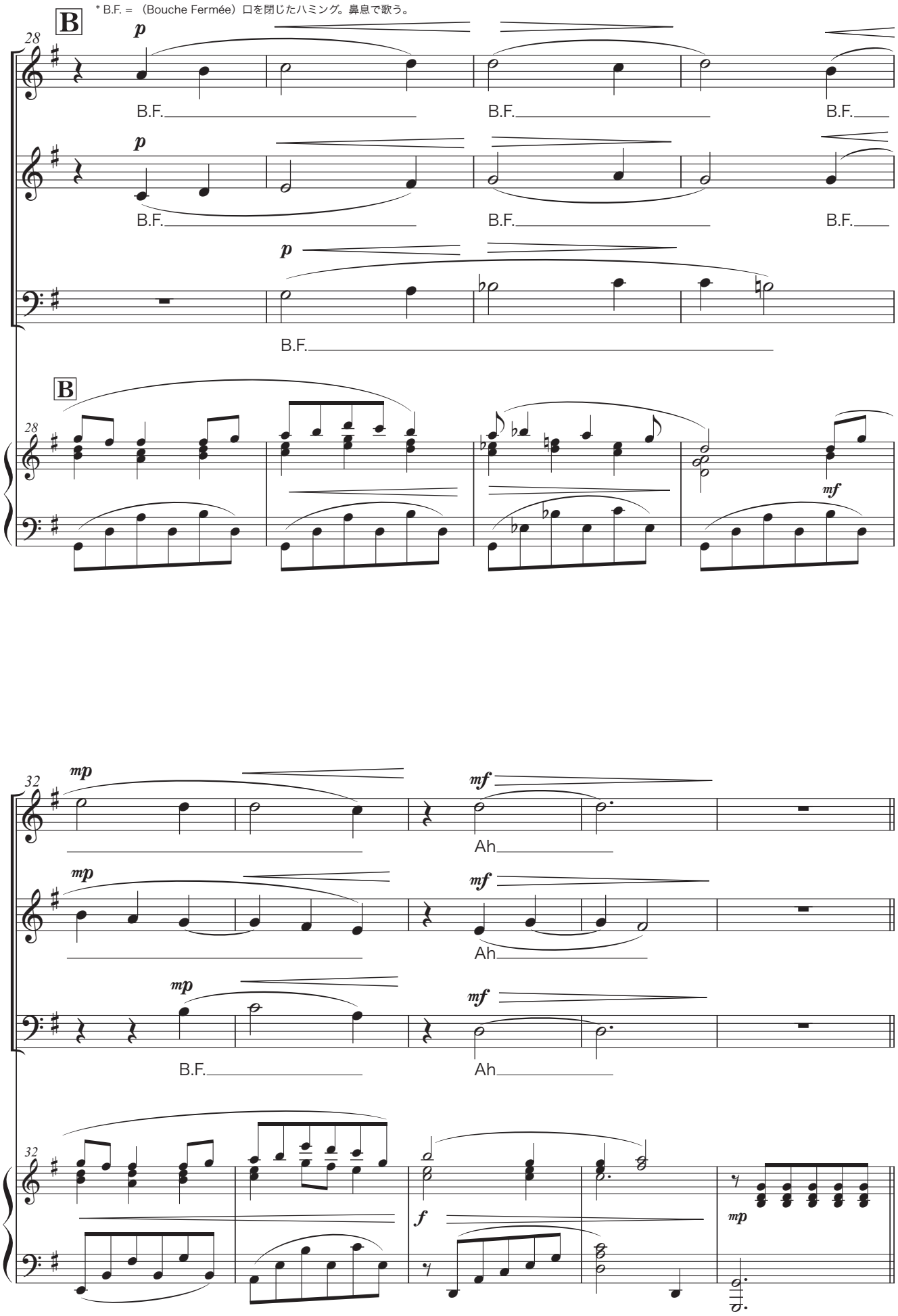
混声三部合唱版（移調）





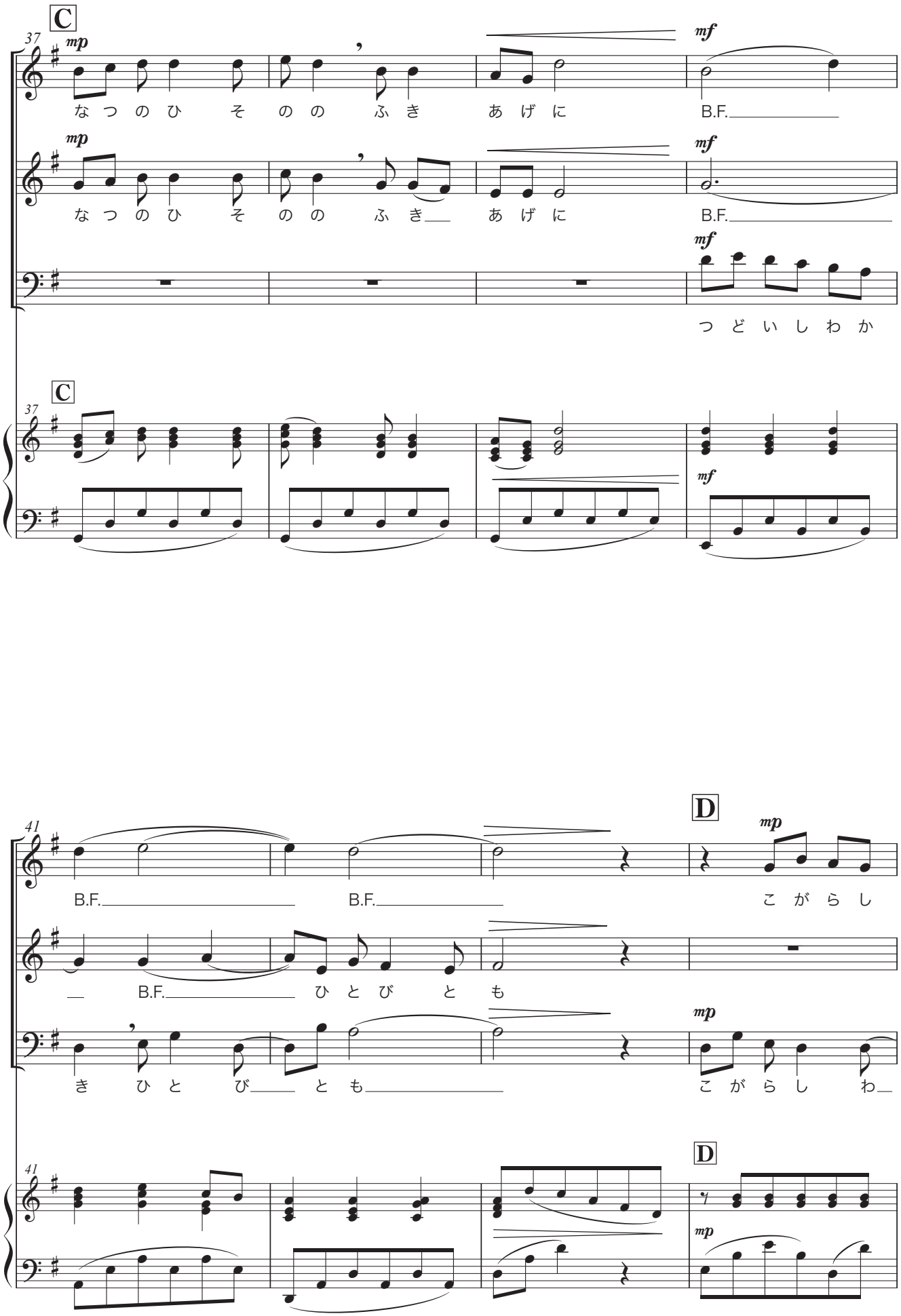
冬の夜

混声三部合唱版（移調）



冬の夜

混声三部合唱版（移調）



冬の夜

混声三部合唱版（移調）

45

mf f mf

わたる　このよるを　かくよりそいてあるべき

mf f mf

このよるを　かくよりそいてあるべき

mf f mf

たる　このよるを　かくよりそいてあるべき

45

f mf

rit. E Poco meno mosso

49

pp

か　かくよりそいて

pp

か　よりそいて

pp

か　かくよりそいて

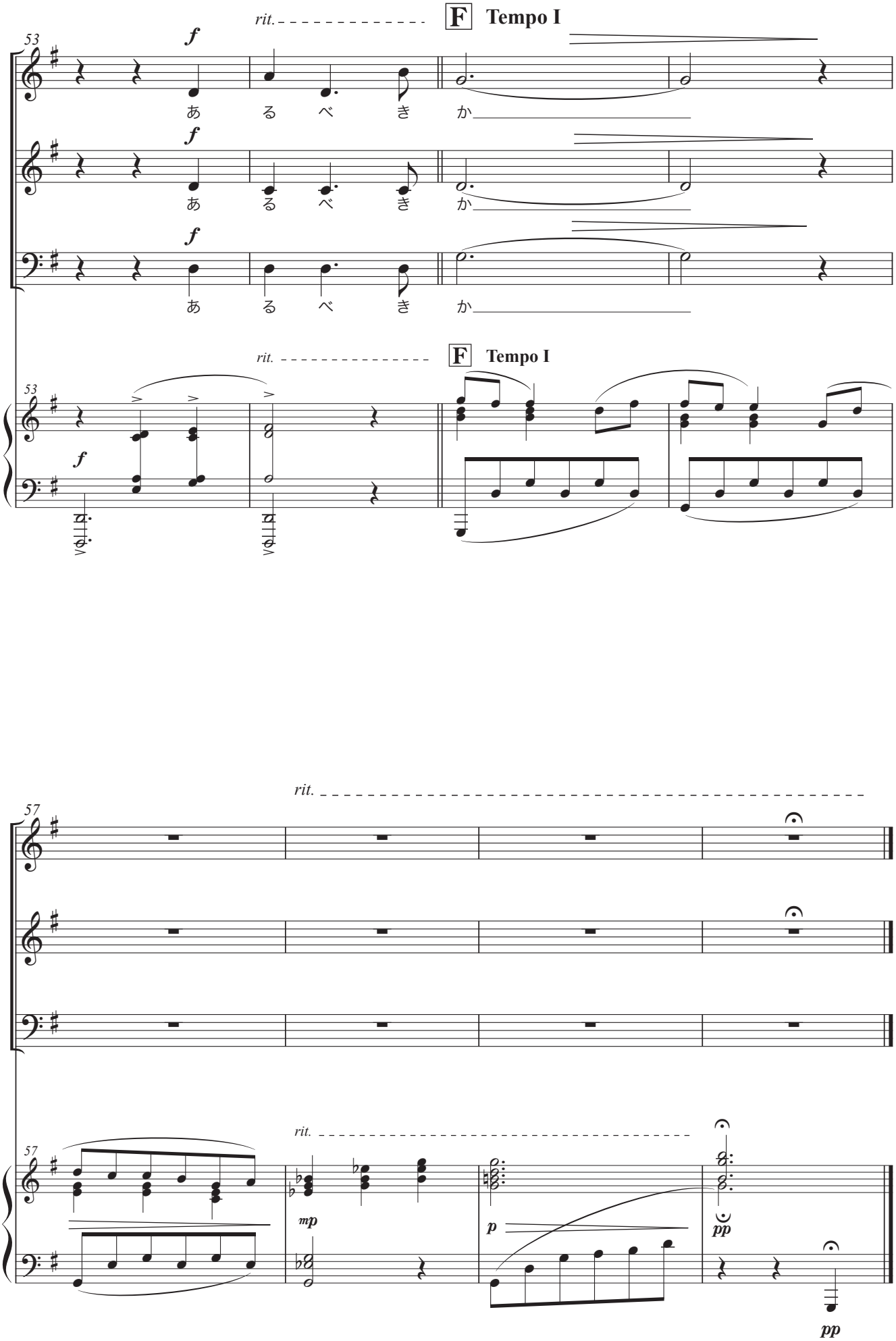
rit. E Poco meno mosso

49

pp pp

冬の夜

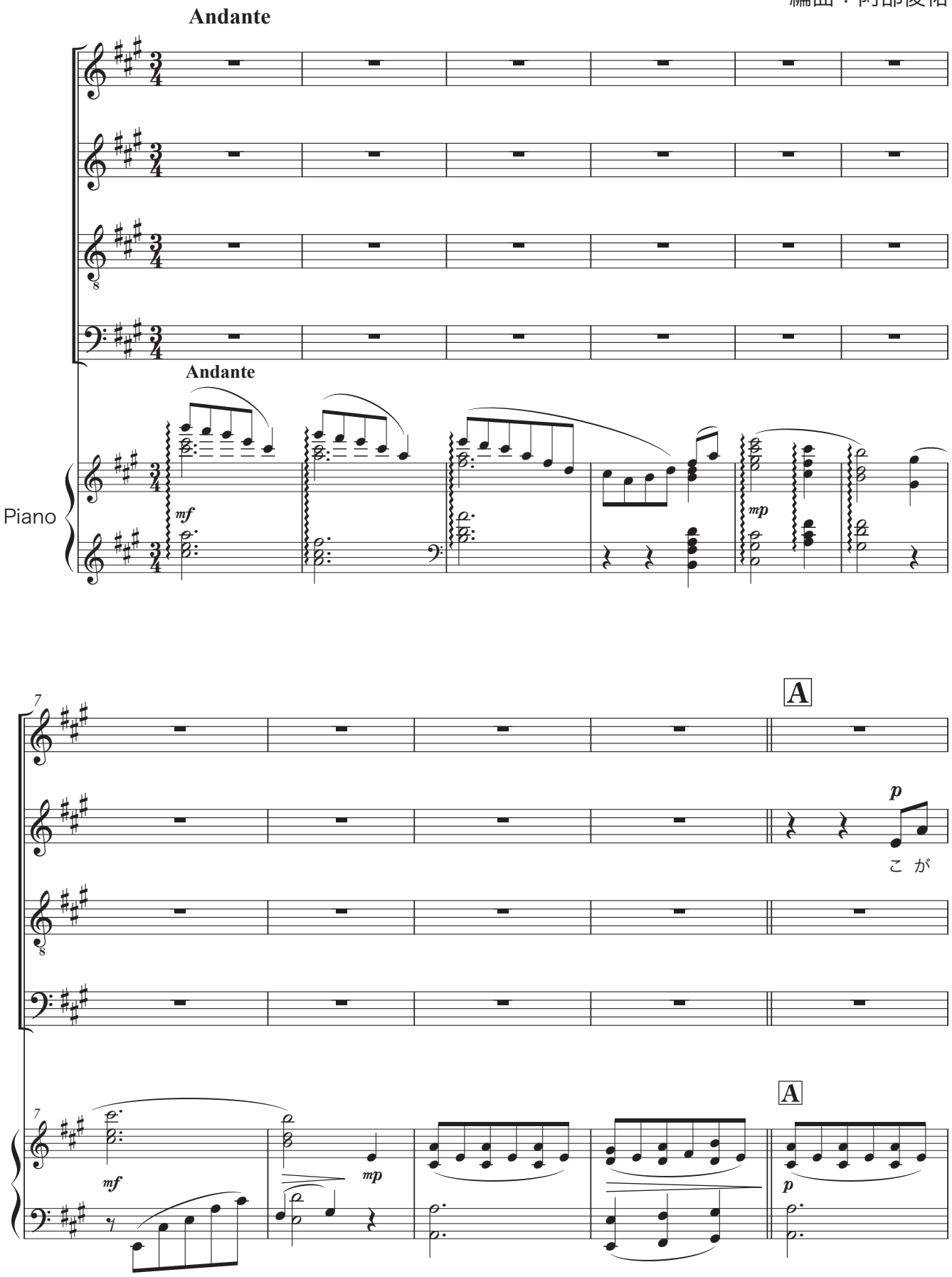
混声三部合唱版（移調）



冬の夜

混声四部合唱版（原調）

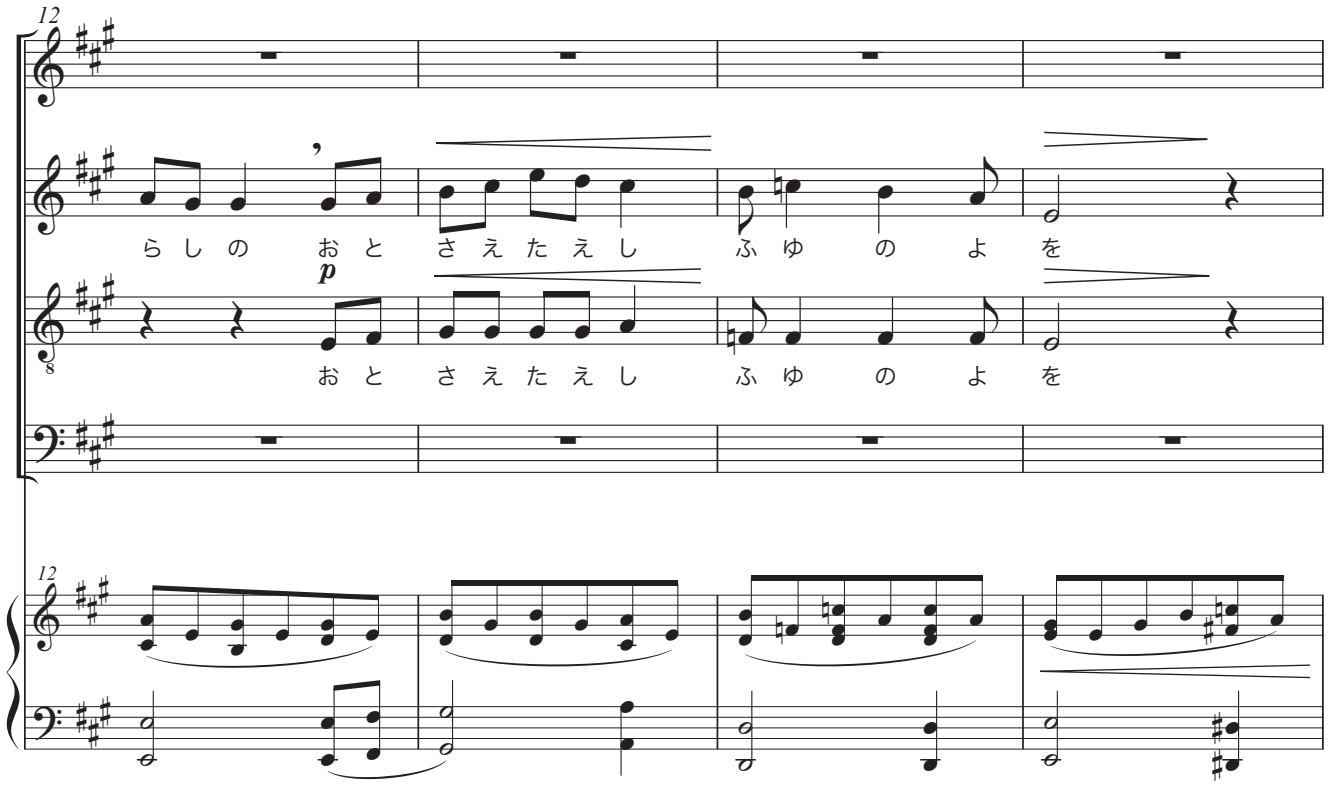
作曲：小松耕輔
作詞：西條八十
編曲：阿部俊祐

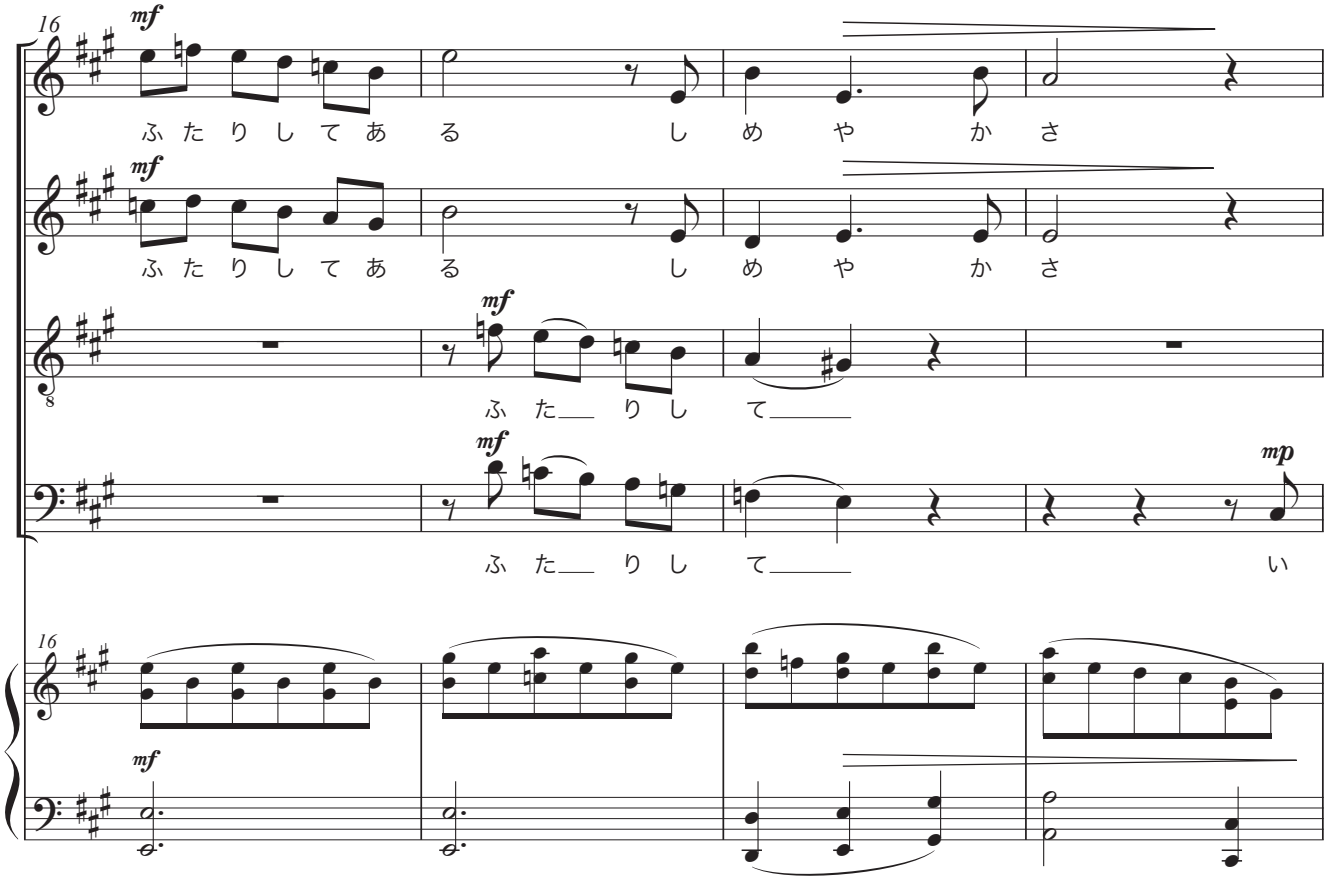


©小松耕輔音楽兄弟顕彰会

冬の夜

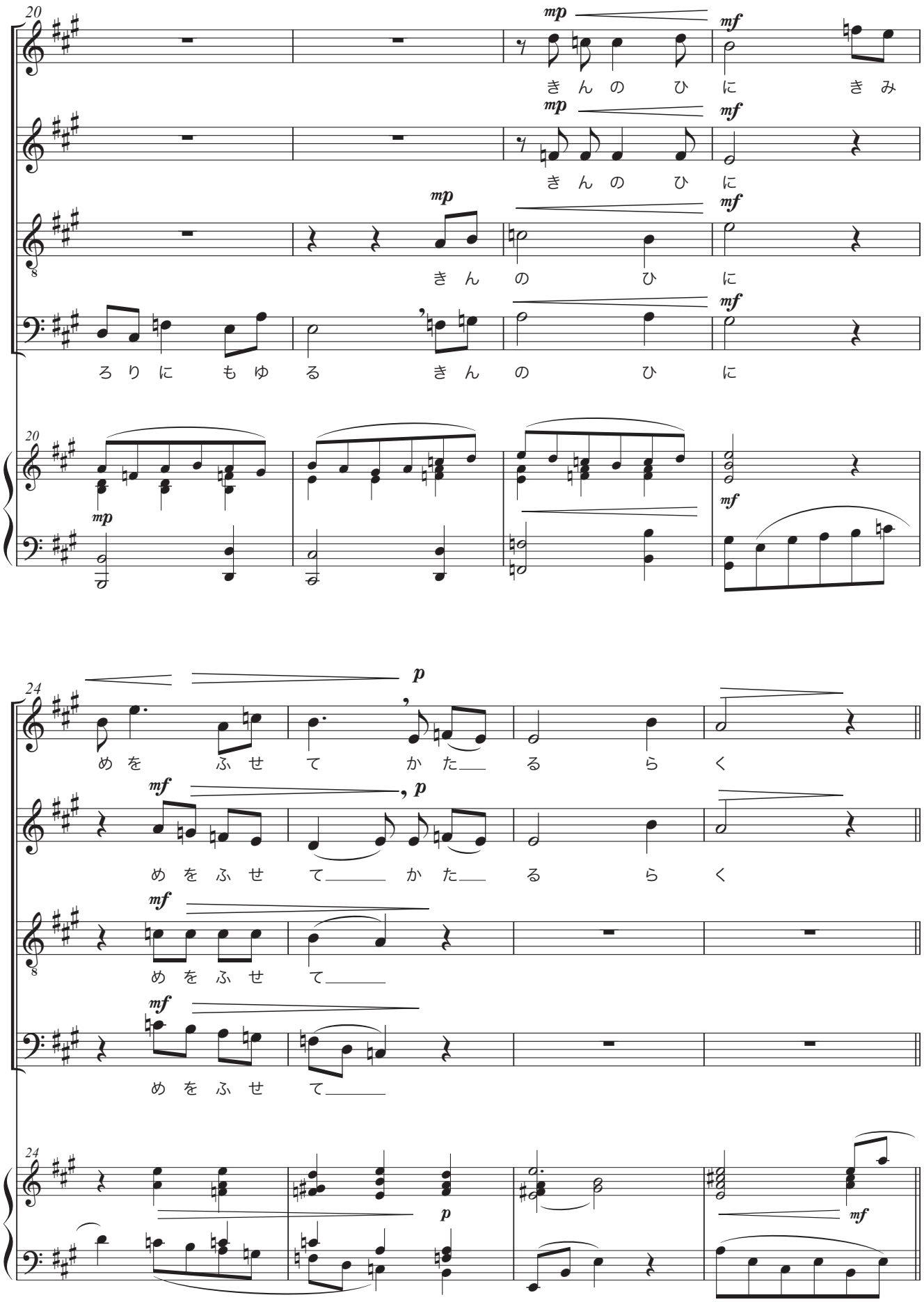
混声四部合唱版（原調）





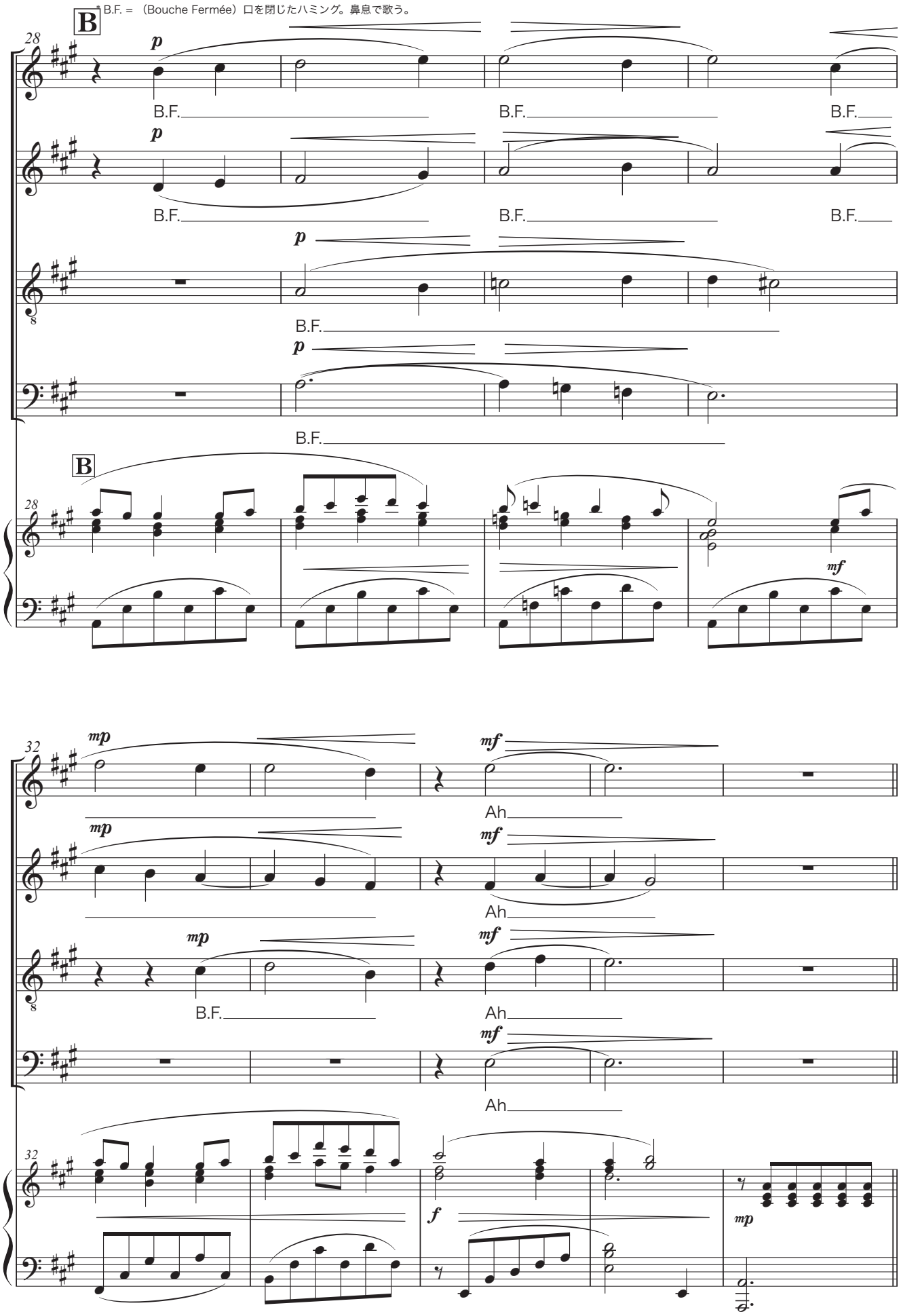
冬の夜

混声四部合唱版（原調）



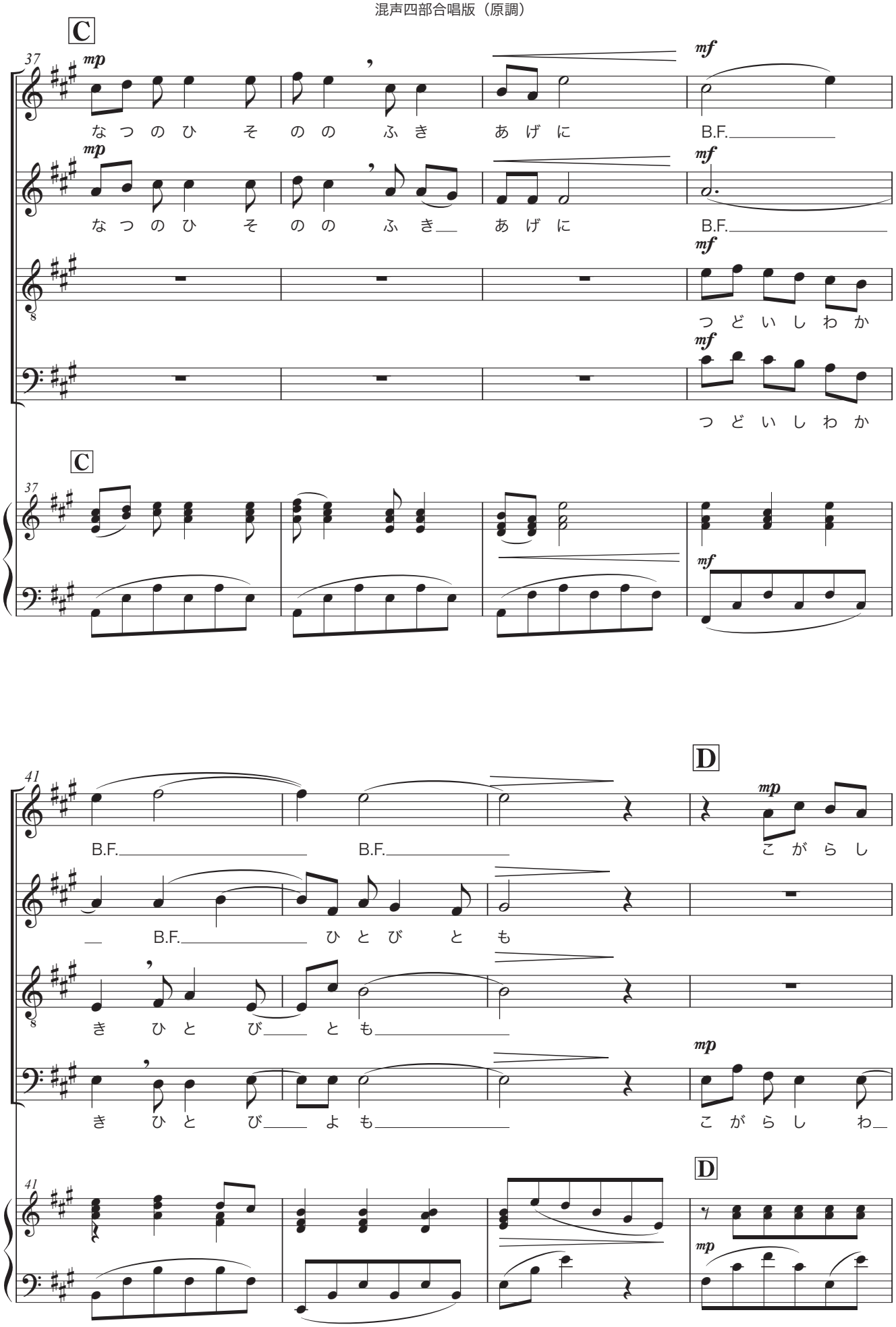
冬の夜

混声四部合唱版（原調）



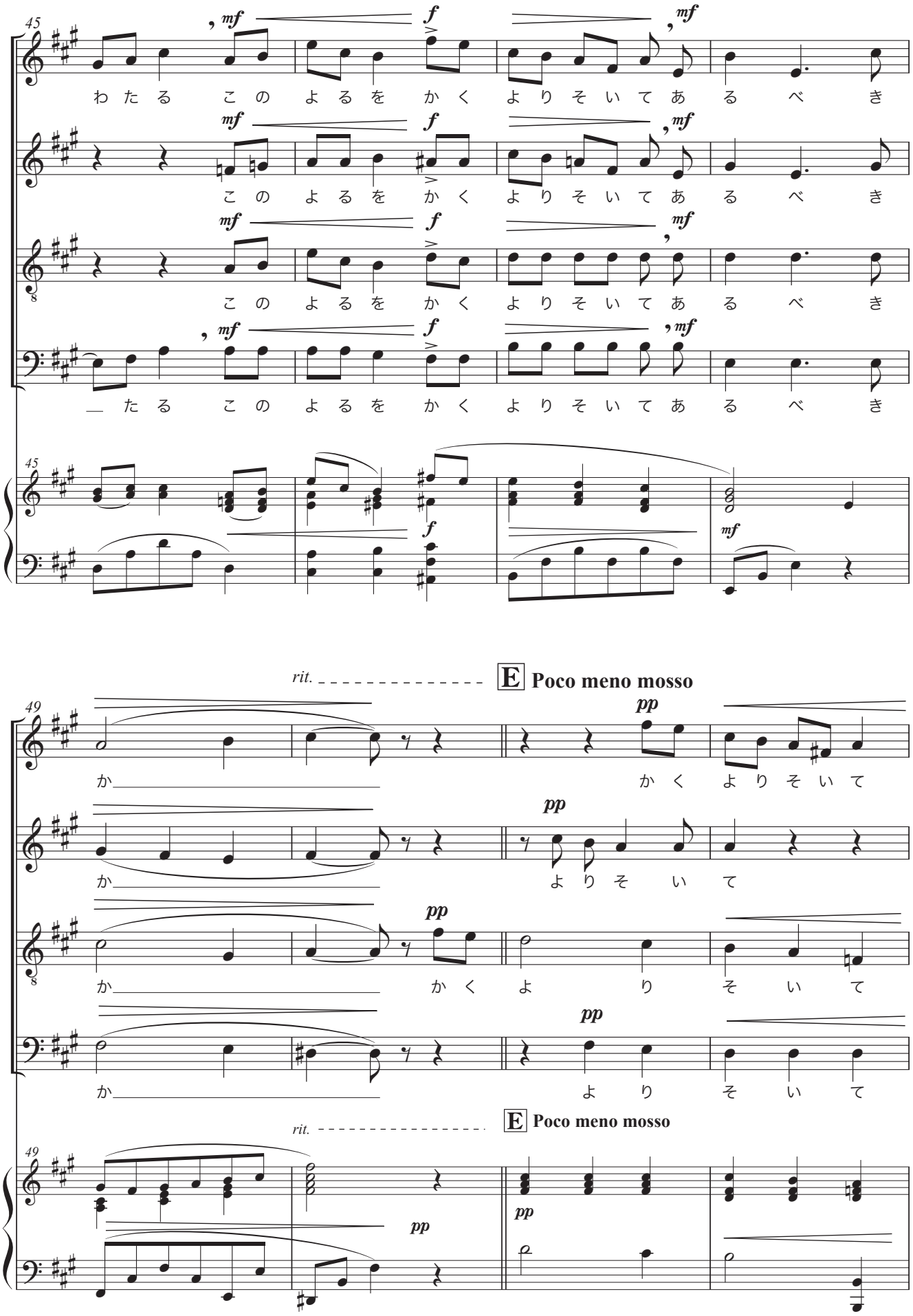
冬の夜

混声四部合唱版（原調）



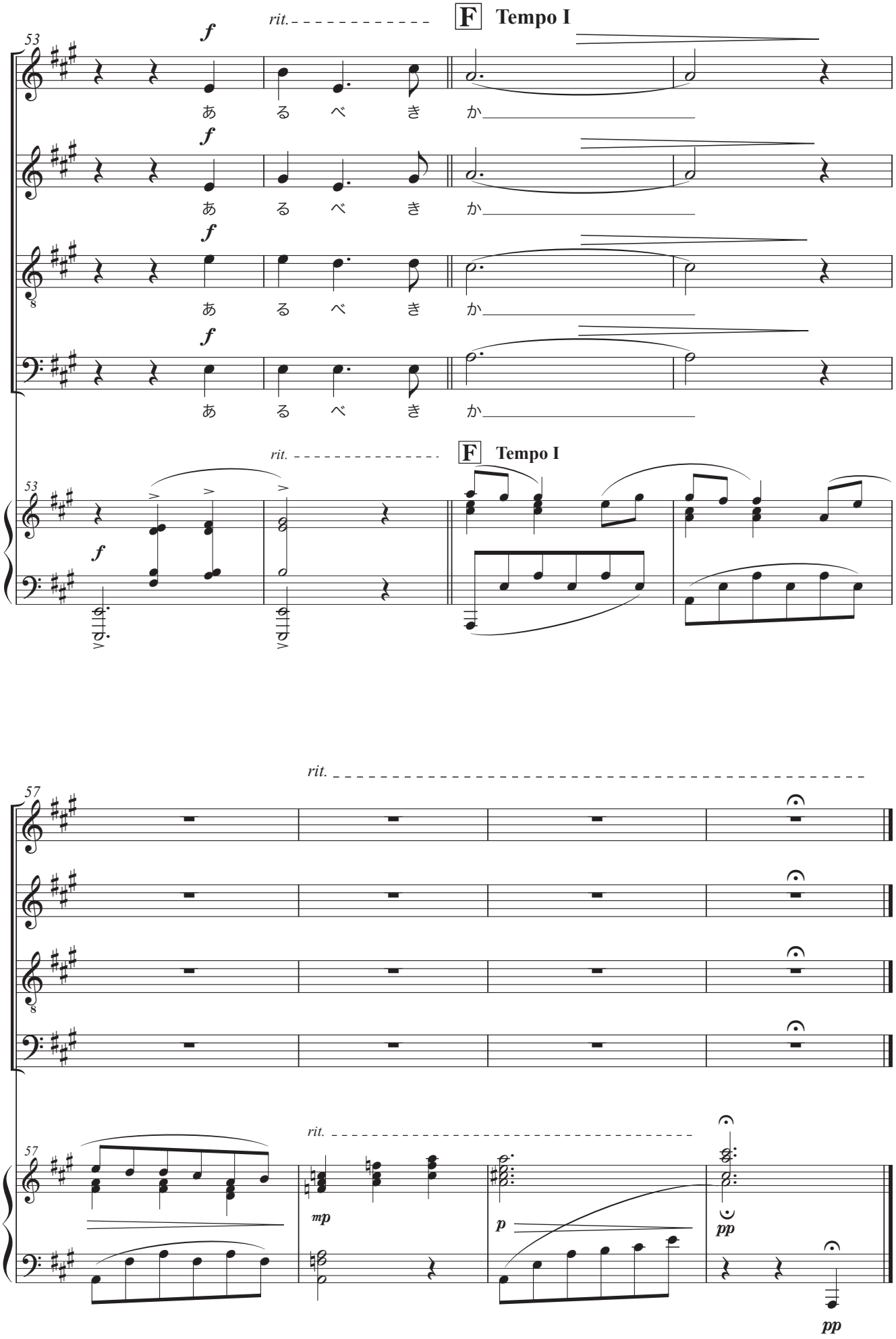
冬の夜

混声四部合唱版（原調）



冬の夜

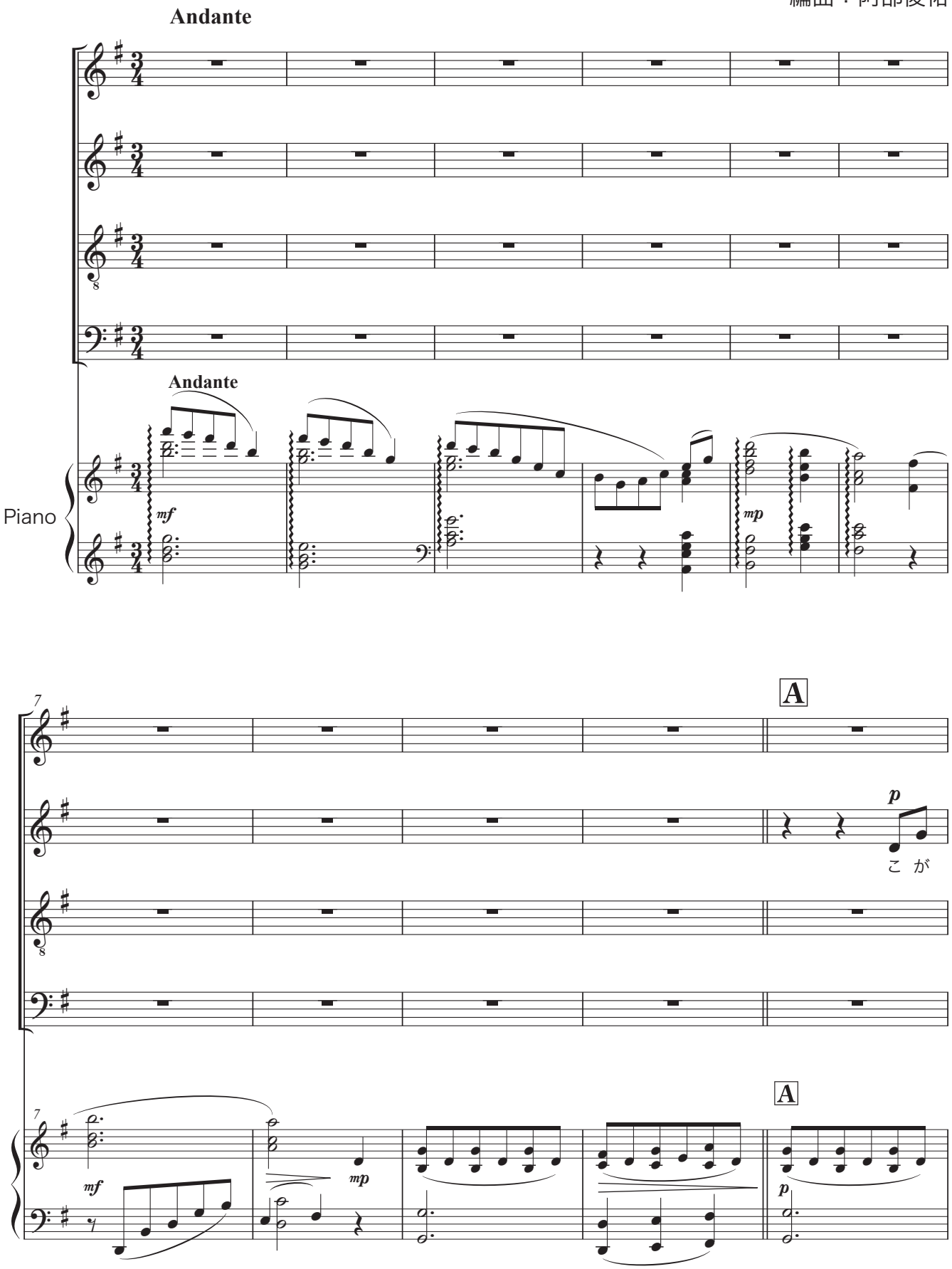
混声四部合唱版（原調）



冬の夜

混声四部合唱版（移調）

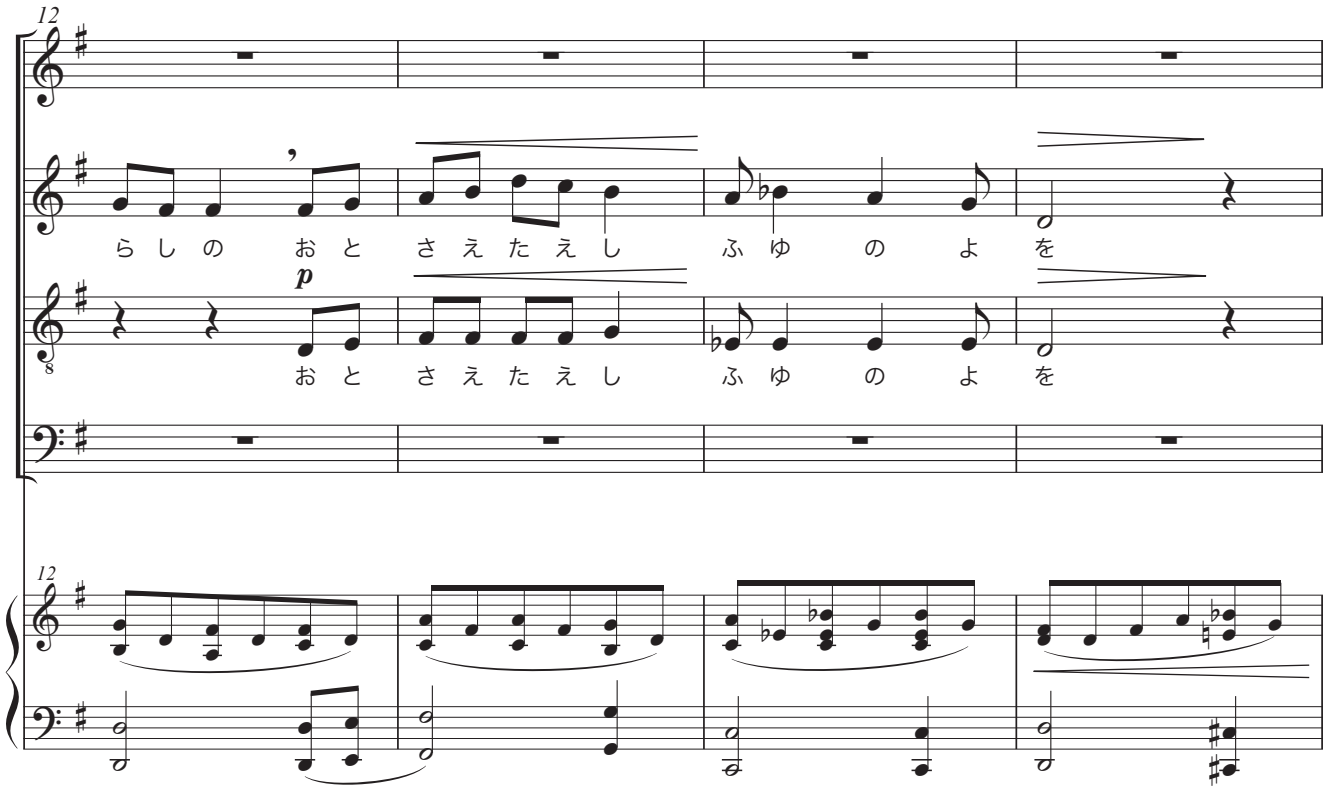
作曲：小松耕輔
作詞：西條八十
編曲：阿部俊祐

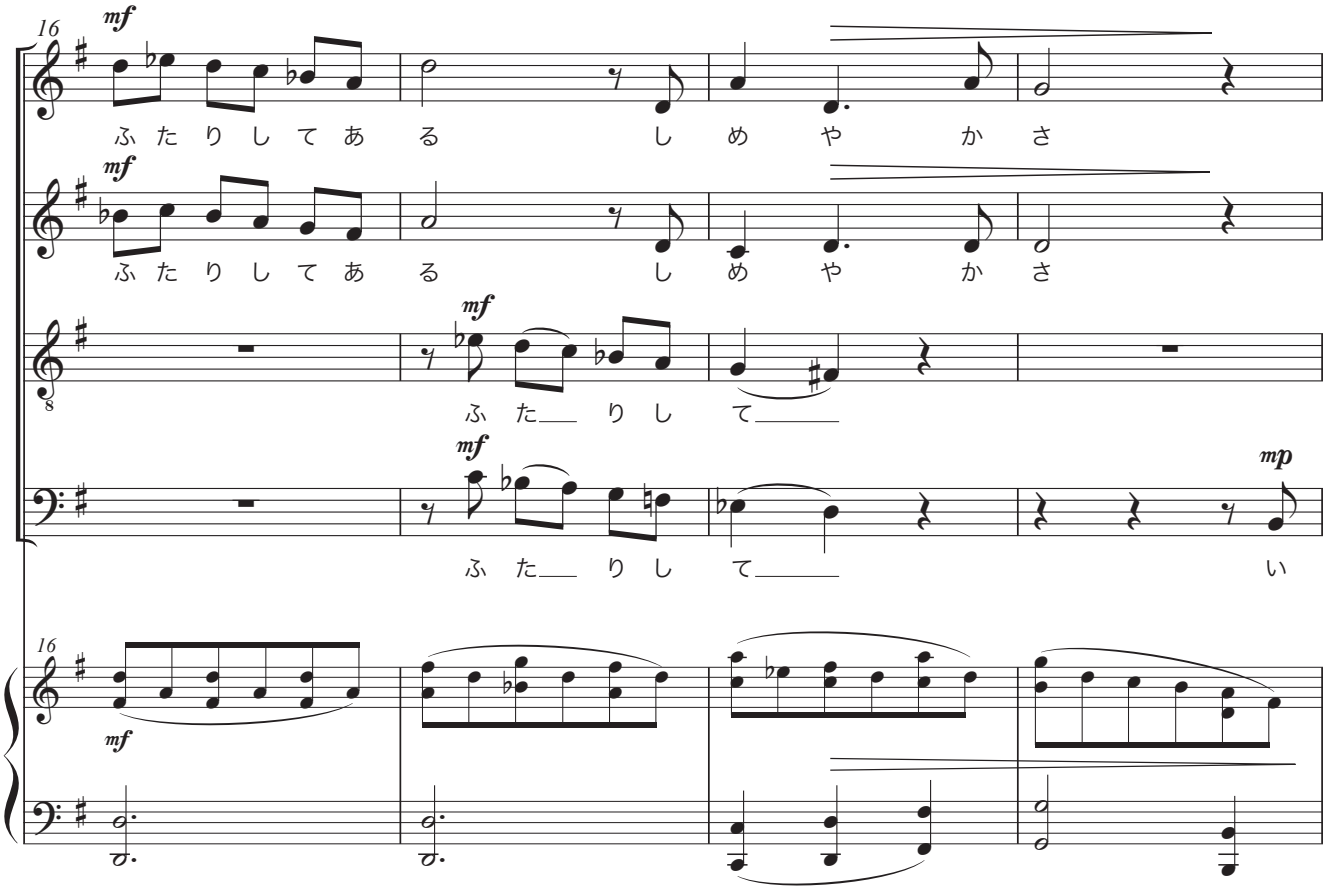


©小松耕輔音楽兄弟顕彰会

冬の夜

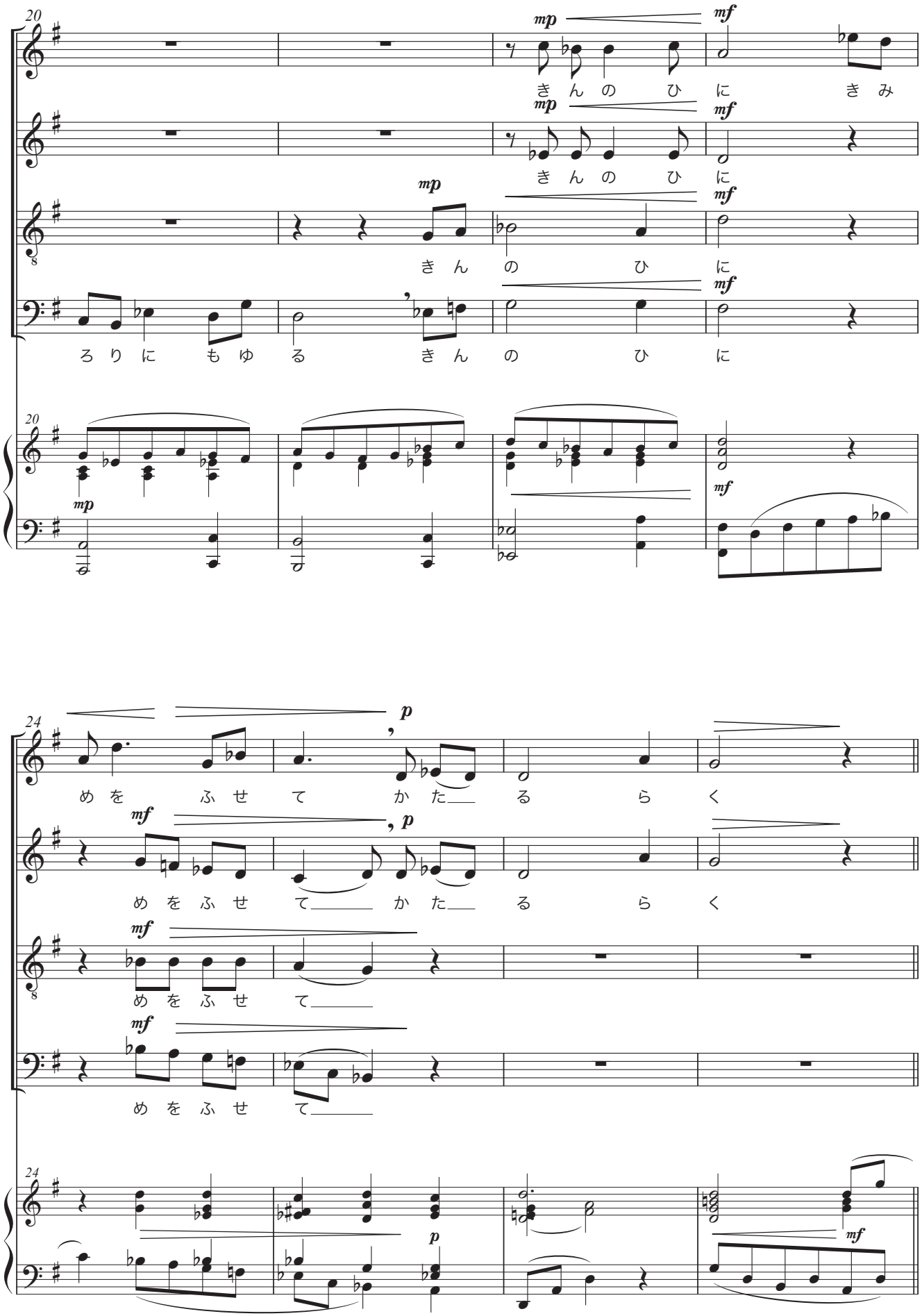
混声四部合唱版（移調）





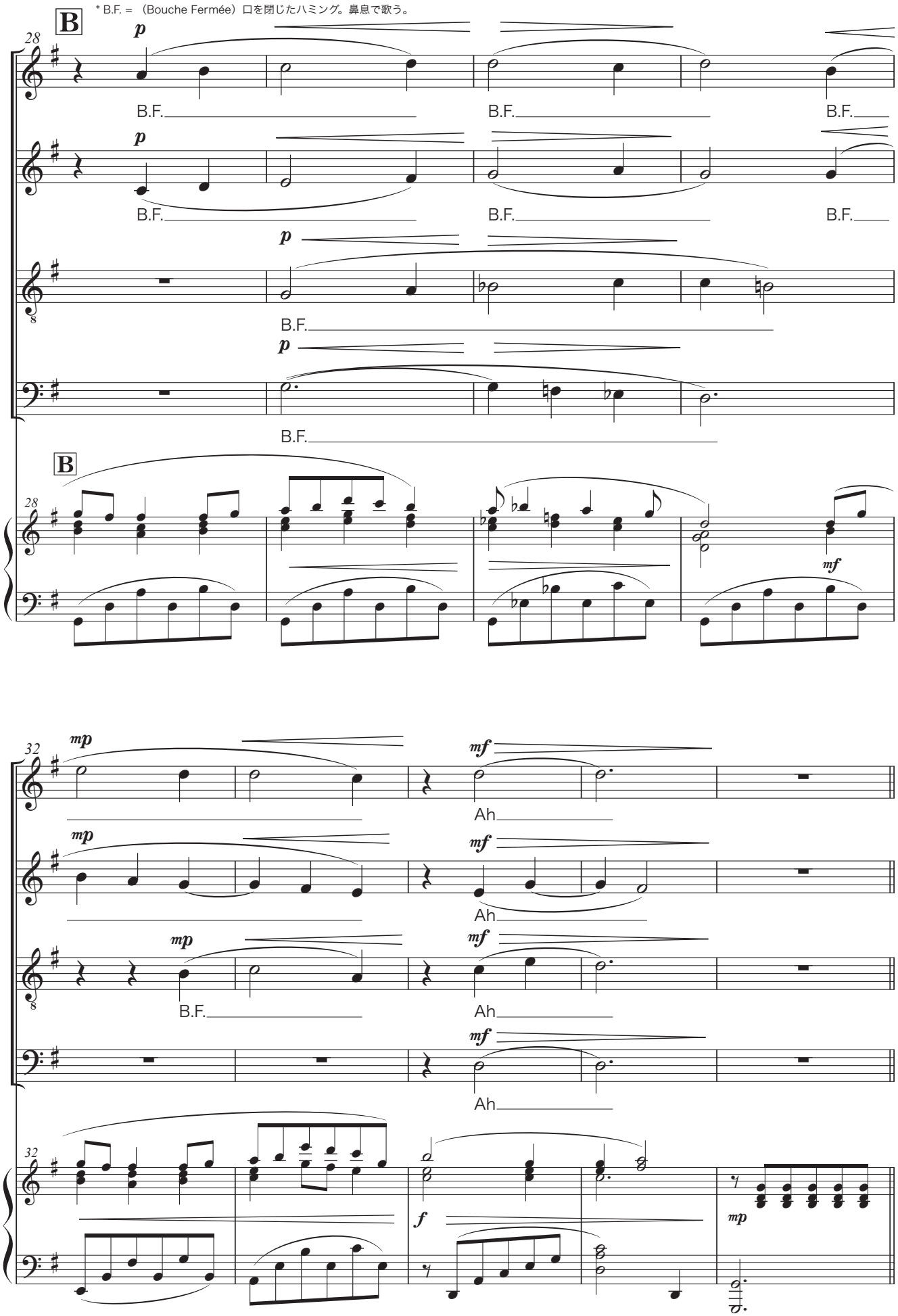
冬の夜

混声四部合唱版（移調）



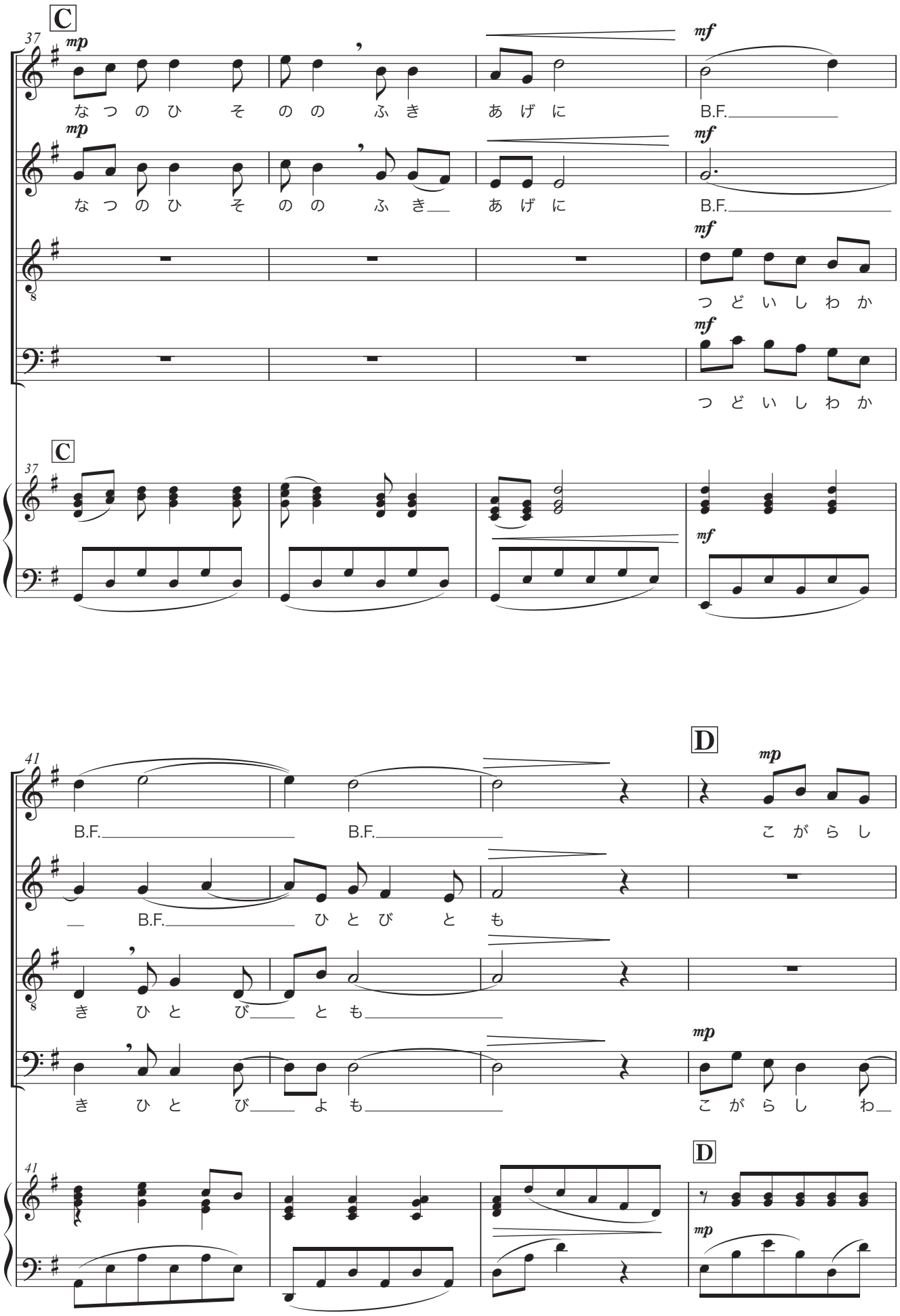
冬の夜

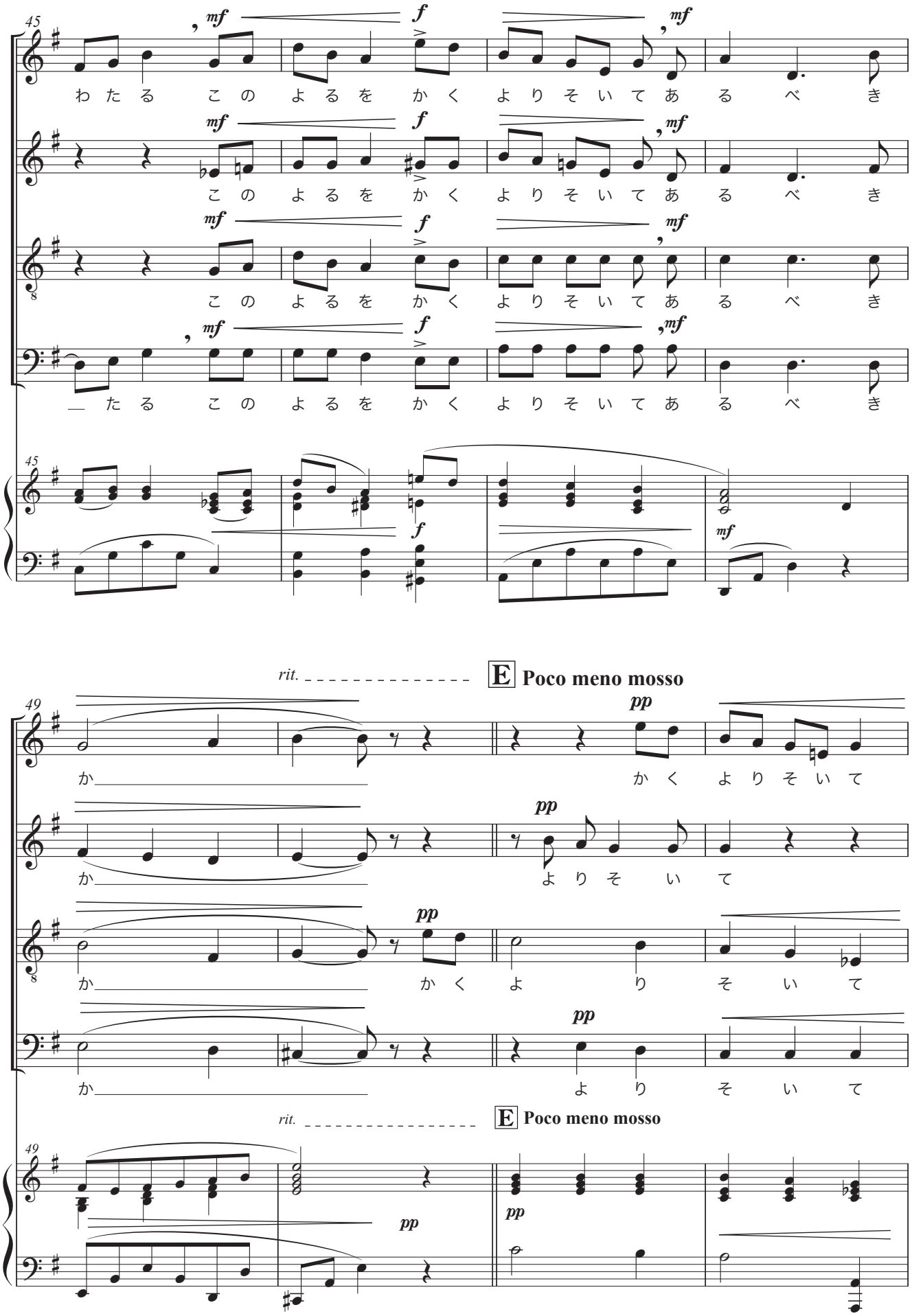
混声四部合唱版（移調）



冬の夜

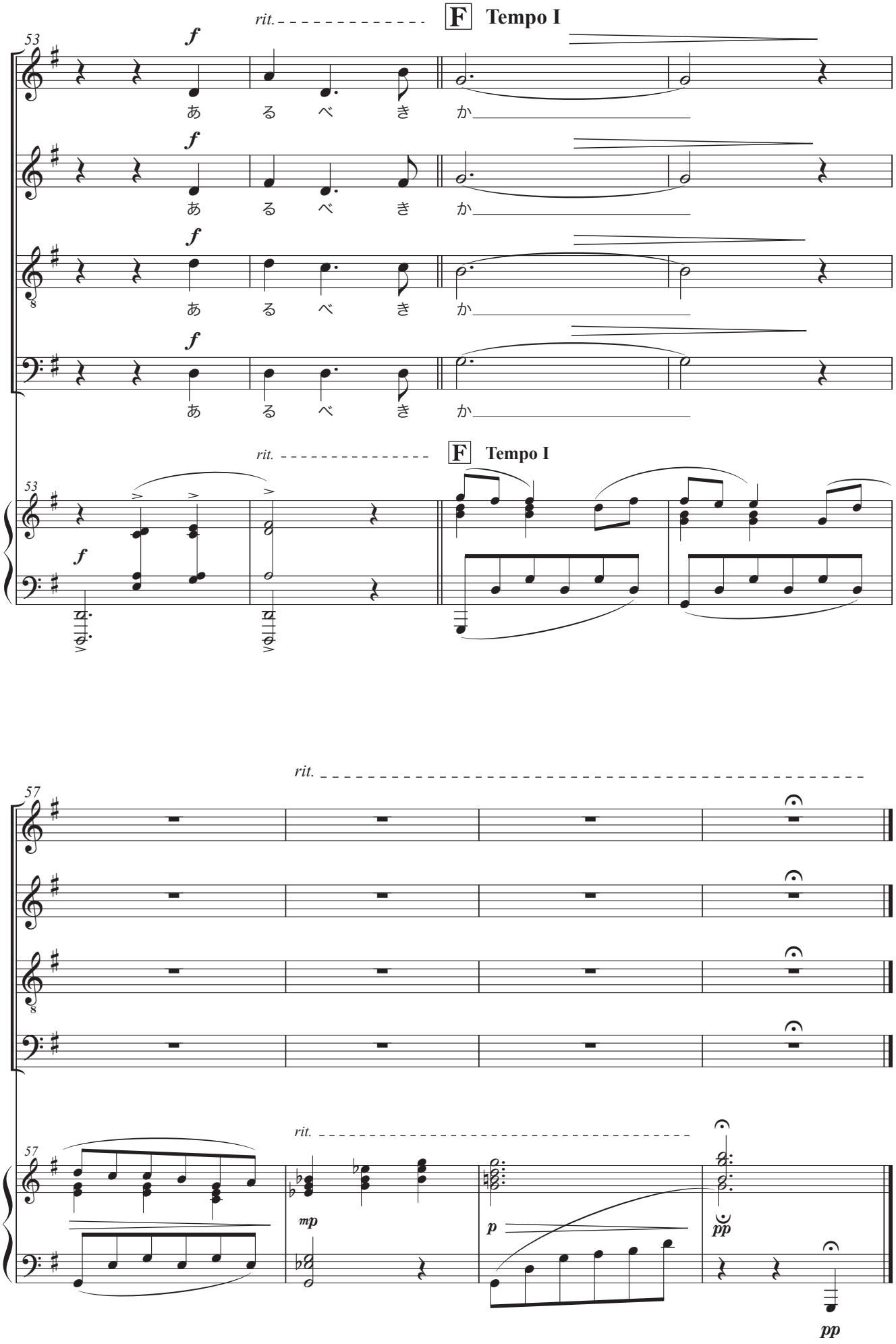
混声四部合唱版（移調）




45
わたるこのよるをかくよりそいてあるべき
このよるをかくよりそいてあるべき
このよるをかくよりそいてあるべき
たるこのよるをかくよりそいてあるべき
rit.
E Poco meno mosso
49
かかくよりそいて
かよりそいて
かかくよりそいて
かよりそいて

冬の夜

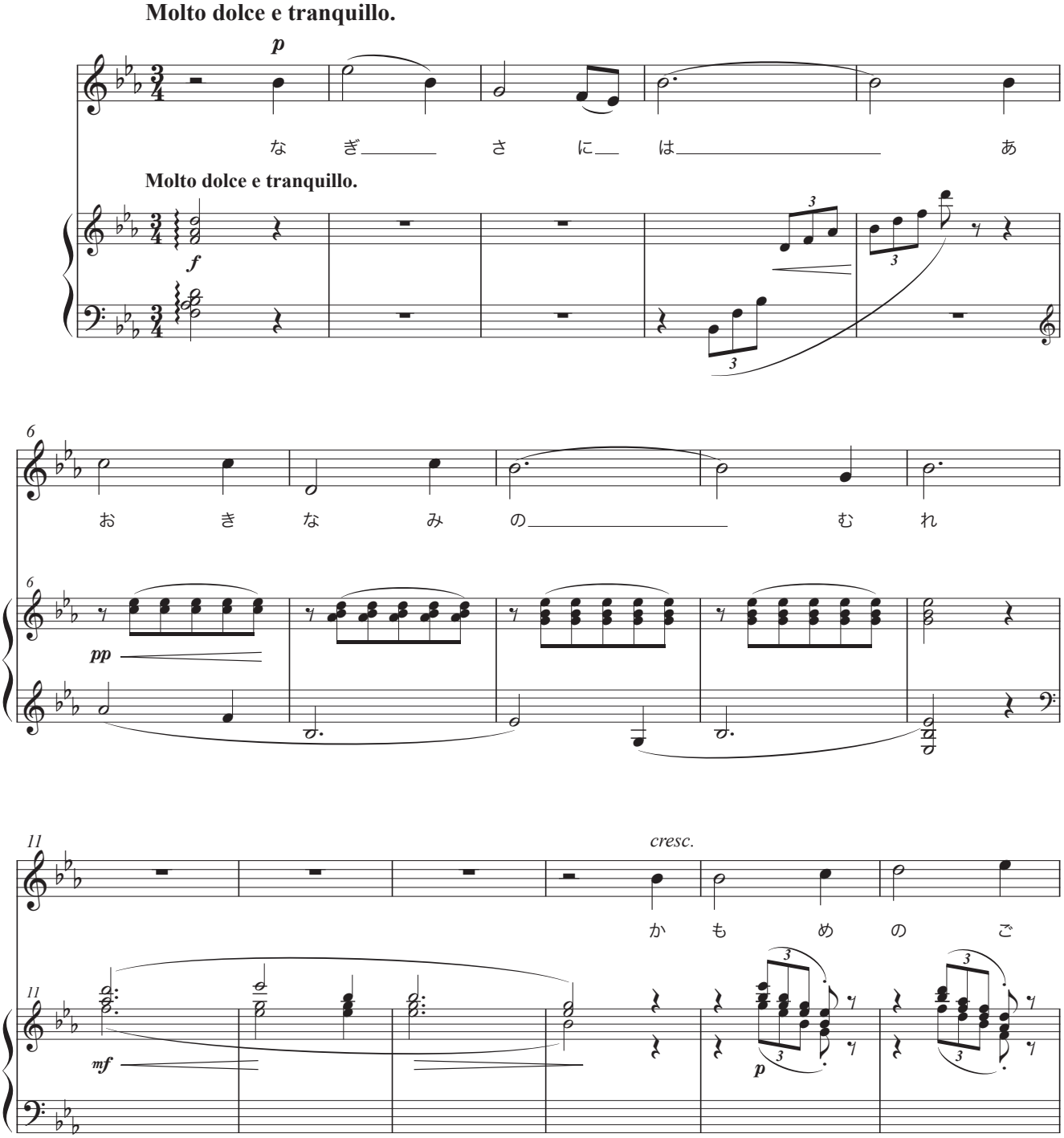
混声四部合唱版（移調）



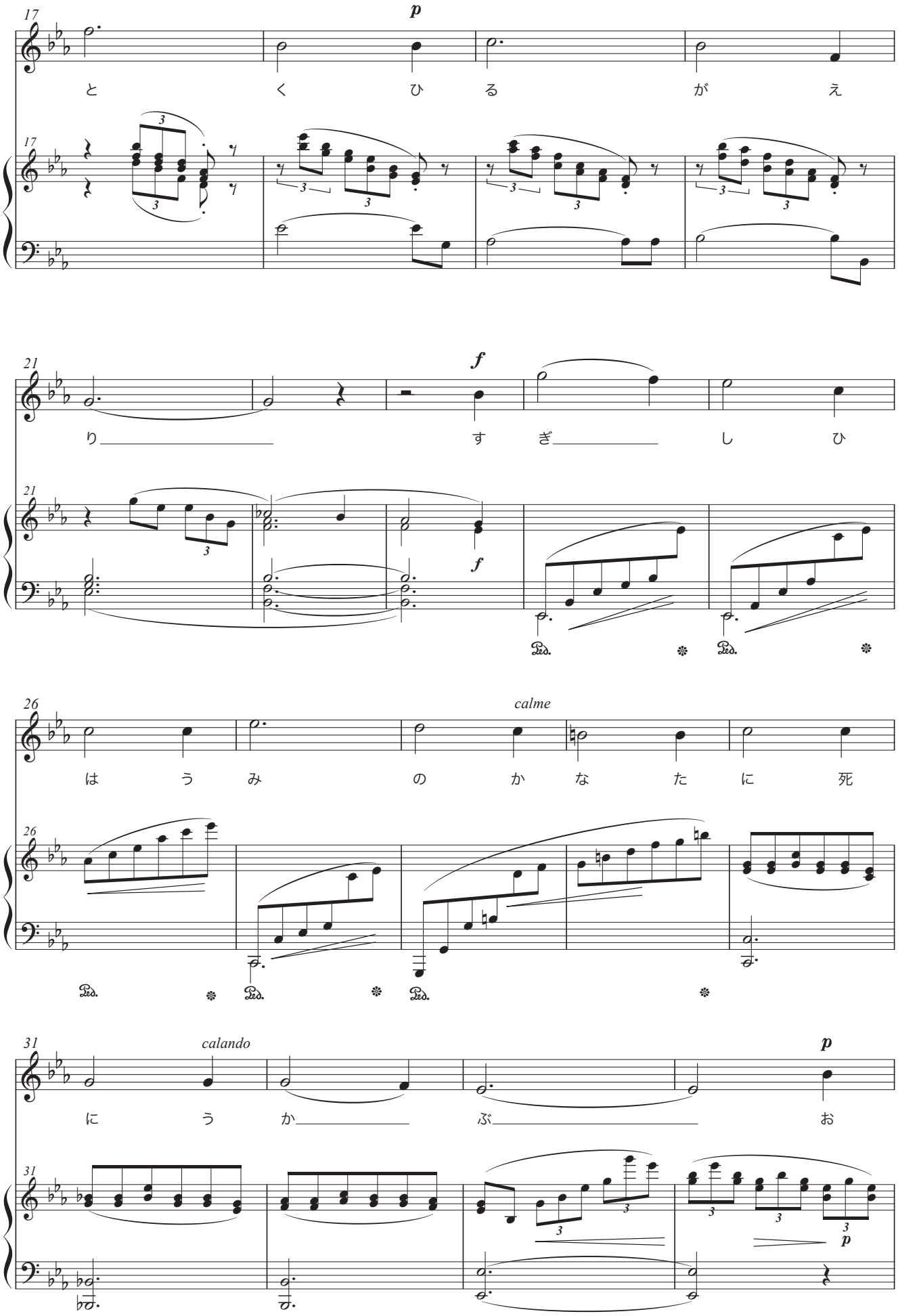
砂丘の上

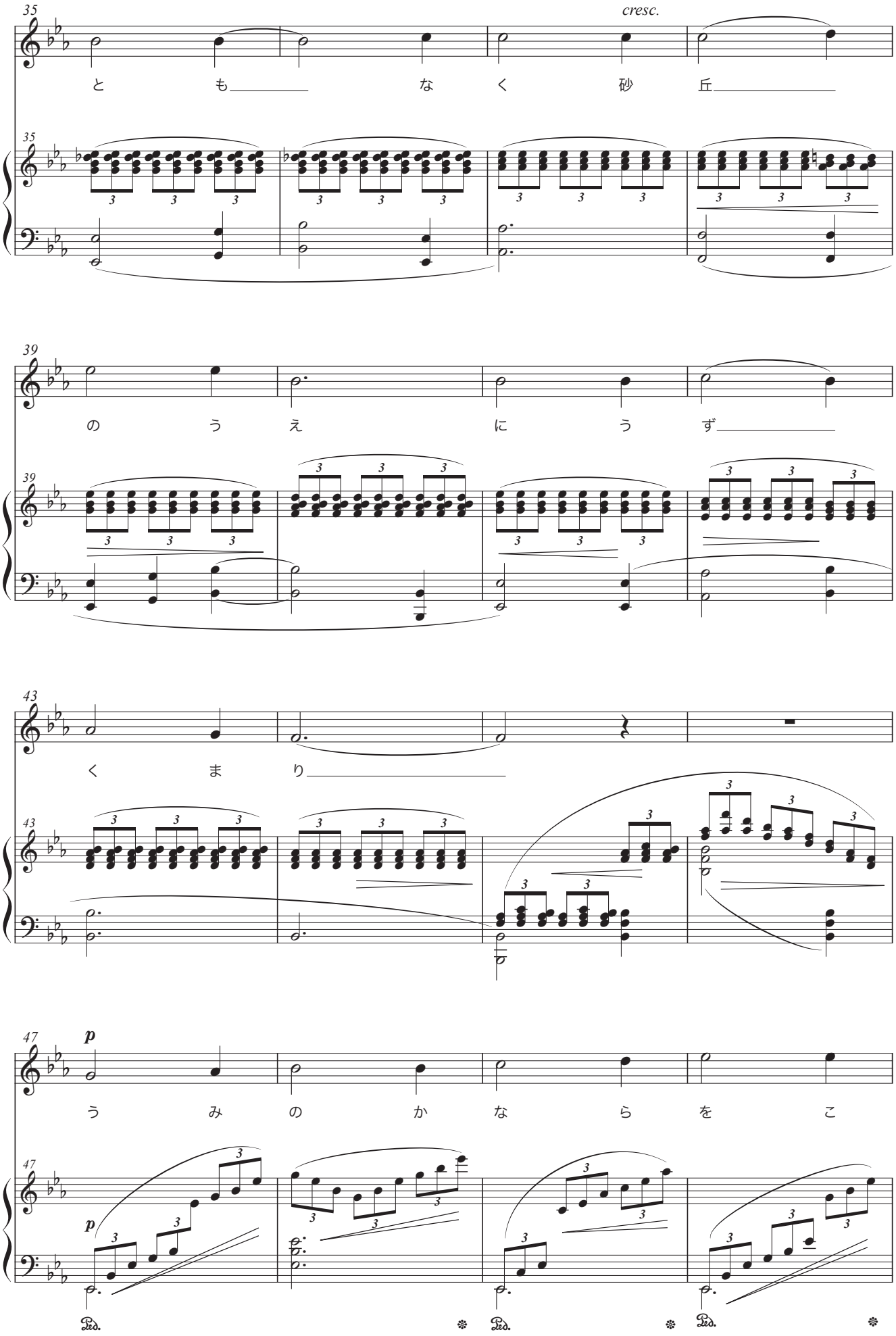
室生犀星　作詞

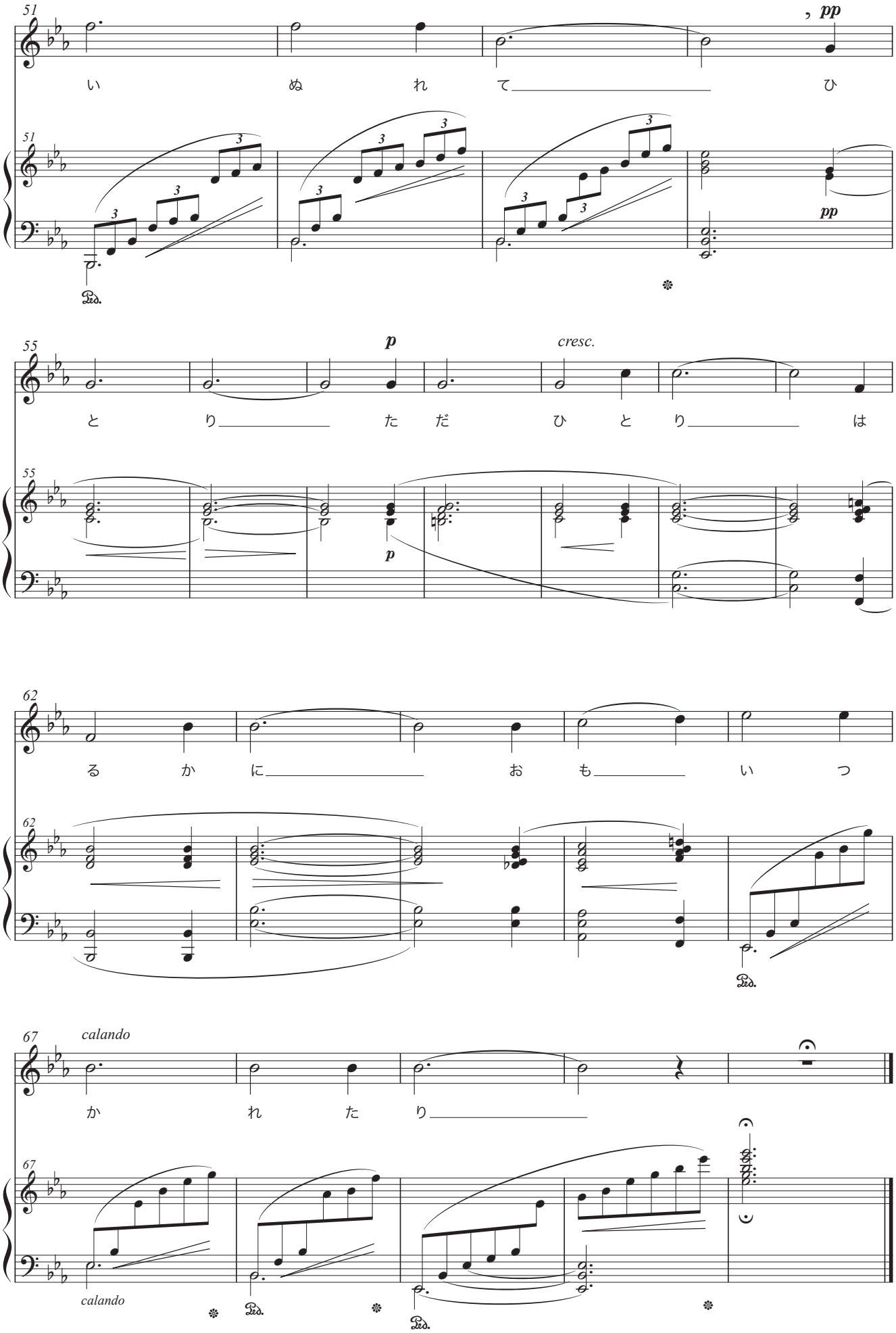
小松耕輔　作曲



©小松耕輔音楽兄弟顕彰会


17
p
と く ひ る が え
21
f
り す ぎ し ひ
26
calme
は う み の か な た に 死
31
calando
p
に う か ぶ お

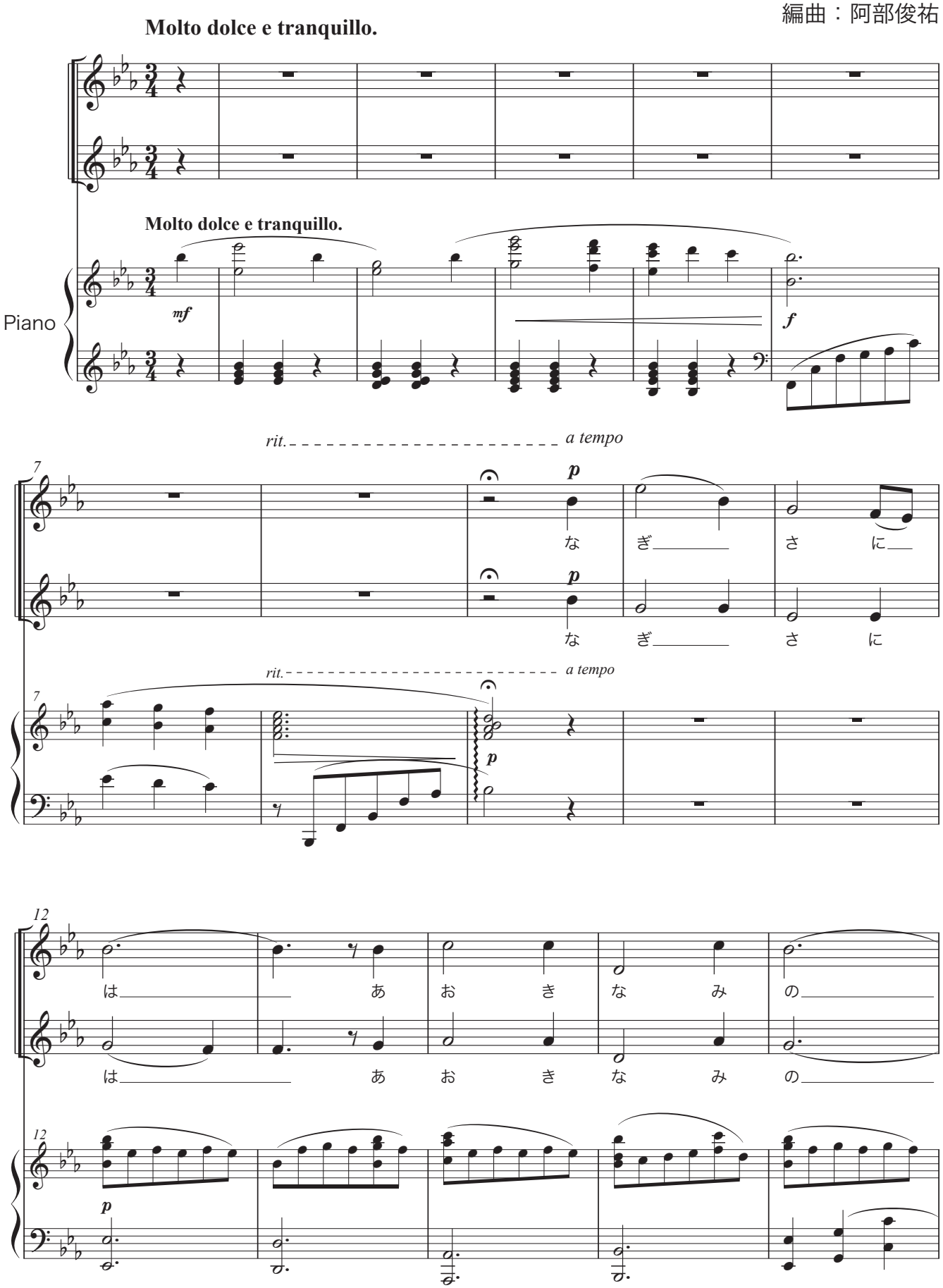

35
cresc.
と も な く 砂 丘
39
の う え に う ず
43
く ま り
47
p
う み の か な ら を こ
Ped.
Ped.
Ped.


51
, pp
い ぬ れ て ひ
pp
Ped.
55
p
cresc.
と り た だ ひ と り は
p
62
る か に お も い つ
Ped.
67
calandо
か れ た り
calando
Ped.
Ped.

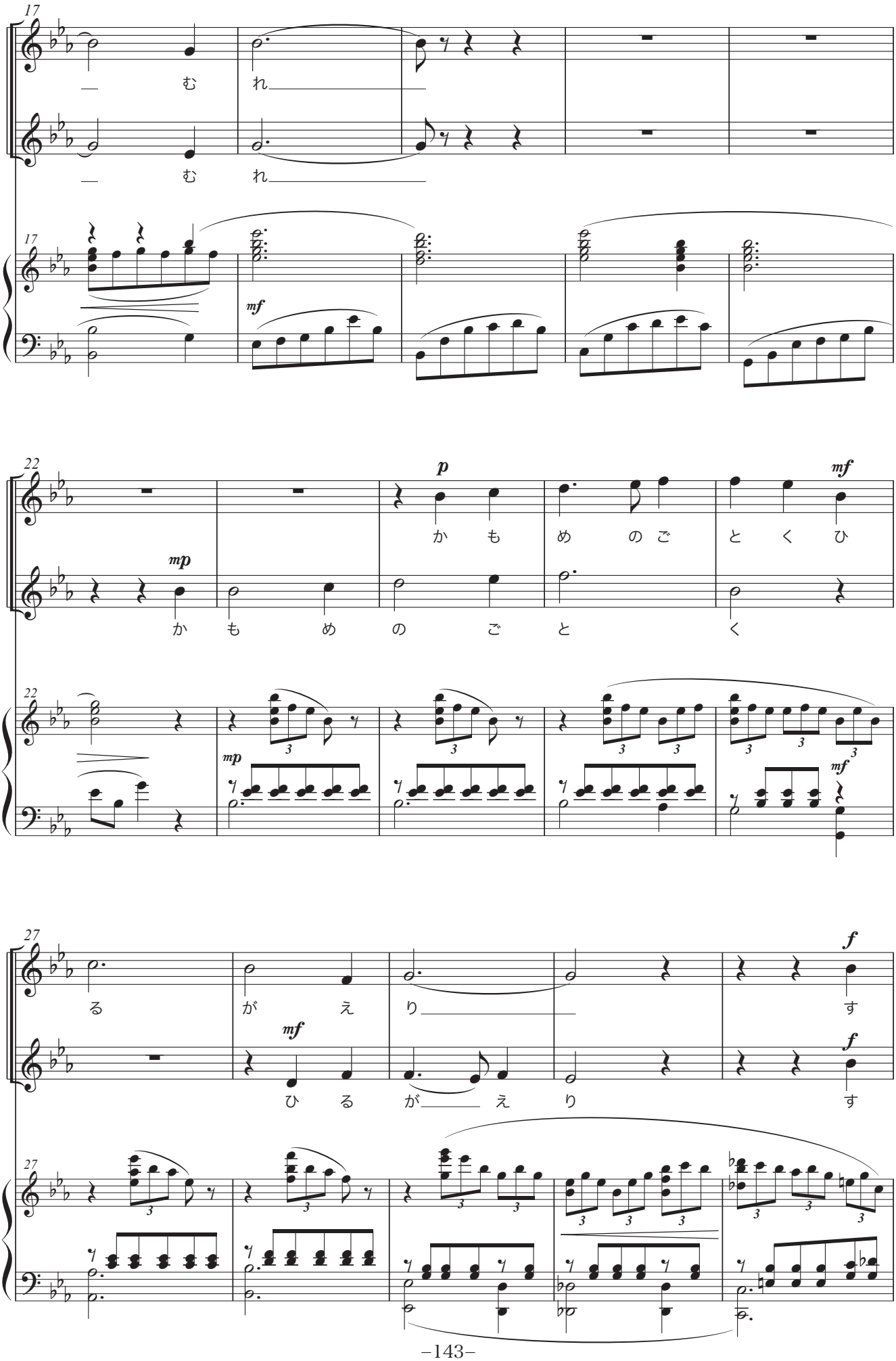
砂丘の上

同声二部合唱版（原調）

作曲：小松耕輔
作詞：室生犀星
編曲：阿部俊祐

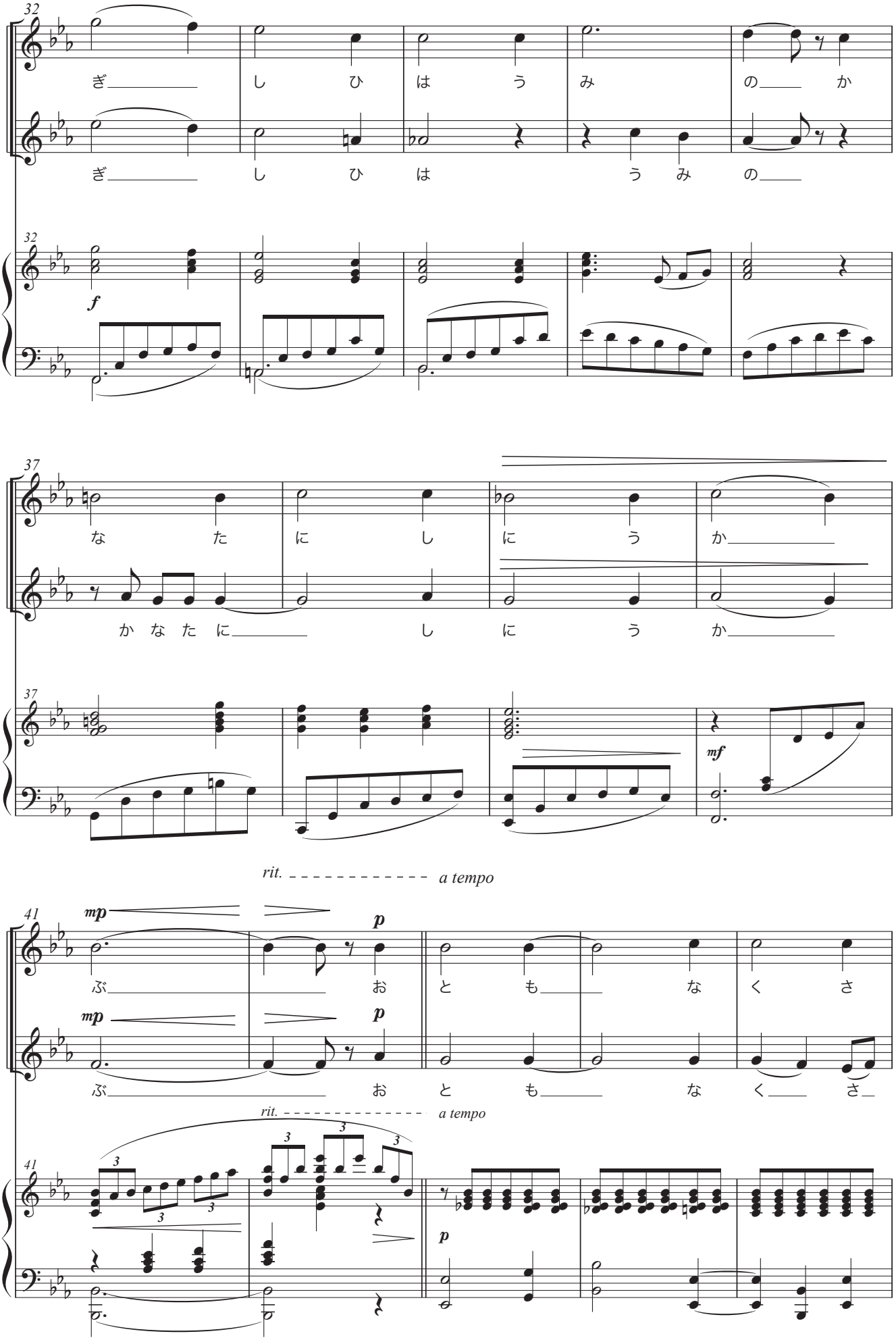


©小松耕輔音楽兄弟顕彰会


17
— む れ
— む れ
mf
22
mp
p
mf
か も め の ご と く ひ
か も め の ご と く
mp
mf
27
mf
f
る が え り す
ひ る が え り す
f

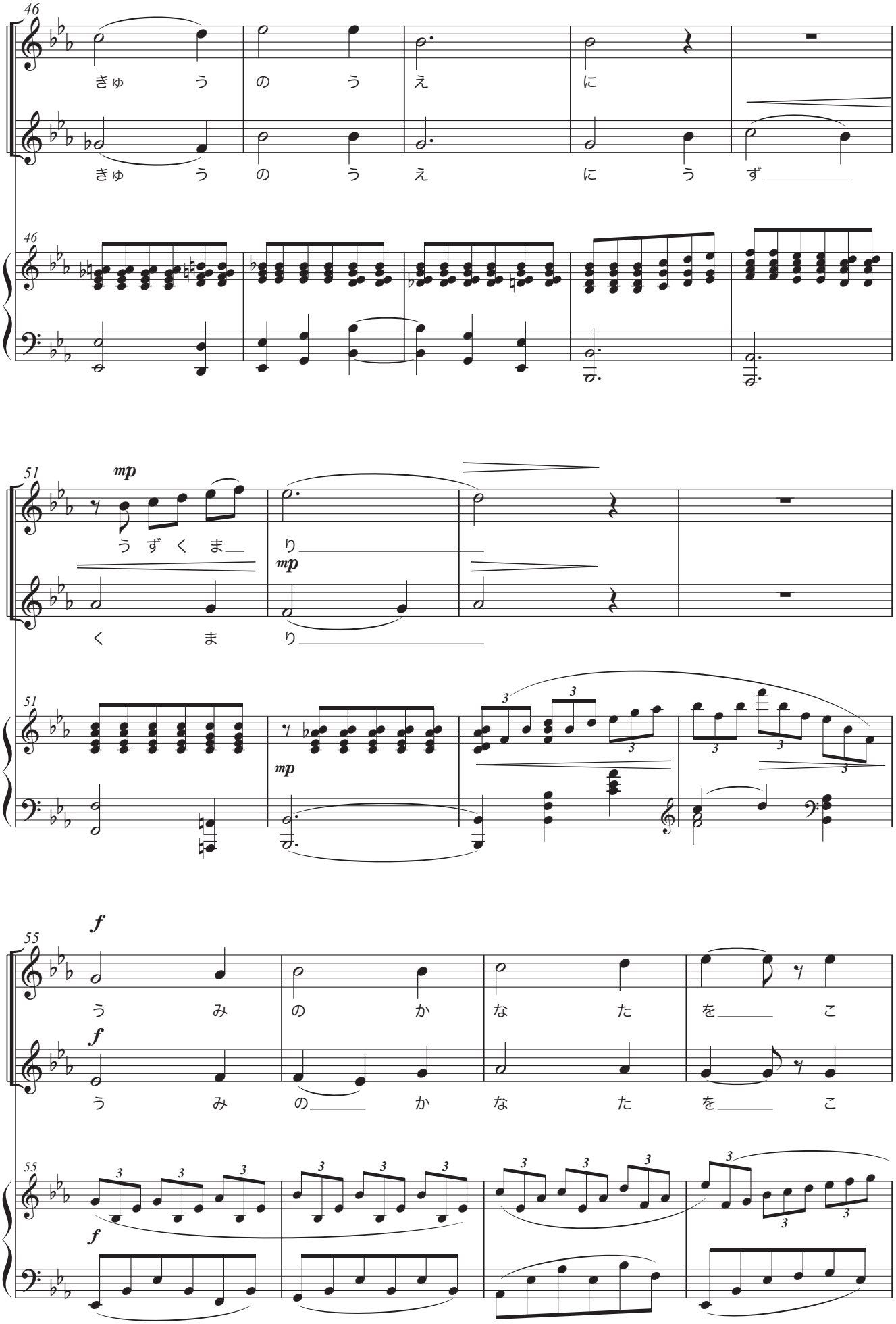
砂丘の上

同声二部合唱版（原調）



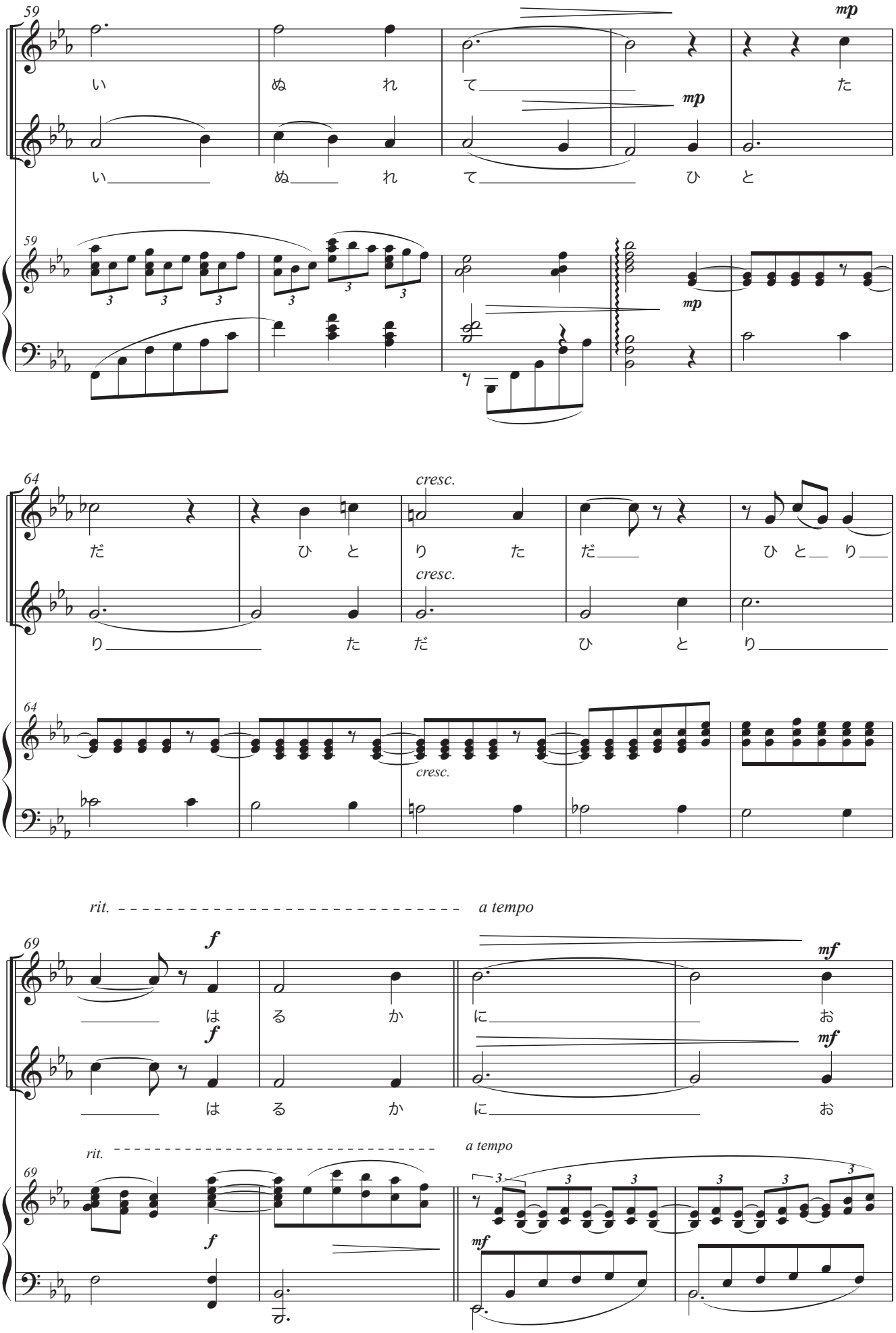
砂丘の上

同声二部合唱版（原調）



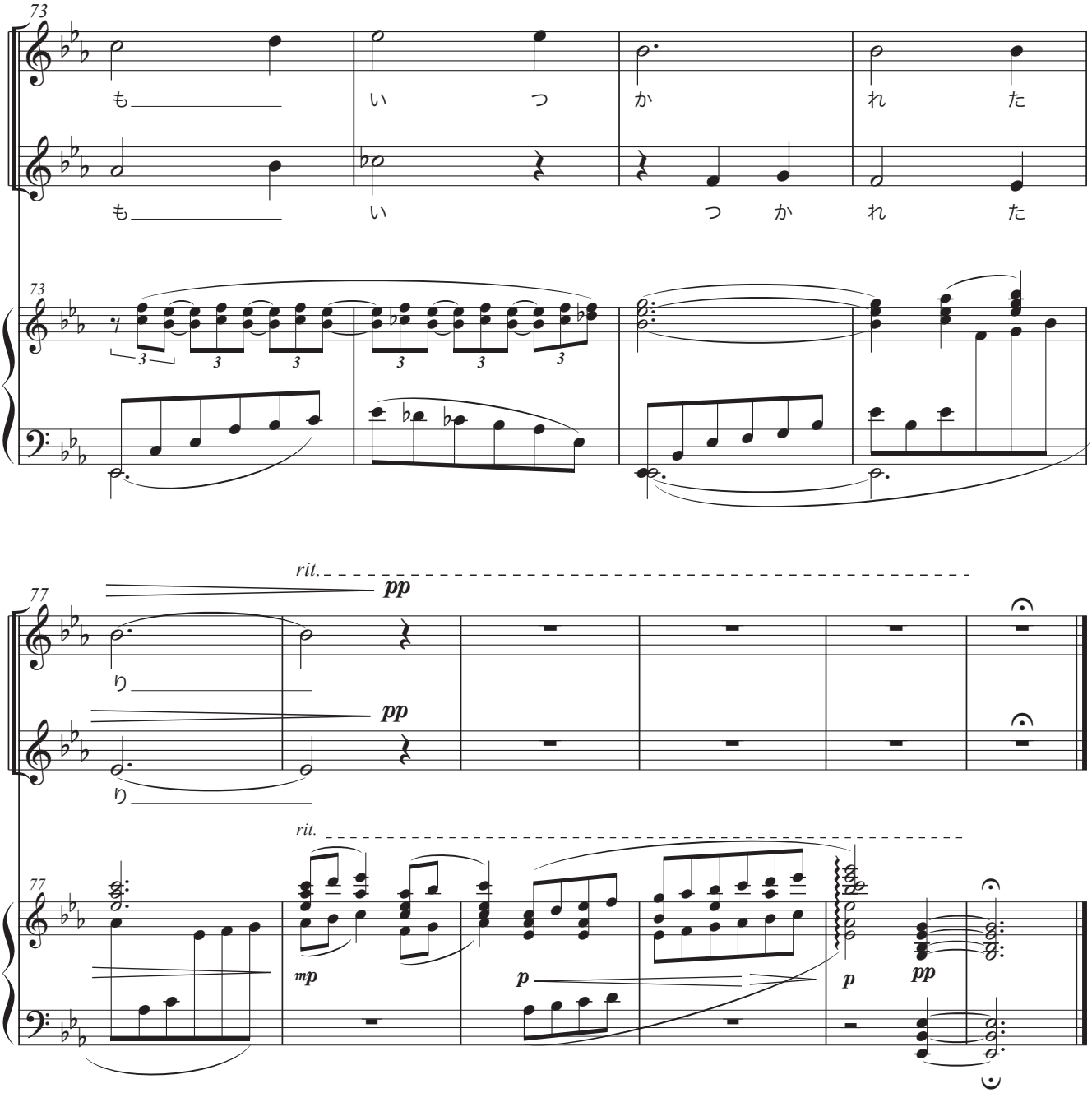
砂丘の上

同声二部合唱版（原調）



砂丘の上

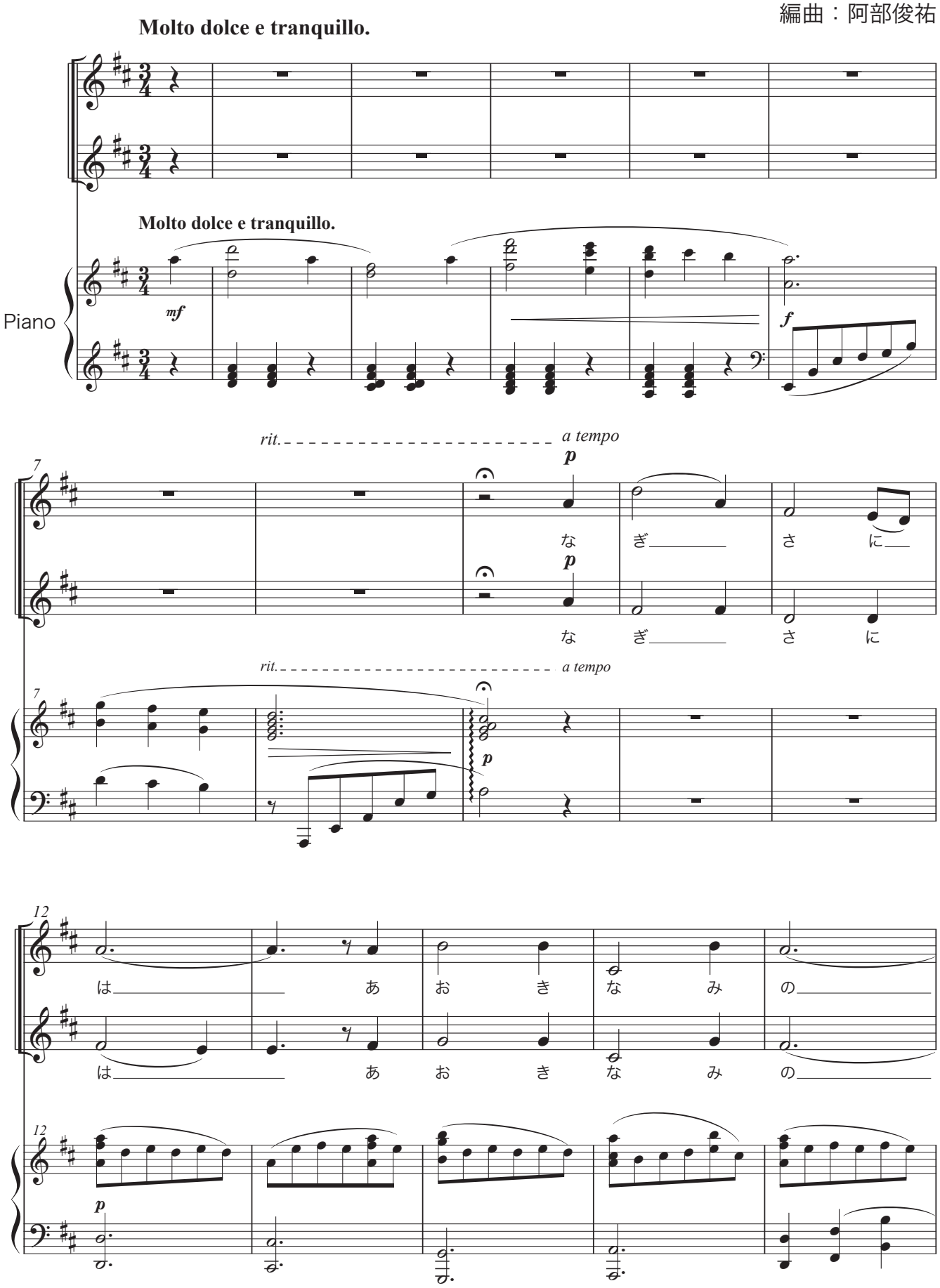
同声二部合唱版（原調）



砂丘の上

同声二部合唱版（移調）

作曲：小松耕輔
作詞：室生犀星
編曲：阿部俊祐



©小松耕輔音楽兄弟顕彰会

17

— む れ

— む れ

mf

22

p

mf

mp

か も め の ご と く ひ

か も め の ご と く

mp

mf

27

f

る が え り す

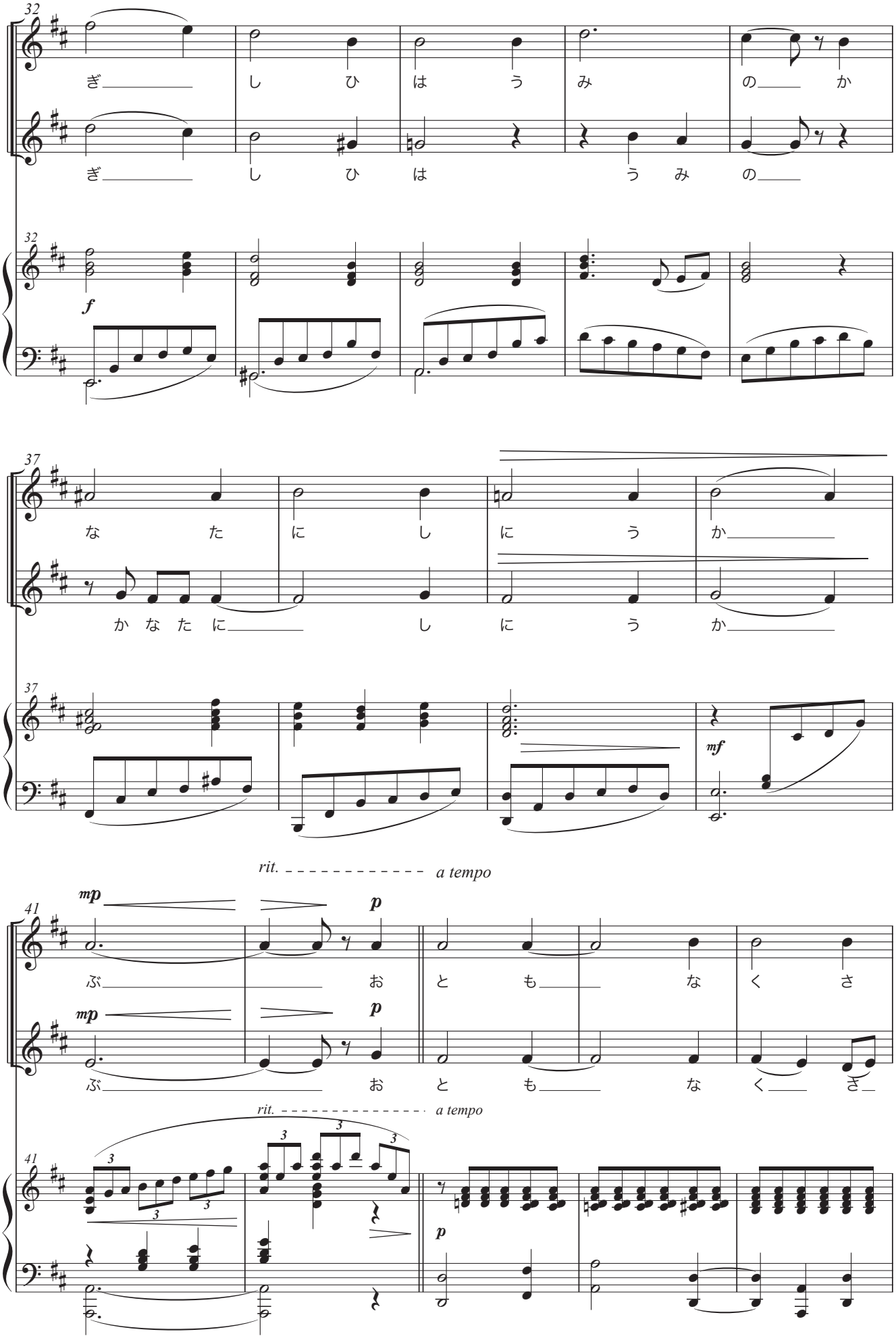
mf

f

ひ る が え り す

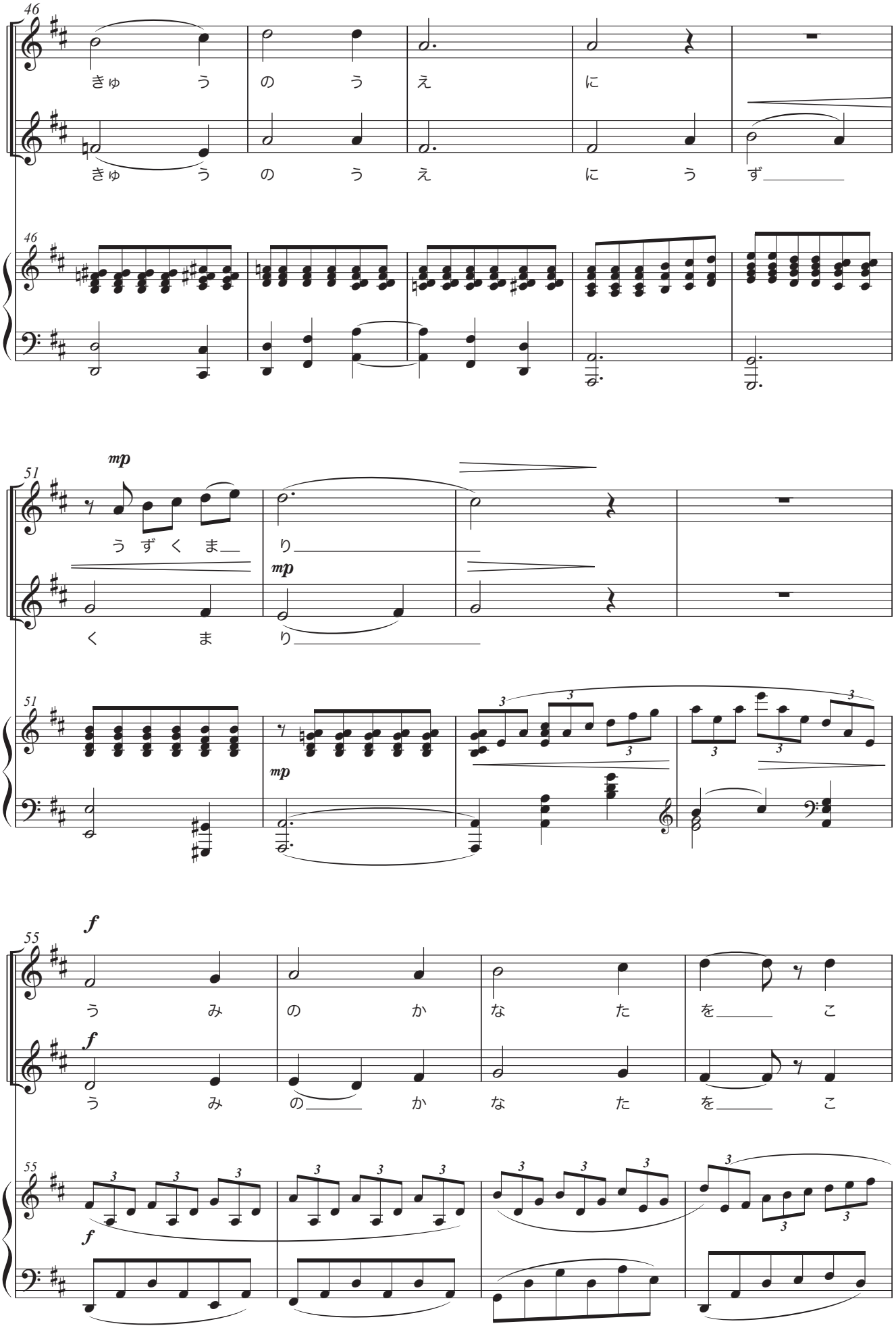
砂丘の上

同声二部合唱版（移調）



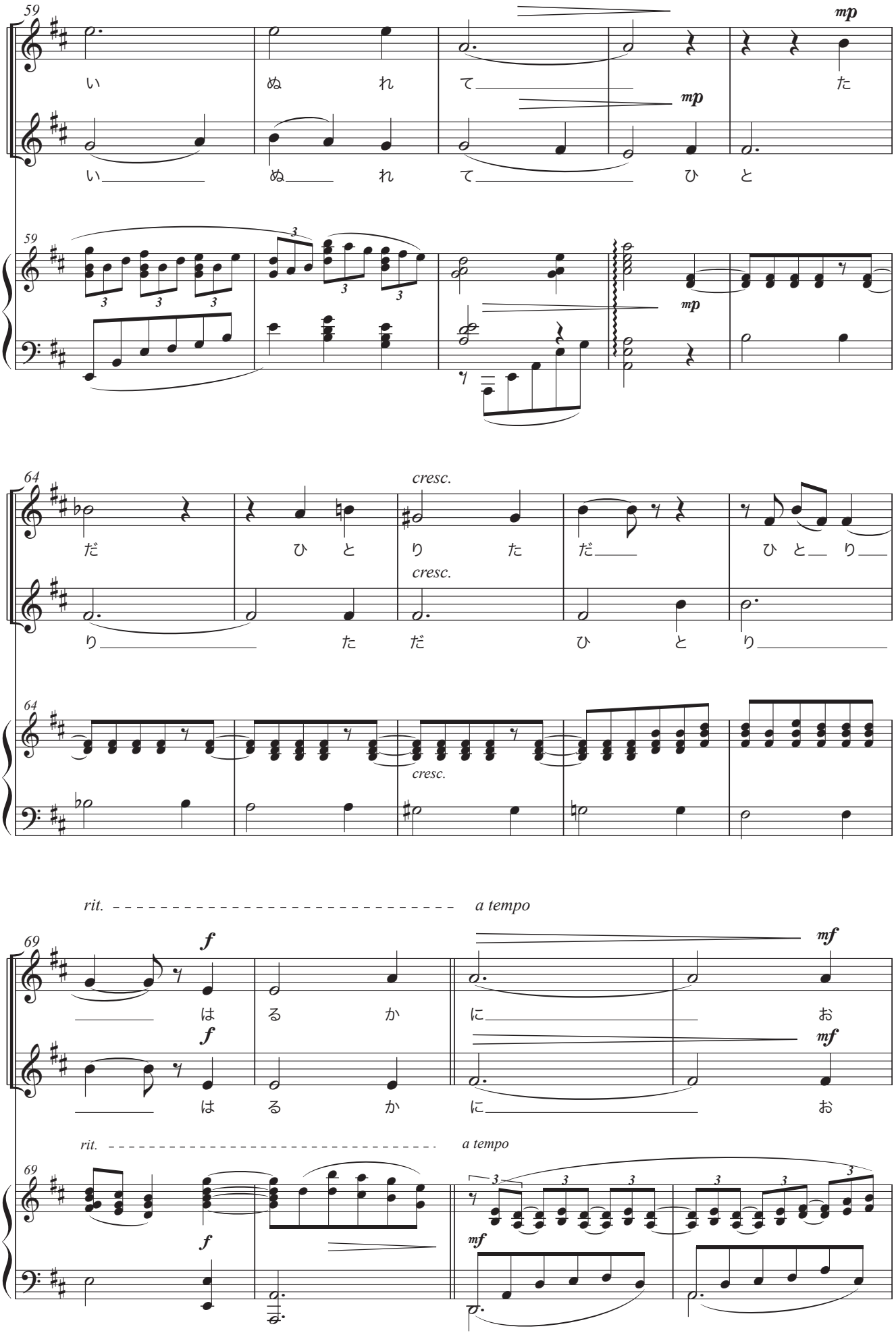
砂丘の上

同声二部合唱版（移調）



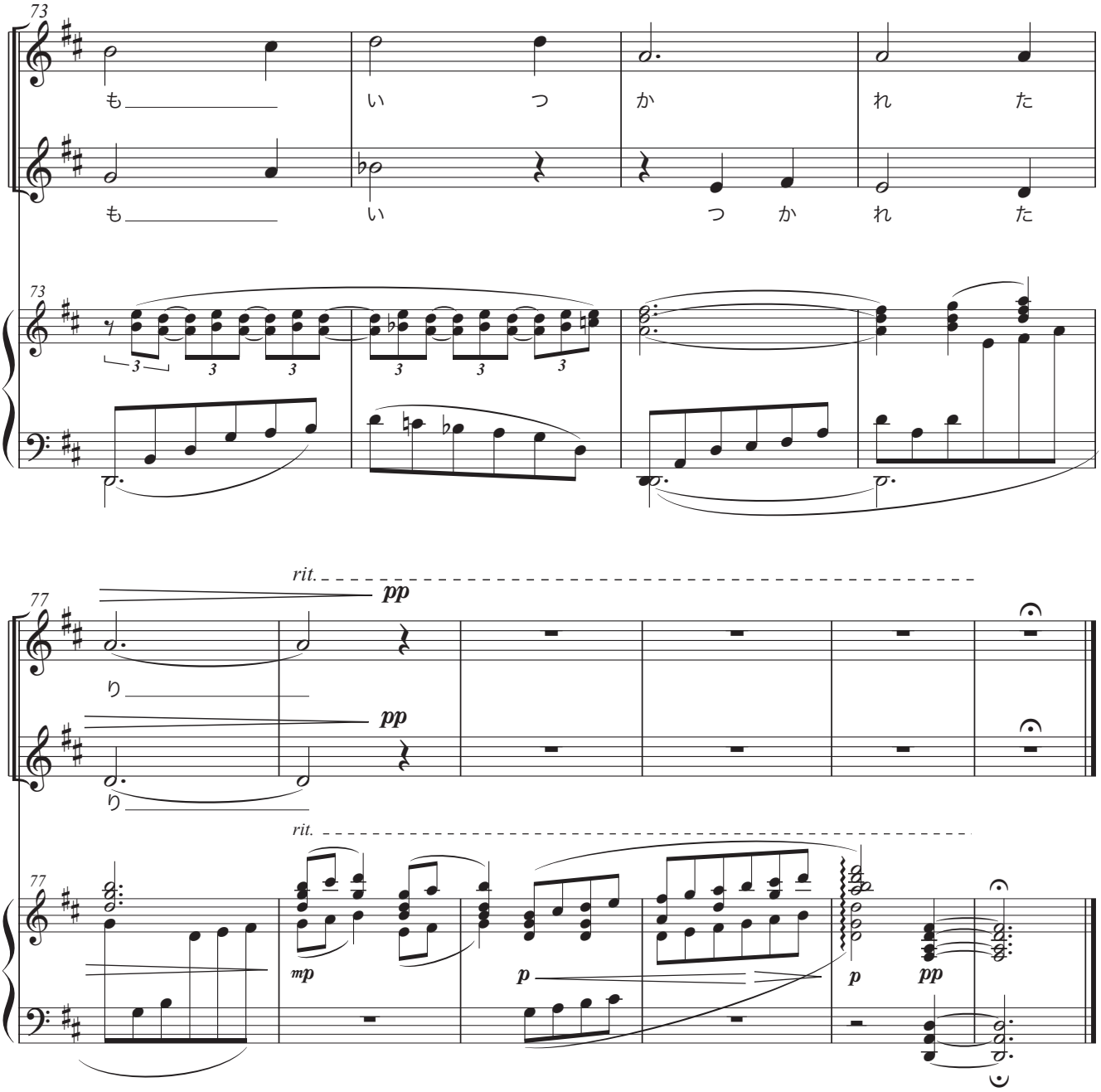
砂丘の上

同声二部合唱版（移調）



砂丘の上

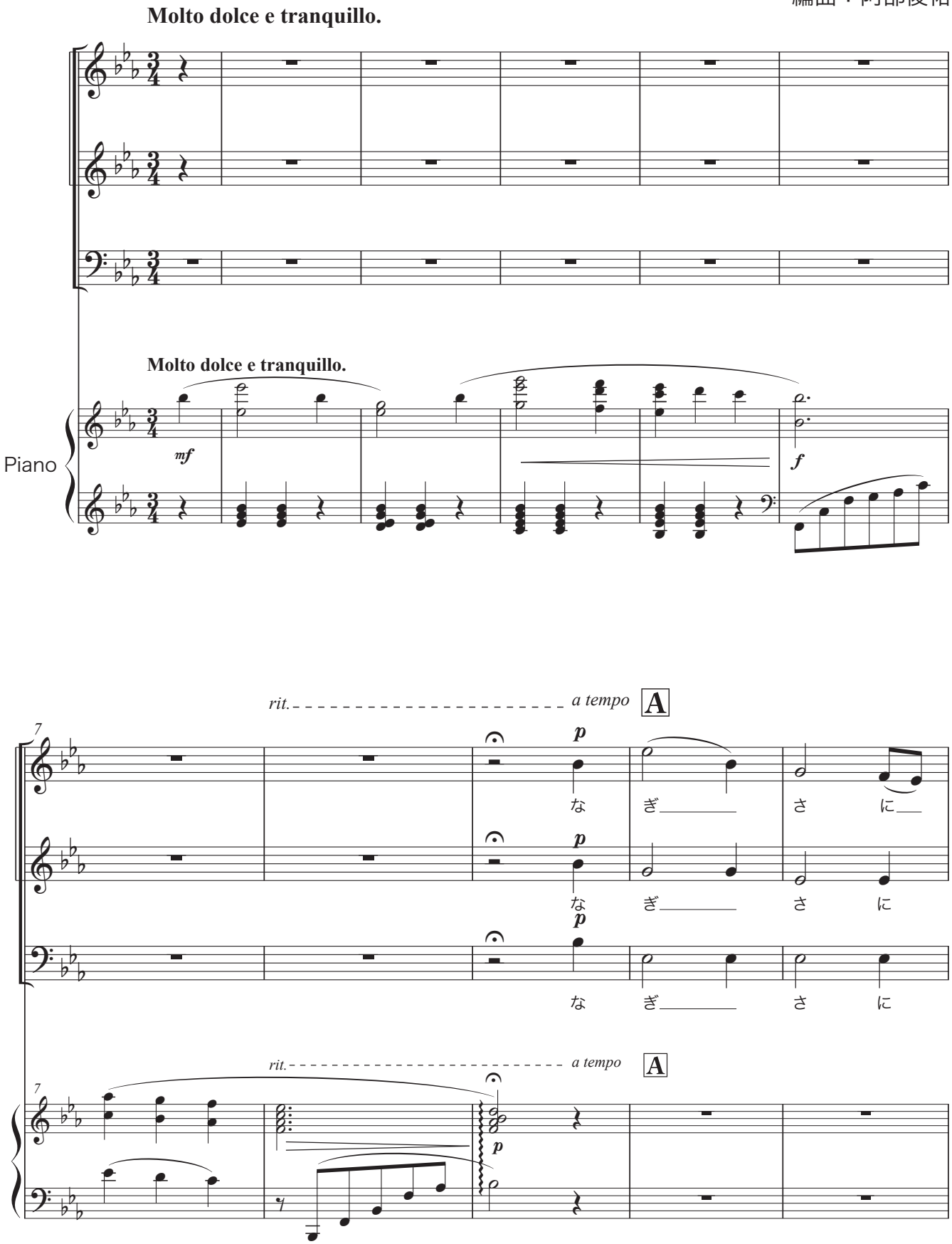
同声二部合唱版（移調）



砂丘の上

混声三部合唱版（原調）

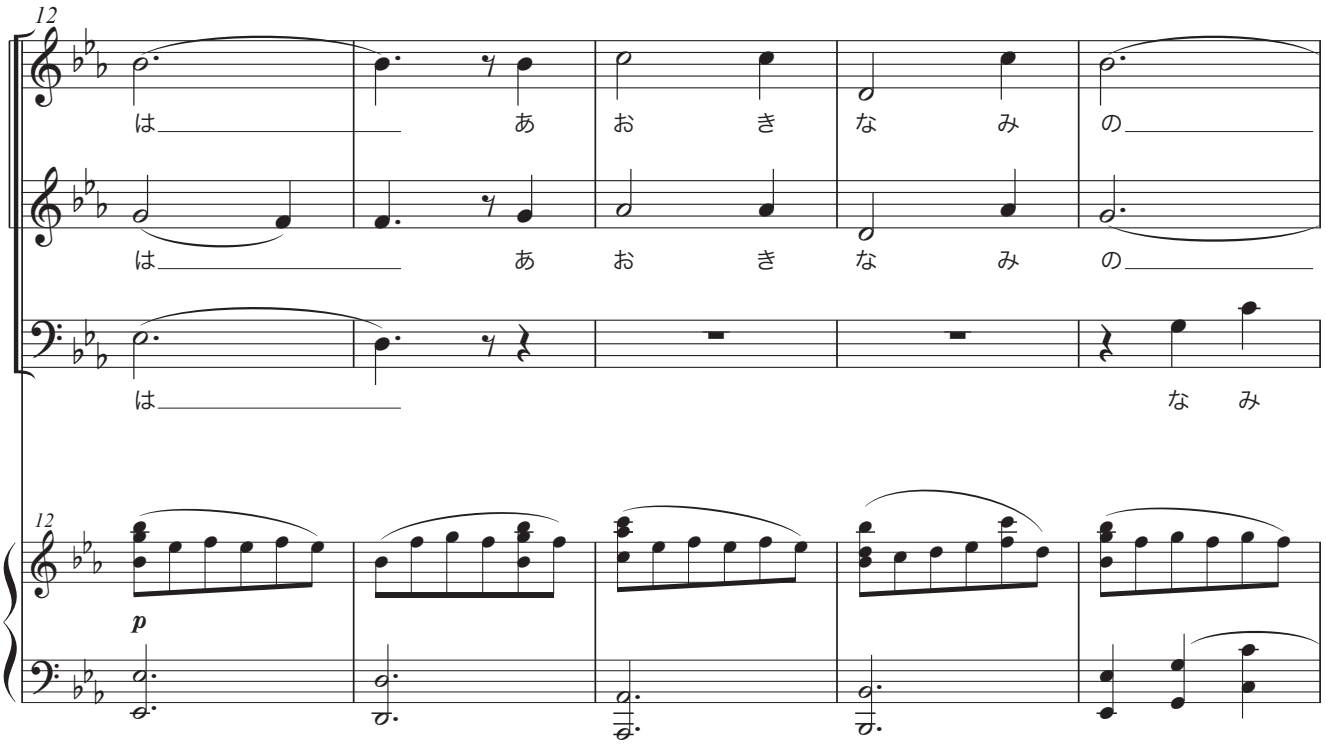
作曲：小松耕輔
作詞：室生犀星
編曲：阿部俊祐

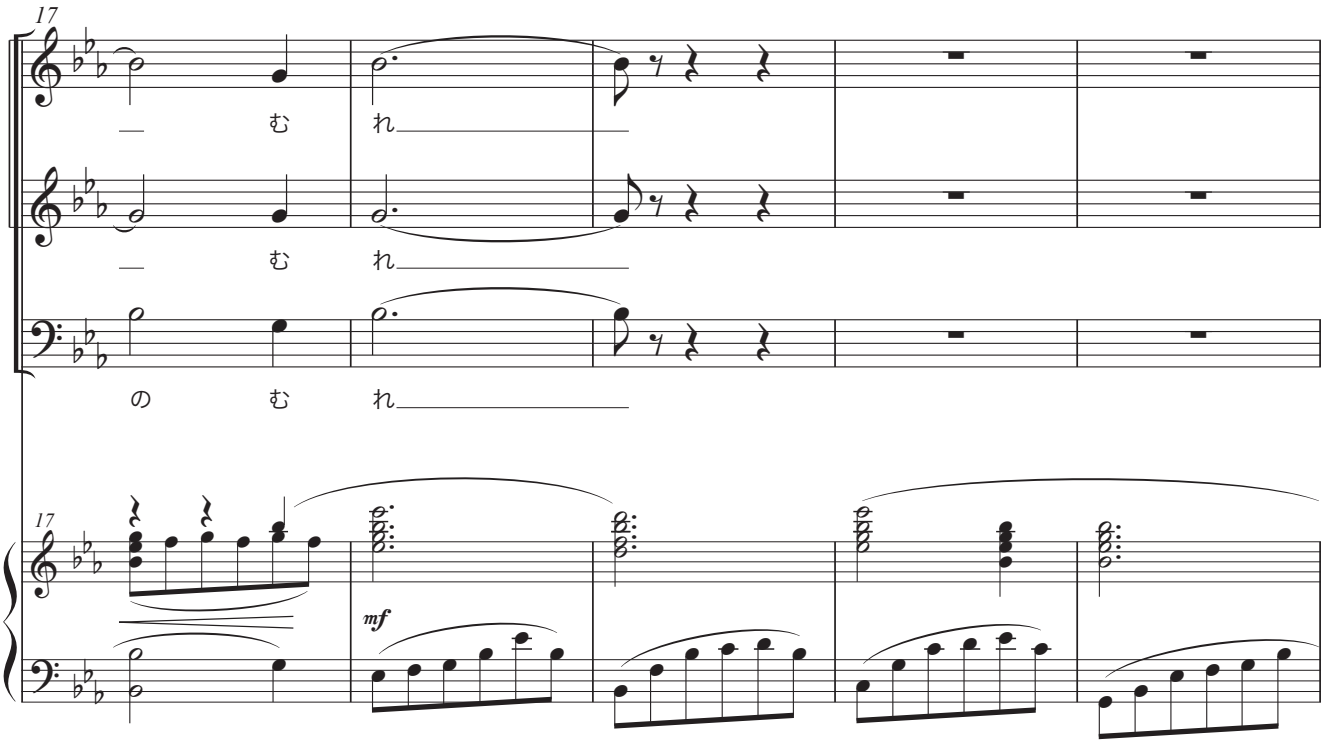


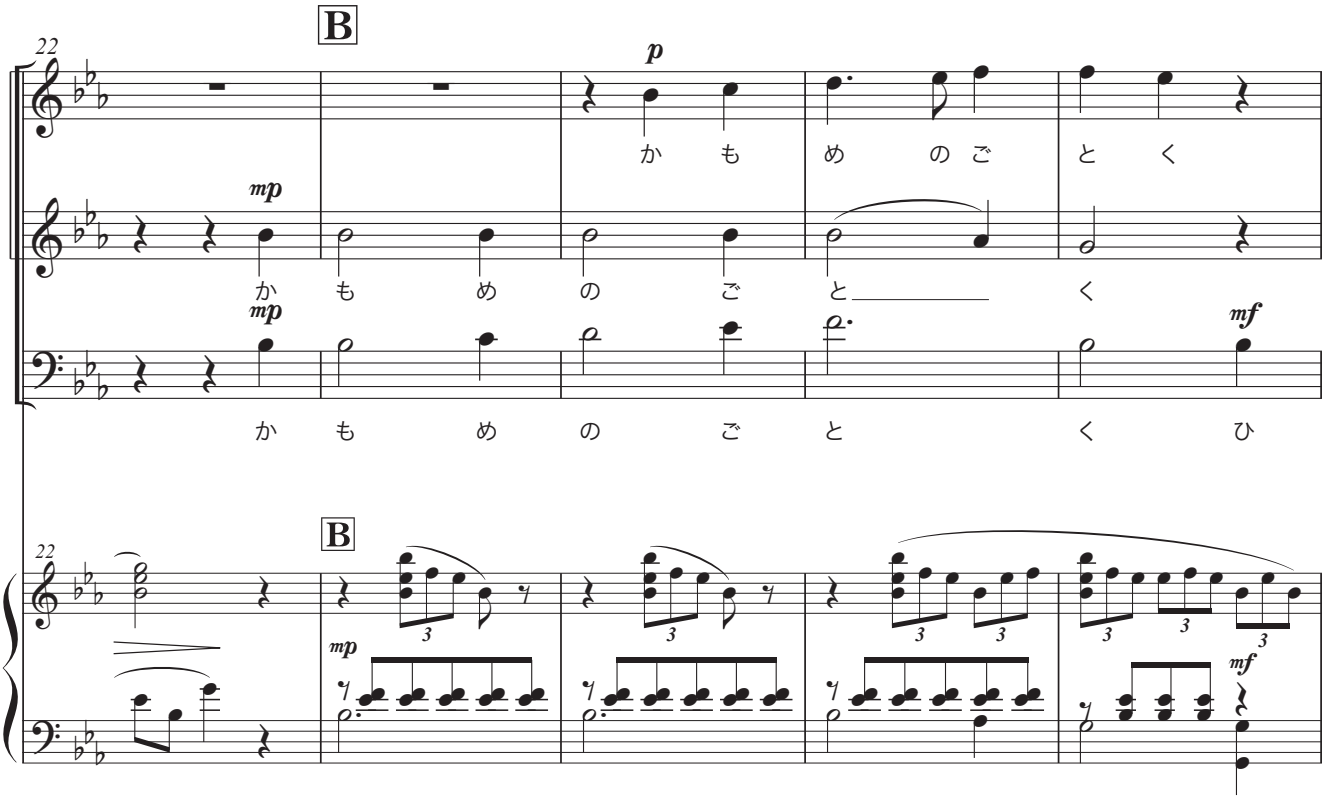
©小松耕輔音楽兄弟顕彰会

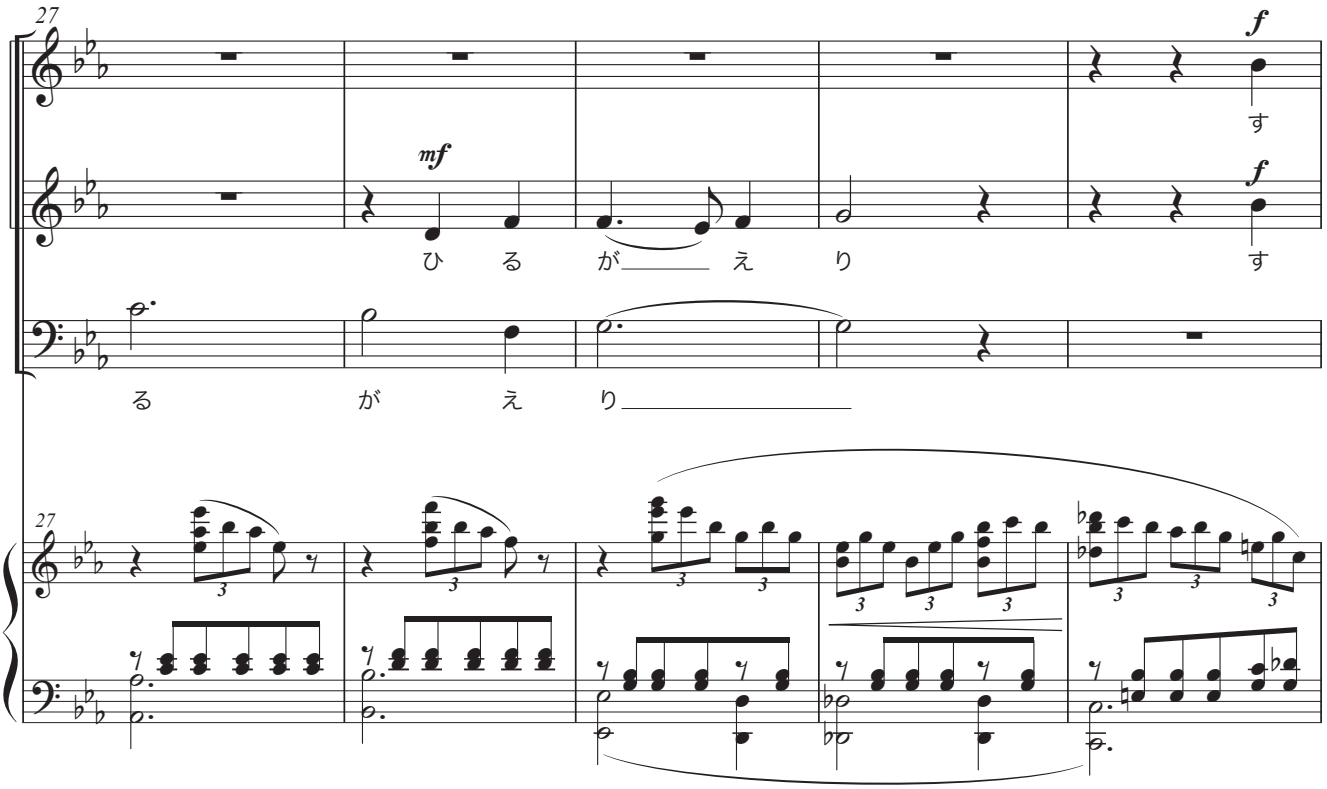
砂丘の上

混声三部合唱版（原調）



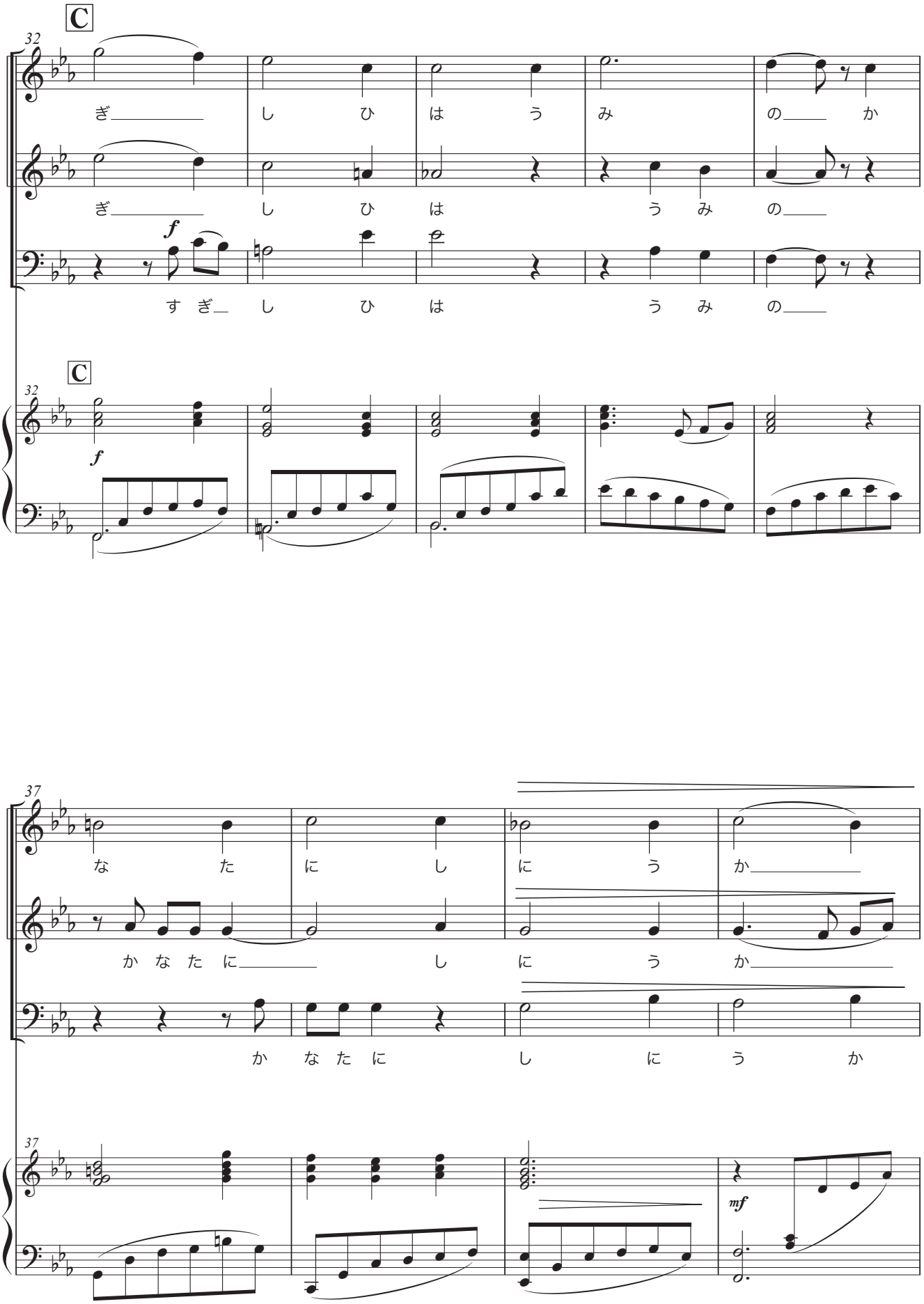



22
B
p
か も め の ご と く
mp
か も め の ご と く
mp
mf
か も め の ご と く ひ
22
B
mp
mf


27
f
す
mf
ひ る が え り
f
す
る が え り
27

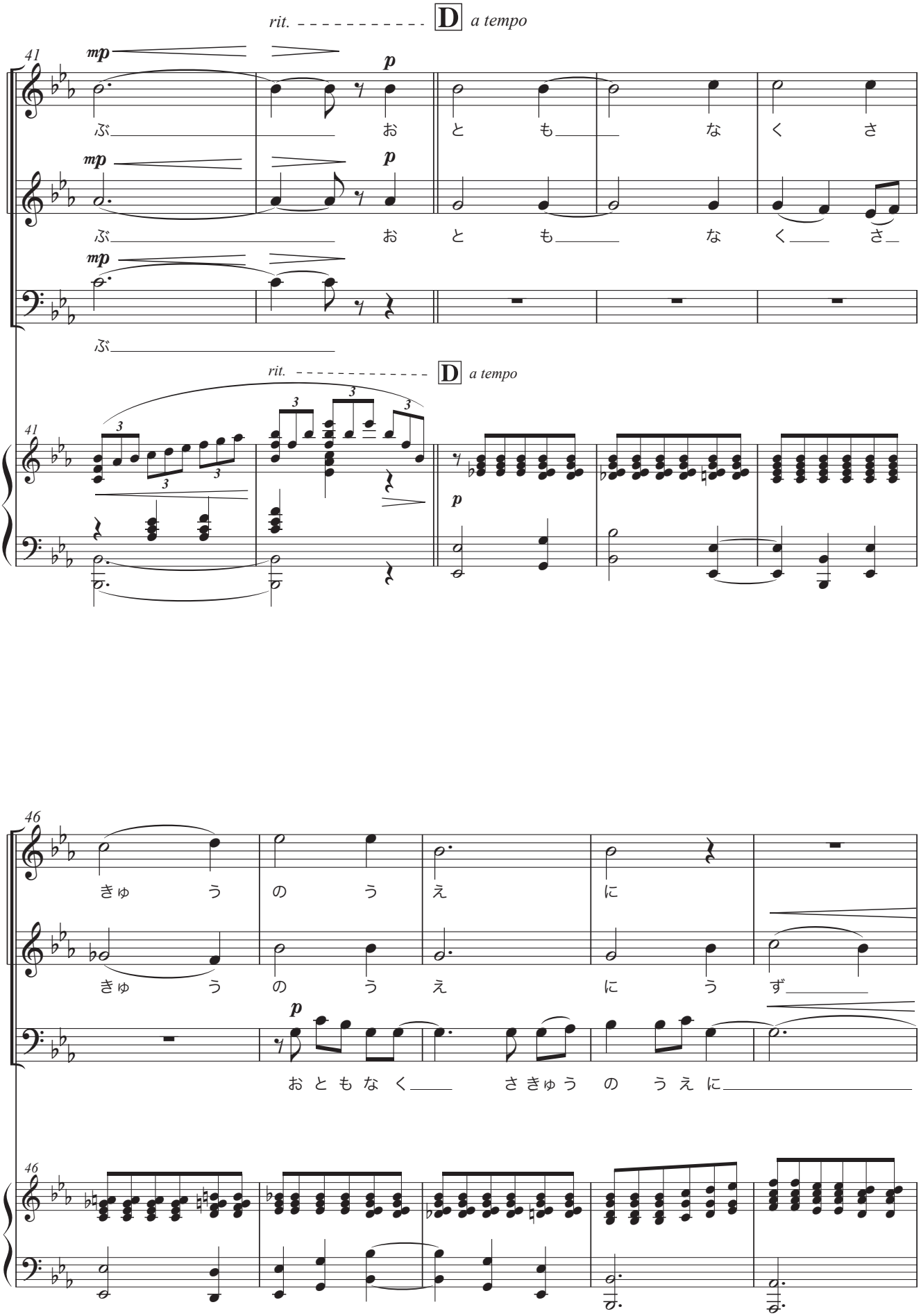
砂丘の上

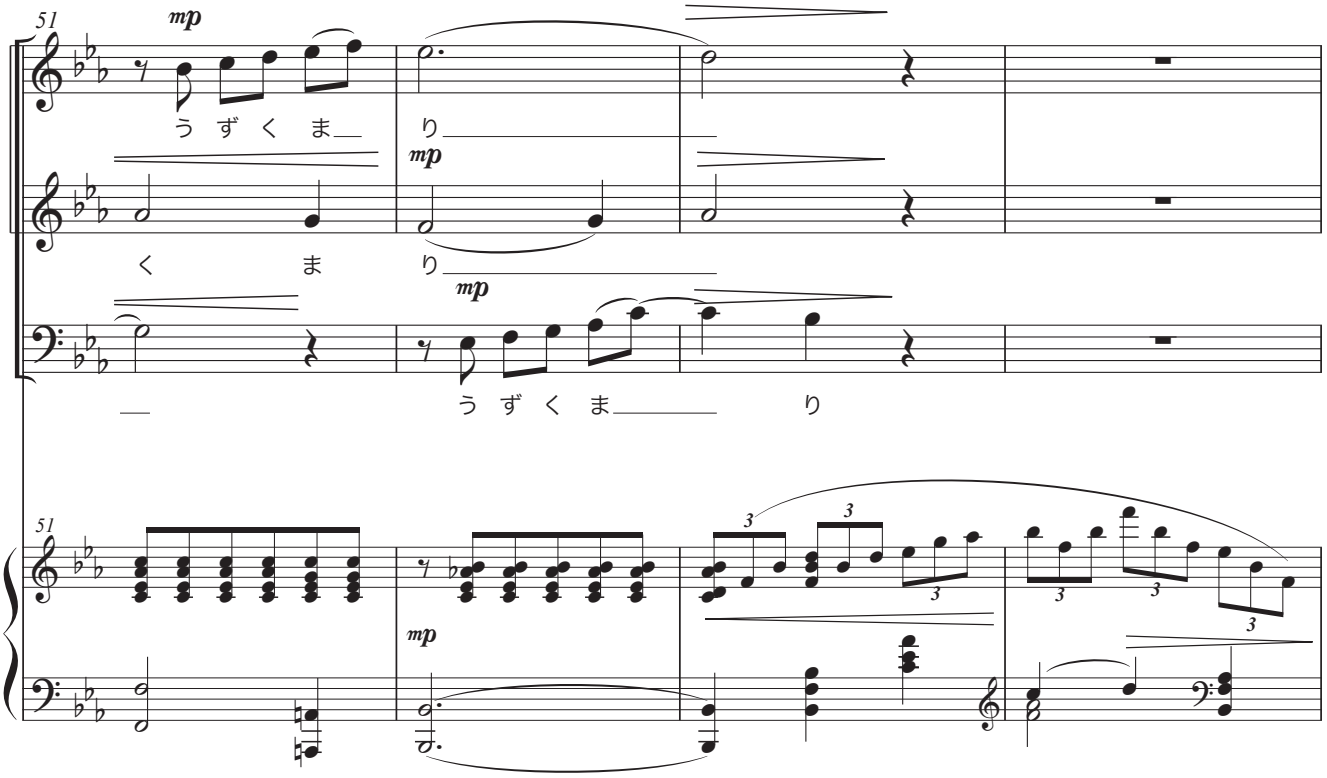
混声三部合唱版（原調）

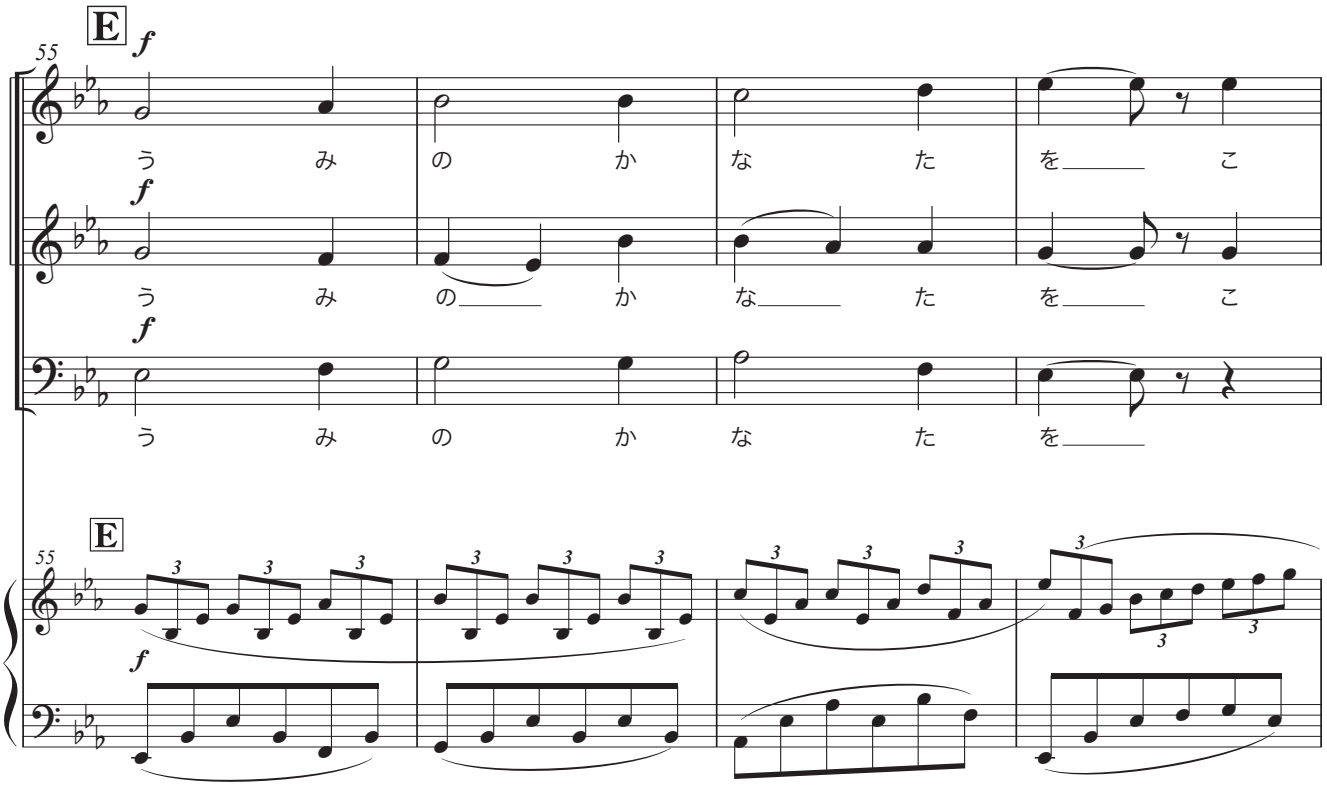


砂丘の上

混声三部合唱版（原調）

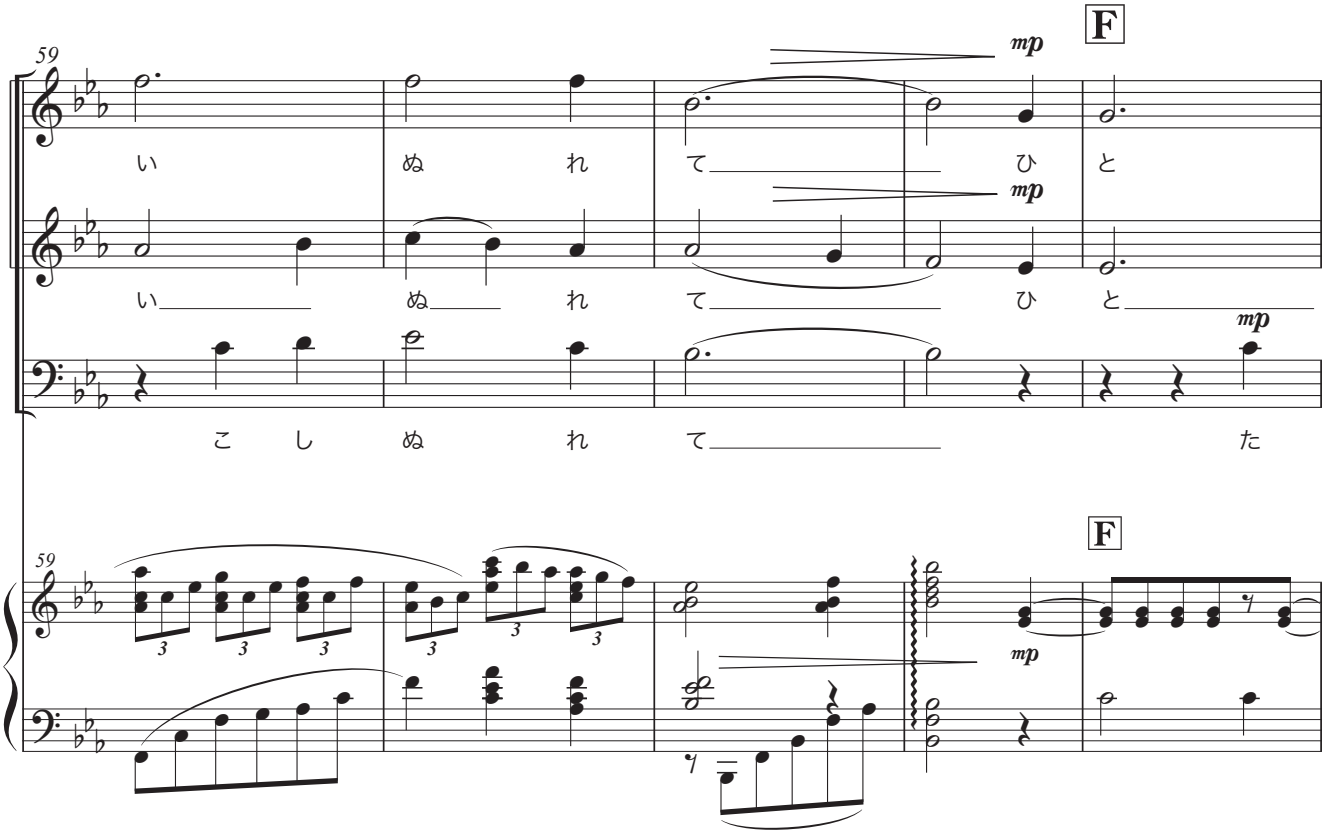


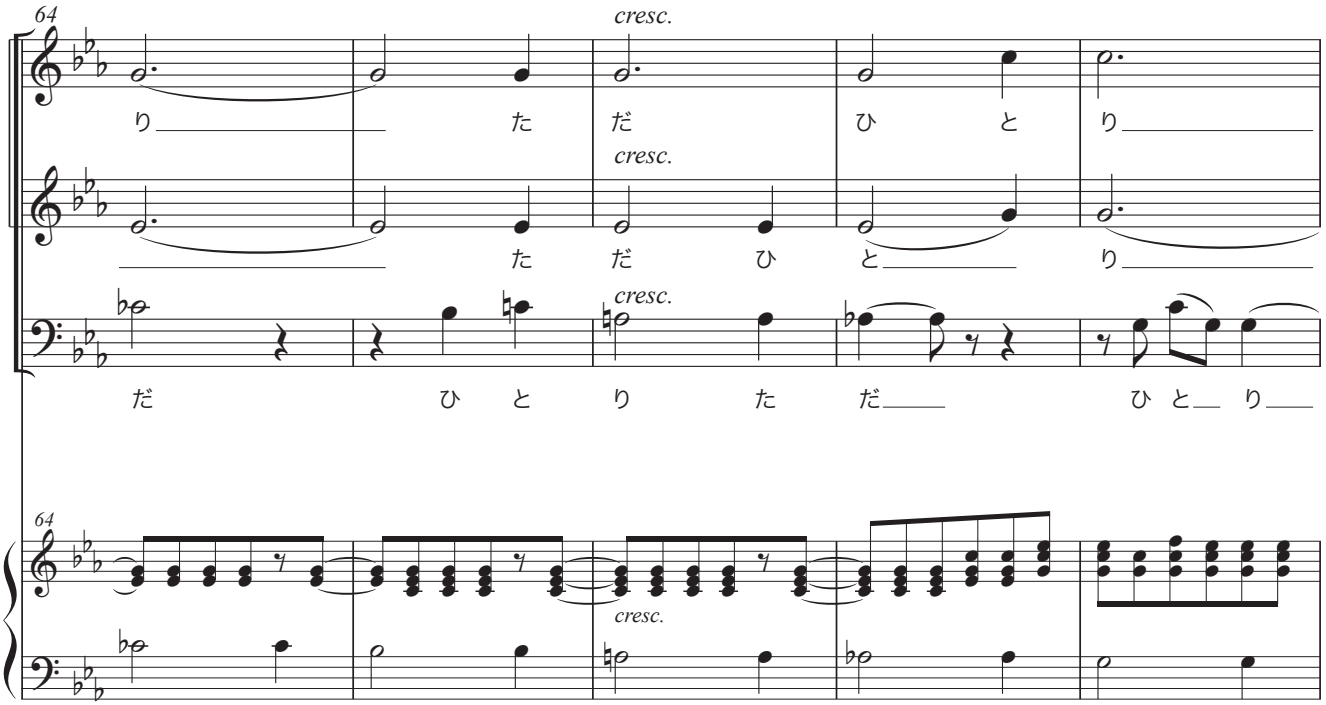

51
mp
う ず く ま り
mp
く ま り
mp
う ず く ま り
51
mp


E
55
f
う み の か な た を こ
f
う み の か な た を こ
f
う み の か な た を
E
55
f

砂丘の上

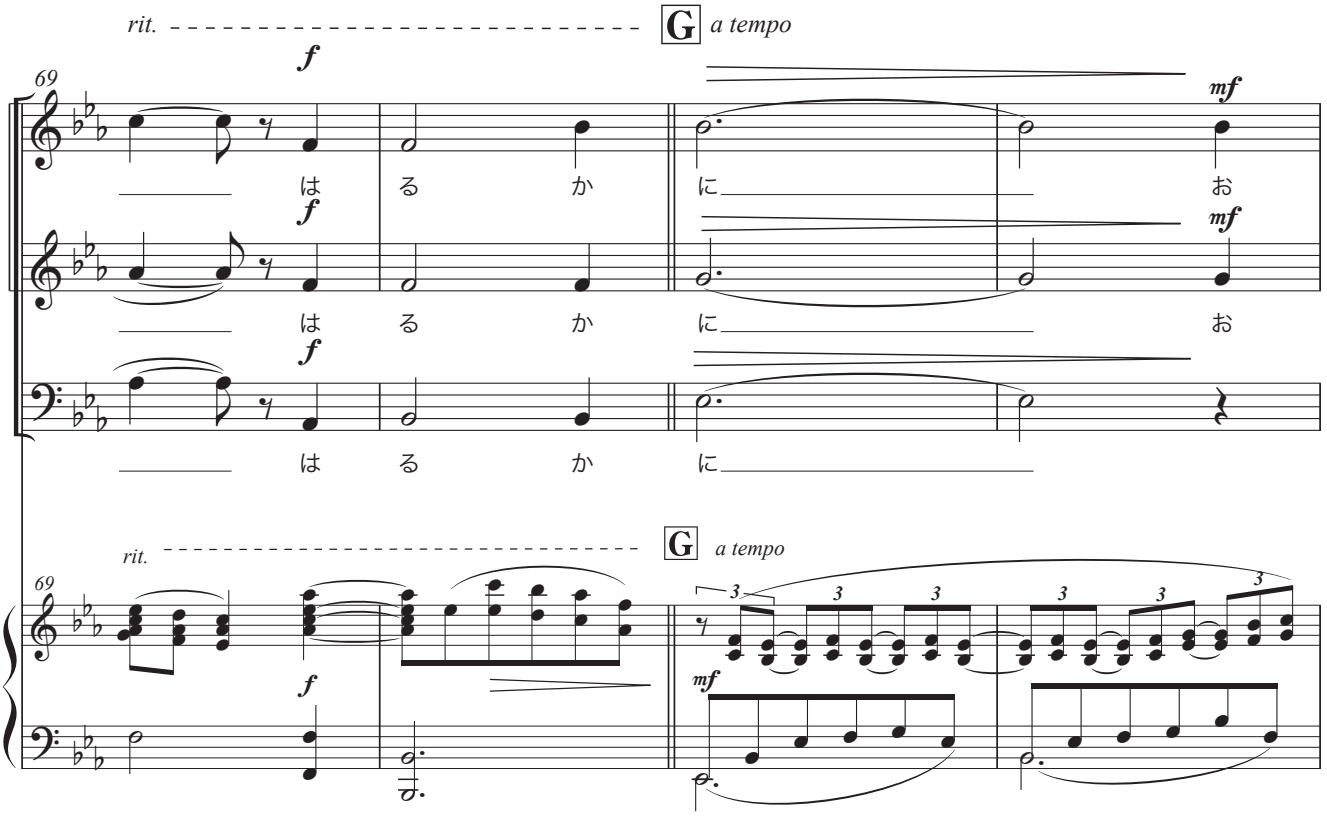
混声三部合唱版（原調）

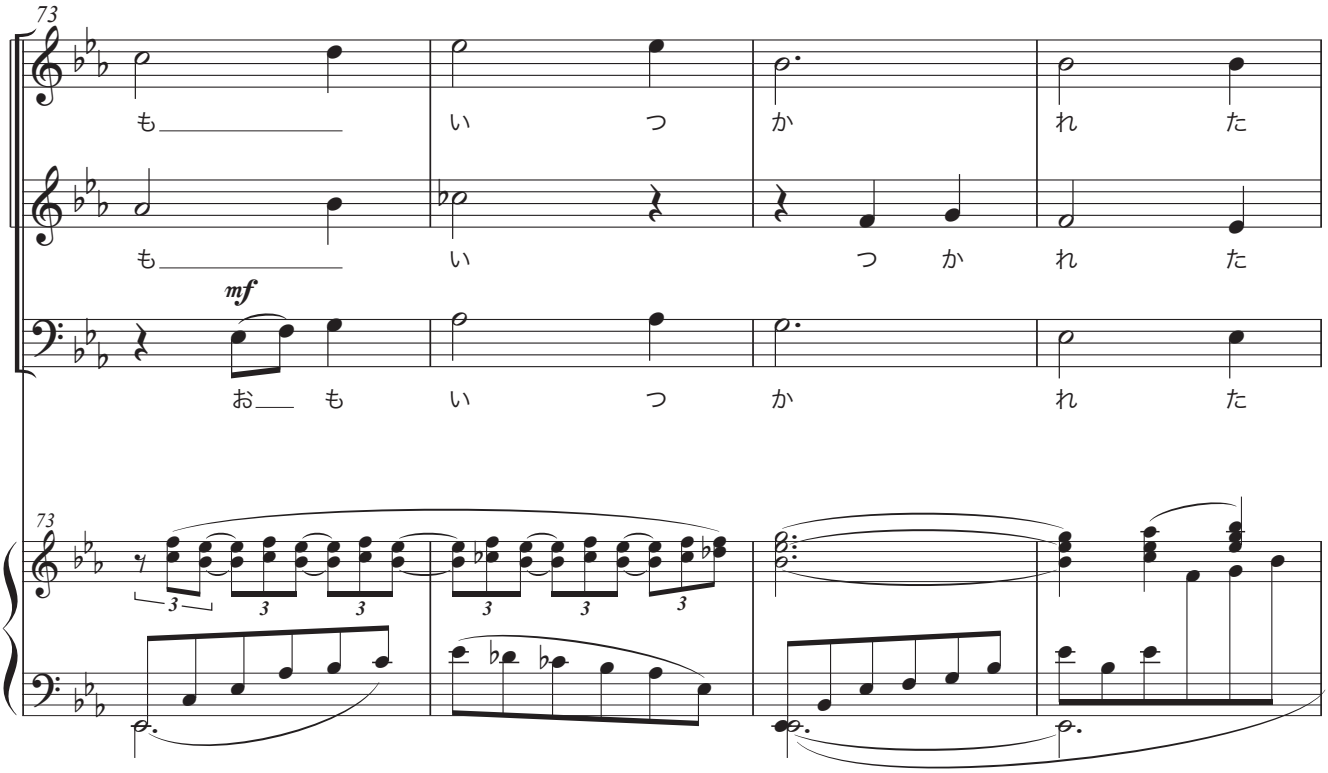




砂丘の上

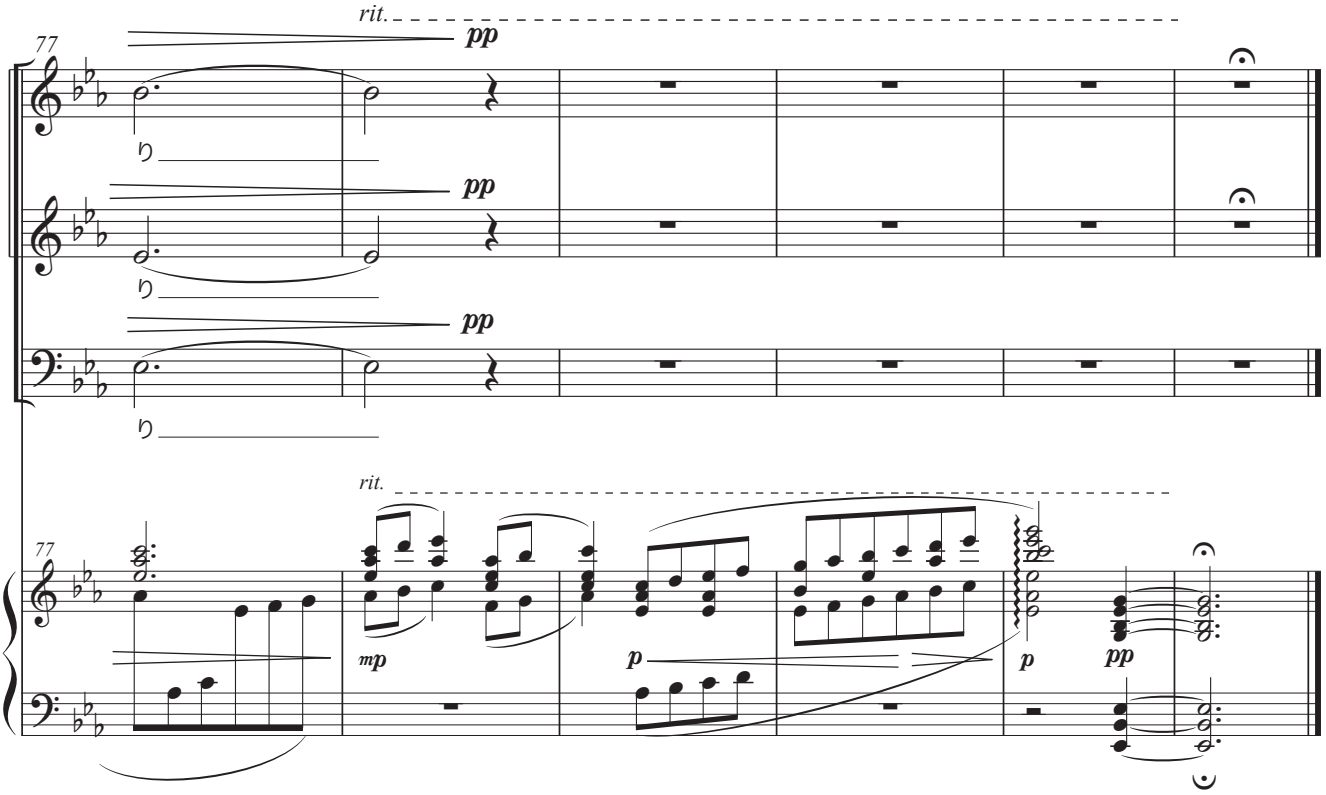
混声三部合唱版（原調）





砂丘の上

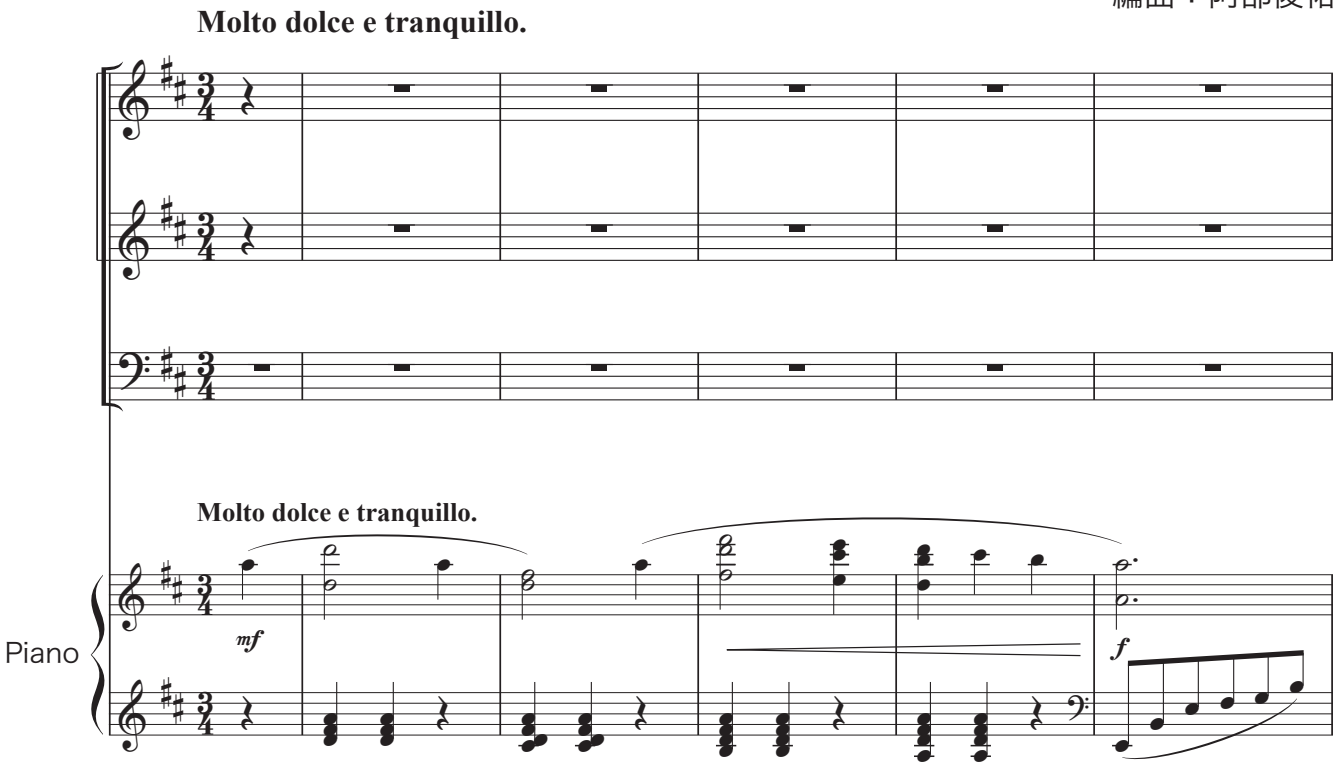
混声三部合唱版（原調）

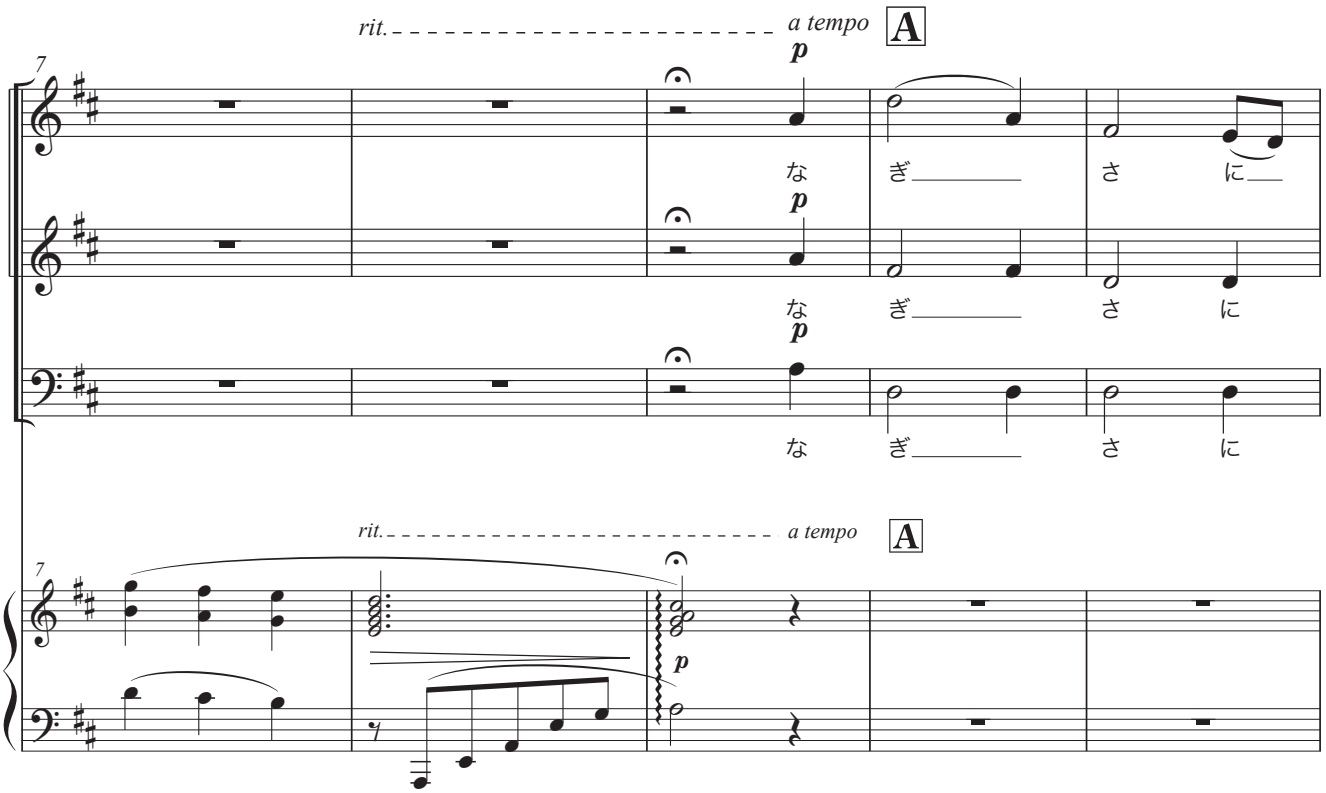


砂丘の上

混声三部合唱版（移調）

作曲：小松耕輔
作詞：室生犀星
編曲：阿部俊祐

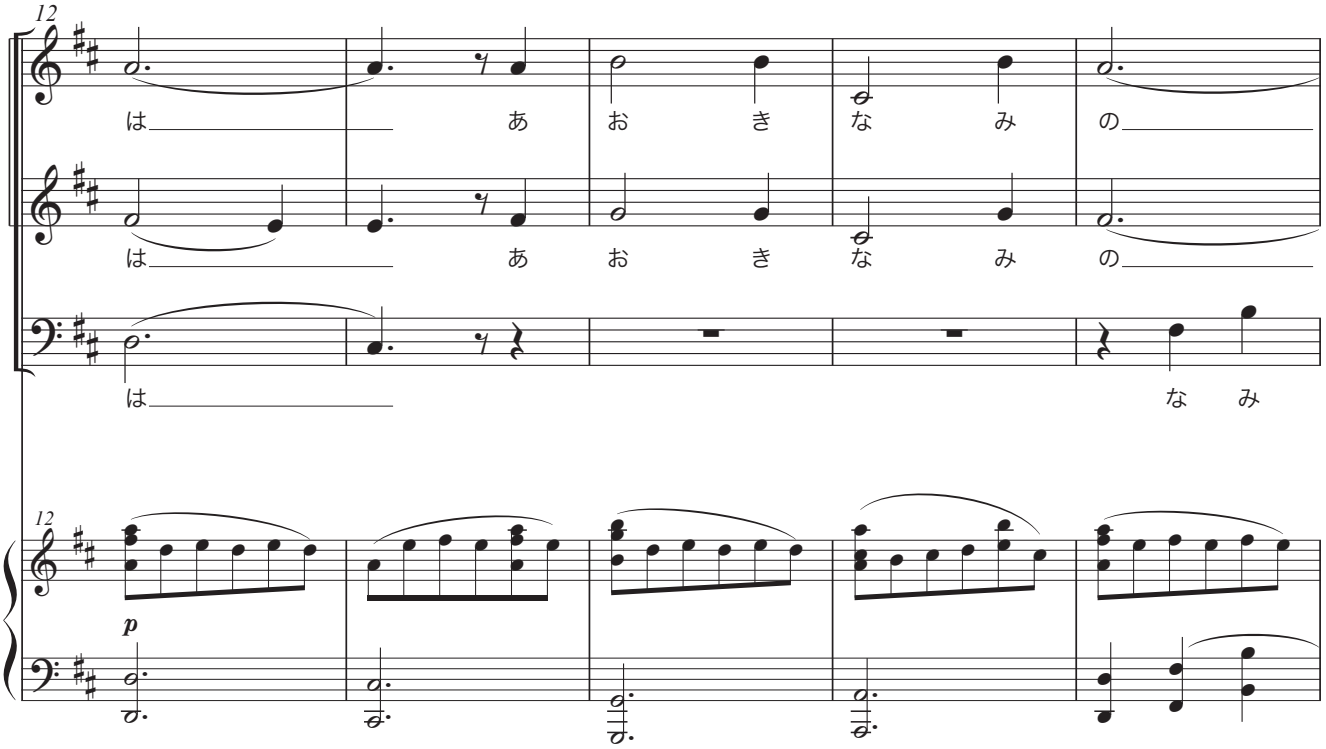


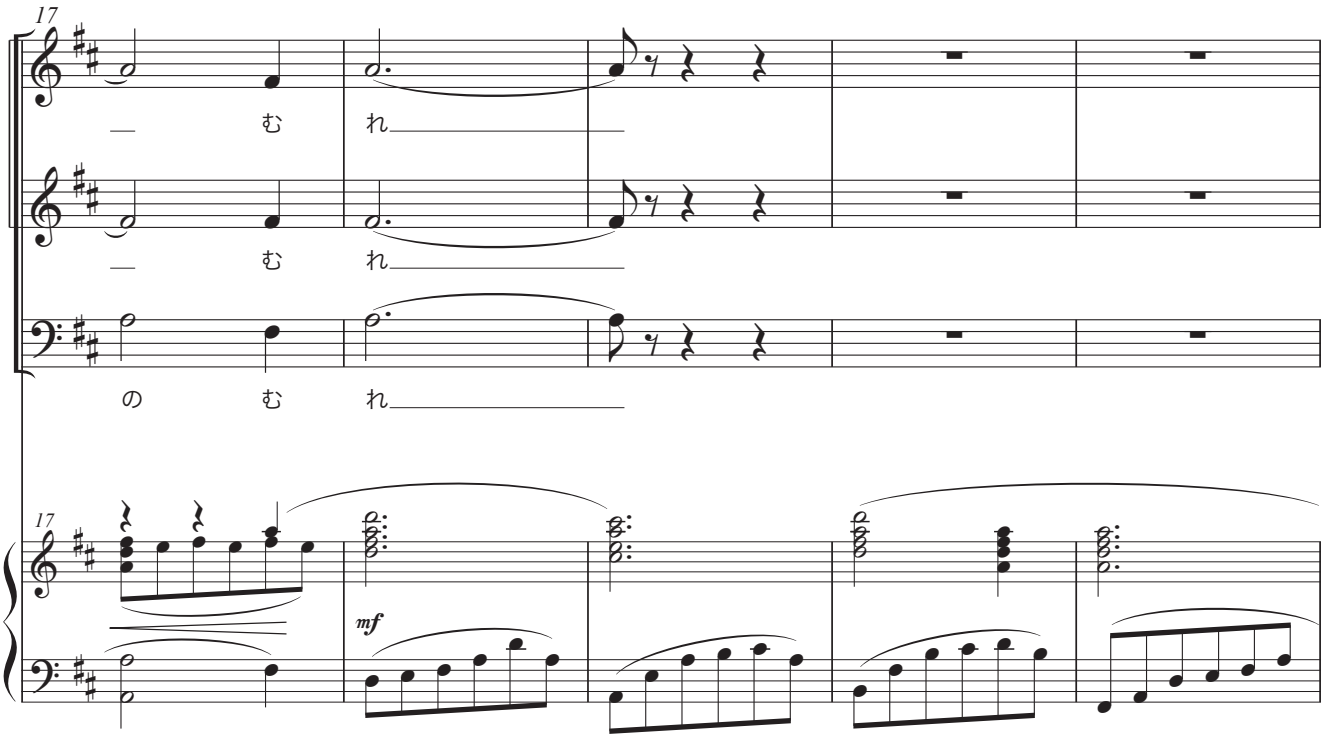


©小松耕輔音楽兄弟顕彰会

砂丘の上

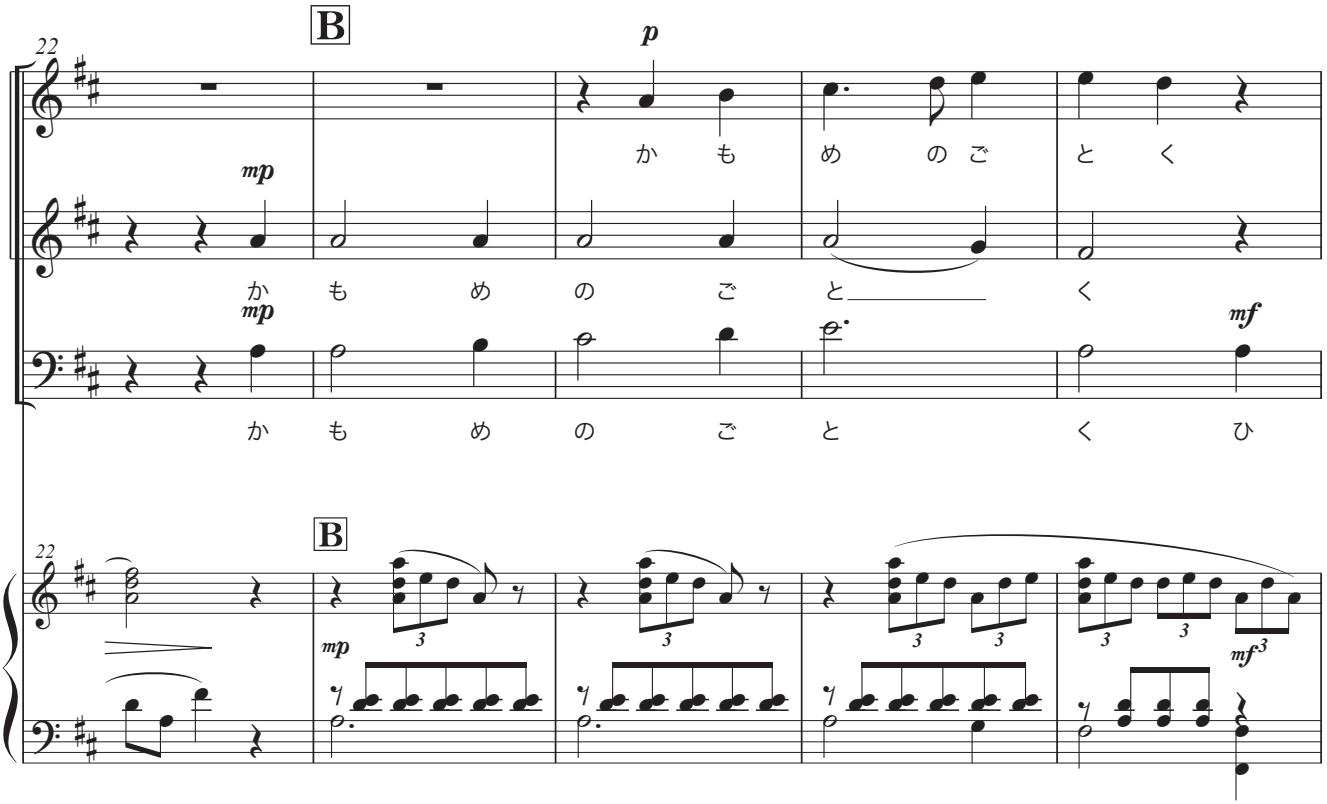
混声三部合唱版（移調）

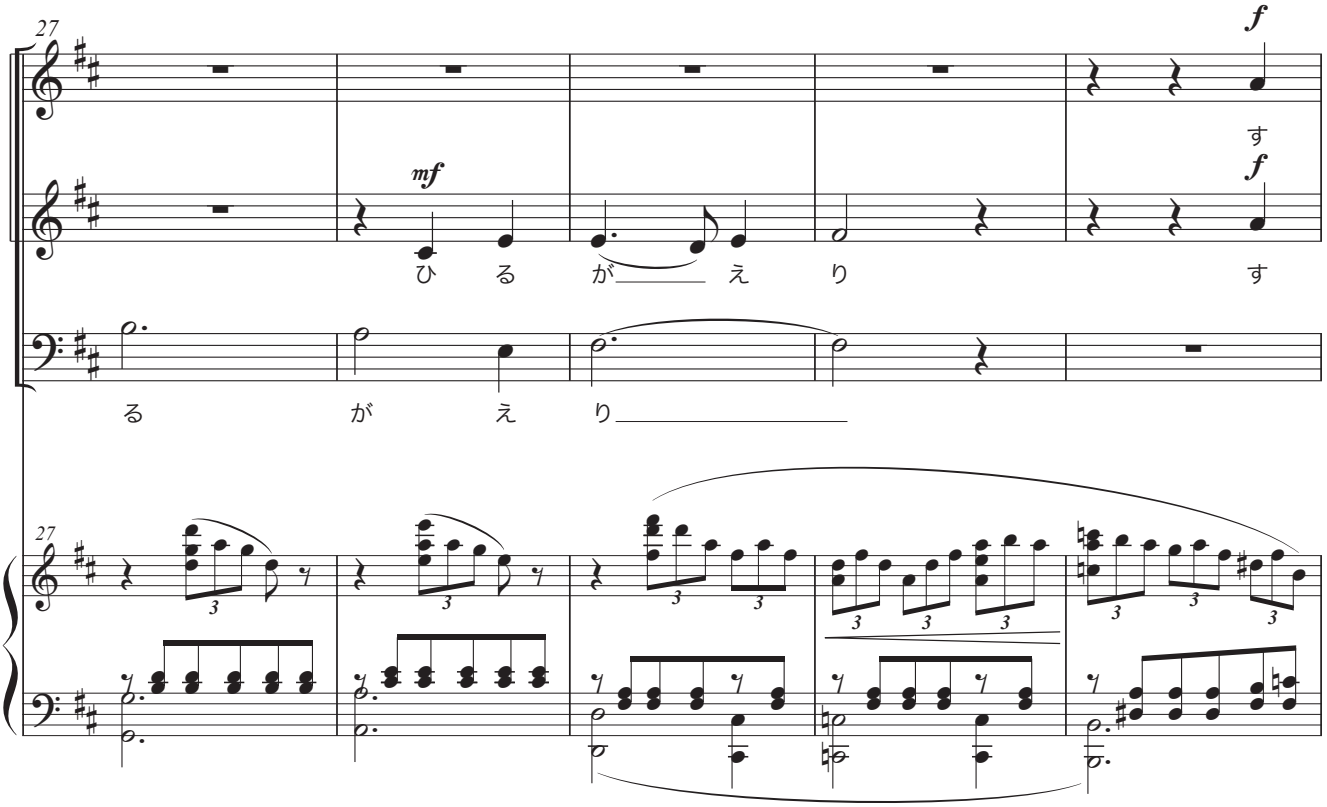




砂丘の上

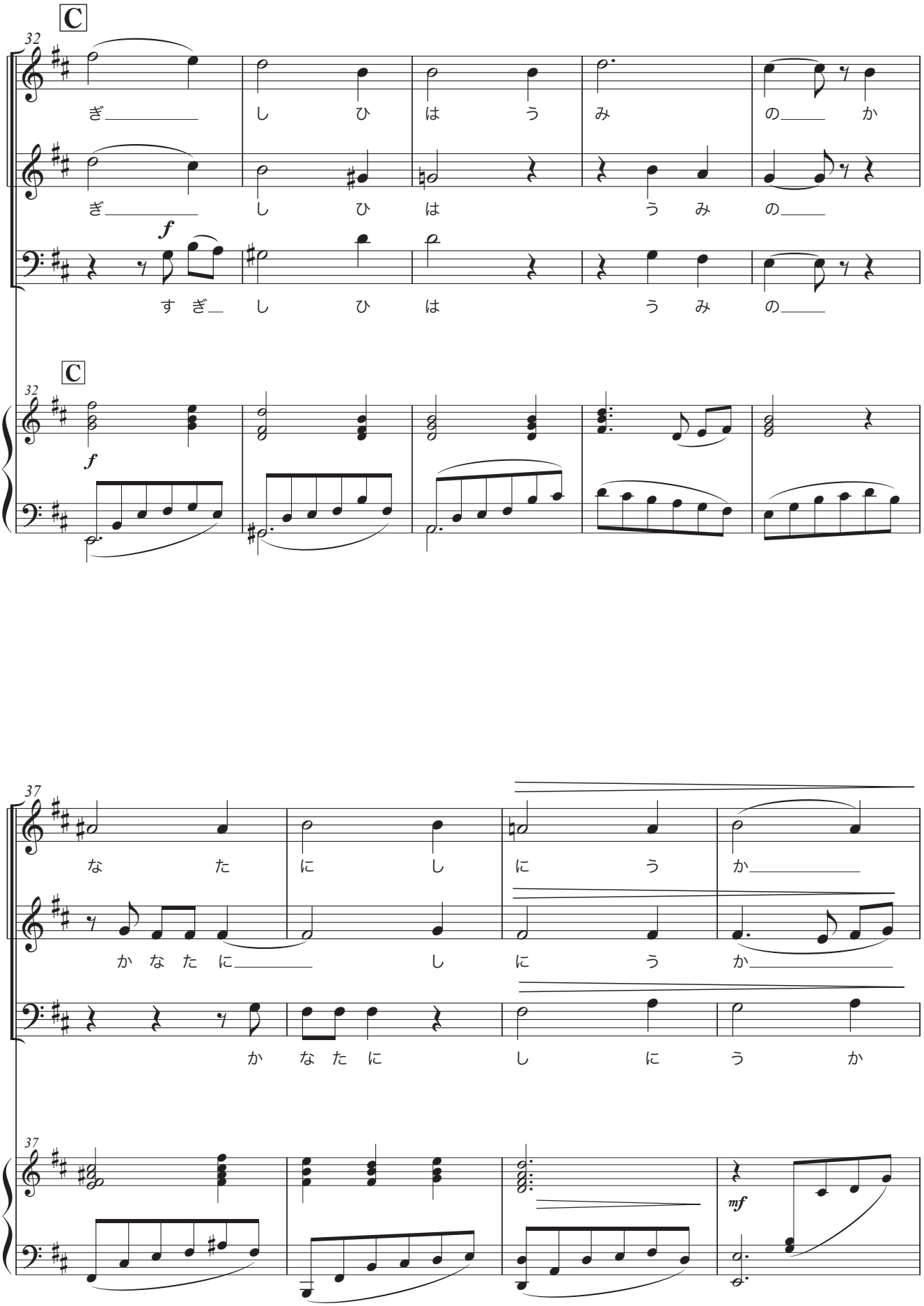
混声三部合唱版（移調）





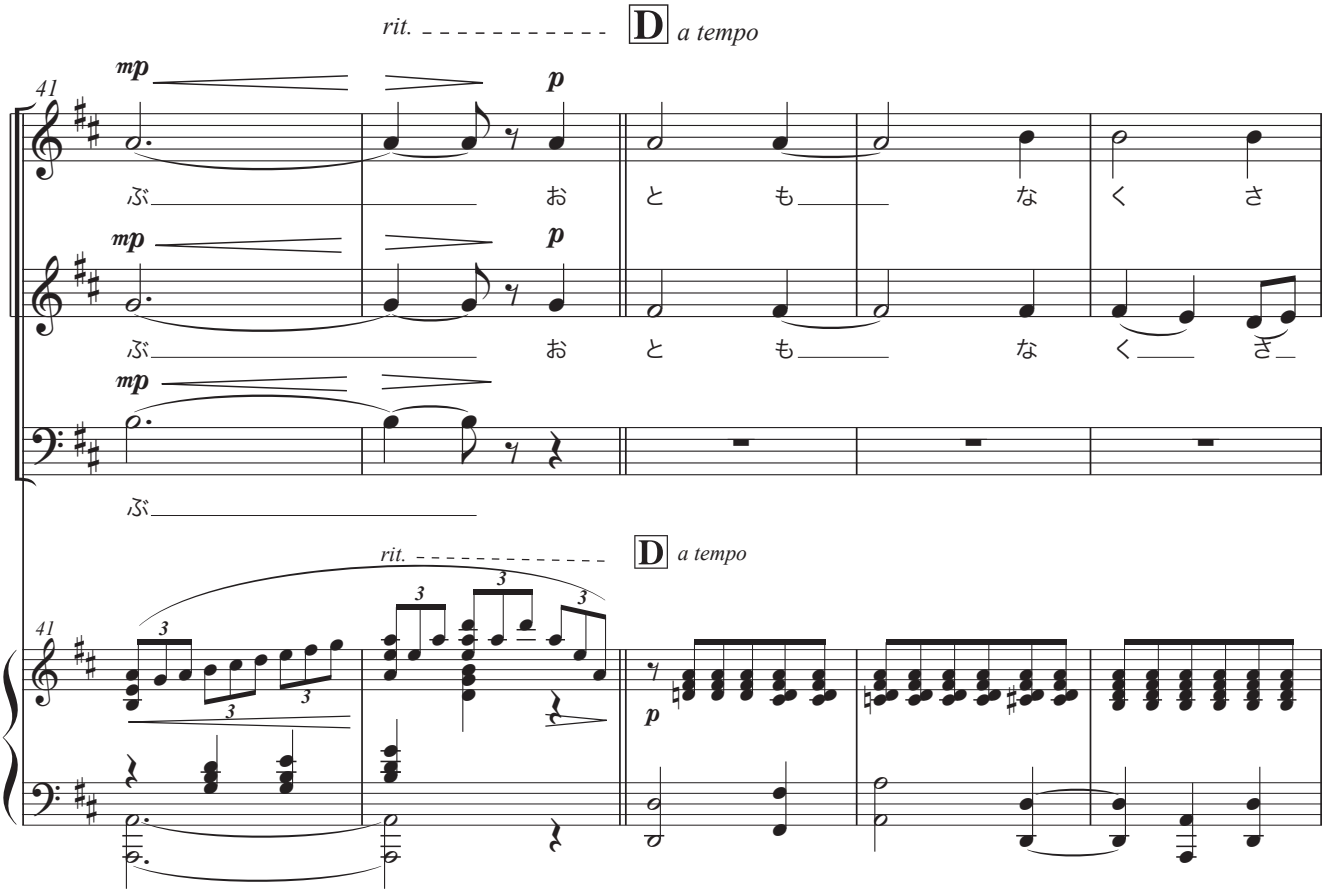
砂丘の上

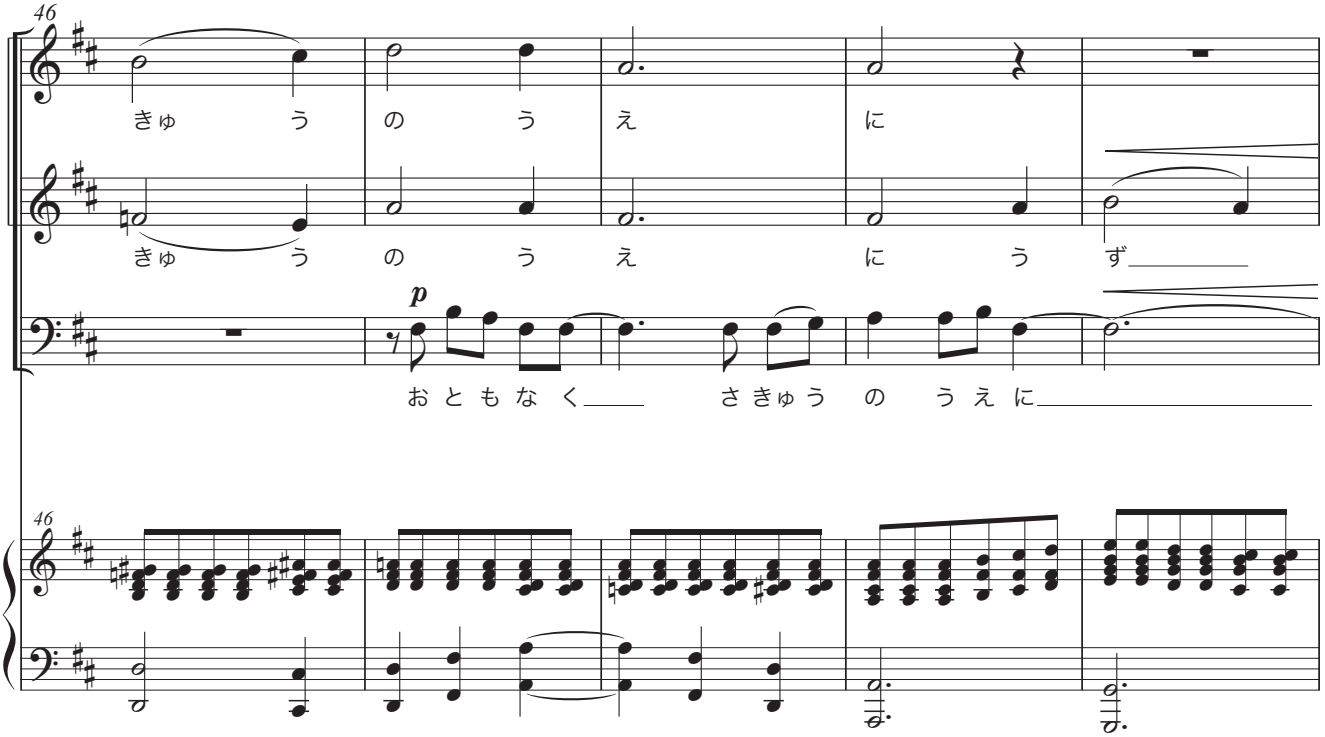
混声三部合唱版（移調）

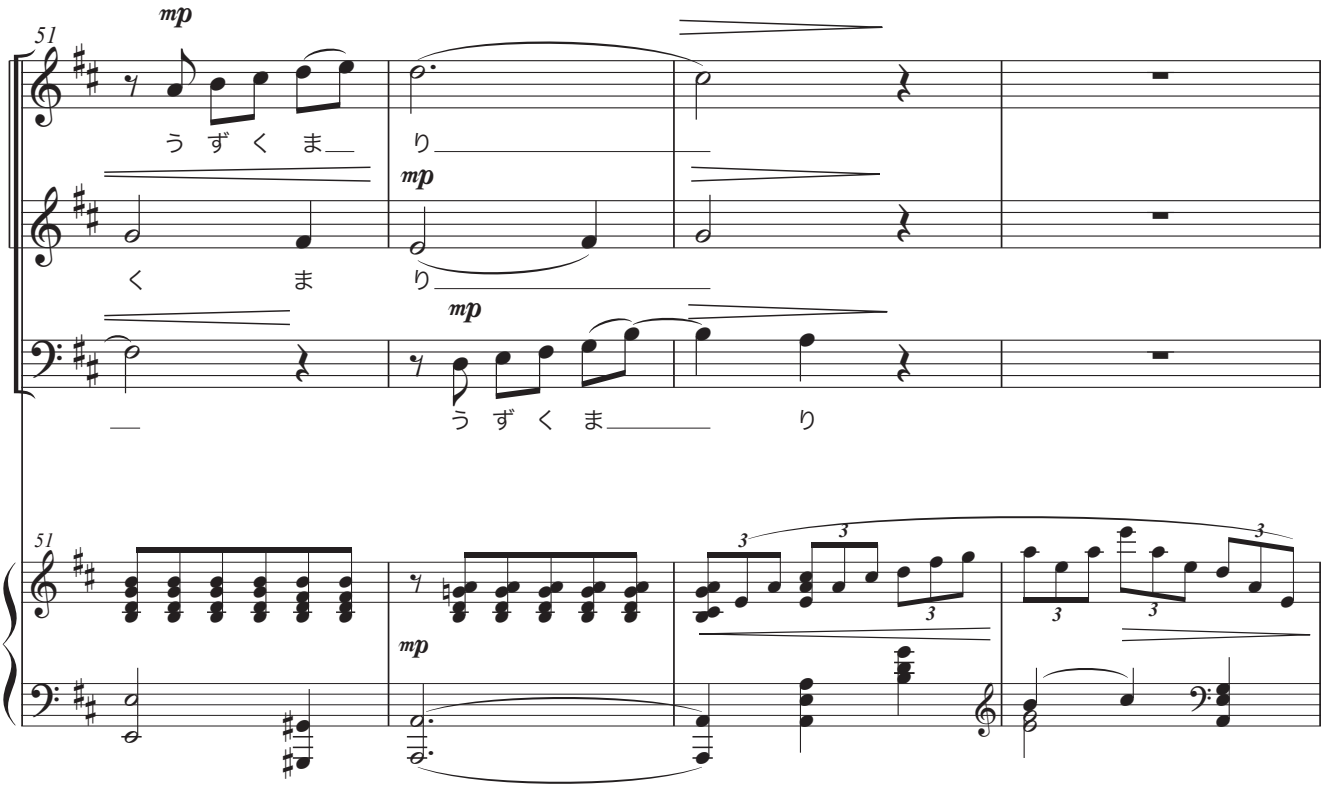


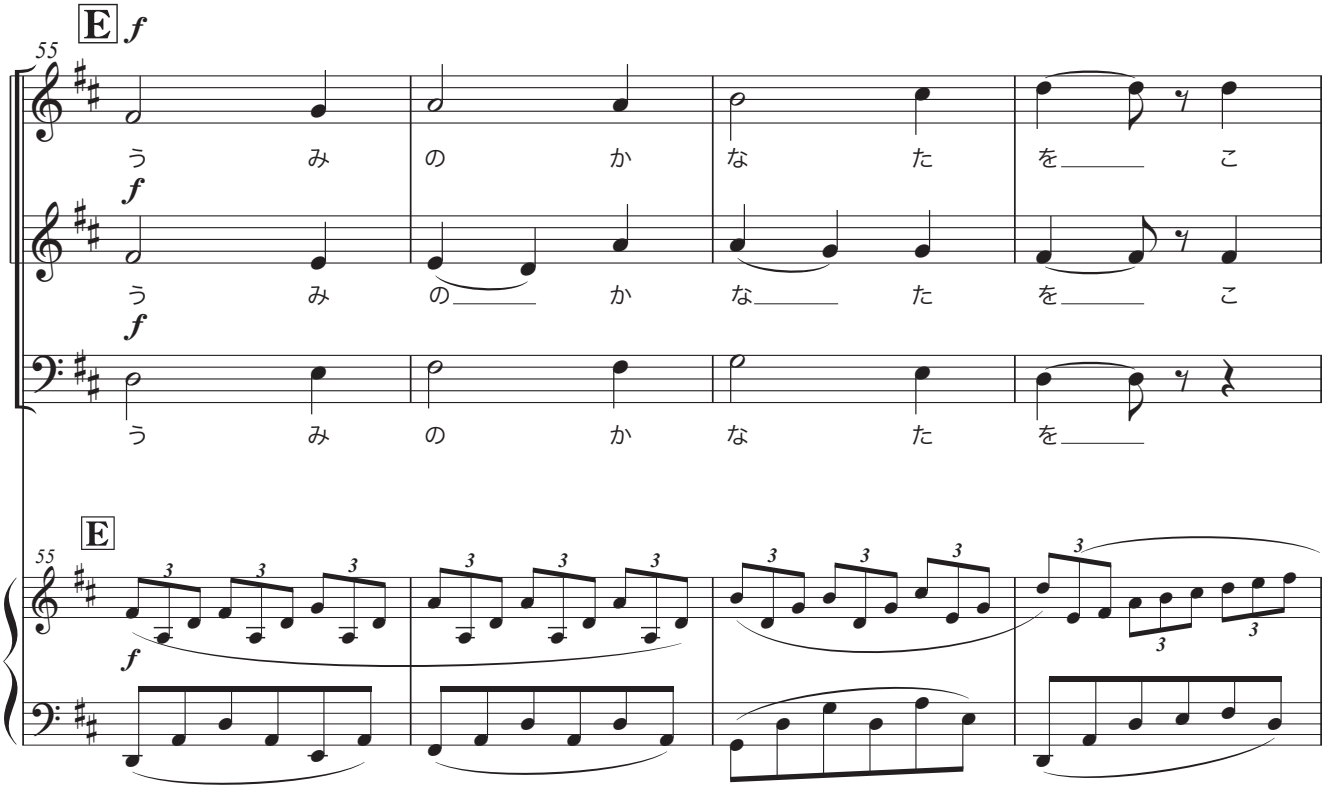
砂丘の上

混声三部合唱版（移調）



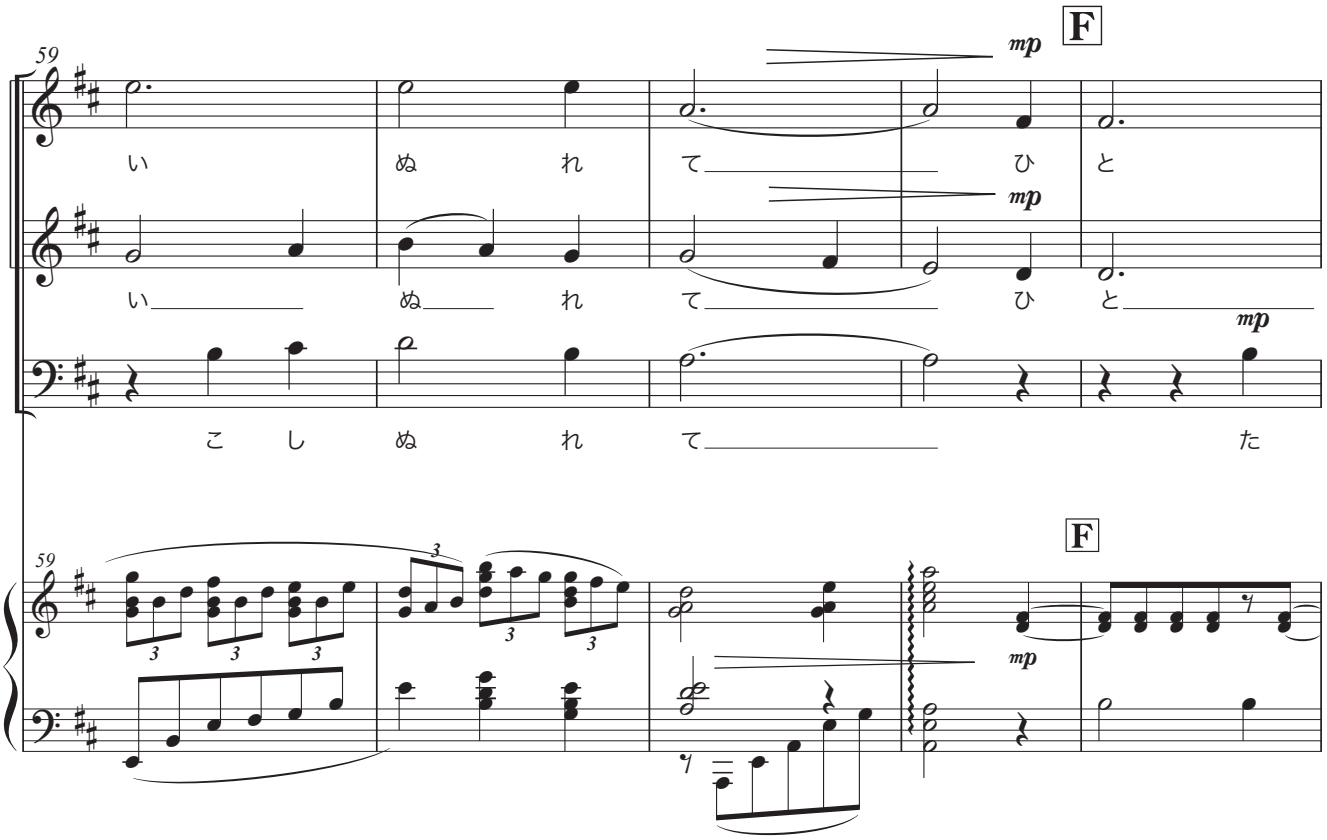


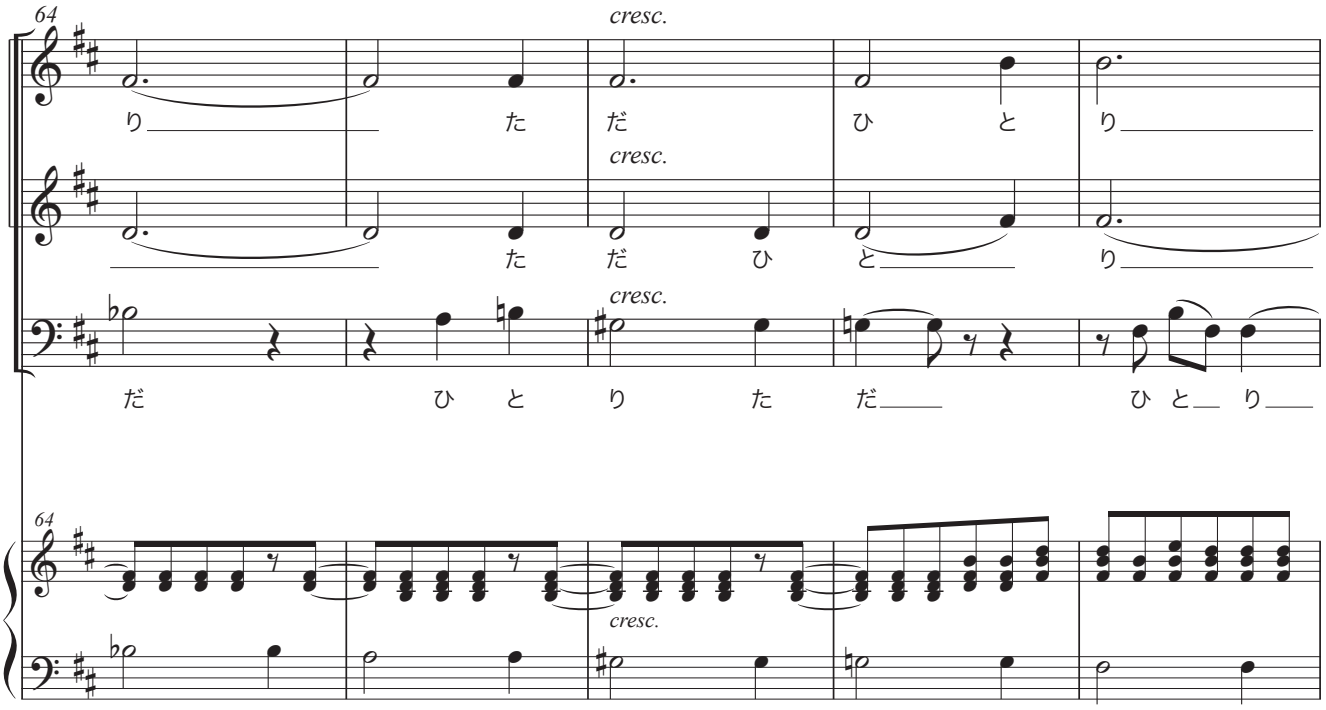

51
mp
うずくま り
mp
くまり
mp
うずくま り
51
mp


E
f
55
うみのかなたを こ
f
うみの かなたを こ
f
うみのかなたを
E
55
f

砂丘の上

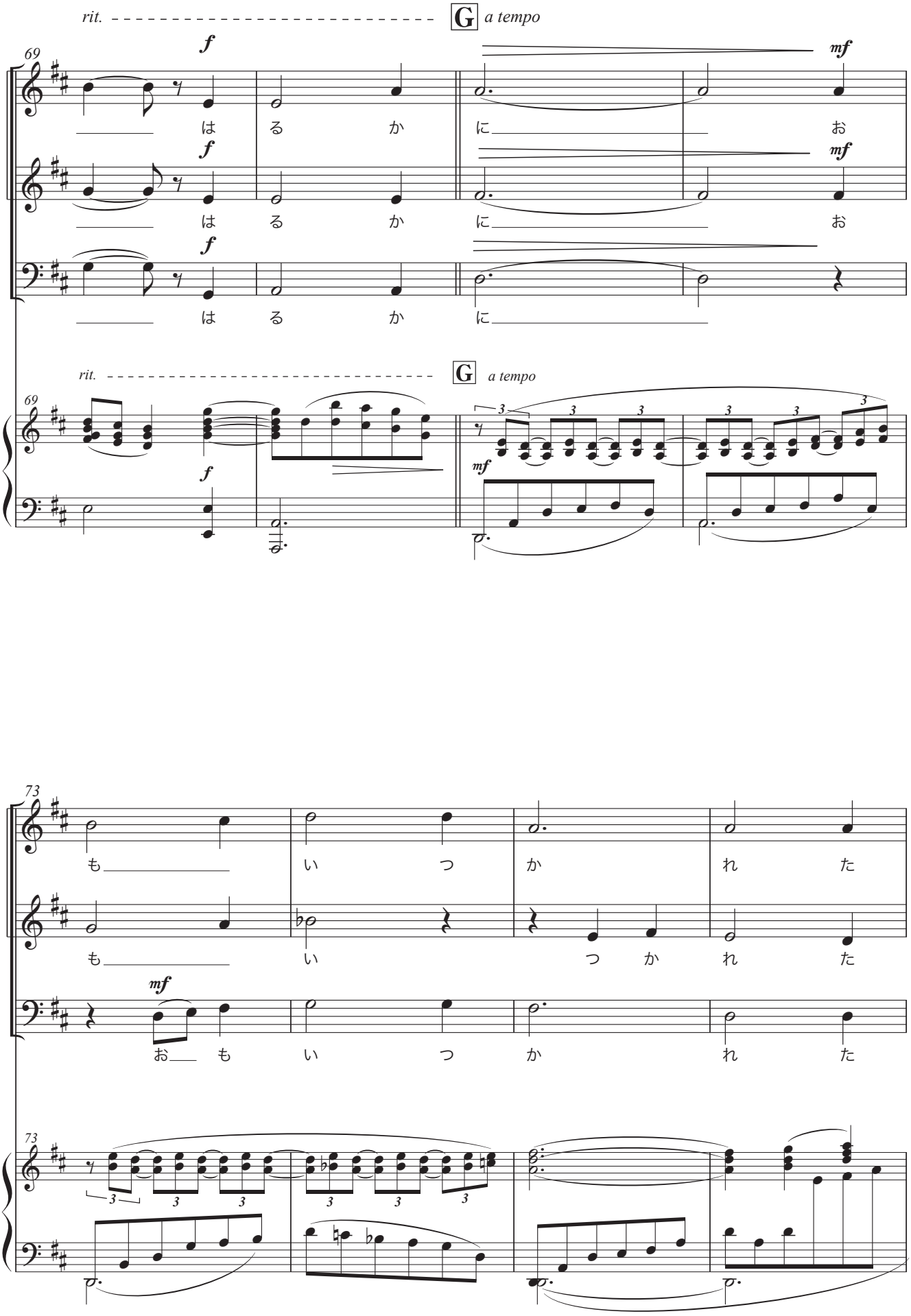
混声三部合唱版（移調）





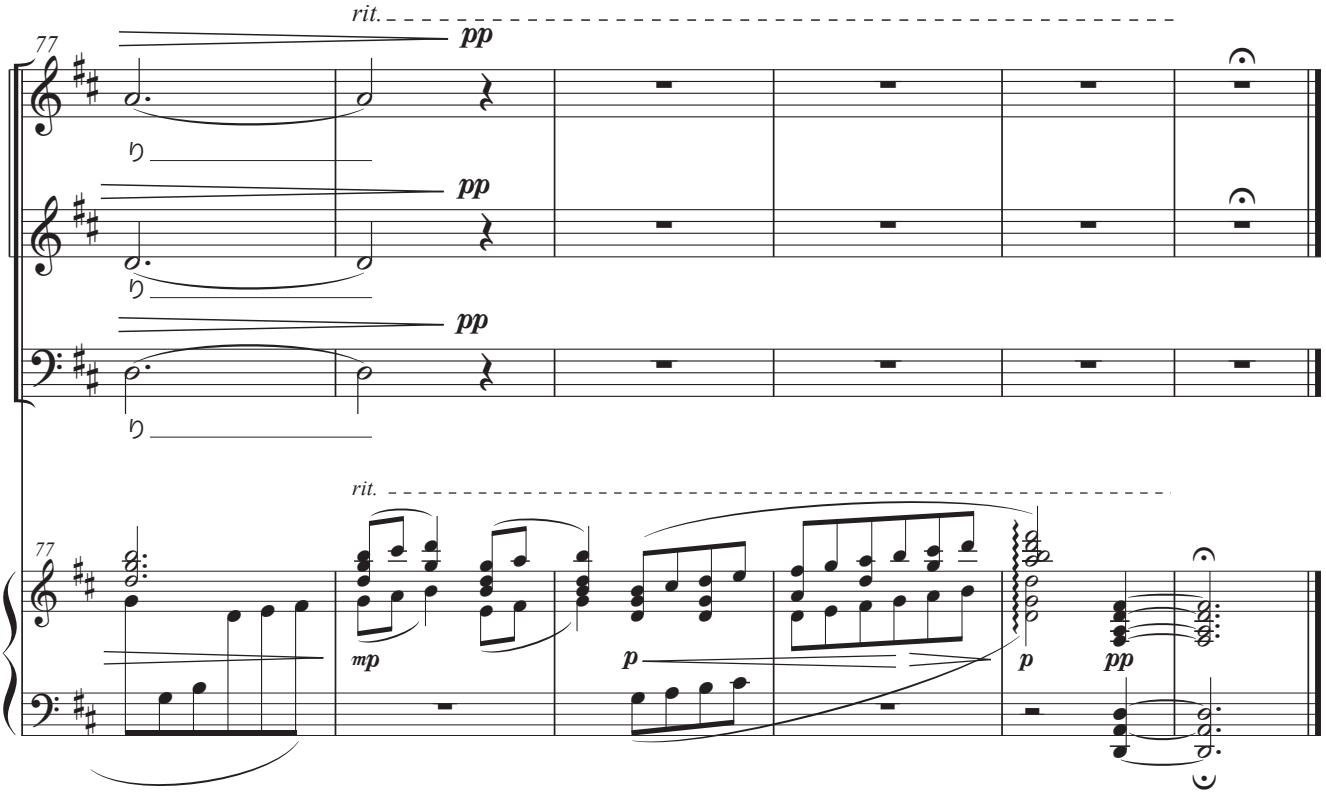
砂丘の上

混声三部合唱版（移調）



砂丘の上

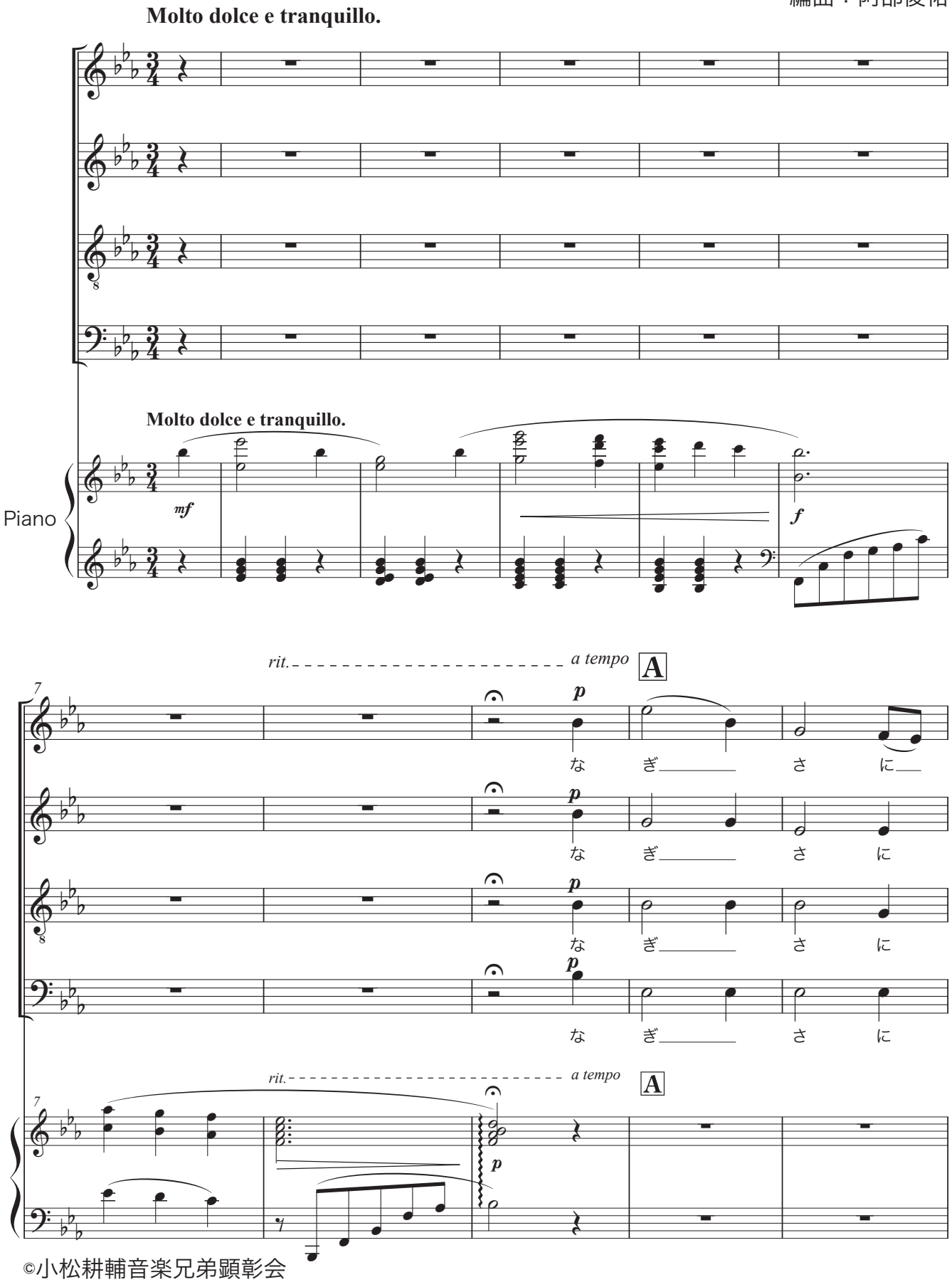
混声三部合唱版（移調）



砂丘の上

混声四部合唱版（原調）

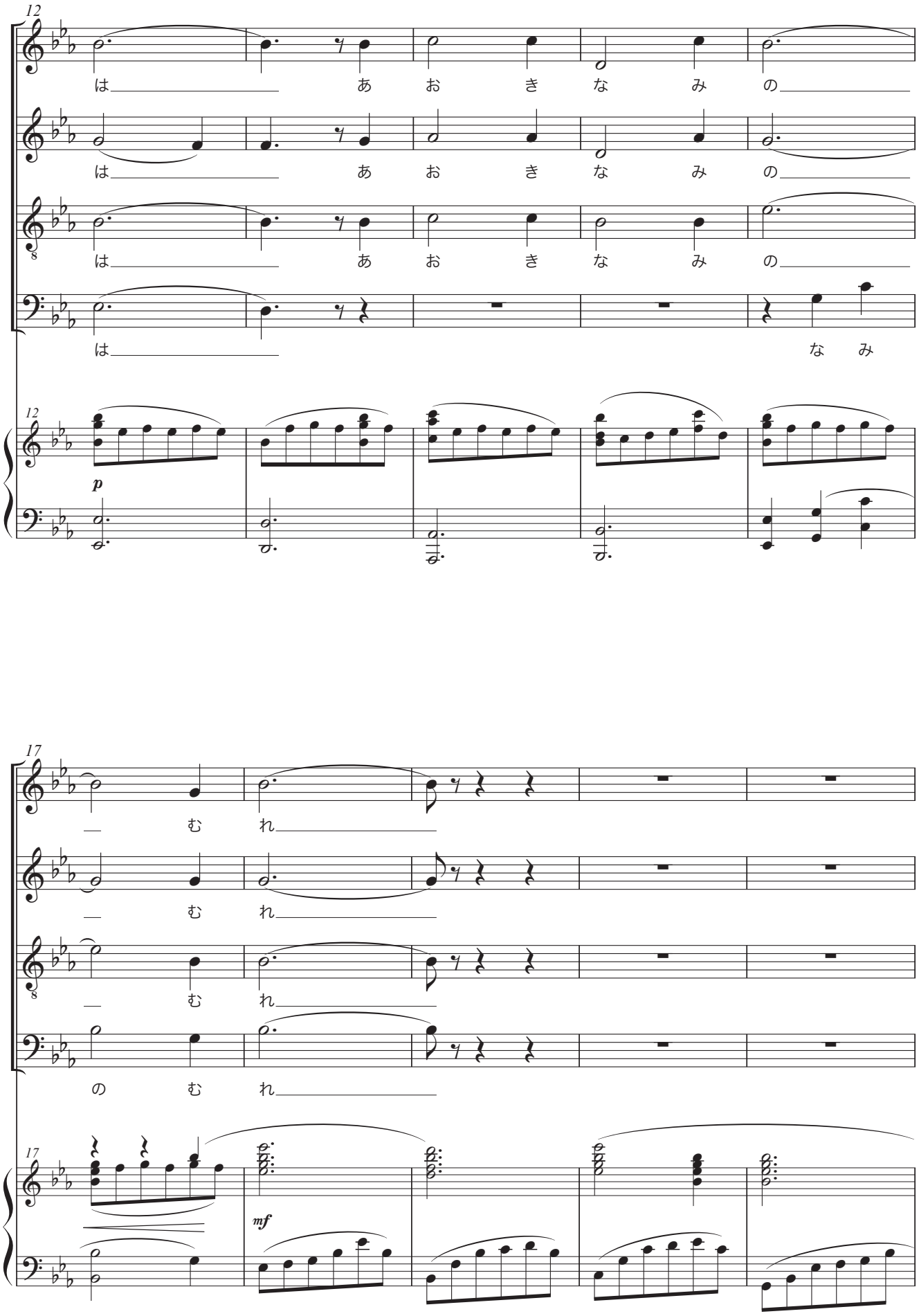
作曲：小松耕輔
作詞：室生犀星
編曲：阿部俊祐



©小松耕輔音楽兄弟顕彰会

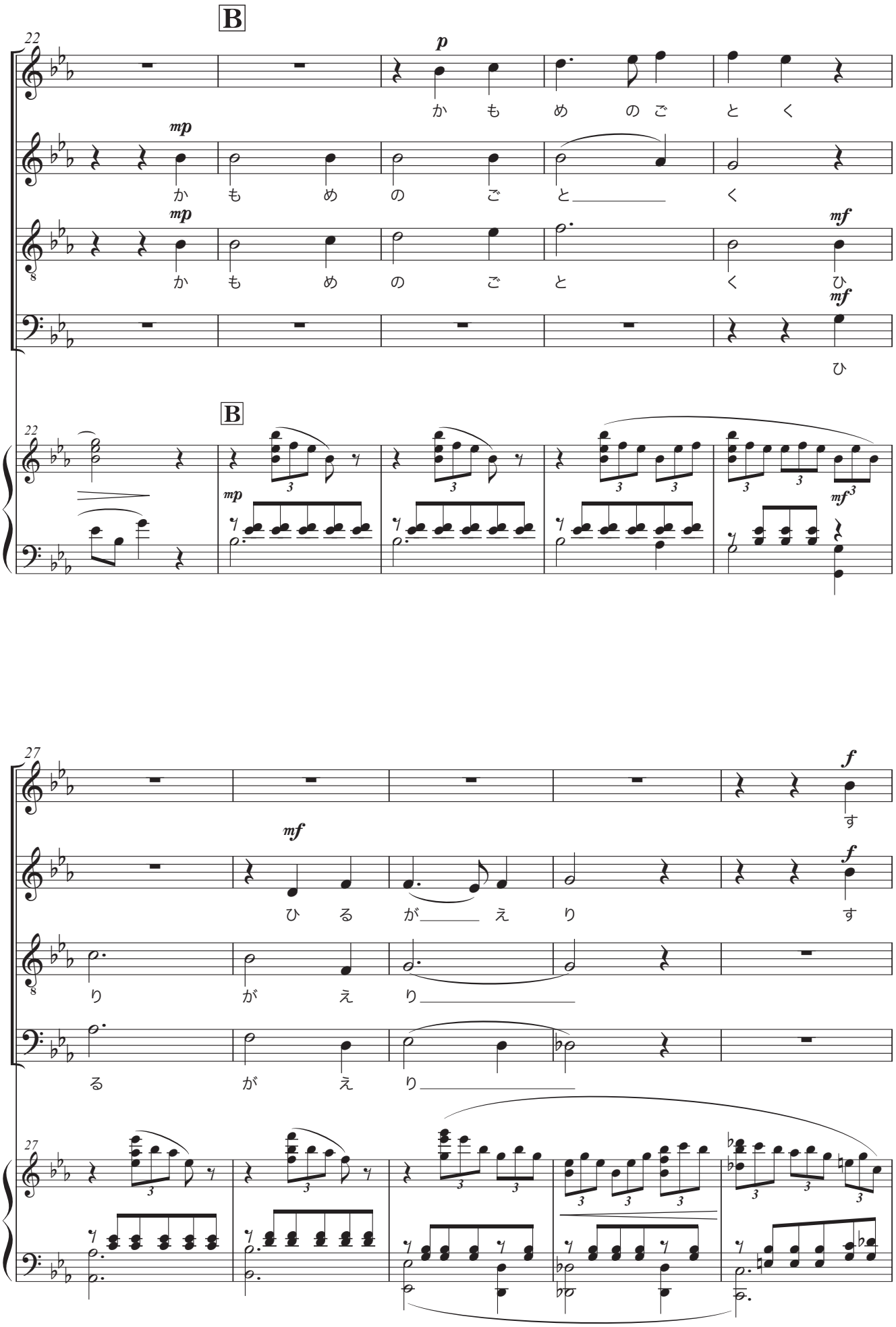
砂丘の上

混声四部合唱版（原調）



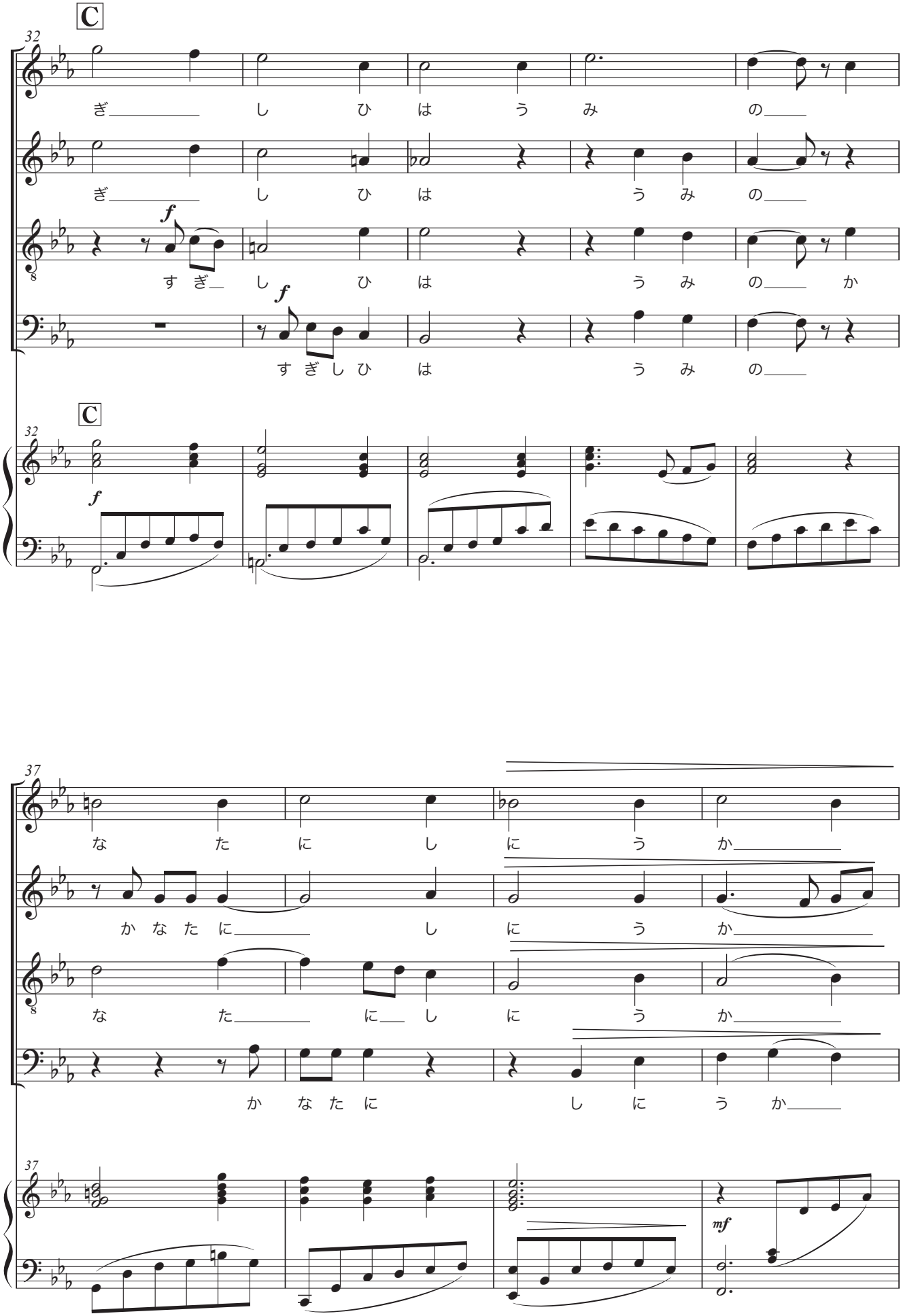
砂丘の上

混声四部合唱版（原調）



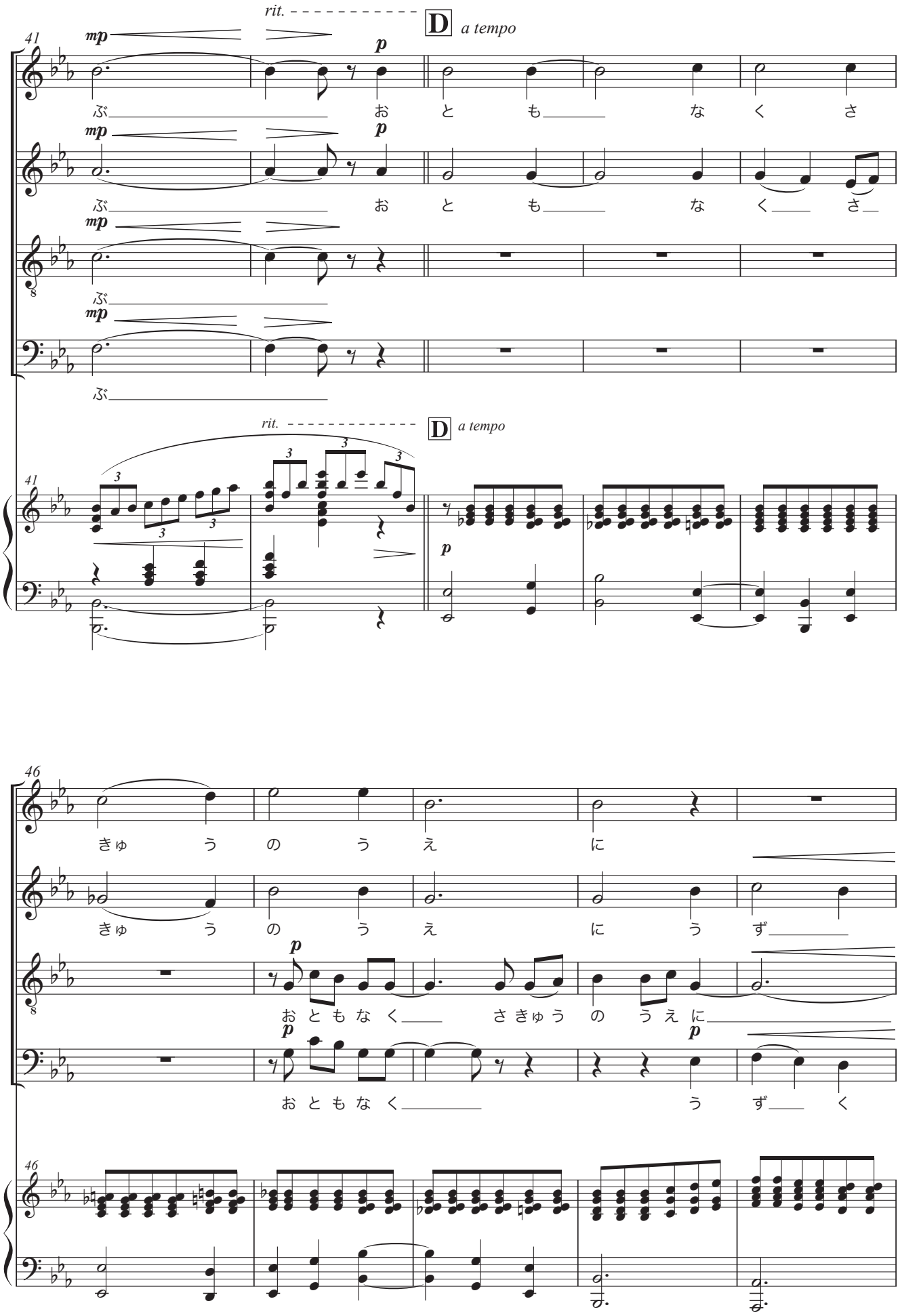
砂丘の上

混声四部合唱版（原調）



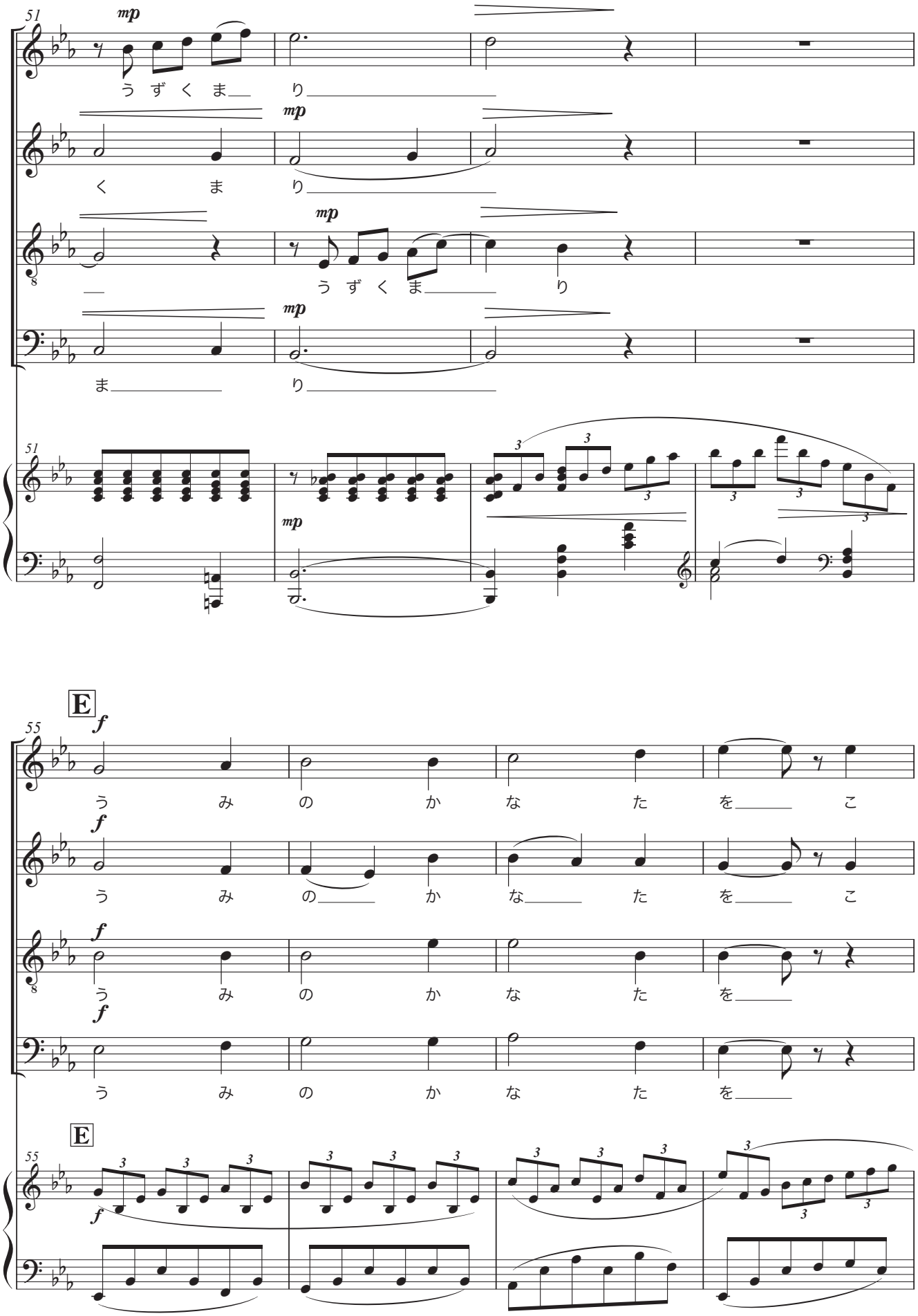
砂丘の上

混声四部合唱版（原調）



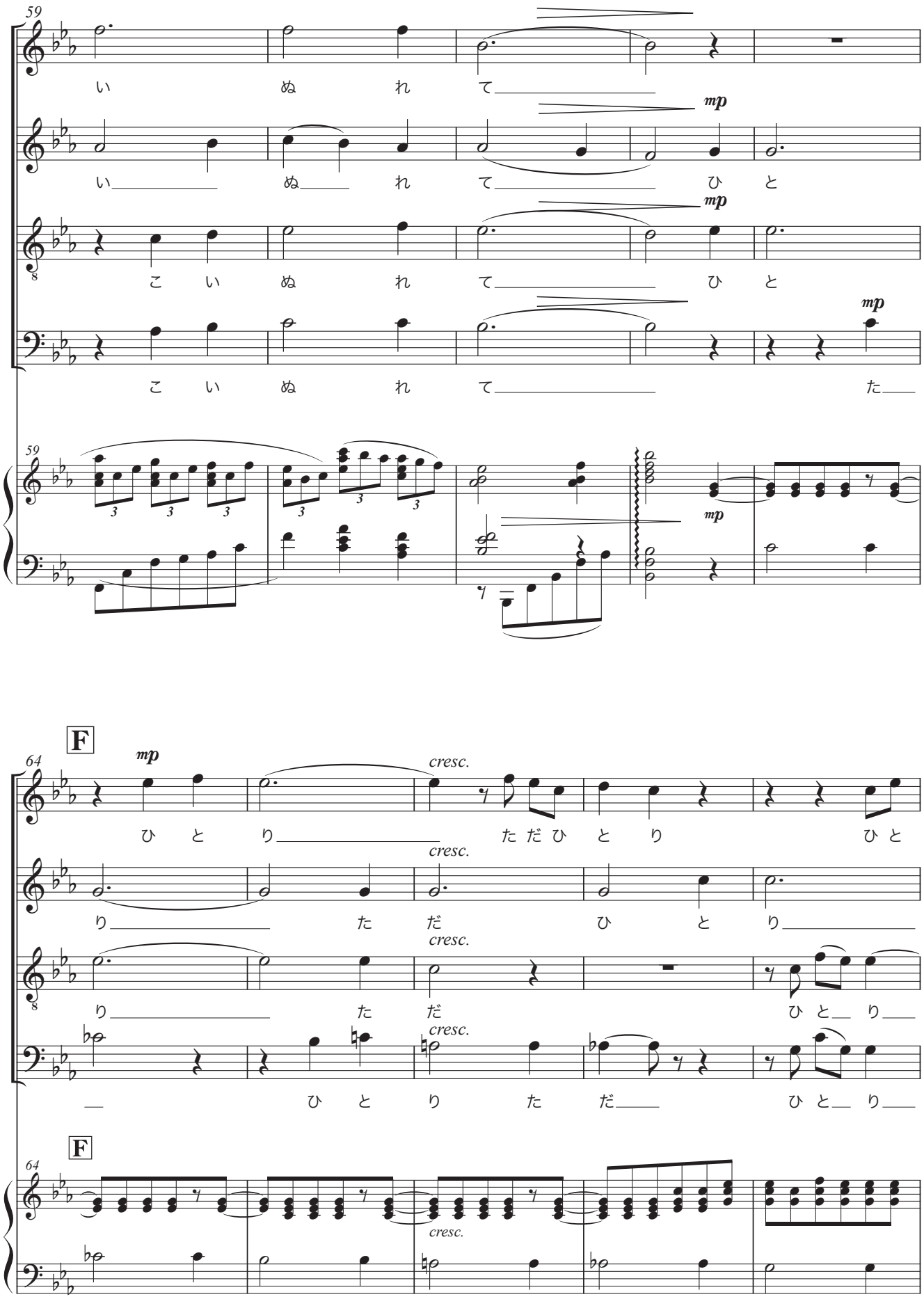
砂丘の上

混声四部合唱版（原調）



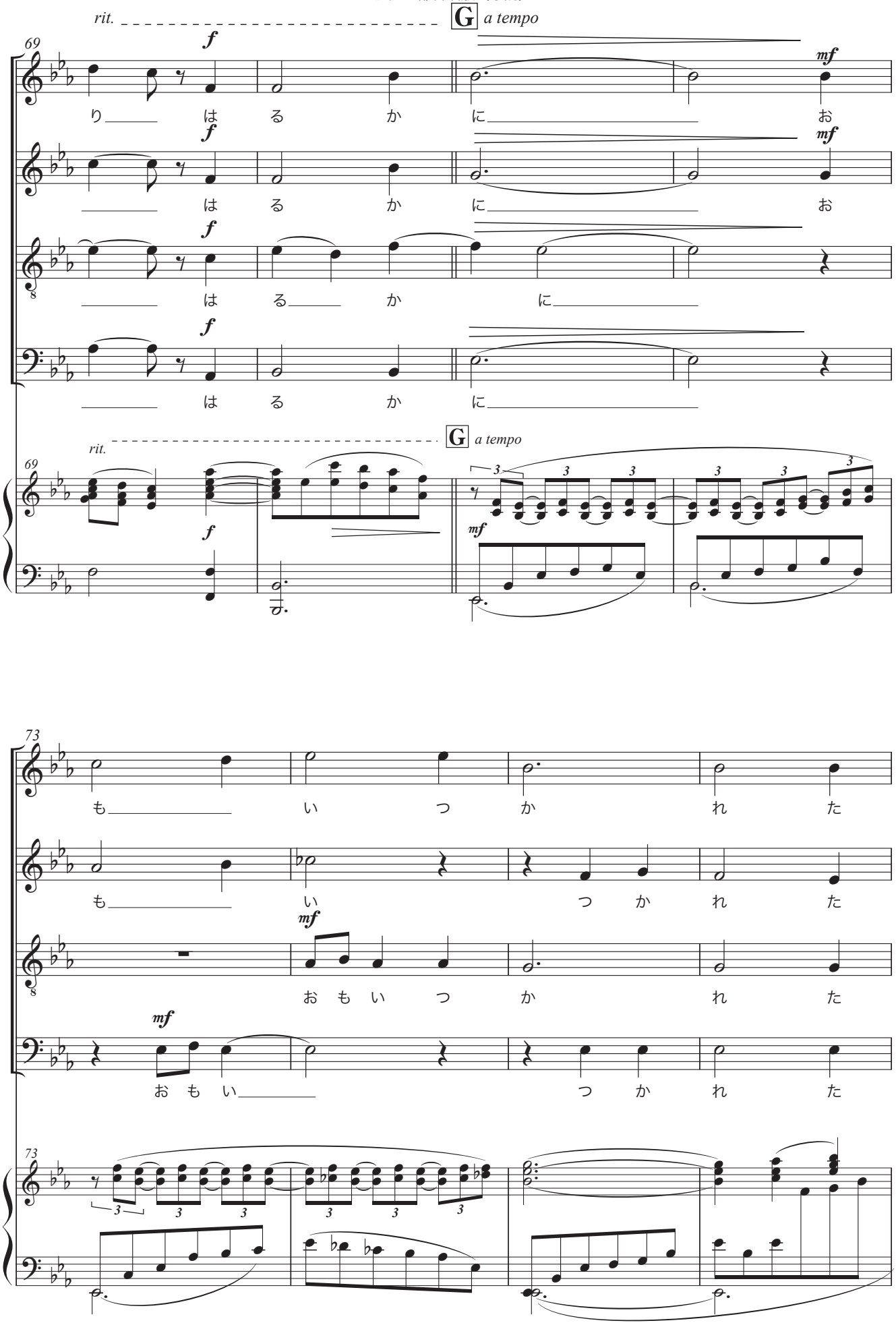
砂丘の上

混声四部合唱版（原調）



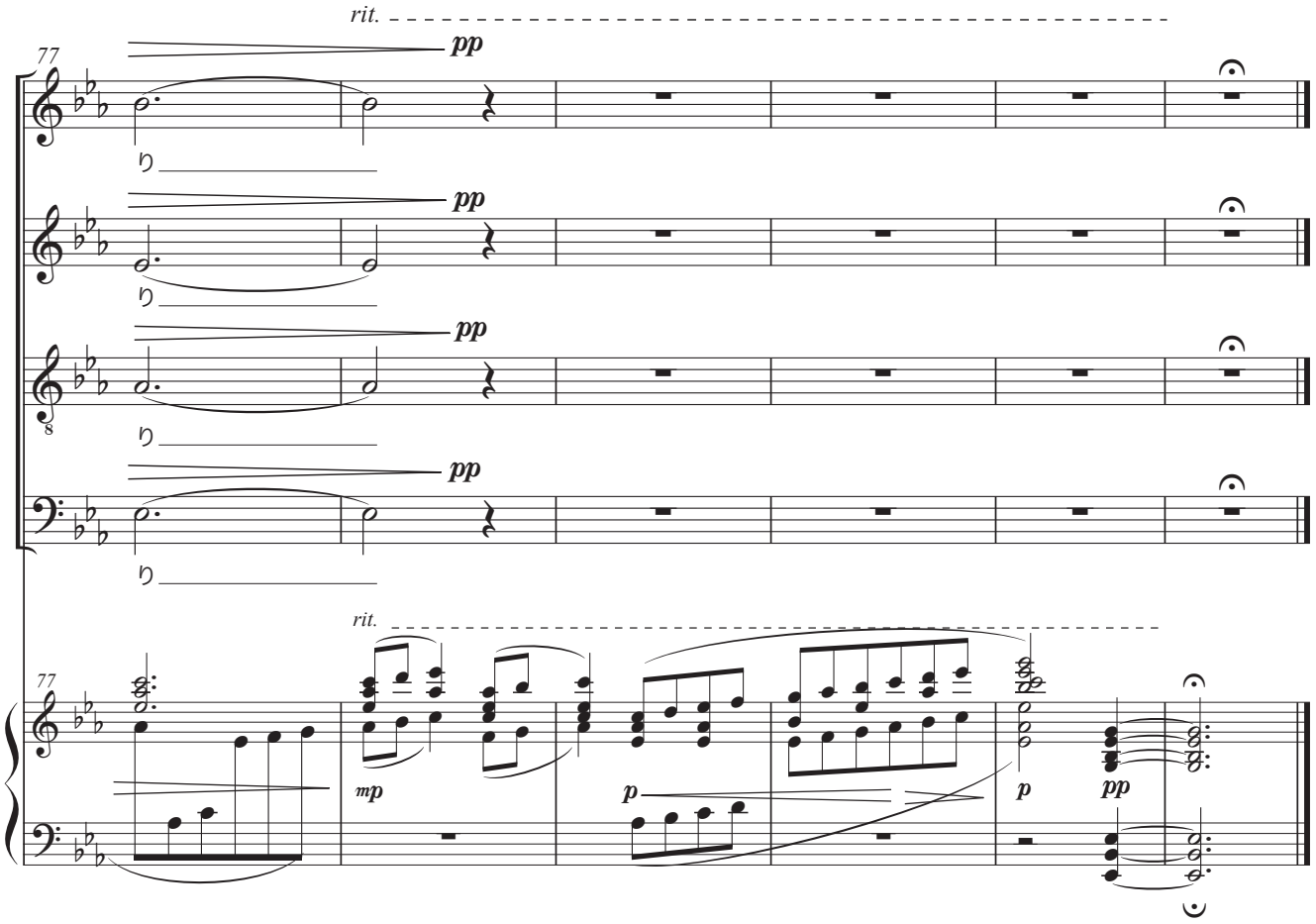
砂丘の上

混声四部合唱版（原調）



砂丘の上

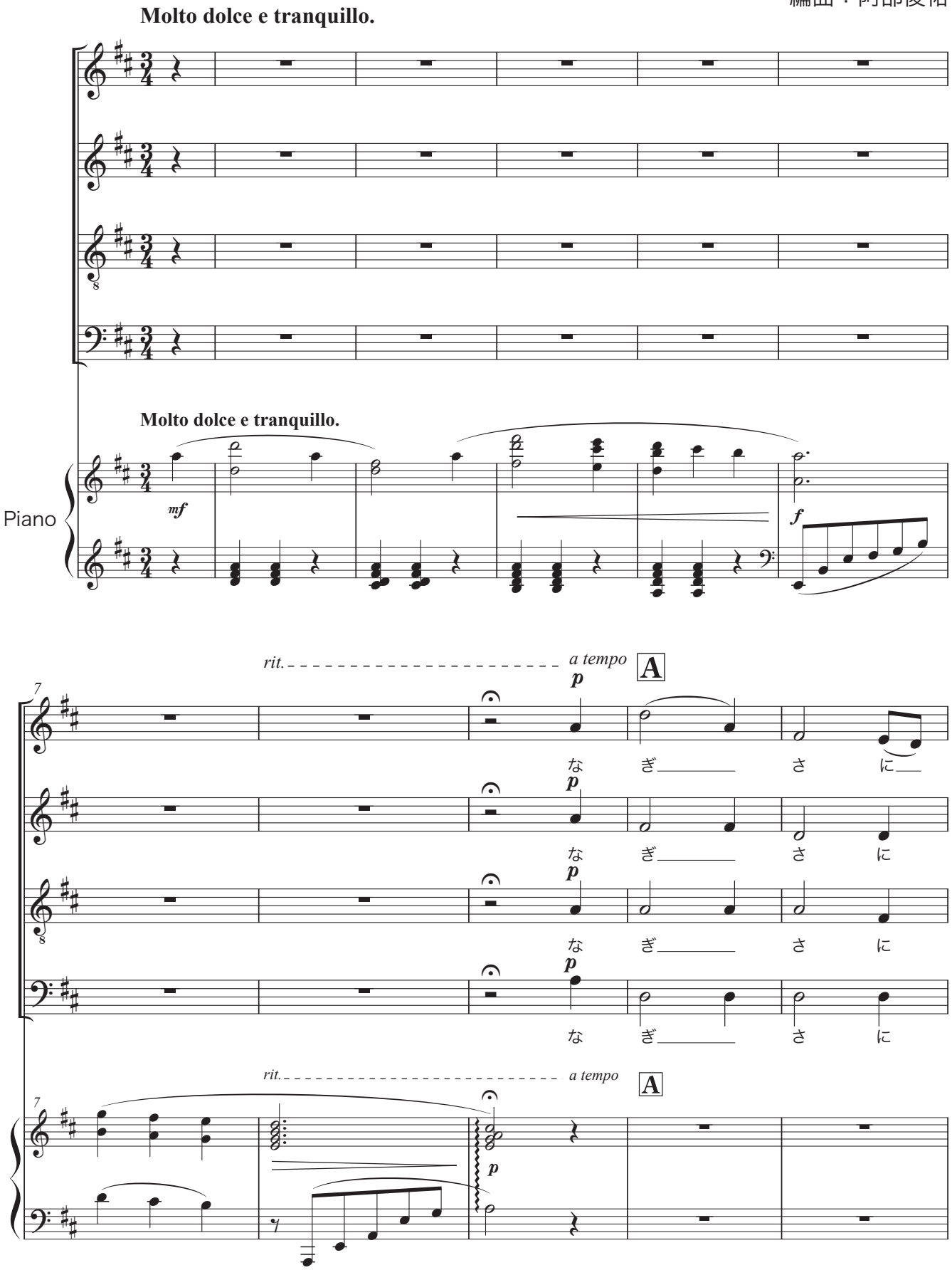
混声四部合唱版（原調）



砂丘の上

混声四部合唱版（移調）

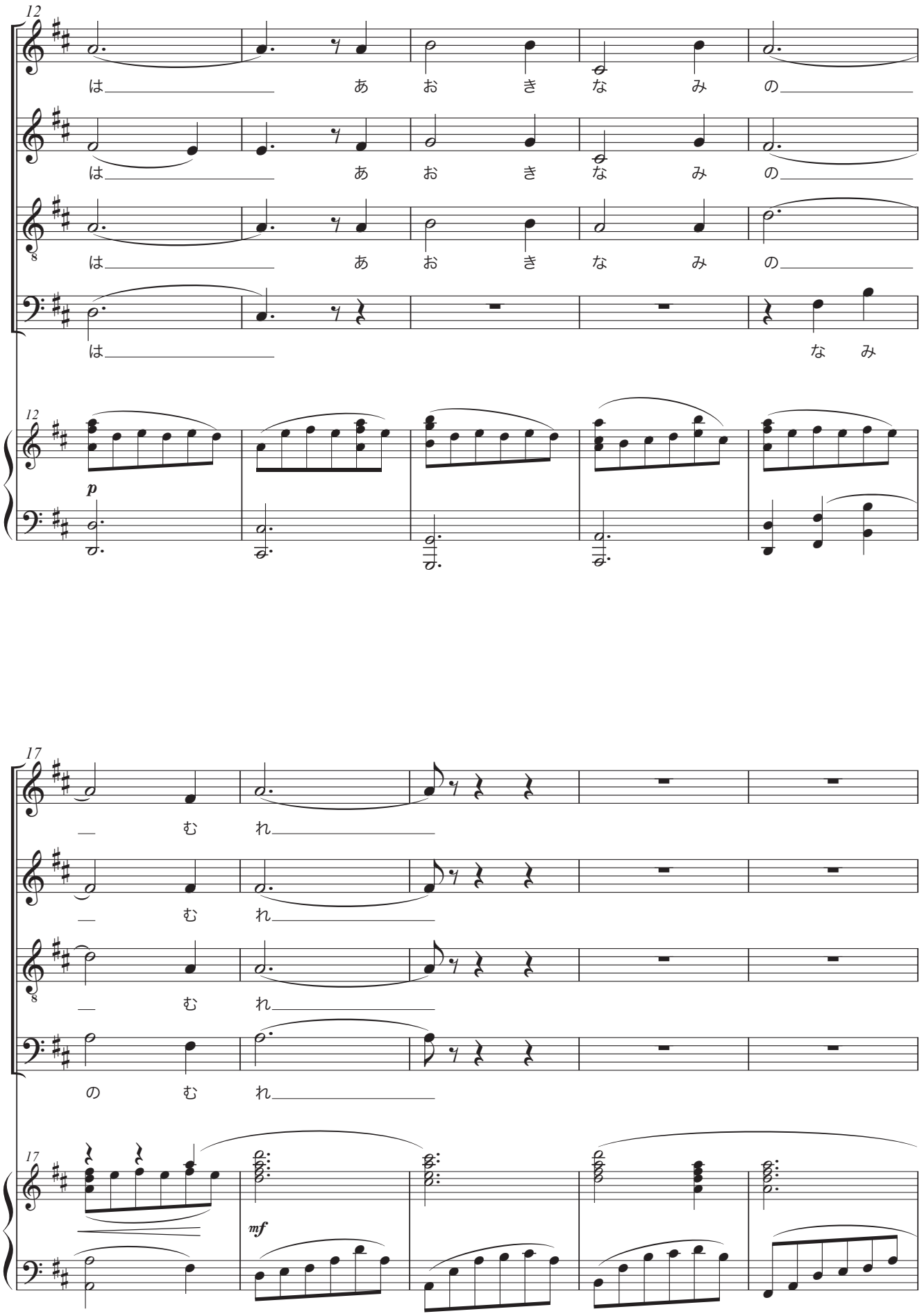
作曲：小松耕輔
作詞：室生犀星
編曲：阿部俊祐



©小松耕輔音楽兄弟顕彰会

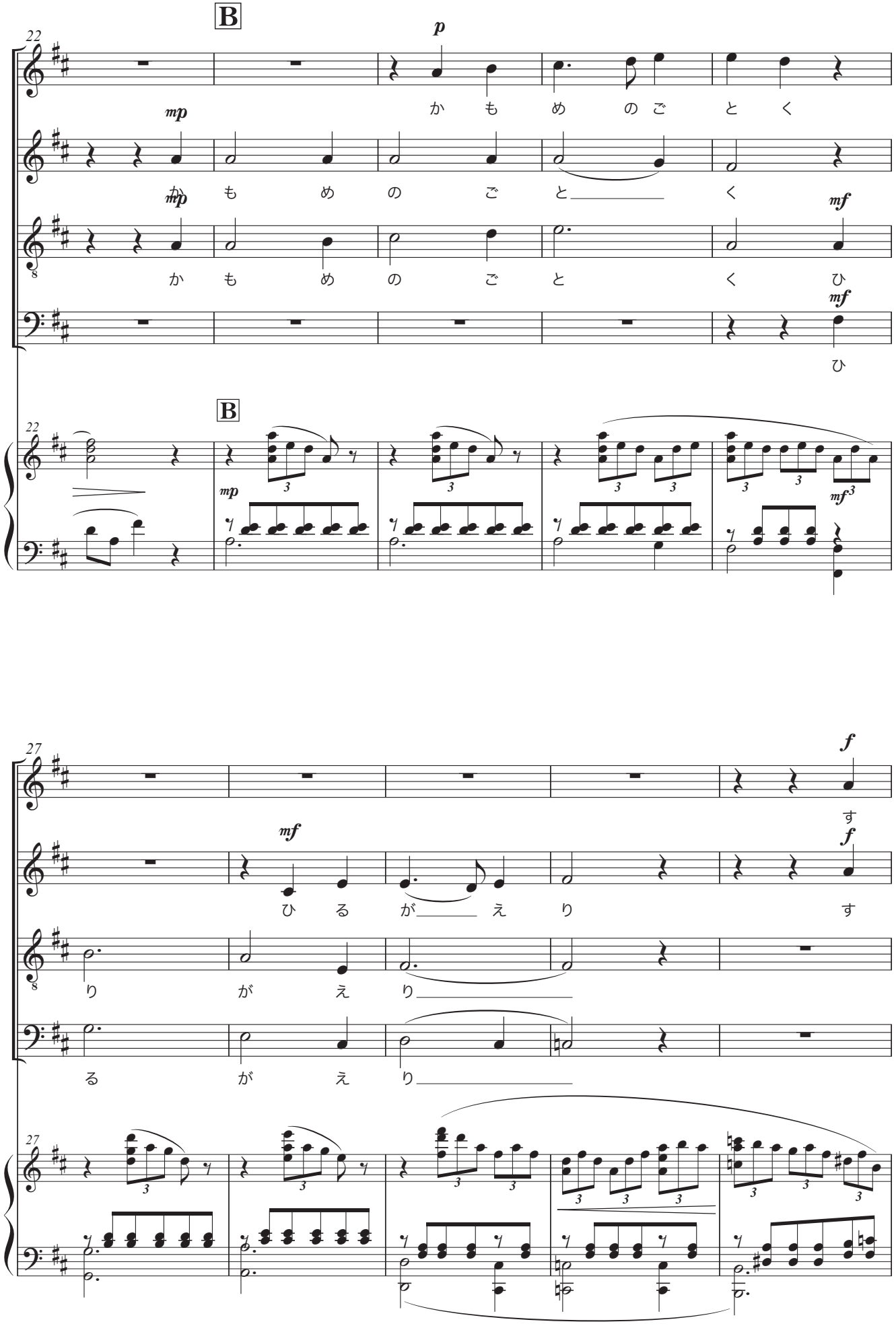
砂丘の上

混声四部合唱版（移調）



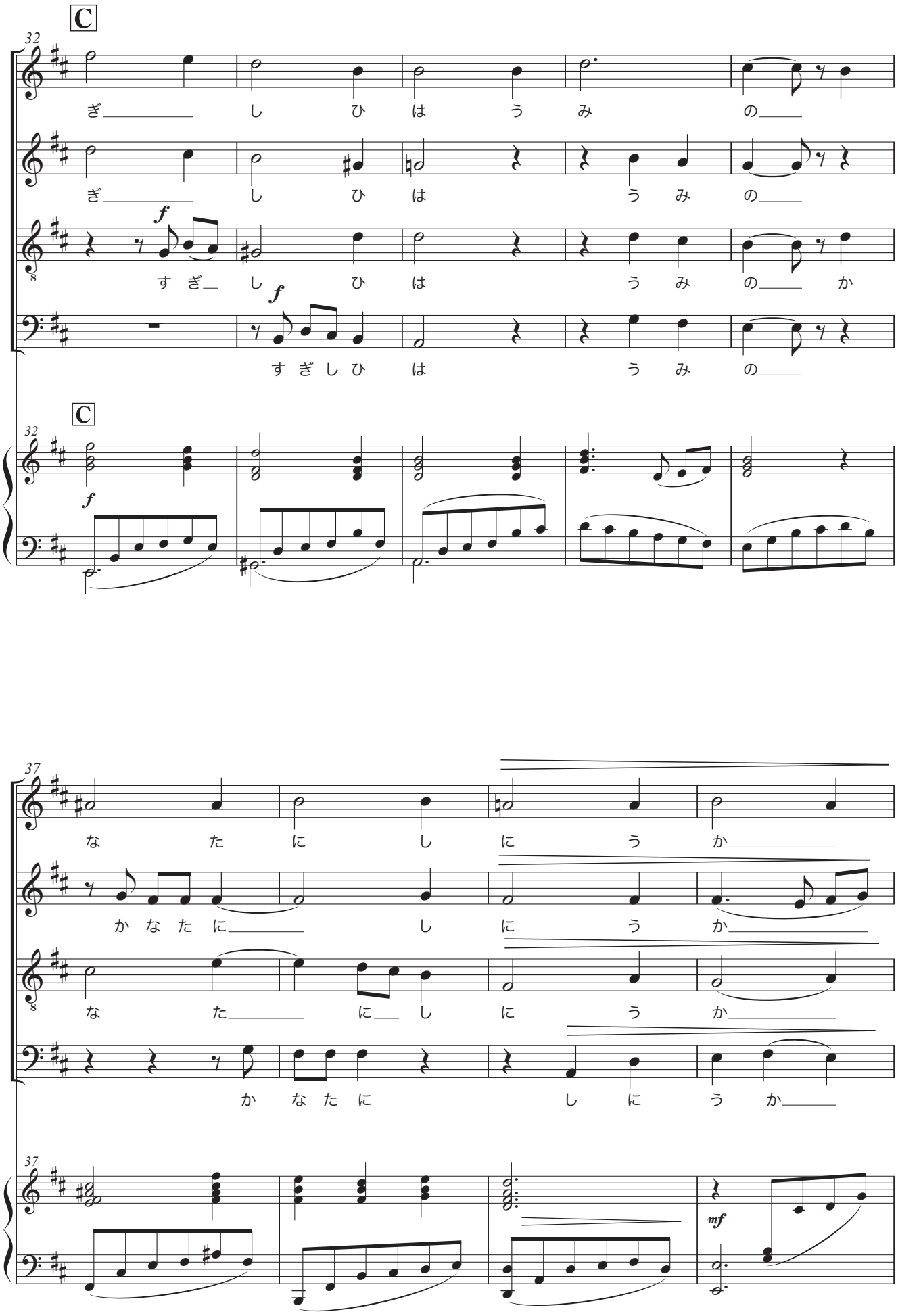
砂丘の上

混声四部合唱版（移調）



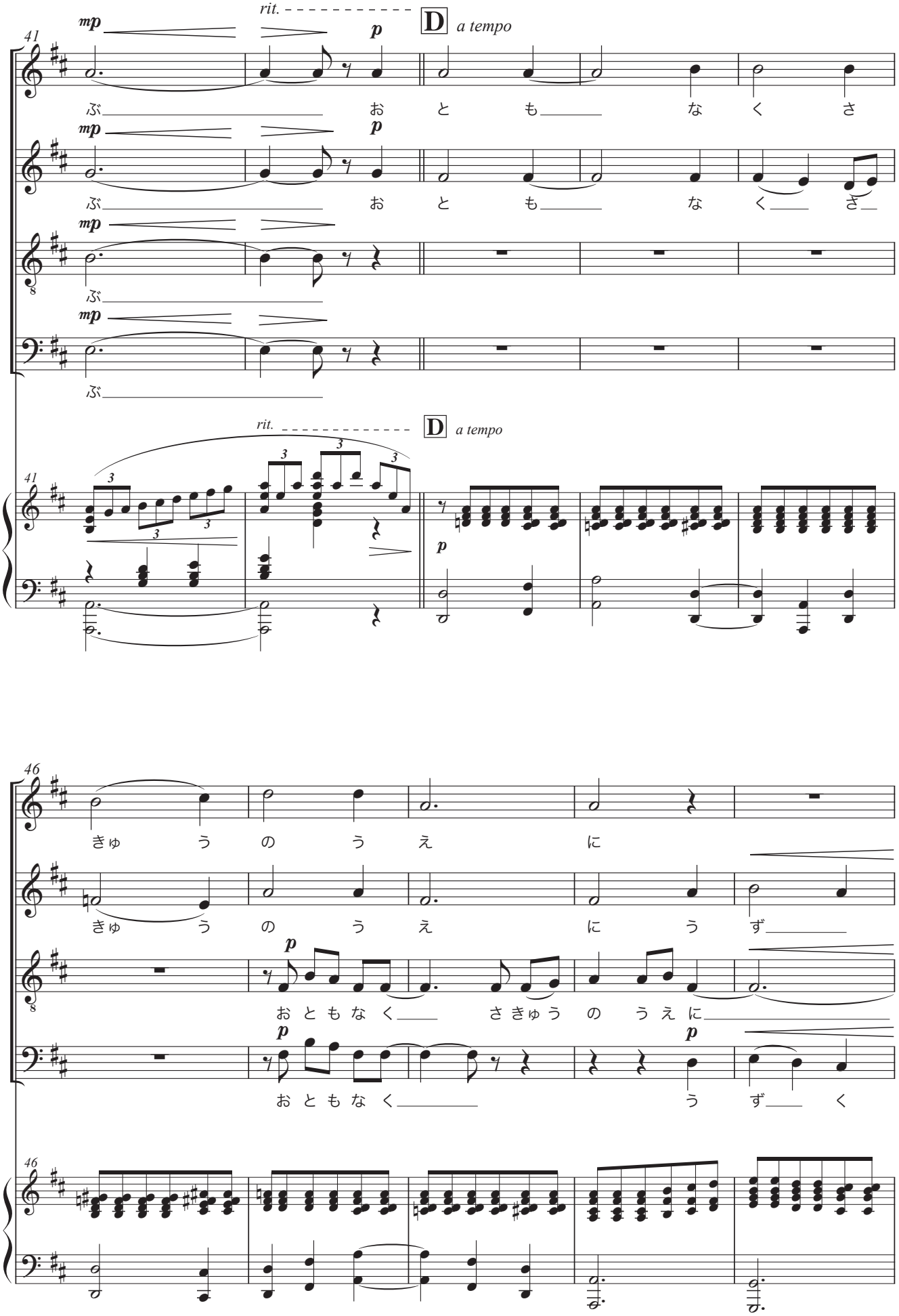
砂丘の上

混声四部合唱版（移調）



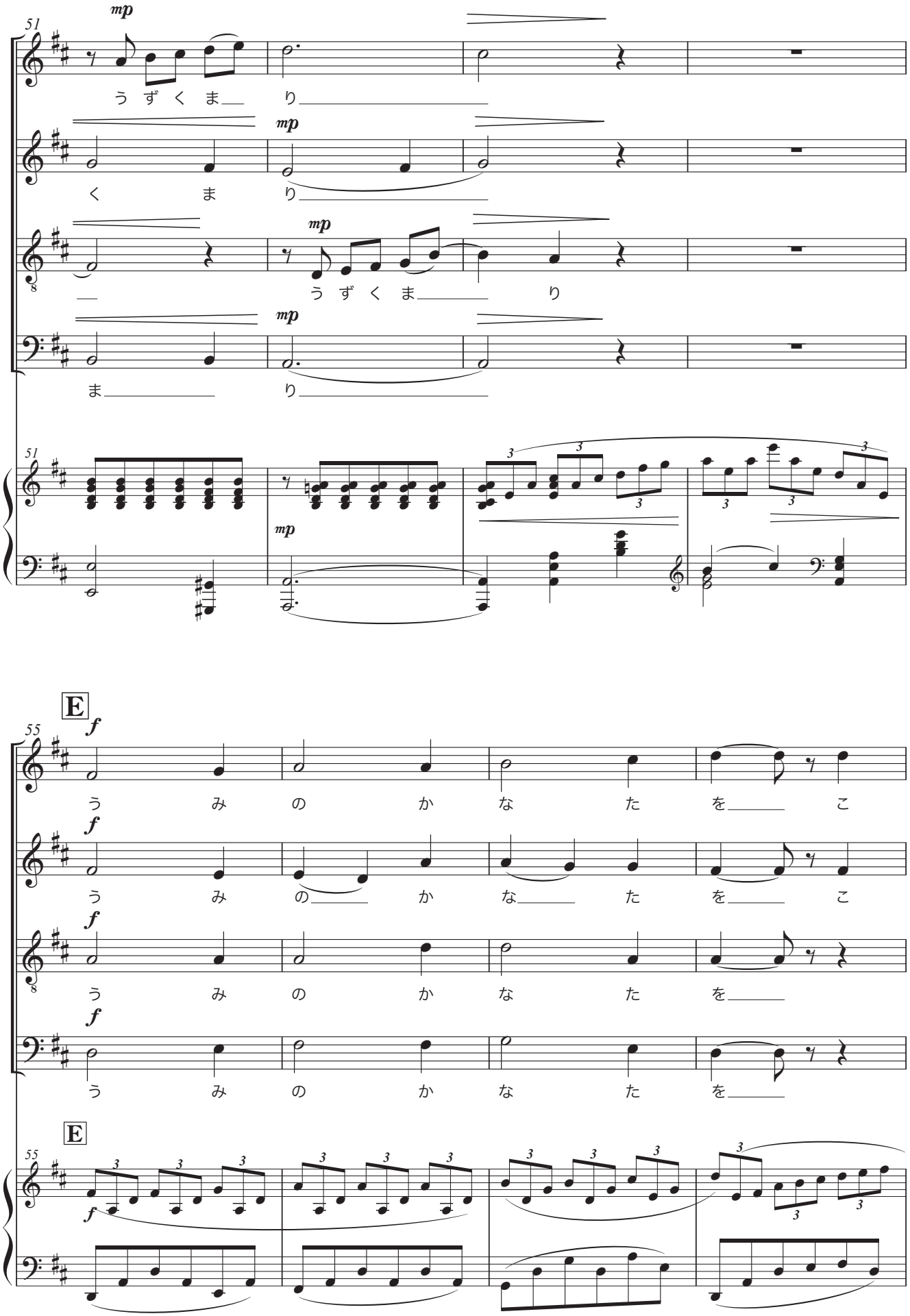
砂丘の上

混声四部合唱版（移調）



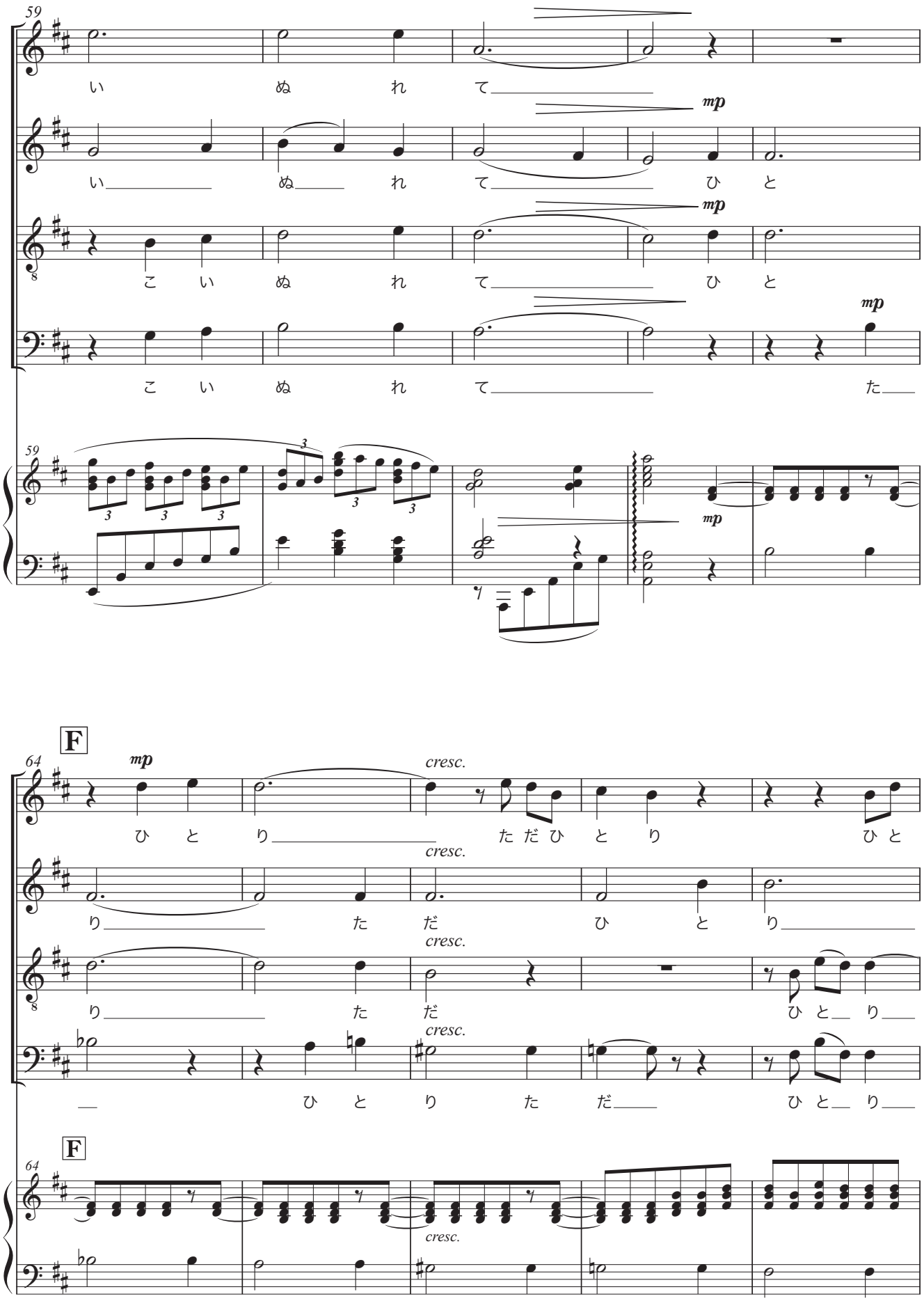
砂丘の上

混声四部合唱版（移調）



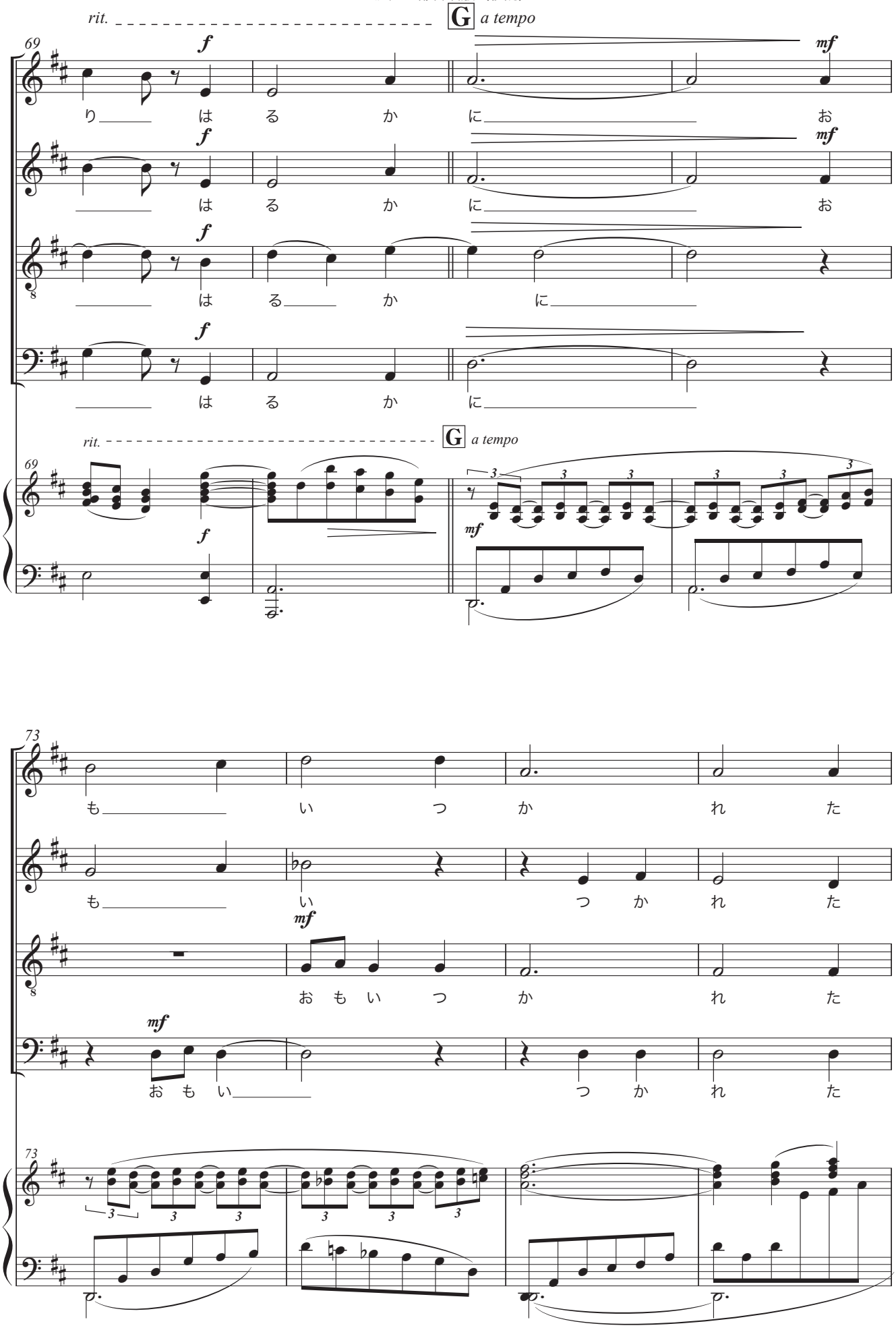
砂丘の上

混声四部合唱版（移調）



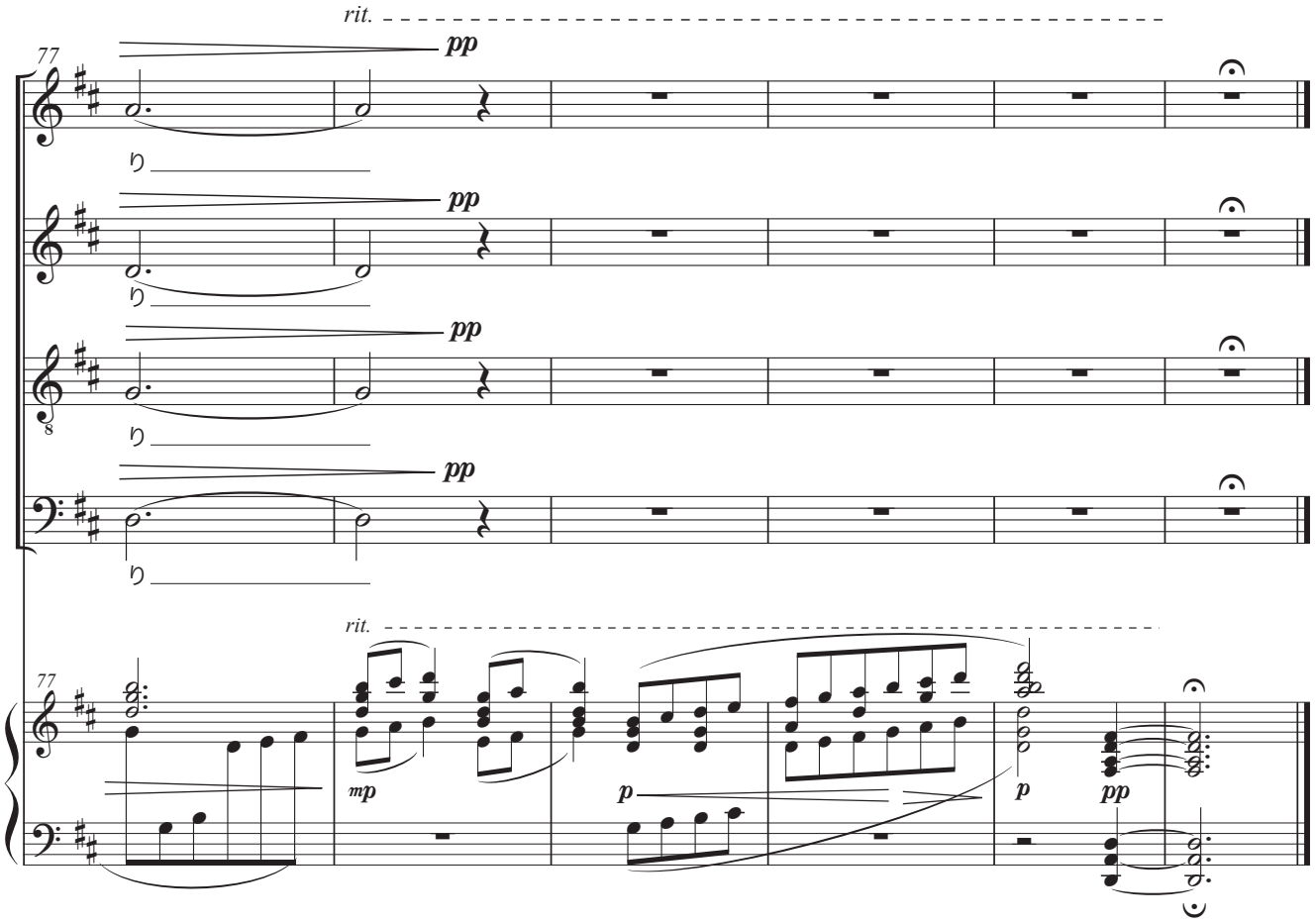
砂丘の上

混声四部合唱版（移調）



砂丘の上

混声四部合唱版（移調）



表紙と裏表紙の絵について

作家　おくだトシ惠

略歴：千葉に生まれる。
山脇美術専門学院・フランス国立美術学校に学ぶ。
フランス「サロン ドートンヌ展」に油絵出品。
山脇美術専門学院・河合編物服飾学園　講師。
ニードルアート先駆者として 各雑誌に作品を発表。
和光ホール（和光　本館 6 階）2005 年までに 4 回、
玉川高島屋　5F アートサロン（2009 年 8 月）など。
著書　『鳥と花』 ヴォーグ社刊
『刺しゅうステッチ百科』 主婦と生活社刊
「手芸の友」ハンドクラフトシリーズ
ソプラノ歌手で国立音楽大学教授の故奥田智重子さんは姉に当る。
その影響もあり音楽に対する造詣が深く、創作歴 50 年の作風は、
詩情豊かで音楽の調べが聞こえてきそう、とも評されている。

由来：この作品は、耕輔の長男の次女小松わかさんより顕彰会に寄贈されたもの。小松わかさんによると、おくださんが耕輔の代表作、「母」を好きとお話されていたので、記念に作品をお願いしたところ、「母」の歌のもりこまれた、彼女の命名による「板絵」で描かれているこの絵が送られてきたという。
想定外の大きさなので、中々飾ることが叶わず、どこか耕輔ゆかりの、広いスペースに飾って頂けないかと寄贈を思い立たれた由。
現在この絵は、東由利小学校玄関と東由利中学校音楽室に展示してある。

編集後記

小松耕輔生誕 130 年を記念して音楽祭、および没後 50 年にこの冊子を発行出来たことに関して、多くの関係者の方に感謝を申し上げます。記念音楽祭を開催するきっかけを作って頂いた秋田大学副学長四反田教授、講演を快くお引き受け頂いた二子様、素晴らしい演奏をご披露頂いた都甲、長谷川両氏、お忙しい時間を割きシンポジュームにご参加頂いた船山学長、音楽祭の司会・パネルディスカッションのコーディネータをしていただいた賀内アナウンサー、何より音楽祭で素晴らしい歌声を披露頂いた生徒・学生の皆さん、開催の雑務を引き受けて頂いた顕彰会のメンバー、映像をボランティアで残していただいた東北新社およびクラシカジャパン様、本当に有難うございました。

船山信子上野学園大学学長の論文は、船山先生のご厚意により本冊子作成のため、小松耕輔没後 50 年に寄稿されたものです。

この企画が契機で小松耕輔およびその兄弟のことを再認識して頂ければこのうえない幸いであります。

（小松義典）

小松耕輔生誕130年記念誌

発行　平成29年3月

発行者および問い合わせ先

小松　義典
015-0221　秋田県由利本荘市東由利舘合字舘前23-2
電話 0184-69-3838　FAX 0184-69-3888
e-mail：komatsu_y@r7.dion.ne.jp

印刷・製本
(株)本間印刷所
015-0817　秋田県由利本荘市中町10
画像記録
(株)東北新社

この冊子は、由利本荘市地域づくり推進事業としての助成を受け作成したものです。